

義太夫大鑑下



秋山木葉齋

義太夫内鑑

下齋

義太夫大鑑下巻目次

第一章 淨瑠璃を語るこ云ふ事の意義……………

義太夫節本來の約束 義太夫の太功記 播磨少
椽と順四軒の狐の子別れ 淨瑠璃を語ると云ふ

意義 淨瑠璃を語る——聲を語る 宇治加賀椽の教訓の一節 越路太
夫にし

ても一部の稽古振がある 髓を語つた大隅太夫と三代目團平の追懷談 惡聲より大成した五代目

彌太夫 彌太夫の熱誠！
長門太夫の教訓

鼻唄式前受専門の淨瑠璃 外連決の辯 無理當自然
の辯よた語りの泉太夫 一例として「艷容

女舞衣」の酒屋 太夫も太夫ななれば三
絃弾も三絃彈である 三絃は弾けるが淨瑠璃を弾き

得る者幾人かある 原武太夫の「斷絃餘論」 斯曲の妙機を
道破した至言

不即不離の呼吸 三絃と離れて三
絃に外れぬ呼吸 節を語らずして淨瑠璃を語る 提節は

れて情を失ふは惡し聲に任
せて情を失ふは尙ほ不可也 竹本播磨少椽の教訓 情語りの達者は比較的惡
聲の人々に多し「當分凌ぎ」

の太夫や三絃彈かある 譽められ不腹を立てた有隣大和ほどの
誠ある太夫幾人かある 中の譽めこ上の譽めこ下の譽め

第二章 聲音と其の習練……………

二の音が大事 三の音專一の淨瑠璃は餘り
にケバ立つて厭氣が来る おツこりとした妙味 基く所
は二の

音で 三絃の調子 宮古路豊後の「都の鐘」の一節「竹
豊故事」の呂律五音十二調子の辯 所謂一聲——大將聲、下

手聲、きばり聲 眞の美聲 惡聲も練磨と工夫

發音の調子の習練 咽喉の適不適よりは耳の良否 小音難聲も或程度までは矯正助長す

れば其の格に入ることが出来る しはがれ 聲音の習練と云ふ事の意義 たきばり聲は義太夫節本來の要望に非ず

聲を似せるよりは心を似せよ 聲音習練の三大要頂 聲の力、聲の

重み、聲の色彩

佛敎の聲曲科 聲明 佛門の聲曲家一式衆 各宗各派の聲明 眞宗の聲明 和讃念佛 聲明の音節を應用した平家の節調 聲

明と日本の聲曲

第三章 語り方の理論…………… 四四

通論…………… 四四

淨瑠璃を語ると云ふ事の二の意義 筋を語る―情を語る 淨瑠璃

五段の型式 一段の淨瑠璃には起承もあれば轉 一段の大綱を語り活か

すと云ふ事の必要 靜山急の呼吸 即ち語り方の三原則 間違つて居る稽古

の仕方 半端稽古は斷じて廢すべし

聲音の適不適は節を語り地合を語る上のみの事に非ず 詞を語る

にも亦適不適がある 詞の調子―抑揚―頓挫 語つての味―はた

らき―變化の妙は寧ろ詞に多し 地合では泣かされど 詞には泣かされる 泣かせるばかり

が淨瑠璃の極致でもなければ能事でも無し 要はホロリとさせる位の程度 泣かして

泣かせぬ呼吸 泣味増太夫と
ならぬ用心

詞には七分の強味がある 地合は或程度迄也 詞の呼吸、活殺の妙用は
底知れず奥の知れざる

ほど深し まづい淨瑠璃
を一層まづく聴かせる 四代目住太夫の研究苦心の逸話

要するに一種の摸倣 形を摸倣すして情を摸倣する
聲を摸倣すして心を摸倣する 摸倣なるが故に上手

もあれば下手もある 稽古の必要もあれば修練の必要もある
三歳児の時より
経験して来たおぼろげな觀念を修練工夫して技巧化

するのが淨瑠璃の修業 全然技巧一片口頭ばかりにては眞箇の情味は出ないの

である 作中の人物となり境遇となる 稽古よりは自覺 淨瑠璃に
情の籠ら

ざるは型ばかりに拘々として根本的
の研究を勿論に附するの結果である

世話と時代との語り方の區別 時代物を語るに就ての通則 生やさ
しき稽

古き伎倆にては出来ぬ時代物
も輩出して居るが、時代の語り
の達人として傳へられたるものは洵に少し 時代

物淨瑠璃の本來の性質 世話淨瑠璃の特長 世話時代物 世話時

代物を語るに付いて第一に心得べき事項 一例として『平假名
盛衰記』の松右衛門 世話時

代物淨瑠璃の特色と妙味 淨瑠璃の重みと輕み 其の
一例 間と云ふ事

阿吽一瞬の呼吸―間髪を容れざる刹那の氣合 黒いも白いも間の

持ち方一ツの巧拙に由る 間は息に非ず 寸分の油断も不用意も許さ
る義と心得べし 三絃が弾き

出せば語り出し、「節」が終れば息を繼ぐ
と云ふやうな淺薄な了簡ではまだくも 間を持つ一例 息一ツ繼ぐに

さへ注意を要す 息を盗む―鼻から息 其の
一例

節に切字 詞にも切字の必要 息を切らずして句を切る工夫 湯

を呑む心得と扇拍子 太夫と三絃の阿吽表裏の關係 自らにして
びたりと合體したのが眞の呼吸

詞と地合………

詞七分地合三分の現今の淨瑠璃正本 融通自在を極めた近松作の

正本と流祖義太夫の節附 其の一例『丹波與作』の重の井子別れの一節 後
の作者の増補した詞本位の『香掛村』

勢ひ詞の研究工夫が急務となる 淨瑠璃の情を語り活かすには地

合よりは詞 地合は主とした語物 詞本位の語
り物 詞七分 地合三分の語り物

詞の研究の要項 最も大切にして興味のある助語の研究 助語の

妙用 先づ其の意味合の研究 其の例 詞に情趣を持たすのも助語の妙
用 淨瑠璃の黒いも白いも甘いも
不味も助語の語り
方の巧拙如何に由る

詞の調子 詞の調子を定むる原則 例合ば勸平と彌五郎 半兵衛と宗岸
浮舟と桐の谷を語り分くる工夫

年輩により夫れ々變則融通の工夫 地聲を第一とする 殊更に假
聲を使ふ

は悪し 一ツク の實
盛ひよろ くの平作 發音は畢竟情の發露、氣分の響である 盲人輩

啞者、阿呆を語るに就ての研究の要點 盲人 盲人を語るに就ての工夫
の楔子提へ所 中年者の

盲人の氣分は多少の加減を要する 相手に話し掛け
る時の發語の調子 假擬盲人 假擬の假擬たる特徴 阿呆 阿呆の阿呆たる特徴
 阿呆の無い調子外

づれの 大聲 一風變つた人物 工夫の要點 一例として
『近頃河原の達引』の奥次郎

詞の字配り 五七七五調の淨瑠璃の詞 やくもすれば雨だ
れ調子となり易し 字配り研

究の必要 一其の例 詞の抑揚 詞を語るに就ての原則 節詞に詞あり 尻

例と引き字 其の病根は一ツである 詞の治定

發音の高低と緩急 其の一例として融通の妙を失ふはわるし 活殺自在の妙

諦極致に悟入するの途 サフリ込んで往く呼吸

地合研究の要項 單に節を語ることは非ず 練工夫計りには非ず 節を語ることの困難よりは

意味を語ることの困難 地合を語ると云ふ事の意義

地合研究の妙味と困難 作意に應じて附けられた節 地合を語る

に就ての要項 地の文を詞の呼吸で語る工夫 其の例 地合を語るに

就ての注意の要點 『音曲口傳』書の一節

理論の應用—先人の遺訓……………一〇八

實際問題としての理論の應用の困難 其の例 『忠四の笑と泣』『壺飯』の

『志渡寺』のお辻 『合邦』の難所 『忠六』の彌五郎と郷右衛門 『伊賀八』の政右衛門の呼掛けとお谷 『近江源氏八』の首實験の呼吸

竹本越路太夫の藝談 藝の立替 今の太夫の修業振りの差 攝津大塚の息

先づ正本を六十遍讀め 浄瑠璃の文句を語り殺す 文句研究の一例 『紙治』の「ヤア」ハア 東風と西風—竹本派と豊竹派 近松原作の復舊—俗受け惡し—地色

惜名文句も捨てて仕舞はればならぬ 世話物研究の苦心 私の稽古時代物は「キエツ」さ一ツ握

業時代 嚴峻な團七師匠 覺束ない「おいだき」の太夫 鹽辛聲の小僧 不動尊に

祈る 團七師匠の聲の遣ひ方と大塚の聲の遣ひ方 似るに長い所は似ぬ 自己の

物とせよ 下手でも素人でも夫れく自己の特色 三味の音にも自然の淨瑠璃 豊竹呂

太夫の藝談 初代鶴澤重造 お菓子を買ふ坊チャン太夫 西風と東風 先代

入の絶句一却て評判 網太夫の三十三間堂 古靱太夫の「吃又」音で地聲同

語る 芝居の眞似をする 現今の太夫 太夫の調子一同じ鐘樓で打つ鐘の音でも同

じ様には行かぬ 文句の研究 『阿漕』の「冥途に急ぐ」『菅原』の「はしごくで」『壺

坂』の「初めて拜む日の光り」箱根靈驗壁の「紅葉のあるに雪が降る」『忠九』の「淺

きたくみの鹽谷殿」『吃又』の「河ンなく姫君奪ひ取られ」『國性爺』の「手を上げ」

「手を下げ」十三の彌作鎌腹」イタイく「腰越状の稽古」冒頭の「酒」の一句一淨

瑠璃ぢやない狂言だ一團平師の教訓 『加賀見山』の「待つ間もさけし長廊下」作者

殺し『播州皿屋敷』の「手許もゆらに汲揚げる」淨瑠璃を大きく語る工夫 語

らずに語るここの研究 語り方の工夫 其例 唇を使ふ老翁の詞一語尾を上げ

姫言葉 下町風の娘の詞 姫言葉には齒を使ふ 笑ふ時は奥齒の詞一舌を撮上大椽

の聲の使ひ方 鼻で息 詞のだれめやう一次の詞との聯絡 泣くべき人が泣ては

不可 調子がイヌ 一杯に語れ 一枚くを叮嚀に語る 思ひ言葉 侍なまり一

奴言葉 サラ一ララ一カラの祕傳 老翁にララ一侍にカラ一若い者や女中にサ

ラ一空鐵砲一發で酔の醒めるやうな「後藤」では詮なし 明治前後の淨瑠璃芝居

『太功記』十段目に就ての竹本津太夫の口授大要

先人の遺した教訓 宇治加賀椽の教訓 『鸚鵡ヶ袖』の序文の

一節 『淨瑠璃祕曲抄』『竹豊故事』の一節

第四章 節

節の稱呼 『江戸節根元記』の一節 節の變化 極り節の實例 正本の

節章に就いて注意すべき廉々 情愛一文義に應じて節の形もさま／＼也一

附も變へて居る 地の様々 竹本四季太夫の『淨瑠璃道の技折』丁寧親

道の篇 上と下 紛らはしきれえんぞの章 ぶんごウシ 太夫癖の

節 『音曲兩節辨』の一節 『章句故實集』

産字の意義 其の 産字を必要とする二の理由

第五章 稽古の心得……………二一九

稽古の順序 最初は音調と曲節の修練 夫れには適當な景事道行もの 古人の至言

猪稽古 百日に百杯の道理 赤案人の三段目 熱心は稽古の要訣

聲音修練の意義 順的助長 修練と逆的對抗 修練 稽古の手初めには先づ順的―助長的修練

輪者さならぬための逆的―對抗的修練 逆的―對抗的修練の意味 聲音修練の原則としては何處までも順的修練

斯道には卒業期限無し 攝津大塚もまだくなくば大隅太夫もまだくなく 稽古に臨んで心得べき廉々 根氣さ辛抱―口を開くまでの辛抱一ツ―稽古の紙數―稽古本の研究―要所―は直ぐに備忘の爲めに書き留めよ―師匠の態度表情に注意すべし

「節」を覺ゆるよりは「程」「間」「拍子」「呼吸」「情趣」を呑み込む事の苦心 初學者の惡癖 正しき稽古の姿勢 二度稽古、三度稽古

氣合のかくつたのは最初の一回―結局悪い所―で覺悟して行く稽古の仕方―一回稽古に限る 杉山其日庵主人の『義太夫の稽古』の一章

淨瑠璃を語る姿勢と態度 昔の出語りと今の出語り 首一ツ振らず、口一ツ歪めずには淨瑠璃の情味は語り難し 要は何處までも格

を崩さぬと云ふ事が肝要 『淨瑠璃早合點』に云へる出語りの辯―餘りに偏固な見解である 自然に出て來る表情的態度と姿勢なるべし 満座の中で恥をかいて見るのも亦必要―何處までも眞摯に自己の限りを盡して語れ

形ばかり學んださまぐの誤解

拾遺参考資料……………二四二

- 蜀山人の見た淨瑠璃詞章の批評〔俗耳〕 淨土雙六と『丹波與作』の道〔鼓吹〕
- 中雙六〔還魂〕 白獅の尺八に武太夫の合奏〔俗耳〕 元の吉原〔異本洞房語園〕
- 辰松齋と文三郎羽織〔我衣〕 塚談〔塵〕 説教節と歌念佛〔用捨箱〕 淨瑠璃本〔柳亭記〕
- 刊行の初〔用捨箱〕 『東西評林』の竹豊兩座の夫評判記 『浪華其末葉』に載〔奈貞業〕
- せた竹本豊竹陸竹三座の太夫評 半太夫節より轉じた河東節〔奈貞業〕
- 京阪の芝居〔劇場〕 三代筆太夫の硬骨 源與清の三絃考〔新話〕

義太夫大鑑下卷目次 終

義太夫大鑑 下卷

淨瑠璃としての義太夫節の理論

第一章 淨瑠璃を語るに云ふ事の意義

義太夫節本来の約束 義太夫の太功記の播磨少
椽と順四軒の狐の子別れ 淨瑠璃を語ると云ふ事

の意義 淨瑠璃を語るに聲を語る 宇治加賀椽の教訓の一節 越路
太夫

にして一部の批難がある 體を語つた大隅太夫
二代團平の稽古振 大隅太夫と三代目團平の追懷談 惡聲より大成した五代目

彌太夫 彌太夫の熱誠
長門太夫の教訓

鼻唄式前受専門の淨瑠璃 外連決の辯 無理當自然
の辯 又た語りの泉太夫 一例として『艶容女

舞衣』の酒屋 太夫も太夫なれば、三
絃弾も三絃彈である 三絃は弾けるが淨瑠璃を弾き得る

者幾人かある 原武太夫の『斷絃餘論』 斯曲の妙機を
道破した至言

不即不離の呼吸 三絃と離れて三
絃に外れぬ呼吸 曲節を語らずして淨瑠璃を語る に節

捉はれて情を失ふは惡し、聲に 情語りの達者は比較的惡
任せて情を失ふは尙ほ不可也 竹本播磨少椽の教訓 聲の人々に多し一當分凌

ぎの太夫や三絃彈 響められて腹を立てた有隣大和ほどの
誠ある太夫幾人かある 中の響めと上の響めと下の響め

唄ふと語る

惣じて淨瑠璃は唄ふと云はず語ると云ふ。之れ單り義太夫節に限るにあらず、河東

節にあれ、一中節にあれ、常盤津、清元、富本等、凡べての淨瑠璃を通じての事なりと雖も、も
とく義太夫節以外の淨瑠璃は、其の曲節おしなべて妖艶嬌々の調子を主とするもの

義太夫節本來の約束

義太夫と太功記

なれば、勢ひ意味よりは聲、語るよりは唄ふこととなり易き傾きあるは免れ難し。されど義太夫節本來の約束は、意味を語ると云ふことを本義とし、何處までも眞面目に、しみりと聽客を満足せしむると云ふ事を主眼とするものなれば、其の間自ら區別あり。斯道に遊ぶ者は、先づ此の本來の面目を了解し置くことを肝要とするのである。

初代 麓太夫は、駒太夫、大和椽忠臣蔵のもめ事より、此太夫に代りて竹本座の座頭となり。に次でのし人初め三輪太夫次で大隅椽夫れより再び大和椽を受領。古今の美音なりと稱せられたるほどの人なりしと雖も、聲に任せてあられもない譜節を附けたり、淨瑠璃の情に外づれた語り方をするやうな不心得などは、露ばかりも無かりしと云はる。『藝林百話』塵山人著には、左の逸話を傳へて居る。『藝林百話』作者未見の書也。本逸話は淨瑠璃

雑誌上に紹介せられたるものに係る。

享和文化年間に、美聲を以つて世に鳴りし、豊竹麓太夫は、一代の物語なかくに多し。中にも分けて名高きは、『蝶花形名歌島臺』、『繪本太功記』等であるが、この太夫の新淨瑠璃本讀の時には、必ず女房に傍聽せしめ、女房の一心に聞入り、眞に迫りて泣顔する時は、まうし分無しとて直ちに納まれども、女房のさまで泣かざるときは、作者に再考あるべしと云ふて納まらず。『繪本太功記』の本讀の時にも、例の如く女房に傍聽させて語り初めしが、作者は自己の得意の段になると、最早こゝらで女房が泣きさうなものと窺へど、更にその様子なく。『尼ヶ崎』の段に至るも泣かざるにぞ、作者も到底をさまるまじと思居たるに、案の如く段切まで讀終りて再考となり、作者は落膽して家に歸へり、脚色を變へて二度目の本讀となり

たるも矢張り納らず、三度まで添削し、三度目の本讀となり、重次郎戦死の段に至るや、女房は眞に聞入りてほろり／＼と涙を流し、果は聲あげて泣出したるにぞ、作者も太夫も大喜にて早速狂言にとり掛りしに、その噂三都に高く、開場の幕より古今比類なき大當を取つた。

以て其の用意の深きを知るべきである。

竹本播磨少椽初代政太夫、二代目義太夫と相續は、「其のかたるところ、音聲に深く人情をふくみける故、聽人感心して、淨瑠璃中興開基の名人なりと譽めて、名を日の本の外までも輝しける」とまで稱せられた程の人にして、「今用るところの地合は、凡此人の地合をふくむものなり。」と云はるゝほど、斯道の恢興に盡した偉人なるが、門人順四軒が著した『音曲口傳書』即ち播磨少椽の口授せる要旨を綴りて一書となせるもの也に、左の一節がある。

我即ち順四軒也年二十五歳の時、ある夜狐の子別の段を語れと申されしゆゑ、我うれしく語りければ、フウとばかりにて何ともかとも申されぬゆゑ、我もふしぎにおもひ、何ゆへまた此子わかれを御語らせなされ候やと問しかば、さればとよ、貴さま去年惣領娘をもふけられしに、そのうへ當春京都東山高臺寺開帳へ愚妻まいりし時に、貴様同道せられしが、伏見街道にて雨にあひ、しばらく休み居らるゝ折から、歌うたふて物もらふ子比丘尼、雨にそばぬれて行を見て、貴様申されしには、去年娘をもふけしが、若みなし子とならばあのごとくに迷ふらんといひながら、涙をこぼし申されしよし、愚妻がはなしにてきゝたるゆゑ、親子の情うつるべしと

おもひ、子わかれの段を望みし所に、おもしろく聞ねて氣の毒と申されしより、人情第一の事をはじめて口傳を受る云々。

由是觀るも、麓太夫と云ひ、播磨少椽と云ひ、如何に義太夫節本來の面目たる、意味を語り、情を語ると云ふ事に付いて、苦心努力して居たかと思はるゝのである。

淨瑠璃を語ると云ふ
事の意義

そも、淨瑠璃を語ると云ふは、一段、一章、一句、一語、それ、其の意味を語り、情を語り、作意の本旨を語り活かすと云ふの意義にして、畢竟は淨瑠璃正本の文義を語り活かすと云ふ事に外ならないのである。節を語ると云ふ事でもなければ、聲を語ると云ふ事でもない。されば斯道先人の教訓にも、「淨瑠璃を語る、聲を語るといふ事あり、聲を語るとは上ルも下ルも品を付、ゆらでもよき所をゆりなどしては文句の譯分らず、是れあしき也、淨瑠璃はのみ込の悪き人に物語りする心なるべし」「惣て人形替る度々、其の氣をかへ、同じ人形度々物をいへども、さきの人形目當替ならば、同じ人形成共心持をかへ、語物なり。當代の淨るりは、節、斗りに氣を付、肝心の文句はおるすになつて、淨るり語るではなふて、節語る也。少々節は三ツゆる所を二つでも、四つでも、其の時の拍子次第、どかく文句に氣を付、一字のかなでもあそばさぬよふと語るべし。然れども節のゆり迄ちがはぬ程、淨るり修行者は、おのづから文句も働く道理なれば、是第一の肝要なり」

〔淨瑠璃秘曲抄〕と云はれて居る。然るに即今の駈け出しの太夫の輩、素人義太夫の連中など、唯々前受一方と云ふ不了簡よりして、サ・ハリやク・ド・キの當節、澤山のところばかりを大事がり、鼻歌式、輕浮な調子で唄ひまくり、踊り出したり、泳ぎ出したり、さまざまの心得違ひ

宇治加賀椽の教訓の
一節

越路太夫にしても尙且つ一
部の批難がある

髓を語つた大隅太夫

二代目團平の稽古振

を演じ、恬として覺らざるものあるは遺憾の極みである。宇治加賀椽の音曲修業教訓には「何の差別をも辨へず、己れが聲拍子にまかせて猥りに語りちらすは偏に本心を忘るゝ狂人ともいひつべし。引くまじき處をも引き、まわすまじき處を廻し、一息く扇を打、柏子にかゝはり、文字のきゆるも、假名のにちあふも、位はかせなど亂れたるは、是れ銘々の我流とてよろしからず。」と云はれて居る。よくよく勘考すべし。

とは云へ正本の意義、作意の眞髓を語り活かすと云ふ事は、なか／＼容易の業ではないのである。二代目越路太夫の如き大家にしてさへ尙ほ且、一部の人々には、「外連淨瑠璃」「八方美人的よた語り」など、さまざまの批難を加へられた事もあるのであつて、夫の三代目大隅太夫が、餘り香しからざる音聲を以て、さまざま工夫修練し、「皮のみを語つて世間を喜ばせる人の多き中に、單り毅然として髓を語つて居る。」とまで推稱せらるゝやうになつたと云ふのも、畢竟嚴格な二代目團平の指導訓練の下に、血の出る思ひをして修練を積み、能く耐え克く忍んで、其の伎を磨き上げた結果に外ならないのである。團平が死んだ時、彼れ大隅は、

團平師は實に斯道の神である。師匠春太夫^{五代}から「貴様等が團平さんの厄介に成るは勿體ない」と云はれた事も在りますが、其の時分は若い時で有り、感じも薄ふ御座りましたが、後年に及び、師匠の勿體無しと云はれた辭がしみ／＼、腦髓に染込みました。嘗て大江橋の芝居で狭間合戦の時、壬生村の持役濱太夫が、初日一日前に、淡路の源の丞座へライダキ^註ナイダキ^{蓋追抱にして、ガイダキを正し}ミサヘシ^{雖も姑く斯界慣用の例に倣つた。}に行く約

東が出来て、初日を出す事が出来ない、私に替り役を勤めよとの話し、今思ひ出すと汗が出ますが其の時分は無茶で——番附面迄本役に直して呉るなら勤めやうと申ますと、太夫元も承知して本役に直して呉れました。

そこで私も行掛り上能い加減な事では済されませんが、當時清六さんも存命中なり、私とは内輪でもあり、稽古もして呉れましたけれど、一度團平さんに調べて貰はねば不安心でなりませんので、頼んで稽古をして貰ひますと、「守袋は筐ぞと肌身に添わて亡母に」の間がどうしても出来ません、夜の十二時より翌朝の九時迄、同じ所を繰り返し……誠に親切な人で、目が爛れてるのに……餘り氣の毒でたまりませんから、どうぞお寝下されと申しても、私しの覺ゆる迄寝ずに教へて呉れられ、漸々出来ましたら、能ふ覺わて呉れたと譽て下さりました。

と追懐して居るのであるが、團平の稽古の仕振りの嚴峻なりしこと、藝事に没頭して殆ど餘事を顧みざる底の熱心ありしことなど、今に幾多の逸話が傳へられて居る所である。

後年大隅が越路と相對して隆々の名を成してからも、始終稽古に往つて居た。地方へ出興行などの時にしても、其の日の出し物は一々弾き合せて貰ふ。「野崎村」なら「野崎村」——「あとに娘は」のたつた一ト口、夫れを言はさぬので流石の大隅も閉口して了ふ。三十遍か四十遍、窘めて窘めぬかれる。

神戸などの興行なれば、宿屋の主人も心得て居るから、こつそり頼んで置いて、時刻を

見計らつては救ひ出して貰ふ。「大隅さん、お宿からお使が見えました。大阪の何誰なにたかお客さんがお出ださうです」「師匠どうしたもんでせう、大阪から何誰か御連中さんが見えて居る」「そりや御連中さんだつたら行つておいで、また來なされや」と斯ふである。大隅は頭かきながらヤツトの思ひで抜け出し、風呂など浴びて歸る。翌日になれば「兵庫の旦那」次は「明石の誰某」毎日同じ手段の救舟すけふねなれど、團平は氣が付かない。何處やら禪味を帯びて居たやうな所もあつた――

曾て東京日々新聞明治四十年に掲載された大隅太夫と三代目團平との藝談は、彼れ二代目

團平の面目を追想するに足るものがある。依て左に轉載して参考に資すべし。團註
平の名は實は二代目廣助の幼名である。二代目廣助は初代廣助の門弟にして初め竹澤吉松次で豐澤言平(後ち言を權に改む)となり、團平となり、仙左衛門となり夫れより二代目廣助となつた人で、二代目團平は三代目廣助の門人にして、初め豐澤力松竹本千賀太夫の子にして幼にして異才あり。天保十年稻荷文樂の芝居に出座、十三年座摩社内の芝居にて丑之助と改め、弘化元年二代目廣助の幼名を譲り受けて團平と改名したのである。されば團平なる名乗りより云へば、彼は二代目なりき雖も、そもく團平なる名前の大を爲したのは畢竟此の人の入神至妙の伎藝の至す所なるより、時人は此の此人を以て團平初代と算して居る。長門太夫、湊太夫、春太夫、越路太夫、大隅太夫等の相手を勤め、明治十六年六月松島文樂座彦山權現の興行の時、櫓下に据る。三絃にて櫓下に据りたるは、實に此の人を以て嚆矢とするのである。

聲と絃

竹本大隅太夫曰く

御存じの通り私は最初春太夫の弟子で、其の後先代團平の絃に就いて、お腹の中がでんぐり返つて、腹の皮もよれ／＼に凹んで終うかと思ふ位苦しみました、今度の出し物の忠臣藏に就きましては、先代團平さんも九段目は「語る」といふよ

り知らぬと云へ」と言はれた位ですから、出来て来れば出来て来る程、益々難か
しう成つて来ます。義太夫では「忠臣藏の九段目」「菅原の二段目道明寺」「娘景
清の日向島」と割藝題物^{世話}の『お初徳兵衛』『大文字屋紙子仕立』『お染久松質店』な
どが難かしい三幅對で與許しのものでございます。私が團平さんに就いて九
段目を語りましたのは、廿三年の三月稻荷の彦六座で演りましたのが初めて、其
の後五度許り語りました。只今の團平其の頃の仙左衛門とは、卅三年の一月か
ら今度で三度目でございます。苦心といへば何れでも皆苦心せんものはござ
いませぬが、就中この九段目などは、最初から本藏の出まで随分難かしいので、
なせと小浪の出の枕「人の心の奥深き」などは、何でも無い様ですが、彼方は雪
のしと、ハ、と降る様に語らないと情が移りません。「道の案内の乗物を傍に待
たせ唯一人刀脇差流石實に行儀亂さず庵の戸口」等は、政太夫風に語らないと
物になりません。政太夫風とは頤を揺らして、呑むだ様な聲を出すのですが、黒人
でも恚ういふ事は解らんものが多うございます。「道の案内の……」から直ぐ
「のりもの」と「の」の字が二つ續く所なども、夫々かち合はん様に頤で使ひ分ける
ことが大事です。之位に注意しないと本眞の淨瑠璃は語れないのですから、只
一字の文字でも幾つ節が有るか知れませぬ。併し人には屹度何所にか妙味が
あるもので、下手と言ふて必らず一概に貶せるものではありません。九段目の
やまは「鳥類でさへ子を思ふに」と言ふ所です、此所を彌太夫さんは押付けて

下から出しましたが、染太夫風は陰氣になりますから、私は上から突込んで語り
ましたので、團平さんも此所はお前の方が好いと言いました。何しろこれはやま
ですから、爾うしないと不可のです。義太夫を工夫して語る人がありますが、も
と、聲曲は自然を尙びます、工風せんで、特色は自然に出来て来るもので、出来もせ
ん間から工風すると癖ばかり多くなり、ます。團平さんに従いて語ります際は、
あの人が微かな音で弾かれます、入撥までが、ピンと強う耳に響いて、語るまいと
思ふても、絃がちやんと物を言ふてくれますから、従いて謠うやうになります。
語つて、人の息が聞える様なことでは駄目です。息はばツと引くのです、が、間
が、劃然と合ふて来んと、不可のです。團平さんは腕が有て、謠が出来て、其の上
に、腹が有つた、古今の名人でしたが、何時でも九段目の出の「チーン、テン」が面白
く、弾けんと言ふて居られました。所が一度出雲の大社へ詣つて。お宮の前で
弾た際には、随分道中の疲れもありましたけれど、初めて「チンテン」の撥が下
りた。これで最う思ひ残す事が無いと云つて、大層喜ばれましたが、藝に氣の乗
る時と乗らん時は誰でもあるものでございます。

豊澤團平曰く

私は十一歳の時から、師匠團平に就いて稽古して貰ひましたので、外に兄弟子も
大勢ありましたれども、一番厳しく仕込んで貰うたのは私でせう、従つて師匠の
弾き方がよく呑み込めて、未だに耳を放れませんので、何時も舞臺へ上つて自分

が弾くと、藝が拙く聞えてどうもなりません、毎日く其れで腹を痛めてばかり居りますが、遂しか自分がでに宜く出来たと思ふた事は永年の間に一度もありません。忠臣藏の九段目の絃は「此太夫」物で、此所の三絃の三上のつばが普通と違ひますから、非常に弾き難うございます、お石が「はたと引立て入り」にけり」と這入る迄の所は、三味線の手の數が無い丈け、夫れ丈け難かしい「トン」と「テン」の間を弾くのですから、つまり音の無い所を出す事になります。之れは「トン」と「テン」を詰めて弾くのです、「入りにけり」から先きはすつと地色になります。地色とは「さはり」などに澤山有りますが、弾かないで居て弾くのです、弾かんで弾くと云ふと何やら變ですが、其の何とも口で説明の出来ん所が難かしいのです、太夫さんでも地色を巧く語れる人は餘計ない位ですから、三絃をちやんと弾く人はまあ無いと云ふて宜敷うございます。師匠の難かしかつた事は、そりやお咄しにならない位で、例へば組さんと伊賀越の八段目なら八段目を語りますと二人差向ひなら出来てますが、偕師匠の前へ出ますとでんで方角が解らん様に成つて、宛で滅茶若茶です。其れで組太夫と何時も「又師匠に滅茶若茶にされた」と云ましたが、其で懲すに一週間以上も續て通てゐますと、やつと出来る様になります。其と云のが、團平さんと云ふ人は名人で有た丈け、人の藝の性を見る事が上手で、彼の人は奇麗な聲は出来んとか荒い事は弾るが、微い足どりなどは、いかんとか直に見てとられました、そして故と勝手の悪い所ばかりやらさ

悪聲より大成した五
代目彌太夫

彌太夫の用意と熱誠

れるので、吾々同志で彈る際は得手てる所ばかり彈て、勝手の悪い所は捨ときますからそれを知つてゐられたのです。一度師匠が朝顔の宿屋を彈ひた際も、憂ひのつばで「チッチンリン」と彈かれたので、ギンのつばなら澤山ある手だが、珍しい事だと記憶込んで、其後十年許り經て師匠の前で此所を彈きました時、それを彈つたのです、所が師匠は「其麼事誰れが彈いた、モ一度彈いて見い」とやられました、又彈きましたが、又駄目又駄目と、何でも朝の十時前から午後五時迄、同じ事を幾百度となく彈らされました、終には腹は空るし腹は立つて「きつと師匠は忘れてるのだらうと、思つてました、最後に私が彈くのは、慙うぢや」と云つて、彈いたのを聞いて、成程と初めで會得しました。彈く事は同じ手ですが、師匠のは心から憂で、彈かれるのを、私は形容の手先き許りに注意した爲め、駄目なのでした。つまり、彈かずに、彈くと云ふのですな。九段目の出の「チーンッテン」は師匠も言はれた通り、どうも撥が苦に成て「チーン」とは彈けても後の「テン」が巧く出なかつたです、私の未だ彈けませんのは其の他「靜まりしが」の「チーン」と云ふ所と二箇所であります。

明治に入つて斯道の模範とも稱すべき人には、彌太夫五代目にして即ち今の彌太夫の先代である。がある。此の人實に古今の悪聲にして前受け太だ悪く、一部の聽客には悦ばれざりしと雖も、研究心の強きことは人一倍にして、淨瑠璃を大事に語ると云ふ點に於ては、他の太夫の企て及ぶべからざるの熱誠があつた。彼が床本には「此處はツヨク」「此處は早く」

「此處は何」「此處は何」と一々研究の要點を書き入れてある。湯を呑む所より扇柏子を入れる所までも夫々符號しるしを附け、一句の語り方、一度の扇柏子の入れ方にまで注意し、斯くして淨瑠璃の意味を語り、情を語ると云ふ事に付いて苦心を重ねて居たのであつた。彌太夫は實に臺詞語りとしては、明治時代に於ける第一人と稱せらる。

彌太夫本名木谷傳治郎。西區北堀江上通二丁目に住せり。初め小熊太夫と云ひ幼少にて太夫となる。中興小供太夫の開發なりと云はる。三代長門太夫の門人に

して、次で長子太夫と改名。師の歿後、四代彌太夫の預り弟子と成りしが、彌太夫歿

後再び四代長門太夫の預りと成り五代彌太夫と襲名した。明治四年八月居に出勤、伊賀越後坂の芝

奥な語る。初めは左程までもなかりしかど、次第に聲變りして惡聲となり、如何に工夫す

るも思ふに任せざるより、到底太夫としては見込なしと斷念し、師匠歿後元治元年十月

門太夫歿一旦中絶とまで決心したのであるが、其の頃惡聲ながらも世話物語りの名人

とまで云はれたる内匠太夫あり、此の人に相談して見て去就を決せんと欲し、其の

意見を叩いて見たるに、内匠太夫は頗る彼に同情し、理を盡し情を籠めて訓戒し、

「今少しく辛抱せよ、惡聲なれど見所ありもどど其の聲にて節を聞かせやうと

焦慮あせつても見ても效ひなかるべし、臺詞に工夫を凝らして淨瑠璃の情を寫すと云

ふ事の心懸けこそ肝腎なれ、道理ぢや〜〜と三ツ位續いて泣く所があらば

最初の道理ぢやから既に悲しい心持ちを含ませ、次の道理ぢやでモ一一杯切な

いと云ふ思ひ入れで語れば、最後のワツと泣くのが自然と悲し氣に聞ゆるので

長門太夫の教訓

ある。第一に始終無理に聲を遣はぬやう心懸くべし。續けて泣く所でも咽喉の工合の能否により加減すべし。結局は二つ泣くも三つ泣くも乃至は一つで濟ましても口先ばかりでなく心から悲しいと云ふ考を以て語り其の情が出れば可し。泣く所でのみ悲しからせやうと思ふのは間違である。淨瑠璃の文句には泣くならば泣くやうに夫れく臺詞に段取りがある。前の臺詞を平氣で語つて泣所になつて急に泣いて見ても悲しくなるものでなし。前々から其の心持でさへ語つて居ればこそ最終の泣が一ツであらうと二ツであらうと自然と悲しくなつて來るのである。尤も夫れにも亦格別の工夫を要する所もあるべし、例之ば道中雙六の沼津の平作の「情ないことしてくれた」の如し。「情ないことしてくれたくく」と同じやうに泣いては情が寫らざる也。同じ泣くにしても三段に泣き別けると云ふのが工夫也。始の泣は他人のものを盗むとは何たることぞと叱るやうに泣くのである。次の泣は若しや何かの間違ひではないかと親の慾眼で少し考へて泣くのである。三度目にはア、情ないこと眞實心からこみ上げて來て泣くのである。

と諄々辭を盡して訓わて呉れたので、彼も初めて翻然として悟り、爾來全く了簡を一新し、眞摯篤實なる研究家となり、工夫に工夫を重ねて遂に大成の域に到つたのであつた。されば道頓堀の各座でも故實ある淨瑠璃物を上場するとなれば、登場の俳優は彼の門を叩いて教を乞ひ、各自の持役に就いて、工夫を凝らすの参考とし

たほごであることまで云はれて居る。

彌太夫は文才あり、増補ものには「増補伊賀越伏見北國屋の段」増補佐倉曙渡場巫子寄の段等七八種がある。新作には『日露戦争記』梅原住家の段最も優る。明治三十二年稻荷座の一連残らず堀江明樂座に轉することとなりし際退隱し、瓢會を組織して篤志家に教へた。明治三十九年十月三十日歿。享年七十歳。男木谷蓬吟氏は數々有益なる考證資料を供給して斯道研究家の爲めに益せらる。

鼻唄式前受専門の淨瑠璃

外連決の辯

義太夫節の本則に外れた鼻歌式——前受専門の語り方をケレンと云ふ。蓋「外連決」と云ふ語の縮約つたものださうで、古人も大に之を非とし、左の如くに戒めて居る。

外連決と云ふ辯。けれんけつといふ論は、是もと岡又を眞似過して出たること

なり。又兵衛岡太夫

註。攝津豊島郡岡町の産ゆゑに岡太夫と名乗る。通稱又兵衛岡又くみと評判されたる人也。は、元と筑前椽

茂太夫門弟にして初の陸奥伊太夫と云へり、其の業合羽屋なる故合羽伊太夫と呼ばる。元文二年竹本此太夫と改む。義太夫歿後竹本座の座頭たりしが、寛延元年例の忠臣藏のもめ事より東座に移り、座頭となり、筑前少椽と受領した。の弟子なりしが、先師故人となりてより西口政太夫に附てもつ

ばら播磨場をかたりて、太政入道兵庫岬の三段目、是等大當りせしなり。又は富士日記三段目能語る。甚だ正しき藝なりしが、三度目操かへし忠臣藏をせし時、

註。明和元年閏十二月二十五日より西の芝居。座元竹田伊豆椽にて假名手本忠臣藏三度目興行。九段目を勤め、大當りして評判遠近にふ

るふ。是より後良もすれば筑前場を語りしが、次第に年積りて、一二の音薄くなり、聲を釣るに從て、無性に末にて操あげ、くろおろし語る故に、自然と治定ならざりけり。されども、本正敷藝なる故、諸人は、從ひ此の風儀を覺わたり。當世筑前場を、きくに、何れも、皆、岡又の流なり。筑前椽は名人なり、治りなき事は語らず、當世の人は是を知らず、くり上るのを筑前と心得、地合はのら猫の様な聲を出し、ス。

エフシを見付ると文句の大小も論せずスエテ、差うつむいてもスエテ、どうと伏してもスエテ、暫し詞もクル、前後も知らずクルりうていこがれても聲のあらん限りクリ上げ語る。是れ情にはづれて、文句の意味わからず。譬へば絹川堤の淨瑠璃に、老のくりごと恩愛のといふ文句、大きに操りあげたり、六十餘の老人ことに立役なり、是れ等は了簡達なり。されども岡又斯く語りし故辨へなき人は爰大事とくり上げ語る、筑前はかくのごとき不調法は有るまじ。錢屋此太夫初註め豊竹八重太夫、通稱錢屋佐吉、寶曆元年十二月時、は、生得聲ほそく音力甲斐なき故、口中太夫となり、同七年八月二代目豊竹此太夫となる。味梅は似せず、唯筑前の腹持詞の情を能語る故、上手の名を得たり。平右衛門島太夫寛延三年八月二代目若太夫元祖駒太夫、内匠大和註内匠理太夫の粹、初め三輪太夫、内座の座頭さまでなりしが、一旦退隱した。然るに寛延元年の忠臣藏のもの事より出雲の頼みにより、入つて竹本座の座頭となり、大隅椽と受領し再び大和椽と受領せり。右三人とも大和彦太夫初代義太夫門人初め竹本彦太夫、後大和太夫と改むを似せて語るなれども、皆儕々が信ずる所に一利ありて、風儀替るといへども水上清き故、何れも銘人の評を得たり。今の世の淨瑠璃語り、多くは外連を習ひて見物に譽させたひといふ心先立故、勤心の元を失ひ、さまでもなきことを仰山にかたるなり。耳に立て聞飽する故、二段とは聞ず、是本儀太夫節の實意をしらざる故なり。『淨瑠璃』早合點

無理當自然の辨。儀太夫節は陽中の陰なり。一段語る中に見物の譽るにも所によりて邪魔になり、座敷淨瑠璃杯も皿鉢の鳴音にも所に寄りて妨と成り、淨瑠璃の情を失ひ、始終のさはりとなるものなり。當世の人は見物にはやく譽させ

ん、こゝを、こゝろが、け、三下り、四下り、語る、内に、無理に、當節を、こしらへ、聲を、かけさ
 す、是を、つかまへるといふ。 缺落者の追人と取違居ると見へたり。 見物の心に
 自然とこたへ、ヨウトほめるを中の譽とする、誠は感心の餘りにアツト腹の内へ
 感ずるを上の譽とする。 ワア、と譽るは下の譽なり。 歌舞伎役者元祖嵐小
 六は、初日に見物の譽る所は、拔、又二日目に譽る所は、拔、幕を引て後、嗚呼面白かり
 しと感ずるやうにせしは、是見さめさせぬ工夫心の巧しき所なり。 何藝にても
 油厚味過ぎたるは長持のせぬ物なり。 有隣大和註。寛延元年忠臣蔵のもめ事より竹
 里し内匠太夫なり、退隠して有隣軒
 と稱せり故に有隣大和とも呼べり。は、度々見物の譽る日あれば床より下りて腹を立
 て、不作法なる見物なりと云しとなり。 此の意最高し。 今は見物ワア、と譽
 るを、當りご心得、猶々當節をおもひ付き、女形のせりふには、さまでもない文句に
 もサハリを附、姫も傾城も、鼻も娘も分らずに、けんをつかひ、下品にもいやらし
 く、いか程、嗜よき女も、無性にくさくさへたり。 むかし播磨のかたりし、襪襦錦
 出立の段、跡にお春が操言のおもへば、さつきの四の字、盡しと云ふうへのふし付、
 五百石取りの女房、年はへ生立節に、顯れ、東西の太夫感じたりと云ふ。 近きは元
 祖鐘太夫が語りし二十四孝四段目八重垣姫の口説のサハリ、文造の仕立此のふ
 しにて能辨べし。 貴人下賤の分あること、藝の善惡、爰に有なり、うか／＼と心の
 つかぬものは百年稽古して語ることも、其の功あるまじ。 近松半二がいふに、見物
 が新しうなる故、芝居も持てたる物といひしは、高論なり。 去年あたりに元服し

たる人、二三十年以前生れたる見物、淨瑠璃は此のやうなるものと心得無性に譽る故能きと心得、安房をつくす、是即毒を呑がごとし。當節ばかり凝すとも正直に心ざすべし。寶曆年中に阿彌陀池門前新芝居にて始て撰を十文にて見せたり。則十七太夫、淀太夫、信濃太夫、杯出たり。見物も十文切にて歸ることなれば、太夫も語り退きのやうになりて、さしてもなきにクリ、或は堅き詰合の場にて、當節を入る積になりたり。其の節より芝居に本家なきゆゑ本も末も行儀惡敷、見物も一日芝居の見物は心靜なり、十文の見物は氣もせはしなく、すこしにても慈味なる場は退屈して面白からず、當世は見物も下手、淨瑠璃も下手なり、たまたま能事を進むる人あれば、最なれども今はこれが徳なりといふて聞入ず、上手になる道を失ふは當分凌ぎといふべし。『淨瑠璃』早合點

由是觀之、往昔も現下も、兎角前受専門の外連、淨瑠璃、よた語りの横道に這入りたがり、次第に斯界の風儀を疊毒し來りつゝあるかゞ想察されるのである。目五代野澤吉兵衛の養父泉太夫は、よた語りで評判を取りたる人にして、目五代春太夫などは、始終嚴しい意見をも加へて居たのであるが、兎角前受けがよいのでやめられない。『菅原』四段目の「命の花おオ、お、ちのがれしイ、お、お、お、お、」『伊賀越』沼津の「勝手覺ねし拔道をと、子故に速ふ三惡道、轉つ、まるび、つウ、ウ、ヤ、ドッコイシヨ、走り行」など、孰れも泉太夫が語り始めたよたであるが、今は其のよたのみが残つて眞摯な語り口は全くすたり、歴々の太夫なども、多くは此のよたを踏襲し、何の辨もなく、得意顔して語つて居る

のを見て、其の傾向の一端を知るべきである。若し春太夫を地下に起し、此の現状を見せしめたなら、呆れて評語を失するであらう、さて、變れば變るものと云ふ可し。
曾て堀江座にて大隅太夫が「管四」を出した時は、團平の注意もあり、正しき筋を語つて居る。

斯道の風儀の類れた一例としては、現下の『艷容女舞衣』の酒屋の語り口の如きが夫れである。

一例として『艷容女舞衣』の酒屋

元來『艷容女舞衣』酒屋の一段の骨は、當時の市民道德の根本義たる義理の二字である。其の肉は宗岸半兵衛親子の愛情である。夫れに初々しいお園を配合して色彩とした至極しつとりとした眞摯な作物にして、鼻唄式輕佻の氣分を以てしては、到底其の眞味を語り活かすことの出来ないのは勿論である。「お園も晝夜泣き悲み、朝夕もすまねば、若や病が起らうかと、見て居る親の心は闇」のあたり、「どうさんの一徹で、無理に連れられ歸りしが、一旦殿御と極まつた半七サン、嫌はれるは皆私の不調法、どんに生れた此の身のさが」のあたりなど、宗岸の氣となり、お園の心となり眞摯に、と語り進んで往つてこそ、眞箇淨瑠璃の情味も出で来るのであつて、「ハイ母さまお變りも御座りまぬか」と云ふ一句の中にも、なつかしさ、きまりの悪さ、舅姑への氣兼、どうなる事かの心づかい等、其の時其の場のお園の氣分が籠らねばならず、「いやで御座る、悴めは勘當したれば、嫁と云ふべきものも無い筈」と言ひ放つ一句の中にも、暗涙を吞んでわざと無情粧ふて居る、半兵衛の苦衷が語り現されねばならぬのである。就中、「今、比は、半七さん」のあたり、閻怨でもなければ嫉妬でもない、唯な

太夫も太夫なれば三絃彈も三絃彈である

三絃は彈けるが淨瑠璃を彈き得る者幾人かある

原武太夫の『斷絃餘論』

づかしいく、の至情の底より浮んで來る心裡のさふやきにして、有心でいかず、無心でいかず、詞にもあらず、地とも定めず、唯うつとりとして、「何處に」と案ずる氣分一つで語るべきもので、「未練な私が輪廻ゆる」「是まで居たのがお身の仇」のあたりなど、いづれもしんみりと引き締めるやうにくくと語つて往かねばならぬのである。

然るに頃日の語り風はと云へば、唯前受一方の鼻唄式にして、太夫は太夫で、一息く扇を打ったり拍子を取ったり、有りだけの聲を振りしほり、これでもかくとるぐりに行けば、三絃彈は三絃彈で色氣たつぶり、高調子にくくと乗せに往つては、喝采々々云はせやうと云ふ算段、一方が美音を聽いて呉れの一天張りなれば、一方は絃音を聽いて呉れの一天張り、語ると云ふ事も、語らせると云ふ事も、ソツチ除けの體たらく、いかにも苦々しき次第である。

現下の斯界は、太夫も太夫なれば、三絃彈も三絃彈にして、兎角當座凌ぎの不了簡者の寄り合ひなりとも評す可し。元來淨瑠璃を彈くと云事は、生半熟の腕前にては出來得べき藝當ではないのである。斯道の達人も、「三絃は、彈けるが、淨瑠璃は、彈けない」と云つて居る。現下の斯界に眞に淨瑠璃を彈き得るものが幾人かある。多くは三味線を掻き鳴らす位のものにして、淨瑠璃を彈くどころか三絃さへ彈くことの出來ない手合ばかりである。原武太夫富五郎と稱す、三絃の名手也。斯道に遊ぶ事三十餘年、元文の始めに絃を斷つて再び其の器を手にせず。『斷絃餘論』を著す。は其の著

『斷絃餘論』に

又問ふ。三絃は手づよく達者にひくぞ肝要ならん、諸藝ともに先達者を第一とす。しかるに汝つねくいふ所、達者は一體のとく、しろふと聞などにはよろしけれども、達者といふには品あり、一圓にはほめがたしといふはいかなるゆゑぞや。答て曰。その達者には品あるべし、芝居などにてひく歌などは達者を第一とす、芝居歌は所作といふものあり、ここには大小笛太鼓大太鼓鉦などまで交る事あれば、ひきかたに吟合せしめゆるめまでも皆三絃につくゆゑ、ばちもつよくきみじかに持ち、こまも高く糸も太し、こまか成いみ合なくして大拍子なるものなれば、少しばかりの弾あぢ氣吟合などにはかゝはらずしてあらましなり。昔の上手は、さのみ、達者をば、このまず、種々弾方に趣談ありて引しめゆるめのびちどみ、おこつき、どびこみ、種々の間拍子手くだりありて、歌も聲よろしきばかりをばせうくわんせず、かたりあぢにくふうせしゆゑ、面白手くだりかん應なる事のみあり、いまに其うた残、やんごとなき席高位の聞にもふつゝかならず、歌の文句もやさしかりしが、今はめりやすといふ事はやり、やひなる文句うたのさまもいやしく成て、めつたむせうにぶつゝけたゝき付け、弾を達者とやらいふよしなり。又、淨瑠璃三絃といふは、弾かた、甚違ふ。肥前永閑語齋土佐節外記、節半太夫、何も淨瑠璃をはやすの三絃にして、淨瑠璃のふしを助け、あたらずしていき合を請、釣合ひつは、りあるを第一とす。されば、どてうかどひ過ぬれば、もたれ、ひきつめたる時は、淨瑠璃にあたり、上るりのふし次第にて合するのみにては、工合といふ事、

もなく、氣味合といふ事もなし。たぶひしく合のみなり。操などはきはま
りたる定法あり、手所あり、ことく習ひありて、古代よりの手くばり有ゆゑ、達
者計にては淨るり、三絃には叶がたし。又問ふ。汝常々いふ所不審はれがたき
事あり、三絃彈者は上るりの文句節細によく覺わうかべ過たるは譽ぬ事なりと
いふ。文句節ともごとく心に覺わうかめずして、何を以てかあいかたとする。

淨瑠璃をはやし節を助けのべちどめ細かに覺わすしてはあいかたはなるまじ
き事なり。答て曰。此ふしんこそ三絃彈者の肝要とすべき所なり。ふしは猶
さら文句太夫の息合迄覺わうかめずしてはあいかたならざる事申にや、およぶ
べき。さるによつて能覺わうかべたるはあしきといふにはあらねど、其よく覺
わたるゆゑにのべちどめほど拍子ともに太夫をうかぶ心うすくして、我覺し
間拍子をたのみ彈ゆゑ、太夫のいき合其時々のかたりあぢこきうの延ちぶみふ
しのあゆみをもうかがわすして、我よく覺わしまふに彈あり。弟子師匠あい弟
子たりといへども、連ふしに語る時は、一ツ口より出るがごとくなるものなれど

も、獨り／＼はなれてかたる時は、ふし合、銘々のいき合、口の内の違老若に同じか
らず。同もの殊更銘々の語りくせもあるものなり。其座に寄ても違事あり。

予は相方とせし者大勢ありしゆゑ、其心を覺わたり。土佐節は土佐太夫虎之助
外記節はさつま源四郎、さつま左内宮内平太夫半次郎、永閑節は小源太夫、半太夫
節は古梁雲を初め、今梁雲、古半太夫、半十郎、初太夫、文次郎、元祖河東意教、雙笠蘭州

かく三絃に數年志を盡すも、生得不肖にして其器に不當、遂に成就なり難き事を計り、元文元辰八月十五日所持せし壽の字の三絃、弟子高木序遊に譲遣し、本迄不殘一時に焼捨、其後無絃無聲の靜なるを樂とせしに云々「奈良榮」

河丈夕丈同河東三代目河東甲良志摩長崎屋平七、一中ふしは古一中古三中今一中和中仲太夫國太夫を初め、かぞふるにいとまなし。歌中山小八松島庄五郎、わけて朝暮手馴しは意教雙笠榮軒二代目河東さつま左内宮内平太夫古一中古三中今一中今梁雲、此類は皆々予方に來居、十日二十日又三十日づゝも宿せしゆゑ、毎日語り合手馴しゆゑ、いき合少の延ちぶめまでくわしくうかべ覺れたれど、樂の出來不出來有るものゆゑ、心に叶ふ事は百に一ツもありやなしなり。三絃執行は平五郎ひしや小左衛門松村權兵衛を初、山崎源左衛門源四郎新次郎、一中節は知原新六、手事は津れ川檢校がぶきうたは羽山八郎七衛門古喜三郎、彼是たより三十年執行せし事は世に知る所なり。然共會て手に入難して四十歳餘におよぶ。此後追々益成就不成事と思ひはかりて元文の初ひしとだんげんせしなり。惣て相方は我覺にし通りの間拍子にて計彈時は太夫といちまいならず、若し又文句捨がななどの違ふ時は、我よくうかめ過たる彈方にては穴の明く事も有、聞人の耳立事あり我覺を定木とせずして太夫といちまいになり、引ばり合て、我覺をば捨よくといふは、此事成。覺を捨合方といちまいに成、引ばつて彈時は、自然と感應なる事も有べし。至極の出來といふは樂のけがにして、重て其所また出來かしと思ひても出來兼る物成りと明て、今日の出來は明日の用にたよす、明日の不できも重ての不出來にもならず、唯其座其時の仕合成り、かづら向しゆら向いのり、いくさ、皆々、心持語方皆々平生はかすめてかたる所なれども、かた

りかけによりてははりてかたる時も有、平日はりて語る所も、時としてはかすめ
る時も有、三絃もばち強に彈所なりとも、淨瑠璃しづめて語所なんども有、常はか
すめて彈所なりといへども、淨瑠璃の語方時として張て語る時も有り、音曲は水
ものゆるか、ねて定め置たると其の席にのぞみては約束甚だ違ふ物なれば、我覺
を、手先へ出し、いつとも同じ心にて彈時は甚違ふ事多し。さるによつて、太夫
といちまいになれ、我が覺を、捨よ、といふは、此事なり。又問。三絃彈もの
本手の手事を覺へざるは三絃彈とはいふがたしといふ、手事の彈方は甚違ふよ
ふに聞ゆる、然るを手事を最上とするはいかに。答て曰。淨瑠璃三絃と本手の
手事の彈方は甚違ふといへども、いつたい手事は三絃の根元本體成、たとへば上
るり歌ともに彈出しあるいは手などをてんさくするといへども、手事の形ちを
以てせざれば要としがたし、其上手事を得と習ひ覺へざる三絃は、かり染に彈し
らぶるといへども、彈方其儘知る事あきらか成、三絃の本躰を知らずしては、たと
へ妙手といふとも何を以てか三絃彈といふべし。又問ふ。あやつりをしらざ
る、三絃を、是又妙手といふとも、淨るり三絃彈とはいへが、たしといかに。答て曰。
先づあやつりは上るりの體なり。殊に操の彈かた種々習ひあり、定たる手所あ
り。然るをあやつりの彈かたしらざるは、能太夫の能囃子をしらすして、小諷の
みうたふがごとし。その上操つりは淨るりの語懸ケ、人形との相方皆習ひ有古
法有、定式の彈方あり、三拍子揃はざれば最とせず。初段の天皇だし段下りの習

有て、其彈方をしらざれば大將人形段よりおりず、天皇三重のならないなくては人形入りがたし、二段めのきり合三重定式違へば、軍兵人形はたらかず、上り三重、下り三重、皆々ならいあり、又碁盤人形衣桁人形はあやつりとはひとしからず、さるによつてたとへ妙手といふとも、上るり三絃彈とはいへがたし。略中又問ふ。かけ聲はうつくしくして大音ならずしては、大場などにて聞わかぬべきを、汝はかけ聲のうつくしく大音なるはこのまぬ事といふはいかに。答ていわく。かけ聲のうつくしく大音なるを、あしきといふにはあらねど、物によるべし。うたごと、外記ふし、若山ふしなどはいかにもかけ聲の大音なるも宜しからん、肥前、永閑、土佐、半太夫、河東節のたぐひは、大音にしてうつくしきは、このまぬ事を、いかにとなれば、すべてかけ聲は上るりのいき合、こきうのたすけ、ふしのあゆみにめぐると、たとへかけ聲かけずしても、かくる心の引ばりぬけざれば、上るりのたすけなる。大音にしてうつくしく、聞人の耳をよるこばすかけ聲は、みなく引ばりのぬけなり。懸け聲は高からずして美しく、うわつりにかくるは上るりのたすけとはならず。我懸聲のうつくしきを、聞する心ゆゑにあいかたは、皆ぬけとなる。昔しより上るり三絃の上手にかけ聲の美しきはなし。第一かけ聲ものびちぢみ高下あり。惣じて、弾かた目のつけ所、心もちに様々の違ひ有。靜なりと思ひねばり、さらくすると思ひ早くなる、引はると思ひもたれ、かつらむきと思ひめつたにしまる、しゆらむきと思ひすらくとはせずして、かけ出す、手所と思ふ心あ

るゆゑ、一くさりまへより、その手所に心うつりて、ねばりもたれ、またははやまり
かけ出す。達者と見て、手先へのみ達者出て内のはりなし。弾める力なきゆ
ゑ、達者にあらずして、かけ出すのなり。是みな素人聞に、達者といふるいなり。
又問ふ。かけ聲小音にてもふしのあゆみ、こきうのたすけにかくるといふはさ
もあらんが、大場などにて小音なるかけ聲は、上りのたすけとはなるべけれど、
かけ聲聞えずしてふつり合ならん。汝は度々大場にて勤たる身なれば、左様の
席にては懸聲の聞ゆるかけかたもありや。答て曰。御尋のごとく予は度々大
場にて務し事あり。されどもかけ聲聞わざるといふ評はなし。たどへて申さ
ん、祭禮の太鼓はドンドンカ、カと打、その音二三丁、風などにさそわる時は四五
丁聞ゆ。カ、カと打は太鼓のふちなれば、十間とも聞わかぬる物なれども、ドン
ドンの音にさそわるゝゆゑカ、カのみぎ聞ゆるがごとし。小音にかくると
いへども、上ると三絃とのひびきにつれて聞ゆ。ことには心ののびを以てか
くるゆゑ、大場群集の席などいへども、なをよく聞ゆるものなり。又問ふ。大
場にては三絃に常よりはばちを強くあてゝ弾かざれば聞わぬべきを、一入ばち
やわらかに弾といふはいかに。答て曰。ぬけものを弓にいて、時分あつたる
強弓にてもはなれにぶければぬけず、よわき弓にてもはなれよくさゆればかた
ものよくぬくるがごとし。和らかにりきみなければ音いろいやさからず、奇麗
にきこゆる事は身に覺わあり。云々

不即不離の呼吸

三絃と離れて三絃に外れぬ呼吸
 曲節を語らずして淨瑠璃を語る

節に捉はれて情を失ふは悪し、聲にまかせて情を失ふは尙更不可也

と云つて居るが、實に斯曲の妙機を道破し盡した至言にして、此の邊の極致に悟入してこそ、始めて淨瑠璃を弾くと云ひ得る資格も出て來るのである。

淨瑠璃を語るに付いて第一に心得ねばならぬ事は、不即不離の呼吸である。詞に於ても爾り、地合に於ては尙ほ更其の心得なくてはならず。餘りに曲節調子に乗り過ぎては唄ふ事になり、外れてはテンで淨瑠璃にならず、其處に不即不離の呼吸の妙味が存するのである。ぴたり／＼と合ひ過ぎるほど三絃に乗ったところで、さまで稱美するほどのことではなし、三絃と離れて三絃に外れぬを極致とする。斯道の訓へにも「乗つて悪し、外れては尙不可」と云はれて居る。「曲節を語らずして淨瑠璃を語る」と云ふ妙境は、實に此處に存するのである。

雖然、義太夫節もも音曲の一部なれば、惡聲よりは美聲、節廻しの拙いよりは巧みな方が結構なるには相違なし。されども、斯道本來の約束が情本位であり、節を唄ふにあらずして情を語るを本位とし、本來の面目とする以上は美聲と云ふも、巧者と云ふも、畢竟は情を語ると云ふ上に於てのことではなければならぬのである。節に、捉はれて、情を失ふは、惡し、聲に、まかせて、情を失ふは、尙更不可也。惡聲は惡聲ながらも淨瑠璃の情を失はず、簾が下りて、嗚呼面白かりしと聽客を満足せしむるほどの域に達したらんには、寧ろ聲にまかせて振り廻はし、當節澤山で喝采を取る、よた語りの淨瑠璃に比して、優ること萬々である。

『音曲口傳書』には、左の如くに云つて居る。

門弟餘多の中に中紅屋長四郎といふ人、よく師傳をのみこみ語りけるゆゑ、我も芝居を勤たしと望けれど、音聲小まへなればとて、筑後椽その事をゆるさざれば、口惜き事かなとおもひくらしける折から、同門兄弟子若太夫、豊竹上野椽と受領を拜し芝居を興行す。上野椽をのちに越前椽とあらたむる此の時に中紅屋長四郎事若竹政太夫と名乗此の芝居へ出る。筑後椽政太夫がかたり口を聽て感心し、我一流を殘し傳へん事此の人より外にあるまじと後悔して急に呼かへし、苗字を竹本に改め芝居を勤む。正徳四年甲午九月十日筑後椽六十四歳にて身まかりぬ。遺言にして義太夫となり名跡相續し、猶又音節章句を正し、終に受領を拜して竹本播磨少椽といふ。播師つねく申されけるは、我長四郎のむかし、小音なるゆゑ芝居はつとまるましと、筑後翁申されけるとき、つらくおもふは、音聲の大小は人の生つき也、音曲の事は世話のたどへにも、聲なふて人をよぶといふ事あり、生得たる調子をはづれ語れば、脾胃を損なひ、調子律にかなわす、應せざれば、人感せず、音聲の師匠より遙におどろしは、生れつきなれば、是非もなし、音は銘々の音あり、音をもつて人情の喜怒哀樂、眞實に語らば、小音なりとも人の感心せぬ事はあるまじと、工夫して語りしと申されしが、成ほど人感心したると見えて、播翁師の語り出されると、手習子供の無言をまもるごとくし、つまり聽入けるゆゑ、芝居の外まで聞ひし也。情をふかく語れば、聲はちいさくとも人が感心してよく聽わけ、嗚呼おしる事や、聲がやりたひと譽らるゝやうがよいといふ序ばなしに、

豊竹、越前、椽は音聲よき人にて、響ぬものなし、しかしながら鉢の木の文彌ふしにて、響を請られしは義太夫の本意にはあらず。此の事そしむるにはあらず、唯執行の心得の爲にはなすと申されし。云々

宜しく此の邊の理合筋途を會得合點して、徐ろに斯道の妙機、淨瑠璃本來の面目に接到すべきである。

思ふに越前には越前の長所もあれば短所もある。播磨には播磨の長所もあれば短所もある。出來得るなれば聲もあり情もある、兩つながら全き淨瑠璃らしき淨瑠璃が聴きたいのは萬々である。されど兩全はなかくに得難し。古來情語りの達者なりと讃へられた太夫は、比較的惡聲の人々に多し。初代政太夫も夫れなれば二代此太夫も夫れである。近くは五代彌太夫の如き即ち夫れである。美音なれば兎角に聲を頼たのんで工夫に疎なるの傾多し。さまざまに苦勞せずとも此の聲一ツで……と鼻にかけるのが、そもく大間違の本である。

とは云へ、一部の識者の月旦よりは百人の素人の喝采の方が、兎角氣持ちのよい事勿論なれば、堂々、何々太夫とか、何代目何の某など稱して、古名人の名跡まで襲ふて居る大看板の輩にして、尙且場當り専門と心懸け、斯道の大事も先人の遺訓もつゆ考へず「當世は見物も下手、淨瑠璃も下手なり、たまく能事を勸むる人あれば、最なれども今はこれが徳なりと聞入れず、上手になる道を失ふは當分凌ぎといふべし」と云はれて居る、其の「當分凌ぎ」の太夫や三絃彈の多いには驚かざるを得ないのである。有隣大和

譽められて腹を立てた有隣
大和は、この誠ある太夫、幾人
かある

中の譽め—上の譽め—下の
譽め

が「度々見物の譽る日あれば床より下りて腹を立て、不法なる見物なりと云ひし」
ほどの誠意ある太夫は幾人あるべきぞ。「今は見物ワア〜と譽るを當りと心得」「三
下り四下り語る内に無理に當節をこしらへ、聲をかけさす」このみを得意にし、嵐小
六が「初日に見物の譽る所は拔、又二日目に譽る所は拔、幕を引て後、嗚呼面白かりしと
感ずるやうせし」心懸けある者の皆無とも云ふべき有様なるは、如何にも嘆かほしき
次第である。

「見物の心に自然とこたへヨウとほめるを中の譽とする。誠は感心の餘りにアツと
腹の内へ感ずるを上への譽とする。ワア〜と譽るは下の譽なり。」とは至言である。
「義太夫節は陽中の陰なり、一段語る中に見物の譽るにも所によりて邪魔になり、座敷淨
瑠璃杯も、皿鉢の鳴音にも所に寄りて妨げと成り、淨瑠璃の情を失ひ始終のさはりとな
るものなり。」と云へるほどの真面目の心懸けにてしつとりと語り締めて行つてこそ、
真箇義太夫節を語るとも云ふべきである。

第二章 聲音と其の習練

二の音が大事

三の音專一の淨瑠璃は餘りにケバ立つて厭氣が來る

おツとりとした妙味

基の音で

あ 三絃の調子

宮古路豊後の『都の錦』の一節『竹豊故事』の呂律五音十二調子の辯

所謂一聲——大將聲、下手聲、

きばり聲

眞の美聲

惡聲も練磨と工夫

發音の調子の習練

咽喉の適不適よりは耳の良否

小音難聲も或程度までは矯正助長すれば

其の格に入るこゝが出来る しばかれた

聲音の習練と云ふ事の意義

聲を

似せるよりは心を似せよ

聲音習練の三大要頂

聲の量、聲の力、聲の

重み、聲の色彩

佛教の聲曲科

聲明

佛門の聲曲家式衆 各宗各派の聲明 眞宗の和讃念佛 聲明の音節を應用した平家の節調

聲明

と日本聲曲

おしなべて現今の聽客は、甲高の——うつくしい——婦女の聲のやうな——よはく——しい調子のものばかりを賞美するのであるが、甲乙併せ兼ね、五音はつきりとしてすみくまでも徹り、艶麗壯重兼ね備はり、山の動かざる如く、水の流るゝが如く、變化自在、往くとして可ならざるはなしと云はるゝほどのものでなければ、眞の美聲とは讃へられぬの

二の音が大事

三の音專一の淨瑠璃はあまりにケバ立って厭氣が来る

おつとりとした妙味

基く所は二の音である

である。雖然、美音と云ふも惡聲と云ふも、畢竟各人箇々に持つて生れた賦性にして、主として生理的素質に左右せらるゝ所なれば、しかと定木に當て嵌めたやうに、註文通りには往かないのである。甲かんに富めるものもあれば、乙えつに強きものもあり、腹の薄き人もあれば、息継ぎの長い人もあり、よしと云ふもわるしと云ふも畢竟は比較上の問題にして、古き訓には「淨瑠璃は中音要なり、中より起り一チ三に通ふ。」「兎角中音動きなき様に心得べし、一の音の響は」如此、三の音の響は」如此、一よりは下へのぞみ、三よりは上へのぞむ、上下より集る所は二の音なり、されば中を第一にすべし」とあつて、大體義太夫節淨瑠璃は、二の音を主として語るべきものと治定されて居るのである。

三の音專一の淨瑠璃はあまりにケバ立って飽きが来る。假令ば赤地に花模様の友禪など著けたるが如し。奇麗は奇麗なれどおつとりとした妙味を缺ぐ。地色は何處までも質素に、年配により夫々工夫し、柄や模様を配合そくあせてこそ、優美な落付きのあるゆかしみも出て來るが如く、如何にはんなりと語るにしても、大體二の音を素地もととし、三の甲高たかねを加味けいゐさせてこそ、其處におつとりとして得も云はれぬ妙味が出て來るのである。無論一段の淨瑠璃中には、三を主として甲高たかねな、奇麗な調子で、美しう語らねばならぬ所もある。二のおつとりとした重みのある調子で、さびを持たせて語らねばならぬ所もある。一のしんみりとした引き締めるやうな調子で、沈めて語らねばならぬ所もある。されど孰れにしても基く所は二の音である。上がりては三となり、下がりては一となり、さまざま趣を變へて變化の妙を極むべしと雖も、落付く所は二の音である。されば

三絃の調子

稽古の順序としては、先づ二の音大事と習練工夫することが肝要とせらるゝのである。三絃に十二調子がある。通常は一本、二本と數へて順次に上がりて十二本に至るのであるが、六かしく云へば一越斷金、平勝絶の以上一、下與、雙鳧鐘、黃鐘の以上二、鸞磬、鸞鐘の以上三、盤涉、神仙、上與の以上三の十二調子である。

三絃にて大切なるは調子にして、他の樂器の如くに、樂譜もなければ、かんどころの區別も、目標もなく、一に熟練と記憶とに倚賴して修練する仕事にして、俗に「調子三年スト、六年」とまで云はれて居る位の難物である。普通は本調子、二上り、三下りの三つにして、本調子とは調子の根本にして一、二、三と順次に高調に赴くをいひ、二上りとは本調子の二の音を一ト調子上げたもの、三下りとは本調子の三を一ト調子下げたるものである。長唄は多く三下りにして、端唄は調子によりて調子いろ／＼なり。常盤津、清元、義太夫等の淨瑠璃は本調子を土臺とし、中途種々に調子を變へて變化の妙を現はして居る。其他琴、胡弓の音などを真似て弾く時には一上り、一下り、三下り等の變調を用ふ。

清元、常盤津、端唄などに用ふる三味線は細棹にして、棹の幅八分より八分五厘であるが、長唄の三味線は尙ほ其れよりは五厘を減ず。義太夫節に用ふるものは所謂太棹にして、八分五厘より九分である。

左は宮古路豊後が著した『都の錦』の一節である。参考に資すべし。

音聲に開合さいふ事あり、是を則ち知るを音曲第一の習とするなり。中華の字法に文字毎に平上

去入の四聲を別ち、平聲の文字を平字とよび、上去入三聲の文字を仄字と云ふ。これを章節の本と爲して、詩文に節をつけて諷ふに、是を朗詠とす。云へり。平仄の文字を知らんが爲に、三十二門の韻頭の文字をたて、音韻を知る。東冬江支の類なり。是を唐の張麟子と云ふ人、韻鏡と云書物に撰述して、父字母字清濁輕重を立て、諸の字を反切して、二字を一字に反し納めて讀しむ。是漢土の書物のかな附と成りて、訓兼る文字の義理を能糺す重寶なり。本朝には、いはるは平かなまたは片假名ありて、文字に反切を付るにおよばず、何にても皆、いはるは假名にてすむ事なり。是故に和書の類ひはみなかな草紙なるものなり。是則三十一文字の歌道の習ひなり。然しながら、音曲開合は、本此の韵鏡より別ち出で、五音七音の道理を辨へしれるやうに調べたるものなり、能々考ふべし。

五十字假名韻譜

開は陽聲春夏に應ず、萬物成長呂也。 合は陰聲秋冬に應ず、萬物收藏律也。

開合開合

開合開合

土	ア	イ	ウ	エ	チ	喉に響く音也	木	カ	キ	ク	ケ	コ	牙に響く音也
金	サ	シ	ス	セ	ソ	齒に響く音也	火	タ	チ	ツ	テ	ト	舌に響く音也
火	ナ	ニ	ヌ	ネ	ノ	舌に響く音也	水	ハ	ヒ	フ	ヘ	ホ	唇に響く音也
水	マ	ミ	ム	メ	モ	唇に響く音也	土	ヤ	イ	ユ	エ	ヨ	喉に響く音也
火	ラ	リ	ル	レ	ロ	舌に響く音也	土	ワ	ヰ	ウ	エ	オ	喉に響く音也

此の五十字の假名韻譜を堅によむ時は、音聲の通音を知る。譬へば、アノ音はウの音に通じ、タの音はテの音に相通ず、是を相通といふなり。又横によむアカサタナハマヤラフは開く音にて、是を宮の音と云ふ。イキシチニヒミイリハは口を合す音にて、是を商の音と云ふ。ウクスツヌフムユルは口を合す音にて、これを角の音と云ふ。またエケセテネヘメエレエは口を開く音にて、是を徵

の音といふ。チコソトノホモヨロオは口を合す音にて、是を羽の音と云。是にて開合二通合す。音三通り有、是を總て開合といふ也。右の宮商角徵羽を五音とば云なり。然し諸の五音にては足る事なし、假令ば濁るかなを加ゆるときは音替るなり、或ひはカギケゴ、ヂジブセソ、ダヂソアド、バビアベオ、如斯音別に替る、これを日音といふ。又音より韻を出し、韻より音を出すことあり、譬ば臙水えんすいの類ひ也。濁りに○を附るの類ひ是則韻より生出すの音にて是を來の音といふ。是にて宮商角徵羽の五音に、來日の二音を合して七音と成るなり。故に上古の琴は七弦にして、萬聲を合せ彈じ載せり。今はつくし琴にて十三弦なり。三味線は三筋の絲にて五音七音十二調子を彈合するなり。又拗音たひといふ事有。譬へば。(あふ)(いふ)(かう)(くほう)(きやふ)(けう)(しやう)(せう)(しう)(ゆう)(しゆう)(ちよく)(ちやん)(しよん)(つう)(よう)(りやう)(りう)如此なり。是二音を一音につばめて訓む。また二字三字連續して音訓をなすときは、上の字の響にて下の字の音替るなり。或ひは觀音、天運、山陰道、日月、正月、此類ひおびたゞしく有事なり。又漢字にて叶韻えんといふは、平仄の二字連續して音訓をなすに茶碗又天目のごとし。茶の字は仄韻碗の字は平韻なれども、茶の字の仄韻に響かされて碗の平韻も仄となる。天目は天の字の平も仄となる。是を叶韻えんといふなり。節をつけて口にて云て見ればよく知るなり。天碗茶目茶碗となり。天目と成る。節眞直まことに附らるゝを平聲と知り、節屈曲するを仄聲と云ふ。故に唐にては、古詩に平仄韻字を置合せて作れるは稀なり。みな節を付て讀ひて平仄を叶へ朗詠したるものなり。此の五十字のかな韻賦は、往昔吉備大臣入唐有て歸朝の後、漢土の詩文に節附て朗詠なす事を、和朝の開合五音七音の呂律の道を合體せんがために、假名五十字韻譜を張麟子韻鏡の書に加へ給へりといひ傳へたりき。其の後又弘法大師、天然の悉曇梵字を寫して、今のいろはに直し、會者定離生死無常の道理を觀じ、一切經をみな阿吽の二字に反切して、假名開合に生死無差別、有爲轉變有る道理をおしへ給ふな

り。假名を遣ひ辨ふる事は和哥の習にて、黄門定家卿のよく製し置せ給ふものなり。其の分別辨へざれば音あやわかれずして聞づらし。此の開合假名遣ひは何れの音曲にも心得べき事なり。其の品さまく有能々考ふべし。

割 か な

九牛か一毛
越鳥南枝に巢をかけ

きうと割る
てうと割る

文字 移り

相生の名はあるぞかし
さびしき道すから秋のかなしみ

はを引けばあの字出る
ちを引けばあの字出る

ひらくかな

おもふはこそさらだにや
おもふもいはでたにや

ふさひくべし

す ぼ む

草堂のうしげに船子ども
樂をそうし船子ども

そうさすぼむ

け し かな

おもひ入さのやまはあれど
草木こころなけれども

ひをけして
くをけすなり

相通 かな

みつほのうらなみしづかに
おもわすは

ほちをさ吟す

す ます かな

おもわすは

ばさにごるべからず

の む かな

新月のいろ
念佛申かす

つなはなへのむ

重 点 かに ごとり

里く返たる雪

後のくをにごる

はれ 字 移り

御きげんありげん
いわんやにんげん

御氣げんなりト吟す
いはんにやま吟す

叶 韵 かな

越王勾踐
富貴萬福

まわをさうさ吟す
まんをばんさ吟す

替 か な

ゆふべくのかり枕

ゆをいにかへる

お な じ く

いざや調べん此のつらみ

べをめにかへる

ひ ふ へ

おもひおもへおもふ

ひふへにて心大に替る

大概如斯し。何れの音聲にても、口を開ていふを陽聲にて發聲の音と云。口を開かず合せていふは陰聲といふて、終死の音といふ。萬物みな始め有は終りあり、陰陽呼吸の道を都て開合と云。ひ

らくかな、すばむかなを開合とおもふべからず。此の假名遣ひを唐の韵鏡に合體し、和歌の道の假名にてにをばの道理符合せしことは、往昔東山殿の御茶道に、觀阿彌といふ人音曲の道に達して、開合定め置れし所なり。此の開合わかたざれば何れの音曲にても言美えびさわやかならずして、聞にくき物なり。よく心を付べし。

『竹豊故事』にも亦、呂律五音十二調子に就いて左の如くに云つて居る。

夫若以謠淨瑠璃等の郢曲の譜は、狂言綺語の嬉遊言成さばいへ共、技堪能に達する則は音義正しく、大鐘、大族、姑洗、蕤賓、夷則、無射等の六律に通じ、大呂、交鐘、仲呂、林鐘、南呂、應鐘等の六呂にも達す。史記の正義に曰く、律は氣を統て物を類す、呂は陽を統て氣を宣ふと云々。呂律調和すれば化成、宮商角徵羽の五音に達せる故、衆人の六根に徹して心耳を清させ、六塵六情の偏欲を厭離なさしめ、神魂を清淨になさしむるなり。調音秘訣に曰く、甲は聲の始めなり、其の音上つて天の五濶と成。寒暑燥濕風なり。呼息則はち天也、陽なり、一調子高きを甲の音とす。乙は聲の終りなり、其音下つて地の五立と成る。金水木火土なり。吸息則はち地なり、三調子下るを乙の音とす。呂は悦びの音也、陽なり、雙調、黃鐘、一越調等は呂の音なり。是天を司ざる。天上には樂しみ多き故に此調子を悦の音と云ふなり。律は悲しみの音なり、平調、盤涉は律の音なり、陰なり。是地を司ざる。下界には苦しみ多き故に歎き憂ふるの音とす。角の調子は肝の臟より出る、和調にして直をなり、是雙調なり。徵の調子は心の臟より出る、和調にして長し、是黃鐘調なり。宮の調子は脾の臟より出る、大きに充て和らかに緩し、是一越調なり。商の調子は肺の臟より出る、軽く少けれど、も勁しく、是平調なり。羽の調子は腎の臟より出る、沈て深し、是盤涉調なり。壹越、斷金、平調、勝絶、下無、雙調、鳧鐘、黃鐘、鸞鐘、盤涉、神仙、上無、是を十二調子共十二律共云なり。

所謂一聲
大將聲—下手聲—き
ばり聲

古來一聲二節と云ひ傳へて居るのであるが、眞の美音と稱たふるほどのものはなかなかに少し。古人も「四音五音明定して、一越、平調、雙調、まで兼ね、揃ひ、息次長く、文名明ら

眞の美聲

惡聲も練磨と工夫と
に由る

發音の調子の習練

咽喉の適不適よりは
耳の良否

攝津大椽さへ尙且晩年には
調子を外した

かなるを一、聲と云ふなり。當世大將聲といひて大聲あり、最も小音聲よりはよしといへども、餘り太く大きな聲は小まわりせず、振廻し自由ならず、此等は下手聲と云ふ。人々太くしはがれたるきばり聲を黒しといへど、左にあらす、上品にして、絲移りよく、水くさからず、甘からず、にがみありて、口さばきよく、自由にどぶくをこそ善と云ふべし。「惡聲小音といふとも、日々夜々に語れば、小音は大音となり、惡聲にも味出て、自然の妙を得るものなり。故人上總太夫嘉助綱太夫生れ付たる惡聲なれども、熟して後に、妙音となり、唯一心の以てなす時は得ぬことはあるべからず。」『淨瑠璃』と云つて居る。されば第一に必要なは、聲音の習練と工夫とである。

聲音習練の第一歩は、三味線の調子にはまるやう發音の調子を習練することである。されば理論としては先、第一に合はすべき三味線其ものゝ調子から會得して掛らねばならぬ順序となるべしと雖も、如何ほど三味線の調子の講釋を聽いたにしても、畢竟は疊の上の水練に過ぎず、篤と實地に語つて呼吸を呑み込まざれば、とんと役には立たないのである。

元來語つて三絃に移らぬと云ふのも、調子に外れると云ふのも、畢竟音聲の善惡よりは聽官の良否である。咽喉の良否如何よりは、三味線の調子を聽き分くる耳の良否如何の問題である。惡聲は惡聲ながらも、三絃の調子さへ聽き分くる官能十分なれば、調子を外すと云ふ虞れは萬々なし。美調第一と云はれた攝津大椽にして尙且、晩年左の耳をわるよくしてよりは、往々調子を外し、最負客をしてハラ／＼させたことのあるの

は誰れしも承知の事で、如何なる美聲でも、名調子でも、聽官の機能十分ならずとすれば、先づ聲曲家としての資格はなきものなりと、絶念するの外はないのである。

小音難聲も或程度までは矯
正助長すれば其の格に入る
ことが出来る

しはがれたるきばり聲は義
太夫本來の要望にはあらず

聲音の習練と云ふ事 の意義

別に人間外れの音聲を出せ
と云ふのでもなければ、各
箇の聲帶組織を無視して萬
人一樣的聲柄に任立上げや
うとするのでもなし

縦し小音にしても、難聲にしても、小音は小音ながらに、難聲は難聲ながらに、何處にか取り柄のあるものにして、根氣よく習練矯正すれば、或程度までは其の格に入ることが出来るのであるが、如何なる美音にても、美聲にても、巢立ちのまゝにては格に入ること難し。よく練り、よく鍛はれ、糸移りよく、圓轉もあり、滑脱もあり、威重もあり、餘音嫋々として、盡きざる底の域に入りてこそ、始めて眞の美聲と稱するを得可し。されば根かぎり、精限り、練習矯正して、出来るだけ極致に近いものに仕立上ぐるの外はないのである。世間には随分不心得千萬な莫迦者もあり、しはがれたるきばり聲を義太夫節本來の約束でもあるかのやうに心得無理から聲帶をつぶして仕舞ひ、やう／＼ドス聲も出るやうになつたなど、獨り極めに極め込んで悦んで居るものもあるやうなるが、誤解も亦太しと云ふべし。元來聲音の習練とは、畢竟個人の賦性の不足を鍛錬助長するの意、味に外ならないのである。別に人間外づれのした奇聲を出せとの註文でもなければ、各箇特有の聲帶組織を無視して、萬人一様の聲柄に仕立て上げやうとするのでもないのである。壯年の太夫に六十七十の老人の語聲を出せと云ふのも無理なれば、男の太夫を捉まへて女性の音聲を出せと註文するのも無理である。忽ちにして久作忽ちにしてお染、忽ちにしておみつ、一人の太夫の口から出ても、箇々生動し、活躍し、聽客をして恍惚として、宛ら其の人に接し、其の光景に接するの想ひあらしむると云ふのは、主とし

聲を似せるより心を
似せよ

て、淨瑠璃の情を語る上の、技能如何の問題である。呼吸である。氣分である。古人の訓にも「聲を似せるをきらふ、信仰なれば心を似すべし、惣じて似せるに能事は似ぬものなり」と云はれて居る。八十の太夫が語つても、小供は小供、娘は娘らしく聞ゆる所を味ふて合點すべし。淨瑠璃の呼吸氣分さへ十分に充實して居れば、別段聲を似せずとも、情味は浮んで來るのである。三味線に一、二、三の調子あるが如く、音聲も亦一、二、三の段階に別ツを得べし。三味線の調子が別れて十二調子となつて居るが如く、音聲も亦十二段階に別れて、各々適切なる發音が出來ねばならぬのである。されど各人、各箇の素質により、詳しく云へば聲帶組織の異同(先天的)其の發達状況の差異(後天的)により二に長ずるもあれば三に短なるもあり、三に長ずるもあれば一に不足するもあり、長所もあれば短所もあり、各人一樣には參り難し。聲音の習練とは畢竟、長所として何處までも助長發達せしめて、其の美を濟さしむると同時に、之れが短所に就いてもよく、工夫し、練磨し、鍛練し、出來るだけ一、二、三と整ふたる發音が、出來るやう、修練工夫すると云ふ事に外ならないのである。

聲音の習練には大要三の要項がある。其の一は聲の色彩を出すことである。其の二は聲の力を強めることである。其の三は聲の量を増大することである。低きものも高くなり、小なるものも大きくなり、息繼ぎ短かりしものも長くなり、低力弱かりしものも強くなり、疎放にして取締なかりしものもキツとしたる細緻のものとなり、餘りにこせくとして餘裕に乏しかりしものも、悠々逼らざる裕達のものとなること、皆此れ習練の結果である。

聲の量

息、繼ぎ、長く、して、滾々として、竭きず、初めは、太く、次第に、細く、綿々として、餘韻あるものを、聲量の十分なるものとす。聲量十分ならざれば、語つて要所に届かず、變化の妙を極め難く、餘韻嫋々の味を出すことが出来ないのである。斯道にて「一ぱいに語る」と云ふ事がある。夫れには十分の聲量を必要とする。

聲の力―聲の重み

聲の力とは、聲の透徹する力と、聲の重みとである。如何なる場所にて語るも四隅に透徹し、さくやくやうな小音でも、しかと聽者の耳に徹底するほどの力ある聲を要望するのである。大音必ずしも力ある聲とは稱し難し。如何なる大音なりと雖も、重みなき聲は唯ざわ／＼と騒がしきばかり、所謂大將聲きばり聲たるに過ぎないのである。重みある聲とは畢竟底力ある聲である。腹から出る聲である。喉元で囁がしたり、絞つたりした聲では、眞の力は出ないのである。

聲の色彩

雖然、如何に聲量あり、力ある聲なりと雖も、耳に響いて、やさしみ、ゆかしみ、を感ぜざるものは、眞の美聲とは稱しがたし。宛も名珠の如く、どんよりとして、光澤あり、圓滑にして、ケバ／＼しからざるものを眞の美聲とするのである。是れ即ち聲の色である。色彩である。

聲音の習練とは畢竟以上の三要件を目標とし、短所を補ひ長所を助け、出来るだけ完璧のものたらしめんとするの意義に外ならないのであつて、此の事必ずしも義太夫節、浄瑠璃を語るに付いてのみ必要なりとするのではないのである。歌曲にも必要なれば、説教にも必要である。演説、講談、落語等各其の目的により、性質により、夫れ／＼特種

佛教に於ける聲曲科

聲明

佛門の聲曲家、式衆

の聲調もあれば、特色もあり、多少の趣きを異にすべしと雖も、聲音の助長、鍛鍊と云ふ事より觀じ來れば、孰れも其の歸趣を同ふするのである。

經を讀み偈を唱ふることも汎き意味より云へば聲曲である。佛教に「因明」「聲明」「醫方明」「工巧明」「内明」の五明がある。因明は論理學である。工巧明は建築學とも云ふべし。醫方明は醫學である。内明は修養を論じた倫理學である。而して聲明は樂譜の研究とも意譯すべきものにして、聲音、曲節の研究を主とする佛教に於ける聲曲科である。

各宗とも聲明を有する。されど最も之れに力を入れ、組織立つたる教養を加へつゝあるのは天台宗にして、往昔より台家の聲明多くは稱名と書けりとまで云はれて居る。

聲明の標準樂譜は偈若くは讚である。法要などの場合儀式の始まりに行ふ朗唱は即ち此の聲明である。聲明には専門の僧侶がある。特に聲明律を研究し、佛門の聲曲家としてその事にあたるのであるが、此等の僧侶を式衆と云つて居る。

徳川幕府時代、將軍家の法事などに方り、諸侯旗本衆など數萬の大衆堂に充ち、隨分ワ・クと騒々しき折柄でも、梵唄梵唄は同一義なりの式が始まり、美妙なる聲明の聲が四隅に響き透ると、群衆感に打たれて恰も水を打つたる如く、靜まりかへつたものださうで、されば聲明の事を止斷とも稱して居るとの事である。蓋し外界の雜音を止め斷つといふの意義なるべき歟。

各宗各派の聲明

經を讀むにも各宗夫々調子を異にして居るが如く。聲明も亦宗派により夫々樂譜

を異にし、調子を異にして居るのであつて、各宗孰れも獨立して式衆の養成に努めて居るのであるが、維新以後兎角形式的の事に重きを置かざるの傾向となり來りしより、佛事、法要など本來儀式的なるべき性質のものにまで影響し、聲明の重んぜらるゝことも舊時の如くならず。式衆希望の者も次第に少くなり、各宗ともこれが補充には、随分と苦心して居ることである。何事にも多趣味にして超絶した一種の觀察眼ある村正統を繼承せる千葉満定師（増上寺内安長院の院主に就いて親しく聲明の妙味を研究し、大正四年一月號の婦人世界誌上に其の所見を公表されて居るのである）、聲曲研究上頗る興味多き所論である。就いて參照すべし。

聲明の基本節譜

眞宗の和讃念佛

聲明の基本節譜は嘆佛偈である。宗派により尙幾種の基本節譜がある。 讚嘆佛徳の偈にして、法事供養なごの式典の始めに方り、先づ佛徳を讚嘆し、渴仰の意を表するのである。

眞宗に和讃念佛と云ふのがあつたが、這は眞宗特案の嘆佛偈とも稱すべきものにして、其れには二洵三首引もあれば、三洵三首引もあり、五洵六首引もある。

流祖筑後椽の教訓にも

凡音曲道上平去入四音四機開合假名清濁をもととする事いふに及す、就中淨瑠璃とて藥師如來の寶號を申事、淨瑠璃御前の事よりおこりたるのみにあらず、平判官康頼入道平家物語を作りて生佛にをしへしふし付は台家の稱名より出たり、故に稱名に二重三重あり、平家に又二重三重有、瀧野澤住の語り初し十二段の古きふしも三重計りぞ今世には残りける。扱こそ淨瑠璃と名付る事、讀佛稱名の心もこもるよし傳へ承り候。

と云はれて居る如く、生佛又性佛に作るが節付けして語り初めた平家の節調は、台家の聲明の音節を應用轉化したものである。

『徒然草』には

「後鳥羽院の御時、信濃前司行長、稽古のほまれ有けるが、樂府の御論義の番にめされて、七徳の舞をふたつ忘れたりければ、五徳の冠者と異名をつきにけるを、心うき事にして、學問をすてゝ遁世したりけるを、慈鎮和尚、一藝あるものをば、下部までもめし置て不便にせさせたまひければ、此信濃入道を扶持したまひけり。此行長入道平家物語をつくりて生佛といひける盲目にをしへてかたらせけり云々。彼生佛が生れつきの聲を、今の琵琶法師は學びたるなり。」

とあり。「徒然草参考」淨福寺惠にも空の作にも

「行長入道慈鎮和尚に扶持せられし故にや、平家のふしも多くは台家の聲明の聲に似たる所あり、六道講式のはかせ、及び叡山大會の時など、よみあぐる聲明のふし、今の座頭のかたるによくうつりてまがふ所多し。」

と云つて居る。按ふに日本の聲曲は、其の淵源を聲明に發して居る。平家爾り、謠曲も爾り、説教節亦爾り、厚薄多少の差こそあれ、間接直接の區別こそあれ、其の始め孰れも聲明の節調より轉化し來りたるものにして、此等平家、謠曲、説教節等より轉化して來た淨瑠璃節も、淨雲、角太夫、播磨、宇治加賀當時のものは、太だしくお經臭きものであつた事は勿論である。

第三章 語り方の理論

通論

淨瑠璃を語ると云ふ事の二の意義 筋を語る―情を語る 淨瑠璃五

段の型式 一段の淨瑠璃には起承もあれば轉落もある 結もあり、承應もあれば一段の大綱を語り活かすと

云ふ事の必要 靜山急の呼吸 即ち語り方の三原則 間違つて居る稽古の仕方

半端稽古は斷じて廢すべし

聲音の適不適は必ずしも節を語り地合を語る上のみの事に非ず 詞

を語るにも亦適不適がある 詞の調子―抑揚―頓挫 語つての味―

は・た・ら・き―變化の妙は寧ろ詞に多し 地合では泣かれど詞には泣かされる 泣かせるばかりが淨瑠璃の極致でもなければ能事でも無し 要はホロリさせる位の程度 泣かし

て泣かせぬ呼吸 泣味増太夫とならぬ用心

詞には七分の強味がある 地合は或程度迄のもの也 詞の呼吸、活殺の妙用は底知れず奥の妙

知れざるほど深く聴かせぬ 四代目住太夫の研究苦心の逸話

淨瑠璃を語ると云ふ事には、一段の筋を語ると云ふことと、淨瑠璃の情を語ると云ふ

ことの二つの意義がある。筋を語るとは要するに、一段の結構より、人物の性格、配合、作

淨瑠璃を語ると云ふ
事の二つの意義
筋を語る

淨瑠璃を語ると云ふ事には、一段の筋を語ると云ふことと、淨瑠璃の情を語ると云ふ
ことの二つの意義がある。筋を語るとは要するに、一段の結構より、人物の性格、配合、作

情を語る

淨瑠璃五段の型式

者が、捉へた急所等を呑み込み、緩急前後の關係を明かにし、作意の筋道を語り、活かす、云ふの意味にして、淨瑠璃の情を語る時は、刻々に移り行く刹那々々の感じ、人物の性情、動作、光景の味ひを語り、活かす、云ふの意味である。

近松が完成した義太夫節正本の型式は五段型にして、後の作者は長く此の五段型を踏襲した。『淨瑠璃秘曲抄』には左の如くに説明して居る。

初段口傳 大方戀慕

一、序の内おろし迄は一番の内の式三番なり。あるひは謠より出、地より出、節より出る心持かはるべし。調子は大よう一越可なり、いかにもあざやかに亂たる糸をさばく様に語るなり。見物の氣をしむるならひあり。段切五段共に大事なれ共、初段の段切殊に大事なり。初日の初段は子細有事なり。戀慕はしのび段なごとして、昔より一通り有事也。唯風俗を大事に、心をつよく詞をかるく、氣をしほれてかたる也。女房のせりふいやにならぬ様にかたるべし。戀なればとてやはらかにかたればもたれてうるさし。せりふ川瀬のごとく、ふしは淵のごとくいふならひあり。

二段家傳 大方修羅

一、初段の位をかゑてめいらぬ様に語、かるきは位なり。修羅は古播磨、太夫の秘藏せられし口拍子有。聞、人掌をにぎる様に、氣をた、まず語也。緩急緩といふ事有之、舞詰のたぐひ、口はやく、ば心をしづかに持べし。口のおもきは心をか

ろくかたるべし。

三段祕傳 大方愁歎

一、淨るりのこなしあやつり迄、三段めを眼として、能ならば曲舞也。但し淨るりの趣向により、何の事もなれど位を付て三段めにして語こなすならひ有。三段めの位とて別に有。君臣のはかせと云事奥に記す。愁歎は眞實をわすれず、一番の淨るりを胸にとめてかたる事なり。心の持用、かんおつの習有。口説物語過去目前感涙等のしなくにしやべつあり。

四段相傳 大方道行

一、間を廣くもたれぬ様に語べし。淨るりも大様むすびになり、人の氣もつくる頃なれば、もたれてはあしし。道行はふし事の第一とする也。貴賤老若男女、長道中、一日路、舟路、山路のかはりめ有。され共是は心持斗也。三味線に打そひやさしく語もの、序破急の三段、序の急破の破口傳まちまち也。但三味線に打そふと云事そふにあらず、拍子にはまるといふ事、逢といふを工夫あるべし。

五段明傳 大方問答

一、一番のくふりなればむつかしき物也。さりながら五段目は淨るりの趣向次第なり。位は祝言、初段は絹、二段目はうら絹、三段目はもやう染色上繪ぬいはく、四段目は糸綿、五段目は仕立也。問答詞は皆狂言なり。公家武家土民町人敵役女若衆、佛神の詫宣わきて大事有。但し體の字用の地と云事有。惣じて是にか

ぎらず、ひつきやう狂言の物まねなり。鳥類畜類、水のながれ風の音、有情非情迄、口にて其景色をうつす事也。然ども牛を牛の聲、ほらがいをはら貝の様に、むさと似ふしを付ること、あてしまいとてきらう也。表裏の物似有。表とはわざをまねる、裏とは心をまねる事也。ゑしやく有べし。

されど此の型式とても、後には次第に紊れ來り、九段もの『夏祭派』も出れば、十一段もの『假名手本忠臣藏』も出で、十段もの八段もの等、幾多型違ひの長篇ものも新作上場せらるゝに至りしと雖も、其の多くは依然として尙ほ舊き五段型の型式を踏襲格守して居たのであつた。但世話浄瑠璃には一定したる型式とては無し。多くは心中ものにして、上中下三段若くは上下二段に書かれ、最後には道行の一章が附いて居るのを普通とする。左に段物浄瑠璃の二、三の例を挙げ、参照に資することとする。

國性爺合戦

正徳五年作

初段

南京王城の段
花合戦
司馬將軍諫言の段
國王殺害の段
皇后最期
柳歌君討死

二目段

濱つたいの段
鳴哈争ひ
唐士舟の段
和唐内出立
千里が竹
三段目

樓門の段

城内の段
紅流し
甘輝味方の段
四段目
松浦住吉社の段
梅檀女道行

九仙山夢の段

天の採橋の段
五段目
龍馬ヶ原の段
南京城門の段
和唐内奮戦の段

北條時頼記

享保十一年作

初段

鎌倉御所の段

桐ヶ谷の段

科人騒動の段

弓削屋敷の段

大赦の段

二段目

鷹野の段

大助六郎出會の段
鷹野狼籍の段
三段目
決断所の段

道行熊谷笠
三浦館の段
忍び乗物の段
四段目

江の島の段
月小夜部屋の段
同變化の段
五段目

泰村謀叛の段
女鉢の木

蘆屋道満大内鑑

享保十九年作

初 段

禁裡評定の段
柿の前下向道の段
保憲館の段
神前御園の段
保名狂亂

御所屏外の段
御菩薩池の段
信田明神の段
小袖物狂ひ
保名正氣の段
狐狩りの段
三大段目
左大將館の段

道満出仕の段
同屋段の段
同奥庭の段
四段目
葛の葉住家の段
同子別れの段
道行信田二人妻
白狐恩愛の段

童子明智の段
信太の森の段
二人與勘平の段
五段目
一條橋詰の段
大内山當物の段
晴明蘇生祈の段

源 平 布 引 瀧

寛延二年作

初 段

大内山の段
義賢出仕の段
布引瀧の段
西八條清盛館の段
親子地藏の段

二段目
義賢館の段
三段目
道行形見の寄生
小萬勤きの段
宗盛御船の段

九郎助住家の段
宗盛物語の段
綿繰馬の段
四段目
重盛院參の段
鳥羽離宮の段

三人上戸の段
成忠卿流罪の段
五段目
木曾義仲生立の段

小 野 道 風 青 柳 硯

寶曆四年作

初 段

禁裡の段
小野兄弟歸參の段
早成館の段

同角力の段
同廊下口の段
二段目
東寺參詣道の段

柳の枝の段
道風館の段
花嫁の段
無筆の段

頼風勘當の段
三段目
六道の辻の段
公卿流罪の段

仁助住家の段
卒塔婆の段
四段目

四天王寺の段
駄六住家の段
お縫戀墓の段

道行思の家名所
池の端の段
洞穴の段

五段目
三條高敷の段

神靈矢口渡

初段

吉野内裏の段
九條町井猶屋の段
義興出陣の段
二段目

義興奮戦の段
同居城の段
三段目

明和七年作

四段目

兵庫助屋敷の段
道行比翼の袖
生麥村離家の段
頼兵衛住家の段

五段目

矢口渡し場の段
新田社遷宮の段

妹春山婦女庭訓

初段

禁裏評官の段
春日社頭の段
蝦夷家方の段
二段目

猿澤池の段
芝六住居の段
同詮議の段
三段目

明和八年作

四段目

妹山春山の段
杉酒屋井戸替の段
道行戀の小田巻
御殿贖七上使の段

五段目

馬子唄の段
紅葉殿の段
志賀大内山の段

伊賀越道中雙六

初段

鶴岡勅使下著の段
二段目
行家屋敷の段
桐谷裏道の段
三段目

同憤死の段
四段目
郡山宮居の段
五段目

天明三年作

七段目

沼津の段
平作住居の段
千本松の段
藤川茶店の段
新關所の段
同拔道の段
八段目

十段目

岡崎の段
九段目
伏見渡舟場の段
敵討の段

碁太平記白石噺

圓覺寺の段
丹右衛門使者の段
六段目

天明七年作

初 段

上巳節會雞合の段
佐々目歸參願の段

二 段 目

夢の告の段
明神の森の段

三 段 目

蝶 花 形 名 歌 島 臺

寛政五年作

序

紫震殿の段

二 册 目

宮島松並木の段
同千疊敷の段
同海邊の殿

三 册 目

岩手の館の段
天眼鏡の段

戀の意趣の段
普傳惡事露見の段

四 段 目

田植の段

五 段 目

錦帶橋の段

四 册 目

鐵砲鍛冶の段

五 册 目

小瀬川戦場の段

六 册 目

門戸兵衛住居の段

奥廣作住家の段

淺草雷門の段

七 段 目

新吉原揚屋の段
宮城野都屋の段
奥座敷の段

七 册 目

一の宮鳥居の段

八 册 目

小阪部兵部館の段
同茶室の段

九 册 目

陣所酒宴の段

八 段 目

常悅浪宅の段
祕法傳授の段
神變邪術の段
扇ヶ谷仇討の段

同使者の段
道行山路の響蟲の段

十 册 目

一ツ家の段

十一 册 目

兩家歸陣の段

總じて一段の淨瑠璃には起承もあれば轉結もあり承應もあれば段落もある

一段の大綱を語り活かすと云ふ事の必要

靜山急の呼吸

總じて五段型淨瑠璃にあれ、世話淨瑠璃にあれ、將又其の他の破格型の淨瑠璃にあれ、大凡淨瑠璃一段の中には、口もあれば、中もあり、奥切もある。段落もあれば、承應もあり、起承もあれば、轉結もある。されば淨瑠璃を語るにしても、先づ第一に全段の結構を通觀し、篇と承應段落の要所を會得了解し、一段の大綱を語り活かすと云ふ事の心懸が肝要となつて來るのである。

斯道の術語に靜山急の呼吸と云ふ事がある。始めは、靜におちついて、ゆつたりと語り出す、即ち靜である。中ごろは、山の如く、堂々搖ぎなく、一杯に語り込んで、往く、即ち山である。末は、わだかまりなく、急調に、惣じて、足取り、早に語つて、結末を付くる、即ち急で

語り方の三原則

間違つて居る稽古の仕方

ある。之れを語り方の三原則とせらる。時代物にあれ、世話物にあれ、苟も段物を語り切り淨瑠璃を語るとなれば、十分此の語り方の原則を心得て懸らねばならぬ事は勿論である。然るに今の多くの素人義太夫連中の稽古振りはと見れば、『攝州合邦辻』合邦住家を稽古すれば、「引つ立てく無理やりに」まで止める。『一谷嫩軍記』熊谷陣屋を稽古すれば、「軍次は居らぬか早や參れ」まで止めると云ふ行き方にして、山もなければ急もなし。宛も詩を作つて起句を得たばかり、文を作つて承應の妙趣を發揮するに至らざると一般、洵に興味もなければ、意味も無い稽古の仕方である。初心なれば初心だけに夫々相應した語りものは澤山ある。長くて困るとなれば又夫々手ごろの紙數の語りものも澤山ある。初手つつけより大ものに手をつけ、僅かに口の十枚や十五枚で打ち切り、奥は六ヶしうて素人などの手を著くべき代しろものには候はずなどと、弱い音を吐いて叩頭をせんよりは、寧ろ初めより力量相當のものより著手し、兎に角一段は一段だけに纏りたる稽古を附けると云ふ事が大事中の大事也と知るべし。如何に短くとも、軽くとも、既に段ものとなり一段と纏つて見れば、又其處には靜山急とまとまりたる別種の妙味が存するのであつて、どれほど面白しと思ふ淨瑠璃でも、半端ものでは第一に筋が通らず、語つても足らず、聴いてもものたらず、眞の妙味も感興も湧いて來ないのである。

若夫れ今の素人連中の稽古振りの如く、兎角半段稽古や飛々とびとび抜きく稽古でお茶を濁し、だれと云ふては、『野崎村』の婆を抜き、久作の意見を抜き、『戀飛脚』新の口村を語つては、「忠兵衛は障子より……身をもみ歎くぞ道理なる」より「涙のひま」に飛び、

半端稽古は斷じて廢すべし

聲音の適不適は必ずしも節を語り地合を語る上のみの事にはあらず

「詞」を語るにも適不適がある

「詞」の調子—抑揚頓挫

語つての味—はたらくき—變化の妙用は寧ろ「詞」に多し

「奥の障子を明るを引き留め」より「コレ〜女中」に飛び、急所や難所は飛び越し勝手次第と云ふやうなやり方となつては、意味よりは聲情を語ると云ふ事よりは「節」を語ると云ふ事に傾き勝ちとなり、何一ツ纏らぬ不具的淨瑠璃が出来上つて來るのも免れざる所なれば、よく〜工夫一番し、此等無意味な半端稽古は斷じて之を廢すべきである。

元來聲音の適不適と云へば、單に「節」を語り、「地合」を語る上に付いての事のみならず、に考へられて居るやうなれど、「詞」を語るにも其の適不適がある。唯「詞」は「地合」と違ひ、三絃に合せて語ると云ふことがないので、善惡ともに際立つて聽客の耳にひびかざるまでの事にして、無論、「詞」にも、調子がある。抑揚頓挫がなければならぬ。而かも三味線と云ふ拍子を取るべき相手方がないだけ、それだけ一層の工夫と一倍の苦心とを必要とするのであつて、多くの素人淨瑠璃の連中が、「地合」は相應に語り了せても、「詞」となつてたちまちポロを出し、一段の淨瑠璃を滅茶々々にしてしまふのも、畢竟其の調子、其の抑揚、其の活殺の呼吸に、工夫と苦心との到らぬ所以に外ならないのである。

雖然、兎角物事は兩全は得難し、兩手に花と云ふやうな好都合には參り難く、「地合」も「詞」も併せ兼ね、孰れに優り劣りなく語り活かすと云ふことは、事實却々に困難である。されば美音の太夫は知らず〜「地合」に趨り、惡聲の太夫は、「詞」に活路を求むると云ふ段取りとなるのも、勢ひ已を得ざる次第なるべしと雖も、さて語つての味變化の多少

「詞」には泣かされる
地合では泣かぬぞ

は、「地合」よりは「詞」の方、一段の深みもあれば、又一層の妙味も存するのである。「地合」では泣かぬぞ、「詞」では泣かされる。「地合」は少々拙くとも、「詞」を上手に語る太夫の淨瑠璃には、つい、釣り込まれて、手巾を濡めすこともあり、雖も如何に美音美調で、振りまはして見ても、肝腎の「詞」が滅茶、と来ては、どんと要領を得ざること、何人も承知のことなるべし。

住太夫、彌太夫、津太夫に
は泣いたが越路太夫には泣
かない

義太夫節も聲曲なれば、泣かすばかりが、能事でないことは、勿論である。濃艶嫵々の

美音を以て、聽客をして恍惚として神逝き魂飛ぶの満足を得せしむると云ふ事も、大事中の大事には相違なしと雖も、情を寫し、意味を語り、斯道本來の眞價を發揮すると云ふ事は、更に一層の大事とせねばならぬのである。淨瑠璃通を以て自ら任ずる多くの老人連は「住太夫彌太夫津太夫等には随分泣かされたこともあれど、越路の淨瑠璃には、

泣かせるばかりが淨
瑠璃の極致でもなけ
れば能事でもなし

一度も泣いた事なし」と述懐し、泣いた、泣かされたと云ふ事を唯一の標準とし、太夫の伎倆の優劣を判つるの照尺として居るものもあるやうなれども、泣かせるばかりが、淨瑠璃其のもの、最後の目的であるか、どうかは頗る疑問である。彌太夫津太夫等の泣かせたのが譽むべきであるか、越路太夫があれほどの腕前をもちながら泣かせないで、情を持たせて往つたのが譽むべきであるか、輕々しく批判を下すべき限りではないのである。義太夫節も聲曲の一ツなる事を考ふべし。泣かせるばかりが淨瑠璃の極致でもなければ、能事でもなし。つき込み、今一息と云ふ瀬戸際まで突き込んで往つて、さらりと氣を變へる、……淨瑠璃の極致は實に此邊に存すべし。泣かせては

興、さめてあさまし、ほご、にして餘情を持たせると云ふ所に、一層のゆかしみもあれば、又一段の妙味も存するのである。とは云へ泣かせること云ふ事さへ既になかくに六ヶし、彌太夫、津太夫等の伎倆を以て始めて爲し得べき難事である。されど意味を語り、情を語り、此處ぞと云ふ瀬戸際まで引き付けて置いて泣かさずして餘情を持たすと云ふ事は、更に一層の伎倆と修練とを要する難事である。聲曲としての義太夫節の極致は此に存し、其の最後の到達點は此に存すべし。

要はホロリとさせる
位の程度
泣かして泣かせぬ呼
吸

あらゆる責道具を寄せ集めて来て、サア泣け〜とひた攻めに攻め付けるやうな作意や趣向は、決して淨瑠璃正本の上乗なるものとは稱し難し。其處までひしとはどり詰めず前後の情味を損せずして、自然に場面を變化して往く所に、作意の妙味もあれば作者のはたらきも存するのである。淨瑠璃を語るに付いての注意の要點も亦同じ。要はホロリとさせるまで、可し。「突き込んで泣かせる」よりは、「今一ト息と云ふ所で氣を變へて往く」と云ふことが、秘訣中の秘訣である。「泣かして泣かせぬ」と云ふ呼吸である。泣かせたが故に住太夫、彌太夫等が偉いと云ふことも未だ〜なれば泣かせぬが故に、越路太夫の伎倆がごうのかうのと批難するのもまだ〜と云ふ可し。夫れには各個の得意とする語り物の作意にも由る所多し。「忠臣講釋」や「阿波鳴戸」八冊目となれば、駈出しの太夫でも、聽客の手布をしぼらせる位のことばさして難事でない。泣くべく出来上り居る外題を語つて、これでもかく〜とひた攻めに攻め付けて往くと云ふのは、餘りに心なき業と知るべし。「忠臣講釋」などは毎場各段愁嘆場ばかり、そ

泣味憎太夫とならぬ
用心

「詞」には七分の強味
がある。「地合」は或
程度迄のもの也

れでは観客もたまらぬとて、後には歌舞伎芝居などでも續き狂言としては之を出さず、一幕や二幕位づゝを取り離して上場することゝなつた位である。泣かせたとて必ずしも大當りでもなければ泣かせる計りが必しも、義太夫節、浄瑠璃の極致ではないのである。『浄瑠璃早合點』に所云「京都の太夫に能泣く太夫あり、愁の文句さへ見付ると聊のことも無性に泣故、泣味憎太夫といふとかや」の、其の泣味憎太夫にならぬやう勘考一番せねばならぬのである。

思ふに浄瑠璃の情を寫すと云ふ上から觀れば、地合より、詞の方に七分の強みがある。周圍の光景―人物の働作を描くのは、地合の主眼とする所なれど、聴客と作中の人物と直に相接し、面のあたり意中の悶々、痛苦、愁怨、悔恨の告白を聞くが如くならしむるのは、「詞」の長所である。「地合」を語つては、ひたと作中の人物と同化せしむるほど、痛切なる感じを惹起さしむるまでには至らずと雖も、「詞」を語つては其境に入らしむること、必ずしも難事ではないのである。古來名人と呼ばれ上手と稱せられた人々は、悪聲の太夫に多し。畢竟「詞」の工夫、研究の上に努力成功したのに外ならないのである。

「詞」を語つて、聴客を釣り込んで往く秘訣は、聴客と太夫と相對して話し、心持ちで語り込んで往くのである。太夫が久作を語る時は、聴客を久松と視て語る―お光と視て語るのである。太夫がお光を語る時は、聴客をお染と視て語る―久作と視て語るのである。常に聴客を對話者の地位に置く。太夫が久松となつて「コレお光ごん振袖の持病のといろくの耳こすり、はしたないこと聽いては居ぬぞや」と語れば、聴客

はお光の心持となつて之れに對する。太夫がお光となつて「ホ、變つた事がお氣に障つた」と語れば、聽客は久松となつて之れに對すると云ふやうに、太夫と聽客―聽客と太夫と、入れ違ひくゝに、其の地位を替へて相對し、久作の異見となれば、聽客は久松ともなり、お染ともなる。お光の髪切りとなれば、久作ともなり、盲目の母親ともなり、久松ともなり、お染ともなり、常に相對して話しするやうに聽かせて往くのが「詞」を語るに付いての祕訣と知るべきである。太夫は久作となり了せて語る。聽客は久松の氣となり、お染の氣となつて聽く。太夫はお光となり了せて語る。聽客は久作の身となり、久松の身となり、お染の身となつて聽くと云ふ境界に入らしめてこそ、はじめ、太夫も聽客も一ツとなつて、思はず曲中の人物と同化して了ふと云ふ事となるのである。

一般には、久作を語れば聽客を久作として了ひ、お光を語ればお光として了ひ、久松、お染を語れば久松、お染として了ふと云ふのが、淨瑠璃の極致なるかの如くに云はれて居るのである。されど、淨瑠璃の極致は、尙ほ、夫れよりは、一步、奥に在る。無論久作を語つて聽客を久作として仕舞ひ、お光を語つてお光として仕舞ふと云ふ事も、なかゝ生やさしき事ではなし。されど聽客が久松となり、お染となつて太夫の久作の異見を聽く、久作となり、久松となり、お染となつて、太夫のお光の「どうさんもお二人さんも、何んにも云ふて下さんすな……死ぬる覺悟、イヤサ、死ぬる覺悟で居やしやんすかゝさんの大病、どうぞ命がとりのめたさ、わしやとんと思ひ切つた、ナ切つて祝ふた髮形」を聽くやうにならせてこそ、始めて淨瑠璃の極致に觸れたるものとも云ふべきである。

「詞」の呼吸―活殺の妙用は底知れず奥の知れざるほど深し

まづい淨瑠璃を一層まづく聽かせる

四代目住太夫の研究
苦心の逸話

もごとく音量の多少と調子の美あしは各個の賦性なれば、如何に修練を加へて見たところで或程度以上には進み難し。雖然、淨瑠璃の情を語ると云ふ事の工夫、研究の範圍は、廣遠にして殆ど無限である。殊更「詞」の呼吸活殺の妙用は底知れず奥の知れざるほど深し。無論「地合」を語るにしても、淨瑠璃の情味を語り活かすと云ふ事の工夫も必要なれば、修練も必要である。されど、「地合」を語つて、人物の性格、情緒を語り、活かすと云ふことには、自ら程度のあるものにして、「詞」の語りやうにより、老若、男女、貴賤、都鄙、人品、性格、喜怒、哀樂、すべて歴々として、目前其人を見るが如くならしむるやうには、参り難し。然るに今の素人義太夫の連中など來ては、「詞」の研究などは、てんで念頭に置かず、唯々「地合」のみに没頭し、まづい淨瑠璃を一層まづく聽かせること、如何にも笑止の至りと云ふ可し。

淨瑠璃の情を寫すと云ふ事の研究に苦心した名人上手の實歴談は、太だ多し。左に四代目住太夫の苦心談を紹介する。

盲人四代目住太夫は、夫の五代彌太夫にも譲らざるほどの研究家にして、何處其處に不幸があつた隣りに、夫婦喧嘩でも始まつたとなると、早速出懸けて往つて、悔詞を言つたり、仲裁をしたり、何や角や話して居る内に、チャンと急所をつかまへては、研究の資料としたものださうで、中には随分珍談もある。

或時、永年の御最負で住太夫には書き入れの得意先のお店の、ほんそ子の令息が、逝去された事があつた。例によつて早速出懸けて往つたが、手引は谷太夫後染で

ある。平素ひこそから心置きなく出入を許されて居るお店のことなれば、サア、此方こちらへと主人の居間に通されて、さてかうくかくくと病氣前後の話し、奥様も傍から、平素恸發の兒だけにあふも云つた、かうもしたと、涙ながらの物語り、住太夫も立端に困る位、やうくのこと切り上げて歸り、「谷、お前今日はいく儲物まけものをしたな」と突然ただひの質問に、谷太夫もおかしいとは思ひながら、「いふね、何ンにももうかりやしまへん」「いや、さうでない、考へて見い」「阿呆らしい、お師匠さん、何にもあなたに隠しはしまへんが、實際今日許りは五十錢玉一つも頂戴いたごままへん」と眞面目まじめになつて辯明べんめいをすると、「馬鹿奴ツ」と一喝「同じ死別わかれにも子の別れ親の別れ、夫婦の別れと夫々情愛の違ふものだ。別わかても今日のお二方の一旦那は旦那、奥様は奥様と、夫々情あいのお話しに何とも云はれぬ妙味があつた。淨瑠璃のつかまへ所は彼處あそこだ。あの情、あの呼吸が通せぬやうなぼんやりなら廢業やめて仕まへ」とさんくんに叱り付けられたので、谷太夫も初めて悟り、後ち人にも語つて、百回の稽古より其時一回の教訓が、しみく身にしんで裨益たぐになつたと云つて居たのである。

夫婦喧嘩の仲裁談には頗る振つたのがある。手引の役は例の如く谷太夫で、偶たまには打つ撲ぶる、皿飛び播木はずきを振り廻はして居る眞最中に、盲目の師匠を連れて飛び込むと云ふ始末なれば、随分閉口させられたこともあるさうな。斯がかうなると又生憎あはげなもので、近所に大工の頭領が居る、家内かみさんが大の嫉妬家、

傍人からはからかい半分、さま／＼悪戯してたき付けると云ふ始末なれば年中ごた／＼ばかり、一日一人の車夫がやつて来た。「親方は在宿ですか」「留守です」「それは困りましたな、手紙を依頼て……、お留守さんでは……と、懐を探しては出したり入れたり、家内ソロ／＼崩し出す、「何處さんから頼まれて」「イエなに」と思はせたつぶり、「厄介やな、這麼もの頼まれて……又来るはおつくうだし」と暫く考へた末、「家内置いて往ますサ、親方が歸つてなら渡して」とそこ／＼に歸つて往つたたくみの一通り取り上げて見ると女名前に女文字、サア一大事出来ーによき／＼と二本の角を立て／＼ねら憤りに怒つて居ると、知らぬが佛の頭領が歸つて来る、「お前さん此の女は何者です」「知らん」「知らんもんが手紙を寄越しまつかいな」「夫りや又例の誰れかの悪戯ぢやがな」「阿呆らしい、ようまあそんな」倏ちばた／＼がた／＼の立廻り。住太夫は夫れ始まつたとばかり、出懸けて見ると……頭領もあまりに度々どて本氣になつて腹を立て／＼居る。兩人ともごねらい傍杖を喰つて逃げ歸り、「ナー谷、今日の芝居は本ものだった。無茶云ふなど本氣になつて居る頭領の呼吸も格別なれど家内がくやしい／＼と泣きながらの情合は又別段で、平素よりは一層の出来榮一實に面白かつた」此れには谷太夫も挨拶に困つたさうである。

卒然として聽かば唯之れ一場の笑話に過ぎざるが如し。されど仔細に味ひ來れば、其處にはねも云はれぬ興味が湧いて來るのである。

要するに一種の摸倣形を摸倣すして情を摸倣る 摸倣なるが故に上手もあれば下手もある稽古の必要もあれば修練の必要もある 三歳児の往時より經驗して來然伎巧一片、口頭ばかりにては眞箇の情味は出ないのである 作中の人物となり境遇となる 稽古よりは自覺淨瑠璃に情の籠らざるは畢竟型ばかりに拘々として根本的研究を勿諾に附するの結ある。

世話物と時代物との語り方の區別 時代物を語るに就ての通則生やさしき稽古や

伎倆にては出來ぬ時代物世話物の語りさしては古來幾多の名人上手も輩出して居る時代物の語りの達人として傳へられたるものは洵に少し 時代物淨瑠璃の本來の性質 世話淨瑠璃の特長 世話時代物 世話時代物を語るに付

いて第一に心得べき事項一例として『平假名盛衰記』の松右衛門 世話時代物淨瑠璃の特色と妙味

淨瑠璃の重みと輕み其の一例 間と云ふ事 阿吽一瞬の呼吸―間髪を容れ

ざる刹那の氣合 黒いも白いも間の持ち方一ツの巧拙に由る 間は息に

非ず寸分の油断も不用意も許さざる義と心得べし 三絃が彈き出せば語り出し、「節」が終れば息を繼ぐと云ふやうな淺薄な了簡ではまだくも也 間を持つ

一例 息一ツ繼ぐにさへ注意を要す 息を盜む―鼻から息其の一例

節に切字 詞にも亦切字の必要 息を切らずして句を切る工夫 湯を呑

む心得と扇拍子 太夫と三絃との阿吽表裏の關係 自らにしてびたりと

合體したのが眞の呼吸

要するに一種の摸倣

元來、淨瑠璃を語る、と云ふ事、夫れ、自體は、一種の摸倣である。腹も立って居ないので、

形を摸倣せずして情を摸倣する、聲を摸倣せずして心を摸倣する

摸倣なるが故に上手もあれば下手もあり稽古の必要もあれば修練の必要もある

三歳児の時から経験した朦朧げな觀念を練習工夫して伎巧化するのが淨瑠璃の修業

さも腹の立ツたやうに語り、悲しくもないのに、子を失ひ、夫に別れ、親に別れた時のやうに語り、別段可笑もあらざるに、大聲あげて、呵々大笑して、見ると、云ふのである。されば、淨瑠璃の奥義と云ふも、秘訣と云ふも、詮じ来れば、形を摸倣せずして、情を摸倣よと訓へるまでのことである。聲を摸倣せずして、心を摸倣よと教へるまでのことである。唯、夫れ摸倣なるが故に、稽古の必要もあれば、工夫の必要もあり、修練の必要もあるのである。如何にへつぽこの太夫にしても、古今に一人と云はるふほどの名人にしても、肉親の子に別れ、孫に別れ、親に別れた情は一ツである。名人なるが故に、數層倍の涙が出ると云ふ譯でもなければ、へつぽこ太夫なるが故に、愁がきかないと云ふ次第でもないのである。情緒の發作は自然である。自然なるがゆゑに、一に歸する。摸倣は不自然である。不自然なるが故に、上手もあれば、下手もあり、修練の必要もあれば、稽古の必要もあり、此に摸倣術の工夫研究が必要となつて來るのである。

吾人は三歳児の往時より泣くことも怒ることも笑ふことも自らにして経験して來て居るのである。されば、どうして泣く―どうして怒る―どうして笑ふと―別段研究して見た譯でもなければ、工夫して見た譯でもなく、唯、夫れ自然の自覺に外ならないのである。他人の泣くのも數々見た―笑ふのも見た―怒るのも見た―されど之れだと云つたところで、しかど氣に留めて、如此な場合には斯う泣く―あんな折には如彼笑ふ―と特に研究的に注意觀察して來て居ると云ふ譯でもなければ、此等觀念とても、至極おぼろげな―雜駁なものなる事は云ふ迄もなし。淨瑠璃の修業とは、畢竟這箇

朦朧乎たる観念を確實にし、幾度も練習し、幾回も工夫し、遂には一種の技術化せるものとなし、随時随所に自在に應用し、眞にあらすして眞に迫まるやうに語り、自然にあらすして自然に近きまでに發情することが出来るよう、修練研究すると云ふことに外ならないのである。

されど全然技巧一片
口頭ばかりでは眞
個の情味は出ないの
である
作中の人物の氣分と
なり境遇となる

されど泣にせよ、笑ふにせよ、憤るにせよ、全然技巧一片、口頭ばかりでは眞個の情味は出難し。摸倣は摸倣にしても、不自然は不自然にしても、語り人自身作中の人物と同化し、其の境遇となり、氣分となり、假りに太夫自身作中の人物と同一の立場に居り、同一境遇の人となつたとしたら、如何な氣分となり、如何な感情が起るべきかと考案思索し、如何にせば其の氣分、其の感情を現はし得べきかと云ふ事に移り、爰に迫眞の表情となつて淨瑠璃の妙味を發揮するの段取りとなつて來るものと知るべし。

稽古よりは自覺

思ふに語り人たる太夫自身が作中の人物と同化し、如何なる氣分となり、如何なる感情を起すべきかと云ふことの工夫や研究は、學ばんよりは覺れである。稽古よりは自覺である。師に就いて學ぶ事も必要は必要に相違なしと雖も、自ら顧みて工夫發明すると云ふ事は、更に一層必要とし、大事とせらるゝのである。夫れには第一に、作意の研究である。作中の人物の境遇の研究である。場面の變化につれて、刻々に移り行く、作中の人物の心裡状態の研究である。先づ一ト通り此等の研究を済まして後に――さて此場合如何な氣分となるべきか――如何な感情を現すべきかと云ふ事の實際問題に移るべき順序となるのである。大凡、淨瑠璃に情の籠らざるは、太夫の伎倆の足らざる

淨瑠璃に情の籠らざるは畢竟其の型ばかりに拘々として根本的研究を勿諾に附するの結果である

世話ものと時代ものとは語り方に區別がある

にも由るべし、發音の研究の未熟なるにも由るべし、雖も第一は作意や人物の境遇、刻々に移り行く心裡状態の穿鑿がお留守になり、碌々研究も積まず工夫も加へず單に伎巧の末に趨り、形式の末に促はれ、淨瑠璃の型ばかりに拘々として情を語ると云ふ事の根本的研究を、勿諾に附するの結果に外ならないのである。

淨瑠璃を語るに臨んで語り人の心得ねばならぬ事は自我を去ることである。雜念を一掃し、己れを虚うし、久作を語れば全然久作となり了せ、お光を語れば全然お光となり了せ、お染となり久松となり、人物變る毎に全然別人の觀念となり、其の境遇となり、立場となり、觀念を一所に集中し、又他を念はざるやうにならねば、眞に淨瑠璃の情味を語り活かすことは出来ないのである。

されど語り人の性格たる各人各様情に脆き人もあるべし、つよき人もあるべし、樂天性の人もあれば神經質の人もあり、同じ淨瑠璃を聽くにしても、聽客の性格により、感じ方に幾様幾段の差別あるが如く、語り人の性格により、又幾多幾様の差別あるべし。されば全然作中の人物と一ツになり、そつくり其儘其の人になりおほせよと註文する事はもとゞ無理なる相談には相違なしと雖も、其處に稽古の必要もあれば、修練の必要も起つて來るのであつて、淨瑠璃の修行とは畢竟古人先輩が工夫研究して來た語り方の定法先例の一般を尋ねて、其の奥義に到るの捷徑とするのに外ならないのである。

總じて「地合」にあれ「詞」にあれ、世話ものと時代ものとは、夫れ語り方に區別がある。何處までも武家風に與ゆかしく、言語動作すべて慎重を專一とし、喜怒哀樂共に

時代ものを語るに就いての通則

生やさしき稽古や伎倆にては出来ざる時代物
世話もの語りとしては古今幾多の名人も上手も輩出して居るが、時代もの語りの達人として傳へられたるものは洵に少し

時代もの浄瑠璃の本來の性質

世話浄瑠璃の特長

輕々しく表面に發さず、應揚に、一重々しく、語り込んで行く、云ふのが、時代ものを語る上の通則にして、おしなべて歩調ゆるやかに、唯々太夫の肚裡一つで、老若男女貴賤都鄙、夫々情緒を語り活かすと云ふ心掛けを專一とするのである。されば時代ものを語ると云ふ事は、生やさしき稽古や伎倆にては出来ざる至難事にして、往時より世話もの語りとしては幾多の名人上手も輩出し、近代にても、組太夫彌太夫住太夫津太夫古靱太夫等好評を博したる太夫も尠くないのであるが、時代もの語りの達人としては其名の傳へられたるものは洵に少し。古き所にては初代豊竹駒太夫の門人麓太夫之に次では河堀口の長門太夫、越太夫初近代にては生駒太夫等にして、明治の斯界の二大巨頭中、大隅太夫は云ふまでもなく世話もの語りの方に屬し、攝津大椽は、世話ものよりは寧ろ時代ものに長したる方なりし。

元來時代ものゝ正本は、一節一章切れ／＼に切り離して見ては、洵に興味の薄きものにして、歩、一步と語り込んで行く中に、次第に情緒を嵩め來り、一段の最高頂となり、一大愁嘆場を演出すると云ふ筋合に出来上つて居るものなれば、僅かに端緒の十枚や十五枚位を語つただけでは、筋途も通らねば感興も湧かず、語つてもたよりなければ、聽いても亦つまらなきものなりと雖も、世話もの浄瑠璃の正本は、夫れとは大に行き方を異にし、人物の歩調も至極輕やかに、ジツと耐へると云ふ氣分よりは、露骨にぶちまいて、胸腹の底までもさらげ出すと云ふ行き方にして、景情刻々に移り變り、後から／＼と宛も糸を手繰るが如く、聽客の感興をそ／＼つて行く、と云ふ遣り方なれば、語つての味も格別な

世話時代もの

世話時代ものを語るに付いて先づ第一に心得べき事項

一例として『平假名盛衰記』の松右衛門

れば、聽いての興味も亦別段にして、古來頻々として世話もの語りの名人上手の輩出したのも、一つは苦心慘憺の割合には受けない時代ものに腐心せんより、語つて面白く聽いて喜ばれる、世話ものゝ方に力瘤を入れると云ふ、人情自然の好惡に由來する所も多かりしなるべし。

「時代」「世話」此の二つの區別の外に、尙ほ「世話時代」ものと稱せらるゝ一種の區別がある。純乎たる世話ものにもあらず、又純乎たる時代ものにもあらず、一段の中に世話もあれば時代もあり、武士、町人、貴賤、高下、入り組んでの事柄を脚色しやくんだものを斯界の術語に「世話時代物」と稱して居るのである。

世話時代ものを語るには、先づ第一に何の點が世話、何の點が時代と、最初より分別考量して懸らねばならぬと云ふ特種の困難がある。例之ば『平假名盛衰記』松右衛門内の權四郎と娘は世話であるが、難物は松右衛門にして、船頭松右衛門としては世話で往かねばならず、樋口の次郎としては時代で往かねばならず、

「ア、コリヤ、女」は時代で語り、「ム聞ねた」で氣を變へ、「最前歸りがけ、下の樋の口で、チラと見た女中よな、若君は身が手に入つて氣遣ひなし、云ふてよければ身が名乗、合點か必ず樋の口を、樋口なご、倉相云ふまいぞ」は、あくまで假面を装ふた船頭松右衛門の心持にて語り、純世話でなく、純時代でなく、樋口の次郎でなく、一生來の船頭でなく、其の虚實の間を縫ふて語つて往かねばならぬのであつて、武士にして武士でいけず、船頭にして船頭の氣分ばかりでも語れず、一段中の難物『盛衰記』

中の難所とせられて居るのである。

「樋口の次郎兼光なり」と名乗つてからは時代である。されど「親父さま、それは餘りな思召切せめて佛前へ直し香花も取り、逆さまな事ながら、御廻香なさつて取らさつしやりませう」は、再び入聲船頭松右衛門と云ふ氣分に戻つて語らねばならぬのである。

世話時代ものゝ難物たる斯の如し。無論、純時代ものには時代もの固有の特色がある。面白味がある。純世話ものには世話もの固有の特色があり、面白味がある。夫れと等しく世話時代ものには又、純時代―純世話ものに味はれざる格別の特色があり、面白味があるのである。世話で語るかと思へば忽ち時代で語る。時代かと思へば又忽ち世話に變る。時代と世話の間を縫ふて語らねばならぬ所もあれば、世話は世話ながらも昔は武家と云ふ氣分で語らねばならぬ皮肉もある。其の刻々に氣分を變へ、步調を變へ、變化の妙趣を極めて行く所に、他の純時代―純世話ものに味ふ事の出來ない格別の妙味が存するのである。

雖然、同じ一段の語り物の中で、世話は世話―時代は時代と語り區別わかれて行くと云ふことはなかくの難事にして、要は語り人の氣分一つ、心持ち一つで―其の趣を變へて行かねばならぬ次第なれば、篤と正本の作意を研究會得し、變り目く要所くの呼吸を合點し、繰返しく實地に修習鍛錬し、妙機に悟入するの外はないのである。

浄瑠璃を語るに「重み」「輕み」と云ふ事がある。總じて時代ものは「重み」がなければ

世話時代物浄瑠璃の特色と妙味

浄瑠璃の「重み」「輕み」

ばならず、世話ものは「輕み」がなければならぬと云はれて居るのであるが（體の區分に止まる。時代世話孰れにしても、時一人一場に應じ、又夫々の「重み」「輕み」のあるべきは勿論である。）「重み」と云へば大きくドス聲にて、ごなりさへすればよろしきものと心得、「輕み」と云へば耳語ごとく、口先きばかりで喋々て居ればよろしきものと心得るが如きは、大なる間違である。

嘗て素人義太夫より本業の太夫に轉じ、時代もの語りとして評判を取つた綾瀨太夫（後）は、晩年に至るまで、時代や世話時代の手強（綾翁）いものばかりを演じ、語出の三、四枚はしかと聽きとれぬ程の低音なりしと雖も、『娘景清八島日記』『布引瀧松波琵琶』などを語つては壯者を凌ぐほどの出來榮を示し、殊更『娘景清』の「つれて來て逢せた一且の禮は云ふ、人賣め」「たつた一目睨んで呉りたい」のあたりなど、情と云ひ、貫目と云ひ、何も云はれぬ妙味あり、淨瑠璃の重みと云ふも強みと云ふも、畢竟太夫の伎倆一つのものだと云ふ事を合點させたるほどであつた。

然るに夫とは反對に、某太夫（此亦素人太夫出の一人也、其の名を缺ぐ。）の如きは、洵に暢びりとした名調子なりしと雖も、嘗て『御所櫻三』を語り、「辨慶真中にどつかと座し、コリヤ聲低にはざきおらう」のあたりがうまく行かず、さんく小言を喰つた末、聲を出さず、く、と苦心して、大きく語る方を工夫して見るべしと訓へられ、始めて翻然として悟り、爾來別人のやうな大もの語りとなつたと傳へられて居る。

淨瑠璃の「重み」「強み」と云ふ事の呼吸は畢竟此處に存する。如何ほど大聲あげ、大汗かいて、嗚鳴つて、見ても、騒々しい計りで、聽客にこたへされば、一向に詮なし。淨瑠

大きい聲／＼と、聲ばかりで大きく聽かざるのが間違である。

「間」と云ふ事

璃の、「輕み」「やさしみ」と云ふ事の理合も亦之れに同じ。別段聲を低めて口輕に語つて見たとしても、夫れにて輕み、やさしみが、出て來る次第ではないのである。

「詞」にあれ、「地合」にあれ、淨瑠璃を語るには「間」と云ふ事が肝要である。淨瑠璃を語るに臨んでの呼吸である。氣合である。淨瑠璃の活きるも此の「間」の持ち方一つなれば、淨瑠璃の死るのも亦此の「間」の持ち方一つである。「間」のぬけたる淨瑠璃は、宛も氣のぬけたる炭酸水の如し、味もそつてもなし。

「間」と云へば通常間隔の意味に用ふ。ふれば、「地合」なり「詞」なりに間隔を置き、一息繼いで語り繼ぐ意味のやうにも取れるのであるが、客觀的に聽客の側より觀れば、一應左様にも受取られぬでもないのである。主觀的に語り人の方より觀察すれば、此時此際、前句の意味は未だ盡きず、後句の意味は將さに發せんとし、所謂阿吽一瞬の呼吸、間髪をも容れざる、刹那の氣合にして、鼻息一つだも出來ざるほどの、大事の、生念場である。

阿吽一瞬の呼吸、間髪を容れざる刹那の氣合
黒いも素いも「間」の持ち方一ツの巧拙に由る

由來本業者の黒いと云はるゝのは要するに此の「間」の持ち方に工夫が積んで居るからにして、素人淨瑠璃の著しく聽き劣りのするのも、畢竟此の「間」の持ち方の工夫の足らないからの事である。口語りの太夫でさへ何處となく黒い所がほの見ゆるのも、畢竟「間」の持方の巧者なゆるにして、素人連中の天狗先生、「地合」だけはどうなりかうなり鼻をつけ、偶には本業者を凌駕するほどの語り振りを見せる人もなきにしもあらずと雖も、何處となく物足らず、殊更「詞」に懸ると直ぐにお里がわかり、何と云つても素人は素人だけの身上なりと、浩嘆を禁せしむること能はざる所以のものは、畢竟此の「間」と云

「間」は「息」にあらず

ふ事の研究の足りないのに職由するのである。「地合」や「詞」の句切り句讀點はひなり、斯道の術語に「息」と云ふ。「間」は「息」にあらず氣合である。阿吽一瞬時の呼吸である。息をも吐かれぬ刹那の氣合である。

「間」とは畢竟緊張せる氣合である。充溢せる呼吸である。「詞」にあれ、「地合」にあれ、氣分にたるみがあり、だら／＼調となり、雨だれ拍子となりては、淨瑠璃の「重み」も、「輕み」も、「強み」も、「やさしみ」も――景情の變化も――刹那の氣分も、正しく精密には表現れて來ないのである。元來淨瑠璃は歌舞伎とは違ひ、作中の人物残らず一人で引受け、夫々性格に應じて語り活かさねばならぬ次第のものなれば、よく／＼注意せざれば氣分にとたるみを來し易し。されば一たび高座に上ばつて聽客に相對するや、宛も白刃を以て相對する劍士の晴の勝負に於けるが如く、寸分の間隙も――油斷も許さざる義と覺悟したゞ／＼氣合一つで語つて行くと云ふ心懸けが專一とせらるゝのである。「三絃が弾き出せば語り出し、節が終れば息を繼ぐ」……ものだから心心得て居るやうな淺薄な了簡では、共に淨瑠璃を論ずるには足らないのである。

例之ば『箱根靈驗覺仇討』の

大磯さして……………走り行

の「地合」の「間」の如し。「大磯さして」で放り出して息を繼いで、筆助の意氣込も――緊張せる氣分もともに滅茶／＼となり、勢ひ込んで走り行く刹那の呼吸は、さつぱり現はれて來ないのである。「大磯さして」で吽と息を詰め――ジツと持ち――三絃のア

「間」を持つ一例

三絃が弾き出せば語り出し、節が終れば息を繼ぐと云ふやうな淺薄な了簡ではまだくも

「ハ……と云ふ息に合せて「走りユウ……ク」と語つてこそ、情味も、光景も、歴歷として現はれて來るのである。

『平假名盛衰記』松右衛門の家の段

「松右衛門出かしたりな、さつきにからのもやくや、寝られはせまい聞いたであらう、そちがためにも子の敵、そのこしびと、づたくと斬りきざんで女子に渡せ」「ア、いや、さうはいたすまい」「なせいたすまい」「サそれは」「それはどはチエ水くさいくくわいやい。」

の「詞」の「間」も亦同じ。「斬りきざんで女子に渡せ」「ア、いや」とかぶせて受け、「なせいたすまい」「サそれは」「それはどは」と息をも繼かず突つ込んで語り來る所に、妙味もあり、淨瑠璃の情も現はるゝのであつて、「ア、いや、さうはいたすまい」と息を繼いで語り、「なせいたすまい」で息、「サそれは」で息―息だらけでだるみがあつては、到底、此時此場の淨瑠璃の情味を發揮することは出來ないのである。

されど如何に息繼ぎの長いにしても、夫れには自ら限りのあるものなれば、ほゞくにして息を繼ぐと云ふ事の自然の必要が出來るのである。淨瑠璃の正本は、必ずしも太夫の都合のよいやうに計りには出來て居ない。歌舞伎芝居なれば一人一役、各自の持役だけは十分に息を詰め、氣合を充實し、持ち耐へて行くことも左して困難にもあらざるべしと雖も、淨瑠璃は總役一人……古人も「語り出せるより仕舞ふ迄、縁の切れぬやうに引張を第一に語るべし。離ればなれになれば聞人も退屈の出るもの也。節、

息一つ繼くにさへ注意に注意を要す

「息を盗む」「鼻から息」

其の一例

「節」に切字

落、に、氣、を、付、べ、し、跡、の、出、と、縁、切、れ、ざ、る、様、に、心、得、べ、し。節、を、云、て、仕、廻、く、つ、ろ、ぎ、た、る、心、に、
て、離、れ、く、く、に、な、る、は、あ、い、ふ。」と訓へて居る位にして、縁の切れぬやうに離れくくにな
らぬやうししかと息を詰めて語り、節落しなりとて、うかどくつろいで息を繼ぐことさ
へ出来兼ねるほど六ヶ敷次第のものなれば、よくく注意に注意を加へたる上にあら
ざれば、息一つ繼ぐことさへ出来ざる義と承知せねばならぬのである。

されば緊張せる氣分もたるまぬやう、充溢せる氣合も失はぬやう、ソツト息を繼ぐと
云ふ工夫が肝要となつて來るのであつて、斯道の術語に「息を盗む」と云つて居るの
は、全く此の間の必要より來た工夫の一ツである。口から息せずして、鼻から息する、曲、話
亦同し。此の工夫が附かねば先づ満足には淨瑠璃は語れざる義と承知すべし。例之ば
『忠臣藏四段目』の「鹽谷判官閉居によつて扇ヶ谷の……」の語り出の如し。しつとり
と呼吸を張り、一息に語り下すべきものと定まつて居るのであるが、なか／＼苦しい—
「鹽谷判官閉居によツ……」「ツ」の一字でソツト鼻より盗み、「て、扇ヶ谷……」と語り下
して往くのであつて、此種の例は隨所にあり、一々は擧げ難し。要は平素よりよくく
注意し、引く息は鼻吐く息は口よりと心得、日常修煉工夫して、自ら其の呼吸を會得すべ
きである。

『淨瑠璃祕曲抄』に

節に切字有左に現あらはす

ホフシ

此所切字

此所切字

此所切字

此所切字

浪こねて

切字といふは、節たるみなく、間を崩さぬためなり。惣して切字によく工夫有べし。句切なくとも心の句切ある事なり。

賀茂のにて切は川きしといはんとて切なり。たとへば犬猫にてもさきへ飛んとして身をちぢむ心なり。川岸のフシに勢を付んとて、賀茂のにて切る是はちぢむ心也。又浪こねて切は跡をゆるく始とて切。萬事いづれのフシとても此心なるべし。

「詞」にも亦切字の必要

とあるも、要は「間」を持つ工夫の大事なることを訓へたのである。節に、切字の工夫の必要なるが如く、詞にも亦切字の工夫が大事である。例之ば「戀女房染分手綱沓掛村」なれば、

尻引からげ立上る。納戸の障子さつと明け。八藏コリヤ何するぞと聲かけられて恟りし。ヤア母者人こなたまだ寢ずか。ヲ、わが脇差研く音で何の寢られよう。云ふ事がある下に居よ。はてさて下に居をれいやい。

●は持つなり、切字である。息を詰めて情を持つのである。「ヤア母者人こなたまだ寢ずか」と連続的に語っては、八藏が吃驚した此の場の情味が出ないのである。「ヤア母者人こなたまだ寢ずか」と息を切らずして、句を切り、わくせくとして一氣に言切れぬやうに語ってこそ、妙味もあれば淨瑠璃の情も籠るのである。「ヲ、わが脇差研く音で何んの寢られう。云ふ事がある下に居よ下に居よ」も亦同じ。息が繼ぎたいとならば、「こなたまだ寢ずか」「ヲ、」と受け、此處にて息を盗むも可なり、「尻引からげ立

息を切らずして句を切る工夫

湯を呑む心得と扇拍子

湯を呑む箇所

上る。納戸の障子さつと明け「入藏」と呼かけたる拍子に息を盗むも可なり、其の工夫には種々あるべし。されど兎にも角にも、聽客の方より「彼處で息を繼いだ」「此處で息を入れた」と看透さるゝやうなたるみのある息の入れ方では、到底駄目なりと知るべきである。

「間」を持つ障りとなるので注意せねばならないのは、湯の呑み方と扇拍子の入れ方である。既に息一つ繼ぐにさへ細心周到な工夫も注意も必要なりとせらるゝ以上は、一杯の湯を呑むにしても、一回の扇拍子を入れるにしても、浮と無心にては出来得ざる次第なることは云ふまでもなき所である。世には「湯呑み太夫」などと云はれてやたらに湯を呑んだり、無暗に扇で叩きたてたり、心なき無作法を演ずる不心得者も鮮くないのであるが、どうせ如此太夫に碌な淨瑠璃の語れるものでなし。湯を呑むと云ふのは畢竟口中の乾きを濕すまでの事である。扇拍子を入れると云ふのも、三絃との拍子を合するまでのものである。かぶくゝと大口開き、湯呑み半分までも空にすると云ふやうな遣り方は、第一に見た所わるく無作法なりと知るべし。扇拍子の入れ方にしても亦夫れく極り所あり。三絃との拍子を合はすにしても、一々叩き立てゝは第一に三絃に障り、騒々しく、しつとりと聽かすべき淨瑠璃の情味の障りとなるのである。元來一段の淨瑠璃には、湯を呑む箇所は二箇所か三箇所のものど知るべし。大概は「色」で飲む。其の他「大オトシ」「フシ」「オクリ」等の節尻りにても可也とせらる。要は淨瑠璃の「呼吸」を損せず、緊張せる「氣分」にたるみの來ない程度に於ての事である。

太夫と三絃との「阿
吽」「表裏」の關係

自らにしてびたりと
合體したのが眞の呼
吸

元來太夫と三絃とは、「阿吽」「表裏」の關係をなすものとせらる。太夫が「阿」と語れば三絃が「吽」とこたへ——三絃が「阿」と掛くれば、太夫は「吽」とこたふ。雙方の呼吸がびたりと合ふて、其處に神韻漂渺として魂飛び神逝くの妙境に達するのである。強ひて扇拍子を借りて景氣を附けて見たにしても、附焼又は依然として附焼及び騒々しいばかり、何等の妙味も佳味も浮んでは來ないのである。「阿」「吽」の呼吸は自然なるべし、自らにしてびたりと合體したのが眞の呼吸である。強ひて「扇拍子」を借りて、合はぬ呼吸を合體して見ようと試むるが如きはもと／＼根本からして誤つて居る了簡である。元來「地」「色」「詞」には拍子を入れぬものとしてあるのである。宇治加賀椽の修業教訓にも、「地、色、詞に拍子無きものなれば扇打つ事なかれ、地節にさへしげきはかしましくいやし」と云はれ居る、よく／＼考ふべし。

詞と地合

詞七分地合三分の現今の淨瑠璃正本 地となり詞となり融通自在を極めた近松作の正本と流祖義太夫の節附 其の一例「丹波與作」の重の井子別れの一節 後の作者の増補した

詞本位の「香掛村」 勢ひ詞の研究工夫が急務となる 淨瑠璃の情を語り活かす

には地合よりは詞 地合を主とした語物 詞本位の語物 詞七分―地合三分の語り物

詞の研究の要項 最も大切にして興味のある助語の研究 助語の妙
用 先づ其の意味合の研究 其の例 詞に情趣を持たずのも助語の妙用
浄瑠璃の黒いも白いも甘いも不味も
助語の語り方の
巧拙如何に由る。

詞の調子 詞の調子を定むる原則 例令ば勤平と彌五郎一牛兵衛と宗岸年
浮舟と桐の谷を語り分くる工夫

輩により夫れく變則融通の工夫 地聲を第一とする 殊更に假聲を
使ふは悪し

よるくの実盛ひ 發音は畢竟情の發露、氣分の響である 盲人、雙陸者、阿
呆を語るに就ての研究の要點 盲人 盲人を語るに就ての工夫の楔子、捉へ

減を要する 相手に話し掛ける時の發語 阿呆 阿呆の阿呆たる特徴 締り 一風
の調子 假擬盲人 假擬の假擬たる特徴

變つた人物 工夫の要點 一例として 近頃河原の達引の與次郎 阿呆の無い調子外づれの大聲

詞の字配り 五七、七五調の浄瑠璃の詞 やくもすれば雨だ 字配り研究
れ調子さなり易し

の必要 其の抑揚 詞を語るに就ての原則 詞に節あり 尻刎と
一其の 節に詞あり

引き字 其の病根は一ツである 詞の治定

發音の高低と緩急 其の一例 されど餘りに型式に拘はり 活殺自在の妙諦
理論に偏して融通の妙を失ふはわるし

極致に悟入するの途 サラリと語つて 聴客
を釣り込んで往く呼吸

浄瑠璃の情を語ると云ふ上より云へば、「地合」も大切なれば「詞」も大切にして、無論

孰れが重く、孰れが軽いと云ふやうな、根本的の差別はないのである。由來近松作の正

本は、「地合」に偏せず「詞」に片寄らず、融通自在の筆致を極めたるものなりしと雖も、出

雲、松洛、文耕堂、宗輔等の時代となりてよりは、歌舞伎芝居の脚本めきたる「詞」九分、「地

詞七分地合三分の淨瑠璃正本

地となり詞となり融通自在を極めた近松作の正本と流祖義太夫の節附

其の一例、『丹波與作』重の井子別れの一節

合二分と云ふやうな「詞」本位の正本となり、門左衛門が遺した格法はやうやくに廢たれ、果は其の筆になつた正本さへも次第に流行より離れ、現下の流行淨瑠璃の多くは、殆ど後の作者輩の筆になつた、「詞」本位の作物ばかりとなり來つて居る次第である。

按ふに創發當時の義太夫節は、地の文本位、聲曲本位の近松作正本其のものゝ筆意文體と相協合して、流祖義太夫の節付けも亦融通自在を極めたるものにして、「詞」の文を「節」にて語る所もあれば、「地」の文を「詞」の調子で語る所もあり、例之ば、『丹波與作』改房染分手續せられて「戀女」の上巻の切重の井子別れの一節の如く、變化の妙趣を極めて居たのであつた。

、を打つたるは「詞」の文を「節」で語る所、を打つたるは「地」の文を「詞」の調子で語る所である。

「お榜の衆に噓されて幼稚心の姫君斯う面白東都とは今迄おれは知らなんだ、サア、往ふはや往ふ、ヤア御座らうとおつしやるか、そりや、目出度は、又もや、御意の變らぬ間、行列揃へど立騒ぐお乳の人は勇をなし、左様ならま一度大殿様お袋様とお盃、是も馬子殿おかげじや、出來いた、其方には禮いふ褒美や、其處に待や、とざとめき渡り、奥に御供し入にけり」
「どれ、三吉其處にか、まあ、其方はけな者じや、道中雙六お目にかけて、夫故に、姫君様お江戸へ御座ると御意なさる、お上にも御機嫌、これは御前のお菓子難有ういた、きやお錢三筋買いた、い物買や、殊に其方は通しじや、びな道中すがらも用あらばお乳の人の重の井に逢ふといや、見れば見る程よい子じや、に馬方させる親の身は能く、で、有ふと最念比の詞の末、三吉つく、聞すまし」
「在所の衆がやしなひで漸々

馬を、追ひならひ、今は、近江の、石部の、馬借に、奉公します、是、守袋を、見さしやんせ、何の、嘘を、申しませふ、お前の、子に、紛れはない、外に、望みは、何にも、ない、父様を、尋ね出し、一日なりとも、三人、一所に、居て、下され、みごと、沓も、打ます、此、草鞋も、私が、作つた、晝は、馬を、追ふて、夜は、沓、打、草鞋、作り、父様、母様、養ひませふ、父様と、一ツに、居て、下され、拜みます、母様と、取付抱つき、泣き居たり、「お乳は、はつと、氣も、亂れ、見れば、見る程、我子の、與之、介、守袋も、覺む、有り、飛つて、懐に、抱き、入れたく、氣は、せげども、アツア、大事の、御奉公、養ひ、君のお名、の、疵、偽つて、叱らふか、イヤ、可愛げに、そうもなるまい、まあ、ちよつと、抱たい、ア、い、ごふせふと、百千色の、憂涙、双つの、眼には、たもちかね、噎び沈みて、居たりしが」

即ち右の如し。以て地となり、詞となり、筆々變化の妙趣を極めた門左衛門の筆致も、偲ぶべく、或は「節」で語り、「詞」の調子で語り、融通の自在を極めた、流祖義太夫の節付のゆかしさをも偲ぶべきである。

然るに後の作者の歌舞伎脚本化したる正本流行の時代となりてよりは、全篇殆ど「詞」ばかり、地の文としては、僅かに「詞」と「詞」とをつぎ合はす色彩^{いろど}までに使はれて居ると云ふ位のものにして、例之ば、同じ、戀女房染分手綱^{こひめがらみ}にしても、冠子松洛が、増補した「沓掛村」の一段の如きは、全然「詞」本位、歌舞伎脚本的のものとなり居るのである。

左は即ち「沓掛村」の一節である。

……を附したるは「地」
合、他は凡て「詞」である

七ツの、日脚、かたむけ、ば、八藏は、い、つき、せ、き、官に、の、ぼる、田、舎、座、頭、から、尾に、打、乗、せ、

後の作者の増補した
「詞」本位の「沓掛村」

て、門口に馬引き付け。コレ座頭殿おれが内は此處じや。ヤレ嬉しや、乗付ぬ馬に乗つたれば、ア、尻がいたい、草履下され。ホイ合點じやと抱きおろし。母者人戻りました、ころ持はどの様なの。ヲ、早かつたおれも今日は氣色がよい、茶も沸いてある、飯喰やらぬか。イヤ、今日は龜山まで追はずばなるまい、戻りは定めて夜が更けふと、内のことを案じたに、仕合せと關でよいかへがあつて、此處な座頭ごのを乗せて來ました、サア、上つて休まじやれ、今日は座頭殿に胡魔の蠅が付きおつて、官銀をせしめるを、おれが馬に乗りかへさしやつて仕合せ、今夜は此處に泊らしやれば、指でもさゝす事じやない、コレ其代りに旅籠屋と違ふて、此方がくひ物を進せるぞや、蒲團もなければ火鉢に火を入れて進せう、たつた一夜さじや、辛抱して寝やしやれと、火を吹きおこして持ち運べば。イヤもう何にも構ふて下さるな、眠かいの見ねぬ者は世話が多ふて氣の毒な、其處にござるはおふくろそうなが、是の息子ごのは宜い氣な馬士、わしも京へ官にのぼるに、今日石薬師から悪者に付られたを、馬士ごのとお蔭で危ぶい生命を拾ひました、が、此處へ來て氣が落ちつきました。ヲ、そりや道理もふ日も暮れた休まじやれ。モウ暮れましたか、ア、秋の日は短かいな、ドリヤそろ、と寝ごしらへと探り廻つて立あがれば、コレ和子、ソレ手を引て進せさつしやれ、こなたもおれも相伴にござれ寝やうと打連れて、納戸の内へ入りにける。八藏はおもてに出で、荷鞍を取つて馬引き入れ、是れからおれが息やすめと、ひきがらの火の煙

草、盆、引、寄、せ、て、す、つ、ば、す、ば、ム、ウ、ハ、ア、如、何、が、な、と、小、首、か、た、ぶ、け、取、つ、置、つ、の、一、分、別、
と、き、つ、く、胸、も、鐘、の、音、も、早、や、初、夜、す、ぐ、る、戌、亥、窓、の、ぞ、け、ば、母、も、泊、人、も、す、や、
聲、首、尾、よ、し、と、障、子、を、そ、つ、と、締、明、に、取、り、出、す、は、藤、卷、柄、の、大、脇、差、す、ら、り、と、抜、い、て、
火、か、げ、に、寄、せ、見、れ、ば、錆、た、る、亂、れ、燒、是、で、は、い、か、ぬ、と、庭、の、砥、石、を、ひ、つ、さ、げ、來、て、か、
く、る、刀、は、切、々、と、し、て、金、石、皆、な、鳴、る、秋、の、夜、の、蟲、の、音、な、ら、ぬ、砥、石、の、音、母、は、夜、ざ、へ、
に、目、も、合、ず、及、物、磨、ぐ、は、心、得、ず、と、そ、つ、と、起、き、出、で、指、し、の、ぞ、け、ば、座、頭、の、け、い、政、聞、
き、耳、立、て、我、身、の、大、事、と、帶、引、め、う、か、ぶ、居、る、と、も、白、刃、の、や、い、ば、ひ、ら、め、く、斗、り、
に、磨、ぎ、す、ま、し、仕、す、ま、し、た、り、と、鞞、に、お、さ、め、尻、引、か、ら、げ、立、ち、上、る、納、戸、の、障、子、さ、つ、
と、明、け、入、藏、こ、り、や、何、す、る、ぞ、と、聲、か、け、ら、れ、び、つ、く、り、し、ヤ、ア、母、者、人、ま、だ、寢、す、
か、ヲ、我、が、脇、指、磨、ぐ、音、で、何、の、寢、ら、れ、う、云、ふ、事、が、あ、る、下、に、居、よ、コ、リ、ヤ、や、い、如、
何、に、貧、苦、に、せ、ま、れ、ば、と、て、人、を、殺、し、て、金、取、る、ふ、と、す、る、お、そ、ろ、し、い、心、に、は、何、時、の、
間、に、な、つ、た、ぞ、や、い、コレ、
母、者、人、此、の、入、藏、が、誰、を、殺、し、て、金、子、を、取、る、ぞ、跡、か、
た、も、無、い、事、云、は、し、や、ん、な、コ、リ、ヤ、知、る、ま、い、と、思、ふ、か、今、夜、泊、め、た、座、頭、殿、金、の、あ、
る、こ、と、聞、い、た、故、そ、ち、や、殺、す、氣、で、あ、る、ふ、が、な、コレ、は、又、や、く、た、い、も、な、い、様、々、の、
事、云、わ、し、や、る、わ、い、の、サ、ア、夫、れ、な、ら、ば、夜、夜、半、脇、指、を、何、の、爲、に、磨、い、た、の、じ、や、
イヤ、夫、れ、は、夫、れ、は、と、は、エ、見、下、げ、果、た、こ、う、ろ、じ、や、と、腹、立、ち、な、み、だ、せ、き、上、げ、
せ、き、上、げ、痰、火、は、胸、に、ふ、さ、が、り、て、苦、し、む、母、の、背、を、撫、お、ろ、し、ア、成、程、折、わ、る、き、
泊、人、ゆ、ゑ、疑、は、し、や、る、も、も、つ、こ、も、な、れ、ど、も、日、頃、お、れ、が、曲、ま、ぬ、氣、は、知、つ、て、居、や、し、

やる母者人、エ、貧乏すれば親にまで疑はれるが、おりや無念な、コレ人を殺して金取る氣なら、四年があいだ此の馬方はせぬわいの、知つての通り、與作様の勘當も八平次が業、何卒彼奴を尋ね出し、奪ひ取られたる三百兩の代り、八平次の首與作様へ見せねば、此の八藏が主人へたゞぬ、今日八平次が坂の下に居ることを聞き出した故、今夜野伏りの非人どもを詮義して、夫でも知れずば坂の下の家々を踏込でも探す合點、此の事こなたに知らしては、ソレ／＼其の病ひの上に苦をかけるか悲しさに、隠したは己が悪かつた、コレ疑ひ晴して下されど、起つを引どめ、爾ふ云へばもつともらしい、そんなら今夜八平次を尋ねに行くが、向ふは武士なれば和郎一人は苦にもせまいが、萬一そちに過ちあらば、死かゝつて居る母親は見捨られもしやうがな、與作さま御夫婦から預かつた與之助さま、誰が養育して進せる、八平次を尋ねるはそちが面晴れ、あの子を養育するはナ、與作様へ御奉公おんなじ事なら母が往生を見届け、與之助さまを親御達へ渡した上、八平次をたづねるとて遅ふはあるまい。サア夫れは爾ふなれども、きやつが此の邊に居ることさいわい。さればやい、夫れが幸ひであるふやらあるまいやら、そりや知れぬ、コリヤそちが心一ツでな、あの子もおれも手を引合ふて、人の門に立ふも知れぬぞよ、その所を聞きわけて、今夜行くのは待つてくれど、わつ／＼いづ／＼いづ、繰り返し、なみだながらに止むれば。ハテモはて夫れ程に云しやる事ならば、今夜はあの往きすまい。ヲ、合點がいたか、夫れなら嬉しい、コリヤおれも此の世に

勢ひ詞の研究工夫が
急務となる

長ふは居ぬぞよ、左様思ふて悲しい目を、必らず見せてたもんなど、跡はなみだに、
くれ居たる。納戸の中をこそ、と探り足してけい政は、勝手に出で。何やら
親子はつくと、夜と共の咄しが耳に入ると、蚤がせより出して寝入れず、鐘を聞
ば早や七ツもふそろくと立ませう。ハテ扱て、今日のに懲りもせいで、夜深に立
ツはいらぬもの、それともに急がしやるなら、夜の明るまで送つて進じよ。イヤ
イヤ夜道が結句用心がよいげな、マア今日はいかる世話、是れは少しなれど今夜
の宿賃、又下りにも頼みます、お袋さらばと這おりて、杖でさぐつて戸をひらき、道
をとばくと、急ぎ行く……

されば此の種「詞」本位に歌舞伎脚本化した浄瑠璃正本を語るとなれば、勢ひ「詞」の
研究に工夫が大事となり、急務となつて来るのは必然の數にして、「地合」はさつぱり話
しにならぬほどの難聲の太夫でも、「詞」の活殺一つで語り活かし、濫いと云はれ、偉いと
云はれ、名人上手の名を成した幾多の太夫も輩出するに至つた次第である。

勿論斯く云へばとて、「詞」は主なり、「地合」は従なりとするのでもなければ、「地合」の
研究はほどくにして、「詞」の研究のみに専一になれと主張するのでもないのである。
本來孰れにも軽重なし。要は語るべき正本次第のものなりと雖も、既に「詞」が主、「詞」
本位の浄瑠璃ばかりとも云ふべき有様の今日に在つては、勢ひ「詞」の呼吸程間色彩と
云ふ事を重要視し、よくよく修練工夫を積むにあらざるよりは、到底浄瑠璃を語ると云
ふことの本義を透徹することは出来なくなるのである。

淨瑠璃の情を語り活
かすには「地合」より
は寧ろ「詞」である

「地合」を主とした語
り物

「詞」本位の語り物

詞七分地合三分の語
り物

されど強て、ごちらかと云へば「地合」よりは「詞」である。正本あつての太夫なれば、勢ひ「地合」よりは「詞」に重きを置かねばならぬ事となつて來るのであつて、泣かすも、笑はせるも、一つに「詞」の呼吸如何に在りとも云はねばならぬ事となつて來るのである。現下流行して居る淨瑠璃中「地合」を主とした語りものは、指を屈するほども無し。僅かに『明烏雪花曙』の山名屋、『倭文章廓日記』の吉田屋、『三十三間堂棟由來』の平太郎住家、『壇浦兜軍記』の琴責、『本朝二十四孝』の十種香、『戀女房染分手綱』のゆるぎ館、『天綱島』の河庄位のものなりと雖も、「詞」本位の語りものはと云へば、『花雲佐倉曙』あり、『四ツ谷怪談』伊右衛門住家あり、『忠臣講釋』目七ツ、『赤垣出立』、『戀女房』香掛、『櫻鱒恨較袴』、『お染質店』、『桂川連理柵』、『戀娘昔八丈』、『忠臣藏』目四段、『忠臣藏』目六段、『鈴鹿合戦』平治、『敵討襪褌』錦寺堤、『伊賀越』政右衛門内、『雙蝶々曲輪日記』八幡、『花上野譽の石碑』あり、「詞」七分「地合」三分の語りものとしては、『伽羅先代萩』、『繪本太功記』、『御所櫻堀川夜討』、『菅原傳授手習鑑』、『一の谷嫩軍記』、『伊賀越道中雙六』、『碁太記白石嘶』、『奥州安達ヶ原』、『艶容女舞衣』、『中將姫』、『傾城戀飛脚』、『義經腰越狀』、『義經千本櫻』、『玉藻前曦袂』、『傾城阿波鳴門』、『平假名盛衰記』、『新版歌祭文』、『攝州合邦辻』、『天網島時雨炬燵』紙治、『神靈矢口渡』、『八陣守護城』、『朝顔日記』、『日吉丸稚櫻』、『近頃河原の達引』等あり。兎にも角にも、「詞」の研究工夫が第一とならざる可からざるは、又已むを得ざる必然の要求から出て來て居る次第である。

詞の研究の要項

「詞」の研究の要項は、第一に發音の呼吸である。次では「詞」の間である。威重、輕妙、優

最も大切にして興味のある助語の研究

助語の妙用

美を持たせる「詞」の色彩である。

「詞」の研究中最も重要にして、興味のあるのは助語の研究である。助語には二種類ある。一ツは「ア」、「エ」、「オ」、「ム」、「ホ」、「ハ」等の感嘆詞にして、一ツは「ナ」「モ」「マ」「エ」等の助辭である。斯界の術語では總稱して之を助語と云つて居る。

淨瑠璃の情を寫して、追眞の妙を發揮し得ると否とは助語の作用に負ふ所多し。淨瑠璃の情を活かすのも助語の作用なれば、色彩を添ふるのも助語の作用である。輕妙を附けるのも助語の作用なれば、優美を持たせるのも助語の作用である。單に「お優しい」と語るよりは、「オ、おやさしい」と語れば一層優美に聽ふるのである。「お情ない其のお心」と語るよりは、「エ、お情ない其のお心」と語れば、一層の情味も現はれて來るのである。「ハ、ア成程」も「成程」なれば、單に「成程」も「成程」である。「オ、最じや」も「最」なれば、單に「最じや」も「最」である。「成程」「最じや」と云ふ根本の意味には違ひないのであるが情緒の深淺厚薄は、助語の助けを借りて始めて適切に寫し出すことが出来るのである。「若い女中のおやさしい」のみでも意味の通じないことはない。されど「ア、若い女中のおやさしい」と云へば、層一層其の意味を強め得る次第にして、助語の妙用は實に此の邊に存するのである。

助語研究の第一歩としては、先づ其の意味合の研究を大事とする。同じ「ア、」にしても、感嘆の「ア、」もあれば屈託の「ア、」もある。驚きの「ア、」もあれば失望の「ア、」もある。同じ「エ、」にしても、疑ひの「エ、」もあれば驚きの「エ、」もある。憤怒の「エ、」

先づ其の意味合の研究

「もあれば、愁嘆の「エ、」もある。強い意味のものもあれば、軽い氣持のものもある。意味を持たせたものもあれば、發音の調子を取るためだけに使つたものもある。其の時、其の場、其の情に依り、夫々意味合を異にし、程度を異にし、輕重を異にする次第なれば、先づ其の語るべき本文の文理的解釋より、研究の歩を進めて往かねばならぬ順序となるのである。

其の例

例之ば、同じ驚きの「オ、」にしても、「オ、これはく宗岸どの舞衣の「オ、」は出會頭の「オ、」にして軽い驚きの意味を有し、「オ、亭主先刻は扱々きつい働朝顔日記宿屋き」の「オ、」は呼掛けの「オ、」にして、其の意味更らに輕し。「オ、それは御苦勞さりながら、年寄に新湯は毒大功記の「オ、」は應答の「オ、」にして、「オ、お姫様とした事が、まだお子達と思いの外本朝二の「オ、」は現代語に所謂アラマトの「オ、」である。其の他、「オ、嘸腹が立ふ道理じや近頃河の「オ、」もあれば「オ、術なからうくるしからう合邦辻の「オ、」もある。同じ「傾城戀飛脚原達引」一段の淨瑠璃中にも、「ア、うたての傾城や」の「ア、」もあれば、「ア、いやく、男氣な忠三郎」の「ア、」もある。「ア、アレく、あそこへ見へるが親父様」の「ア、」もあれば、「ア、お年も寄り足もとも弱つた」の「ア、」もある。「ア、載きますくごなたか知らぬが忝い」の「ア、」もあり、「ア、若い女中のおやさしい」の「ア、」もあり、「ア、コレ益體もないく」の「ア、」もあり、幾多幾様夫れく文意に厚薄もあり、區別もあり、深淺もある。さればよくく勘考會得し、助語本來の妙用を發揮し、遺憾なく淨瑠璃の情味を語り活かすと云ふ事に、注意せ

「詞」に情趣を持たす
のも助語の妙用

ねばならぬ次第となるのである。

「臺詞に情趣を持たす」と云ふことがある。斯道の術語には「程」又は「口拍子」と云つて居る。「時雨炬燵」の「モア、云出しては聞かぬとゞ様、わたしやマア歸ります」の「モ」は即ち「程」である。「口拍子」である。「詞」の情趣である。「朝飯前には忘れずと、ナ、ソレ、桑山の丸子、く呑して下さんせ」の「ナ」も亦「口拍子」である。「情趣」である。而して皆孰れも助語の應用である。

「詞」に餘情を持たすと云ふ事も亦多くは助語の妙用に由る。詞の「間」を持つと云ふ事も亦助語の働きに由ること多し。當代斯界の巨人攝津大椽は、其の著『義太夫の心得』に左の如くに訓へて居る。

『義太夫の心得』野崎村に就ての一節

久松とお染の諍ひになりまして、「振袖の持病のといろくの耳こすり」と云ふ所がござりますが、あれを其の儘語つて了まわずに「振袖の持病のと、モいろいろの耳こすり」と、一字のモの字を加へて語りますと、久松の腹を立つて居ります様子が尙一層深く強く聞へますので、是れは「ホ、ハ、變つた事が、マ、お氣に障つた」と云ふ所も「喧嘩の行事さすのかいやい、二人とも、エ、嗜め嗜め」といふ所も同じで、之を口拍子と申しますが、實に一字の事でも非常に活動する様に考へます。

同上伽羅先代萩に就ての一節

淨瑠璃の黒いも白いも甘いも不味も助語の語り方の巧拙如何に由る

詞の調子

則 詞の調子を定むる原則

「乳母が今泣いたのは、アリヤ飲の早ふ出来るまじない呪何の悲しい事は御座りませぬ」と、唯た一呼吸に語つて了へば何の興味もござりませんが、「今泣いたのは………ナ………アリヤ………飯の早ふ出来る」と云ふ様な風に、泣たのはで一寸詞を切りまして、其の間に云ひ紛らす辭を考へて、アリヤと續けるまでの間に、唯一言のナ、の字を加へますと、此の淨瑠璃の本文が大に活動してまゐる様に存じます。云々

實に至言である。畢竟淨瑠璃の黒いと云はるゝのも、白いと評せらるゝのも、甘いと云はるゝのも、不味いとけなざるゝのも、要するに助語の語り方の巧拙―工夫の届いたと届かざるとに由ること多いのである。

「地合」に調子のあるのは勿論なるが、「詞」にも亦調子がある。總じて女性きんは上の音、男性おとこは中の音を土臺とし、年輩に應じ、老年なれば調子を下げ、若者わかなれば調子を上げると云ふこと「詞」の調子を定むる原則とせられて居るのである。

大凡一段の淨瑠璃の中には、男もあれば、女性もある、老いたるあり、若きあり、種々雑多の人物現れ來り、箇々其の異色を發揮して變化の妙趣を極むる次第なれば、克々よく文章前後の干係を按じ、年輩と氣分とを吟味し、大體一段中の年少者を標準に取り、夫れより順次に調子を低め、一番老年の者を一番低い調子で發音すると云ふのが普通の準則とせられて居るのである。假令ば『繪本太功記』なれば、初菊はつぎくよりは操ま、操よりは臯あづ、月つきと順次に調子を低め、『忠臣藏』四段目なれば、力彌ちからや―判官はん―由良之助ゆら―郷右衛門ごうゑもんと云ふ順序に、

例令ば、勘平と彌五郎、二宗岸と半兵衛、「浮舟と桐の谷」を語り分くる工夫

年輩により夫々變則融通の工夫あるべきは勿論である

淨瑠璃は地聲第一のもの也―殊更に假聲を使ふは―惡し

調子を替へて往くが如し。

されど勘平と彌五郎「忠臣藏」六段目、宗岸と半兵衛「舞衣」、浮舟と桐の谷「鶴山古跡松」と云ふやうな難物―年輩とても大差なく、單に調子の高低のみでは判然差別を附け難い難物に在りては、又格別の工夫も、勘考も必要となつて來るのであつて、篤と人物の性格境遇、其の場合々々の心持ちを吟味し、宗岸は低く半兵衛は傲岸に、彌五郎は若氣の一徹、さら々と調子を張つて較々甲高に語れば、勘平は心の當惑、はたと行き詰まつたと云ふ情を持たせて遠慮がちに低くめに語り、浮舟はわざとにくくしく、桐の谷は少しやさがたに語るなど、夫々工夫もし、差別も附けて往かねばならぬ事となるのである。

總じて女性は上の音、男性は中の音を土臺とし、年配により調子を加減すること、本來の通則とする所なりと雖も、夫れとても程度のあることにして、女性に女性にして、餘りに年寄つた老人などは上の音では調子がとれず、男性は男性にしても、餘りに年の往かぬ若年者は、中の音では調子がとれない。されば例令は、「新版歌祭文」野崎村の婆、「菅原傳授」道明寺の覺壽の如きは中の音に變へて語つて權衡を取り、「太功記」の十次郎、「忠臣藏」の力彌等は、殆ど上の音に近き調子で發音して其の年輩を表すなど、夫々變則融通の方法をも講せねばならぬことは勿論である。

されど斯く云へばとて、何も其の年配に似せて假聲あひさうを使へど云ふの意味ではないのである。總じて、淨瑠璃は、地聲第一のもの、とせられて居る。殊更に假聲あひさうを使ふは、惡し、太夫各自の地聲の儘にて調子を加減し、老若男女、夫々個性を語り分くると云ふ事が工

ワク／＼の實盛ひよろ／＼
の平作

發音は情の發露、氣
分の響である

盲人、聾啞者、阿呆
を語るに就ての研究
の要點

夫の第一となつて居るのである。然るに現下の多くの素人太夫—あやしげな稽古所の師匠となる。單に形式の末のみに趨り、齒抜けの眞似までしてワク／＼の聲を出し、ワク／＼の齋藤實盛をこしらへたり、ひよろ／＼の平作をこしらへたり、獨自呑み込みひじりに呑み込んで恐悦がり、淨瑠璃を語ると云ふ本來の意義など一切お構ひなしで、濟しこんで御座る所などは、如何にも智慧のなき次第と云ふ可し。

元來發音は情の發露である。氣分の響である。人物の性格境遇に對する會得あり、發音の原則に對する理會さへあれば、別段あやしげな假聲を使はずとも、十分に其の人の其の場の情味を語り活かすことは出来るのである。

淨瑠璃の中には、往々盲人、聾啞者、低能者等を仕組んだものがある。されど此等とても、何も別段阿呆なり、盲人なりの假聲を使はずとも、十分其の人の氣分、性情を語り分けることが出来るのであつて、唯此等の人物を語るに就いて、特別の用意を要し、格段の修練を必要とするのは、豫め此等特種の人物に特別なる—境遇上の習性—氣分—心情を研究し篤と其の心持を會得し、理解して懸ると云ふ事だけである。

盲人の「詞」は心持ち顔を上げて横向きになり、耳にて話するやうな氣分になれどは斯道の祕傳にして、聾者は自問自答的に獨り合點し、何か獨語でも云つて居るやうな心持、啞は目に見えて口に云はれぬのを、どかしがるやうな氣分、低能者はさもねらさうに、唯我獨尊と獨り極めに極め込んで居るやうな氣分にて語るべしと云はれて居るのである。

盲人

「盲人」を語るに就ての工夫の楔子、捉へ所顔を上げて少し横向きとなり耳にて話しするやうな氣分になれ

中年者の「盲人」の氣分は其間多少の加減を要する

されど同じ盲人にしても、うまれながらの盲人もあれば、中年よりの盲人もあり、假擬盲人もあり、夫々相應じて工夫もし、思案も附けて見ねばならぬ次第となるのであるが、總じて盲人には、何處となく平常對手ふだんあひてに顔さし付けて話しするやうな傾がある。何事にも聽耳立ききみだて、大小残らず聽漏らさじと努むるやうな一種の習癖がある。淨瑠璃を語る上に於ての工夫の楔子は即ち此處で……捉へ所は此の氣分である。此の習癖である。顔を上げて少し横向となり、耳にて話しするやうな心持になれと云ふのも、畢竟此の氣分——此の習癖を促へて、さまざま思案もし、研究も盡した果の先人の考案にして、殊に盲人の音調は、底力なくして甲走かんばてり、兎角上すべりしたがる傾きあるものなれば、此の邊の氣分をも併せて會得了解し、よく勘考して工夫を重ねればならぬのである。『三十三所花つぽの山はな』の澤市は即ち其の一例とすべし。

中年者の盲人の氣分は、其の間多少の加減を必要とする。生來の盲人とは違ひ、一度は外界の事物とも直接接觸れ、相應の觀念もあれば知識もあり、不幸中年にして憐れむべき境遇となり、薄倖の身の上となつたものだ云ふ點に、著眼せねばならぬのである。何んもなく勝手が違ひ、何處となく附端つぎはがわるい……と云ふやうな感じを專一として語るべし。生來の盲人同様——始終極端に——盲人的特性を持たして語つて往つては、却て其の情を失ふべし。先づ——常人四分、盲人六分ぐらゐの氣分にて、よく勘考の上語るべき也。

中年者の盲人の呼吸中、専ら盲人的氣分になつて語らねばならぬ要所は、相手方に話

し掛ける時の發語の調子である。總じて盲人は發語の調子が不確ふたがにして……次第にはつきりとなる發語はゆるやかに……次第に口早くちばやになると云ふ呼吸の具合が大事とせらる。例之は『戀女房染分手綱』香掛村の慶政の如し。『そこにござるはお袋さうなが、これの息子ごのはよい氣の馬子ごの』と話し掛ける調子が、即ち夫れにして、阪の下となつて「これく先へ行くお人、坂の下へは斯ふ行くかの」の呼び掛け、「さては夜の殿かア、小氣味が悪い」の獨語のあたりなど、特に盲人的氣分に充ちて居らねば、其の景、其の情を寫し出して、躍如たらしむことは出來ないのである。

元來盲人の「詞」には、場所又は相手方に對する疑の辭を使つた場合が多い。例わば慶政の「そこにござるはお袋さうなが」には「其處に」と云ふ場所の不定と、「お袋さうなが」といふ相手方に對する疑問から筆が起されてある。『三十三所觀音靈驗記』の澤市の「オ、お里か」も亦然り。『新版歌祭文』の「親父殿、久松もそこにか」も夫れである。其間多少の區別もあり、輕重もあり、緩急もあるべしと雖も、要するに、心中然り―然るべしとは思ふて居つても、一應突き留めてからかゝると云ふのが盲人の通有性にして、語頭は不確で……次第に確然となり、發語はゆるやかに……次第に口早になれと云ふのは畢竟、此の盲人的氣分の研究より來た、工夫の一案に外ならぬのである。

假擬盲人

假擬の假擬たる特徴

假擬盲人の一例としては、『源平布引瀧』の檢校まづなみである。故意わざとらしく聲をつくり、げられまじと工夫する……其のけぶりもほの見ねばならず―偶には不用意に常人

阿呆

阿呆の阿呆たる特徴

締りのない調子外れの大聲

の氣分に遠へり、ハツと氣付いて取り繕ふて往くと云ふ心持ちもなからねばならず
―其の邊の語り方一ツで假擬の假擬たる風貌、形容が彷彿として寫し出されて來る
のである。

雙啞者を仕組みたる語りものは少し、されど低能者を仕組みたる者はなか／＼に多
し。『時雨の炬燵』の三五郎『帶屋』の長吉、孰れも其の適例である。阿呆の身の上知ら
ずと云ふ俚諺を考ふべし。自己ほど偉い者は無いと云ふ積り―時も場合も四圍の
事情も一向頓著なく、調子外れの頓狂聲を出し、サモ最もらしく、平氣の平左でやつて
のけると云ふのが低能者の低能者たる特徴にして、所謂阿呆の大聲上でなく、中でな
く、締りのない調子外れの大聲で、取り止めもない莫迦げた事を、サモ伶俐さうに云つ
てのける所に、阿呆の滑稽味が語り出されて來るのである。

サア／＼／＼氣疎い物に成つたぢやないかへ、ア、さつきにおゑ様のいはんすに
は、コリヤ三五郎よ、おれが留守に成つたら、大方小春様がござんす程に、そしたら且
那樣と祝言さすのぢや、われを頼むと云ふて置かんしたわいの、そこでおれが思ひ
付、花瓶の松に鶴龜、酒のとつたがなかつたさかいで、水を銚子に入れた、媒役のお
れ様ぢや、禮には好のどらやまんぢう、コレ今からあほうと云はんすなへ、好いかへ
／＼「ア、コレ泣んすないの／＼、ハ、ア偕は嬉し涙じやの」「エ、何の濟ぬ事は
ござんせぬはいの、おゑ様は出しがらになつて、是程味い松魚節をお前にやらんす
事ぢやもの、志を無足にせずと、きり／＼呑んでさ／＼んせい」

一風變つた人物

の如き即ち其の呼吸である。

此の外、一風變つた無教育な賤者業や、朴訥仁に近しとでも稱すべき人物などを仕組んだものが往々ある。一例としては『近頃河原の達引』の與次郎の如し。もとく此等の人物たる、一に作者の描いた作意如何で性格も定まり、特徴も定まる可きものなれば、よくく作意を吟味研究し、作者の捉へた要所を會得了解してかゝらざれば、とんでもなき誤解に陥り易し。全然阿呆の氣分になり切つても不可、分別があり過ぎては尙ほ不可也。何處までも愚直一方、飾りつ氣のない、眞個天真流露の人物と云ふ事を土臺とし、夫れから割出していろく工夫し、或は常人七分に阿呆三分、或は常人六分に阿呆四分と云ふやうに、夫々加減斟酌して語り往くことゝすれば、大概は其の人物の氣分も性格も浮み出て來るのである。

『近頃河原の達引』の與次郎に就いては誤解せる語り人多し。今の群小太夫の輩、作者の書いた性格の研究など一向に頓著なく、何等の分別もせず、工夫もせず、唯々阿呆一片の心持にて語つて居るものもあるやうなるが、大なる了簡違ひである。

元來作者の描いた與次郎の性格風貌たる、母おもひ妹おもひの殊勝なる正直一片の朴訥者にして、やきもきくと痛心焦慮して居るといふ本來の作意なる事は、『堀川』の一段を取つてよくく吟味し來れば自ら瞭然たるのである。

ア、コレ母者人、ソリヤマア何を云はんすぞいの、其やうな密やかな身代ぢやと思はしやるか、此間弟子入りした米屋の息子殿から、長々お袋の煩ひで嘸かし勝手が

一例として『近頃河原の達引』の與次郎

工夫の要點

わるからふと云ふて、雪か花かと申すやうな上白米の仕送り、店々の旦那衆から何など用があるならいふておこせ、若し出養生でもさせますなら、幸な隠居所もあるほどにといふて來るお方もあり、羊羹饅頭生ごかな、近所隣りへそうくすそわけもしられねば、鯛赤貝の類は横町の鮓やへ卸賣、モこれ案じる事はみぢんもないぞや、それにまだく氣の毒なは、此の家主が此家を居なりに買ふて呉れぬかと頼まれる、ヤレ否やのく

の出鱈目も、畢竟は母に案じをかけさせぬ、贅八百さへ一貫に足らぬ節季の言譯的氣安め文句にして、母親の話しを聽いて「サア私も其の入り譯を聞いた故おしゆん的心根を思ひやり、おもはずしらす涙が」とほろりとなるあたりなど、十分に情味を利かせて語らねばならぬ所にして「よしく此状さへあれば千人力ぢや、サアく母者人も落付かしやれ」でまづく安堵やすこいたと云ふ氣分になり、殊更とつち「傳兵衛さんの泣かしやるも道理ぢや、またおしゆんの泣きやるも道理ぢや、母者人、こなたの泣かしやるのは尙道理ぢや、道理く」と云ふて居ては根ツから葉ツからわからぬ道理ぢや」のあたりなどは、何處までも眞面目に、心から泣て掛るほどの氣分で語らねば、惡洒落となり、くすぐりとなり、却て與次郎の性格を打ち毀して仕舞ふ事となるのである。要するに、與次郎を語るに、就いての工夫の主點は、「音調」と「歩調」である。「猿廻し」と云ふ一風變つた鄙賤な人物にふさはしい發音の調子に就いて、一ト工夫を要すると同時に、此の愚直な、粗野朴訥な人物の性格境遇にふさはしい「歩調」に就いて一ト

工夫を要し、主として發音の調子と步調との工夫一ツにより、性格風貌ともに眼のあたりに髣髴たらしむるまでに、語り活かして往かねばならぬのであつて、筋として、は何處までも眞面目に――寧ろ眞面目過ぎるほど大眞面目に語つてこそ、其處に自ら云ひ知れぬおかしみも湧いて來るのである。

本來「近頃河原の達引」の堀川の一節たる、傳兵衛おしゆんの死――心中を主題とし、盲目の母親を配し、「兄はアレあのやうな正直者、そなたの身に凶事でもあつたら」と云ふ、頼る邊なき境遇を描いた至極淋しい淨瑠璃にして、前には「鳥邊山の道行」後には「猿廻し」の三絃を入れ、中には與次郎を働かせて場面の沈滞を破ぶり、調子の變化を利かせた所に作者の働が見らるゝのであつて、攝津大椽は、其著「義太夫の心得」に於て左の如くに云つて居る。

おしゆん傳兵衛は豊竹八重太夫といふ人が新作かきぞろしの時に語つたのでござります
が、何でも大した人氣で、此一幕が出来てから後に全體の淨瑠璃が完成したとい
ふ様な説もある位でござります、――一體この堀川は極淋しい淨瑠璃でござい
ますが、夫を成丈賑かに爲やうといふので、三味線も二挺弾にしたり、種々と細工
が爲てございますが、それも今に較べて見ますと、昔の三味線は餘程手が鮮な
かつたやうに見えまするので、當時は合の手も非常に多く、又手數といふものも
大層殖ゑて居ります、其處で、この與次郎で、ございます、が、是は、孝行、一遍の憶、病者
で、馬鹿のやうでもあり、又道化のやうでもあり、何とも彼とも、素性の解らぬ難物、

「詞」の字配り

でござい、ますから、誰しも大きに困つて居りまするが、此等は語るものが能く其性質を調べて見んと不可いませんので、ツマリ歌舞伎の方で大層喧やかしくなつて來た性格の研究といふ事を、人形の方でも、矢張充分に研究しなければならぬのでござい、ます。云々

與次郎決して莫迦にあらず、道化の心得にて語るべきものにあらず、當初つづより阿呆視し、聽客を笑はせるばかりを本義として此の淨瑠璃を語るなどは、以ての外の不了簡と知るべし。

淨瑠璃を語るには「字配り」が肝要である。句調が大事である。字配り悪ければ、音調に關係し、何處となくゴツ・ゴツ・として快く響かず、第一に正本の作意、淨瑠璃の情味を十分に語り活かすことが出來ないのである。

元來「地合」にあれ、「詞」にあれ、「字配り」の大事なることは勿論なりと雖も、もとく「地合」には、抑揚、緩急、長短を吟味工夫して定められた「節譜」がある、されば「字配り」の研究、抑揚の工夫と云つて見たにしても、其の範圍たる太た狭まく、新たに研究を凝らし、工夫を廻まらすべき餘地とては洵に尠しと雖も、「詞の」字配り、抑揚の研究となれば、其の餘地綽々として、語り人の工夫、考案に俟つ所太た多いのである。

今日残つて流行して居る淨瑠璃正本の「詞」は、大概五、七、七、五の調にして、音便や通かよひ假名の都合により、二字又は三字を縮約つよくて一字又は二字に響かせたるもあり、一字又は二字を伸ばして二字又は三字と同じやうに響かせたるもあり、三五五又は四四五と

五七、七五調の淨瑠璃の詞

やくもすれば「雨だれ調子」
となり易し

字配り研究の必要

云ふやうな字配りとして調子を加減したるもあり、六七五八七六八五と云ふやうな字餘りの儘で、ほどよく調和せしめたるもあり、七七と重ねたるもあり、五五と續けたるもあり、變調變格のものなきにしもあらずと雖も、近松作の正本は殆ど此れ等語格に捉はるゝこ腕に文句をしつゝ詰り過ぎれば、却て淨瑠璃の妙味を失ふべしとなし、音調句讀の工夫は、一に節附の手、主腕と太夫の伎倆に譲ることとし、活用の範圍を自在ならしめたるものなること既に説ける所の如し。主として五七、七五の調を通則としたるにより、著しく變化の妙を殺き、語調も重なり勝ちにして、ともすれば雨だれ調子となり、だれ氣味となり易し。「字配り」の研究は、畢竟這箇千變一律の格法に捉はれた淨瑠璃の「詞」を語り活かし、聽客も嫌厭ぬやう、淨瑠璃の情も失はぬやう、巧に語勢の長短高低を按排調節して往くべき呼吸を、研究工夫するの外ならないのである。

例之ば『一の谷嫩軍記』の

其の一例

「一里いたら様子がしれうか五里來たら便があらうかと七里歩十里歩百里餘りの道をついで都迄ホ、ホ、ホ、ヲ、しんき」の字配りは、「一里いたら様子がしれうか、五里來たら便があるか、と七里歩十里歩百里餘りの道をついで、都迄ホ、ホ、ホ、ヲ、しんき」にして、七里歩十里歩百里餘りの道……と句切りを附けて語つてこそ、其處に「一里いたら様子を知れうか、五里來たら便があるか」と氣遣ひさなり、なつかしさなりに、宿りを重ねてたどつて來る旅中の消息が歴々として語り現はされて來るのであつて、「七里歩十里歩百里あまりの道をついで都迄」このべつに語りつづけては、興味太た索然たるものとなるのである。

詞の抑揚

詞を語るに付いての
原則

「詞」に節あり「節」
に詞あり

『三十三間堂棟由來』の「様子は聞いたコレお柳」は「様子は聞いたコレお柳」である。「コレお柳」と呼吸を變へて出ねば、呼びかける心持ちが寫らないのである。『攝州合邦辻』の「そんなら早ふ呼込んで茶漬でも手向てやりや可哀や立寄る所はなし幽靈も嘸ひだるかろ」は、「そんなら早ふ呼込んで茶漬でも……手向けてやりや」である。「茶漬でも手向けてやりや」と棒に直ぐ續けては、「手向けて」と云ふ辭が當初より工んであつたやうで面白からず、「茶漬でも」と云ひかけて行きあたり、此の世を離れた者と云ふのにふさはしい「手向けて」と云ふ句に思ひあたり、「手向てやりや……幽靈も嘸ひだるかろ」とつづける氣分になつてこそ、始めて文意も活きて働くこととなるのである。

「詞」には抑揚を必要とする。抑揚とは調子の變化である。「地合」の調子には三絃と云ふ調節の道具がある。典型もあり、目標もあり、努力一つでは、要領を得ること必ずしも難きにあらずと雖も、「詞」の調子、變化、抑揚には、目標もなければ典型も無し。古來「詞」を語るの原則としては、「普通に話しすると同じ心持なるべし。巧智もせず、修飾もせず、假聲などは無論必要とせず、サラリ、と、其時、其場の情合を念頭に置いて語るべし」と云ひ訓へられては居るのであるが、實際問題としては、單に之れだけにては要領を得ること太だ難し。斯道の術語に「詞に節あり、節に詞あり」と云はる。「詞に節あり」とは畢竟句調の抑揚を意味し、素讀み、捧讀み、だらふ、調子にならぬやうの工夫を肝要とするの意味に外ならないのである。

尻刎と引き字

「詞」の「字配り」「抑揚」と云ふ事を工夫するに先だち、第一に心得て置かねばならぬ事は、「詞に尻刎しりばねを忌む」と云ふこと、「引き字を嫌ふ」と云ふことの二つである。這は「詞」の發音上の二大禁物とせられて居る。

「引き字」とは畢竟「詞」の末句を延ばし、過ぎて、産字うぶじとなるを云ひ、「尻刎ね」とは此の産字をピンと刎ねて發音するのを云ふのである。産字のことは後章に詳説せり参照すべし

例之ば、『繪本太功記』の

「ア、コレこなたも武士の娘じやないか、十次郎が討死は兼ての覺悟は、様さまに泣顔見せ、若し悟られたら、未來永々縁切るぞや」で、「娘じやないか」と正しく發音せず、「ないかア、」と引き、「覺ごオ、」と延ばし、「見せエ、」「悟られたらア、」「切るぞヤ、」と延ばすのが所謂引き字にして、其の引き字となつた産字を、「かア、」と上げ、「ごオ、」「せエ、」「らア、」「やア、」と上げて發音するのが、「尻刎ね」と稱せらるゝのである。

されど如何に「引き字」を忌めばとて、姫娘の詞などは、多少は産字に移らざれば、餘りにぶつきらばうとなり、やさしみを損じ、ごちなく聞わて悪し。其の邊亦一ト工夫を要するのは勿論である

其の病根は一つである

されば多くの場合、「引き字」が止めば、「尻刎ね」も止むのである。「詞」の發音さへ治定すれば、「引き字」も少くなり、同時に「尻刎ね」と云ふ事も減じて來るのであつて、「引き字」も「尻刎ね」も、其の病根は一つにして、畢竟發音の調子の治定せざるより來る病弊

詞の治定

發音の高低と緩急

に外ならないのである。

此の外斯道の禁物としては訛音を嫌ふ。されど此れ亦多くは「詞」の治定せざるより來る病弊にして、「尻刎ね」のする人の「詞」は訛り易し。さればよく「詞」の治定と云ふ事に注意反省し、一舉に其の病弊を驅除するの工夫を肝要とするのである。

一ツの語句の初、中、終りとも夫々抑揚の法則に適ひ、語尾の一字はびたりと定まり「引き字」「尻刎ね」等の見苦しき様なきを「詞」の治定と云ふ。

「詞」の抑揚とは發音の高低と緩急とを意味するのである。「初句を甲にて出れば、結句は乙にて止め」「初句を乙にて出れば、結句は甲にて止める。」「初句を急に出れば、結句を緩に止め。」「初句を緩に出れば、結句を急に止める。」と云ふ事を原則とし、中の句は常に一定不動の位置に居り、甲乙兩音の中間——緩急兩調の中間にて發音するものとせられて居るのであつて、例之ば

其の例の一

高(甲)——中——低(乙) 低(乙)——中——高(甲)

「ヤアおろか、敗軍の大將忍んで我家へ入込しと、早くも敵へ洩きこね、
數千騎を以て此家をかこめば」『三日太平記』
松平住家

其の例の二

急——平——緩 緩——平——急

「合邦殿、今こなさんは何とぞ云ふてか」「イ、ヤ何共いやせぬ、そりや空耳
であるぞいの」「イヤ空耳かは知らねども、ちらりと聞けた娘の聲」『攝州
合邦家
の段』

大體右の如し。されど之れとても無論型に入れたやうに千變一律には參り難し。時により、場合により、前後の關係により、夫々斟酌もあるべく、加減もすべきは勿論にして、要は雨だれ調子、だら／＼句調にならぬやう、語り活かすと云ふ事より打算し、夫々工夫も勘考も加へて見ねばならぬのは勿論である。

されど如何に抑揚變化を主眼とするにしても、甲乙—緩急—孰れも耳だつやうに、際立ちて變化さするは惡し。高い所はばかに高く、低い所は殊更低く、緩なる所はばかにのろ／＼となり、急なる所とて殊更に急調に語るは、假聲ツクリコゑとなつて其眞を失ふ次第なれば、孰れも際立たぬやう、自然に調子を變へて行くと云ふ工夫が必要とせらるゝのである。其の他、「詞」の變化、抑揚に就いての工夫の要項としては、語勢の「長短」と云ふ事もあれば、「輕重」と云ふ事もある。されど語勢の「長短」と云へば多くの場合語調の緩急と云ふ事と一致し、調子の「輕重」と云へば、或は高低を意味し、或は緩急を意味し、其の時其の場の景情により、夫々其の意味合をも異にすべしと雖も、まづまづ高低緩急の理論さへ篤と呑み込んで置けば、「長短」「輕重」宜しきに應じて、運用の妙を極むること必ずしも難しとせざるのである。

されど理論よりは實際である。「詞」の調子と云ひ、抑揚と云つた所で、餘りに形式に拘はり過ぎては、却て淨瑠璃本來の意義を没却するに至るべきは勿論にして、理論に偏して融通の妙を失ふはわるし。形式の末に趨りて、淨瑠璃本來の意義を没却するは尙不可。例之ば、『菅原傳授手習鑑』の

されど餘りに形式に拘はり
理論に偏して融通の妙を失
ふはわるし

檢視の玄蕃は見分の詞證據に「出かしたくよく討た、褒美にはかくまうた科ゆるしてくれる、イザ松王丸、片時も早く時平公へお目にかけてん」「いかさま、暇取つてはおどがめもいかど、拙者はこれよりおいとまたまはり、病氣保養いたしたし」「ヲ、役目は濟だ、勝手にせよ」

玄蕃は何處までも聲高に、松王は飽くまで調子を低く、語尾をよはめて擬病のさまを見すると云ふ工夫を必要とするが如し。殊更「姫」「娘」「盲人」「子供」「低能者」など、夫れく其の性格にふさはしき音調も、變化も必要とする次第なれば、千變一律單に、高低「緩急」の法則のみに拘はりすぎては、却て本來の性格に背き、淨瑠璃の情味を没却するに至ることあるべきは勿論なりと知るべし。

元來「詞」の調子、抑揚、緩急の呼吸と云ふ事は、單り義太夫節、淨瑠璃のみに限りたる事にはあらず、説教にあれ、落語にあれ、講談にあれ、常盤津、清元等の淨瑠璃より、筑前琵琶、浪花節等に至るまで、等しく研究工夫を必要とする重要事項にして、吾人日常の對話、談笑の場合に於てさへ、尙且、話上手と話下手とは格段の違ひあり、苟も其の道の名手達人となれば、一寸した小話にさへ不知不識、相手を釣り込んで行くこと云ふ呼吸の妙所があること、吾人日常見聞する所の如し。されど畢竟、伎巧は末節である。發音の高低、緩急の修練、工夫も、大事は大事に、相違なしと雖も、寧ろよくよく、作意を研究し、人物の性情、境遇を了解し、其の時の氣持ちとなり、其の人の氣分となり、全然、作中の人物と、同化したる、ことが出来てこそ、始めて活殺自在の妙諦、極致に悟入することが出来るのである。徒ら

活殺自在の妙諦極致
に悟入するの途

サラリ／＼と語りて聽客を釣り込んで往く

に音調、高低の、伎巧の、末の、みに、趣つた所で、形は得べしと雖も、其の髓を得ることは、出来ないのである。由來落語にあれ講談にあれ、名人上手の話し振りは、サラリ／＼として、恰も白湯を飲むが如し。されど這箇平々凡々の裡に、云ふに云はれぬ妙味があつて、聽客は捉へられて、直に話中の人物と同化せられて仕舞ふのである。淨瑠璃を語るに就いての呼吸も亦同じ。餘りに變化抑揚の末に趨り、上下緩急の段取り―差別が、一々聽客の耳に聽き別けられるやうにては面白くなし。サラリ／＼と語つて、知らず／＼聽客を釣り込んで往つてこそ、初めて妙味もあり淨瑠璃を語ることも云はれ得るのである。されば、發音の方法を研究することも必要であり、「高低」「緩急」「長短」「輕重」の理論を研究することも必要なりと雖も、落語、講談、説教等凡ゆる名人達者の話し振りをも聽いて思案一番し、其の妙諦に悟入するの呼吸を研究工夫することも、亦肝要なりと知るべし。要するに其の極致は一である。

地合研究の要項

單に節を語るこそこの修練工夫計りには非ず

節を語ることの困難よりは意

味を語ることの困難 地合を語ると云ふ事の意義

地合研究の妙味と困難 作意に應じて附けられた節 地合を語るに

就ての要項 地の文を詞の呼吸で語る工夫 例其の 地合を語るに就て

の注意の要點 『音曲口傳 書の一節』

地合研究の要項

「地合」を研究するの要點は、「節」を語ることと、意味を語ることとの二つであるが、

單に節を語ることの修練工夫ばかりにはあらず

節を語ることの困難
よりは意味を語るこ
との困難

地合を語ると云ふ事
の意義

「節」を語ることの修練もなか／＼容易の業にあらずと雖も、意味を語ることの研究は、更に一層困難とせらるゝのである。

世には「地合」の研究と云へば、單に「節」の研究——三絃に合はして「節」を語ることの修練工夫の事ばかりのやうに考へて居る人も少くないのである。無論「節」の研究は「地合」研究の大部分である。三絃に合はして「節」を語ることの修練は、「地合」研究の主要條項たるには相違なし。されど義太夫節研究の難所は、「節」を語ると云ふ事の困難よりは淨瑠璃の情味を語り活かすと云ふことの困難なる點に存し、單に「節」だけの工夫研究なりとすれば、別段大汗かいたり、頭痛をやましたり、眞面目くさつての勘考も工夫も、左まで必要とはしないのであるが、「節」に合せて「地合」の意義を語り活かすと云ふことの意味なればこそ、其處に語ると云ふ事の困難もあり、妙味もあり、工夫の必要もあれば研究の必要も出て來る次第にして、單に「節」を知り「節」を覺へ「節」を語ると云ふまでの事なれば、左までの苦心も勘考も必要とはしないのである。

流祖筑後様の辭にも、

淨瑠璃にかはりたるふし今古なき事なり、只趣向年代せりふ風景時宜にそむかず、無理ならぬやうに、地色ふし詞迄心をかへて情をふかく語りなす事かの病根病因によりて配劑加減するが如し。

かくあればとて本式にわきめもふらず、つくりつけたるが如く成は佛藝とてきらう事なり。其の内の意味は聲とふしとの和にありて、言語同斷天然の所なるべし。

地合研究の妙味と困難

と云はれて居る。

「地合」研究の妙味と云ひ困難と云ふも、畢竟は「地合」に表現^{あらは}れた作者の用意、作意の眞味を語り活かすことの工夫であり、勘考である。「詞」の研究の眞味が主として淨瑠璃の情を語り活かすと云ふ事の一點に存するが如く、「地合」研究の妙味も、亦主として淨瑠璃の情を語り活かすと云ふ事の一點に存するのである。「詞」の工夫、勘考の困難が、主として刻々に移り變る刹那の氣分情合を寫し出す事の研究の上に存するが如く、地合の工夫、勘考の困難も、亦主として刻々に移り變る刹那の氣分情合を寫し出す事の研究の上に存するのである。

作意に應じて附けられた「節」

元來淨瑠璃一段の中にも、口よりは中、中よりは切と次第に節付も皮肉となり、一つの正本にも、大序よりは二段目、二段目よりは三段目と、段々に節付も巧緻となり、復雜となり、作意の變化と相伴ふて節付も亦變り、場面の發展と相協ふて曲節も亦變轉し、或は急調激越の音となり、幽玄深刻の節付となり、戀に逶迤細々の調あれば、怨には悲痛切々の音あり、其の調其の「節」、孰れも淨瑠璃の情味を寫し出すと云ふ事の上より工夫研究して考案せられ、編み出されて來て居る次第なれば、よく、這間の理合を會得し、「節」一つ語るにしても、常に淨瑠璃の情味と云ふ事を念頭に置いてかゝらねばならぬのである。

地合を語るに就ての要項

されば「詞」に「呼吸」「間」「程」「拍子」と云ふ事の必要なるが如く、「地合」にも亦「呼吸」「間」「程」「拍子」と云ふ事の必要がある。「詞」に「威重」「輕妙」「優美」を持たせる

總じて詞に必要な理論法
則は悉く移して地合の研究
工夫勸考練習の理論法則と
すべし

地の文を詞の呼吸で
語る工夫

其の例

と云ふことの必要なが如く、「地合」にも亦「威重」「輕妙」「優美」を持たせると云ふこと
の必要がある。「詞」に淨瑠璃正本の文理的研究と云ふ事を必要とするが如く、「地合」
にも亦淨瑠璃正本の文理的研究と云ふ事の必要がある。「詞」に情趣と云ふ事、
餘情と云ふ事の必要な如く、「地合」にも亦情趣と云ふ事、餘情と云ふ事の必要がある。
「詞」に「音調」と「步調」の必要なが如く、「地合」にも亦「音調」と「步調」の必要がある。
總じて「詞」を語る上に於て必要とする氣分は、「地合」を語る上に於ても亦必要とする
のである。「詞」を語る上に於て忌むべし、禁すべしとしたる事柄は、「地合」を語る上に
於ても亦忌むべし、禁すべしとするのである。要するに「地合」と云ひ「詞」と云ふも、畢
竟形を異にするも其の質を同ふし、行き方を異にするも理合を等ふし、「詞」の研究、工夫、
勸考、練習に必要な凡ゆる根本の理論法則は、悉く移して之れを「地合」の研究、工夫、勸
考、練習の理論法則となすことが出来るのである。

「地合」を語るに就いて特に注意を要するのは、「地」の文を「詞」の呼吸で往くべき場
合である。「地」の文を「詞」の呼吸で語るべき場合は、孰れの語り物の中にも、二箇所や
三箇所は必ず存する。

例之ば、『近頃河原の達引』の、

「ヲ、さうぢや、我子が可愛くと、子故の間に脇ひら見ず、此までお俊がお世
話になつた、思も義理もわきまへず、一途に仲を引き分けふと、思ふた母は義理知
らず、賤しい勤めする身でも、女の道を立て通す」したが此れもうし傳兵衛さん、

定めて親御さまたちも御座りませうが親の心と云ふものは人間はおろか」

『平假名盛衰記』三の切の、

「道理で見た様な顔ぢやと思ふた事は夢か現かいのふ、およし悦べ、楊松を取違へた人ぢやとやい、此方からも行衛を尋ね、もどくへ取戻す筈なれども、何を證據に尋て行ふ手がよりもなく」「ヲ、それよ、風一度ひかさばこそ、親子が大事にかけたに付ても、此方の息子めも嘸御厄介、お世話で有ふ、よふ連れて来て下さつた、忝ないわ、ハ、ハ、忝ないわフム、ハ、」

の如し。孰れも「地合」を「詞」の呼吸で行くべき適例にして、大凡淨瑠璃の黒いと云はるゝのも、素いと云はるゝのも、畢竟は此處等の語り方一つに由るのであつて、「地合」と云へば、單に三絃について振り廻はすべきものばかりと心得、普通一遍の語り方のみで満足して居るやうな了簡では、幾年経つても淨瑠璃の黒味は出て來ないものと承知すべし。

地合を語るに付いて
の注意の要點

「地合」を語るに就いては、先づよく「地合」の本文を研究し、作者の本意が那邊に存し、何ものを含蓄し、どう云ふ氣持で書いたかを研究、工夫して懸るべきは勿論である。等しくきまりのわるさは、ぶかしいと云ふ心持ちを寫すにしても、『新版歌祭文』の「立寄りながら越わかねる戀の峠の敷居高く」と、『艶容女舞衣』の「アイ母さま、お變りも御座りませぬかと、低き敷居も越わ兼ねる」とは、其の間自ら情愛に違ひがあり、同じクドキのかよりにしても、「ソリヤ聞なませぬ傳兵衛さん」と「ソリヤ聞なませぬ才三さん」

とは其の間又情愛に違ひがなければならぬ次第なれば、よく／＼本文の意味、人物の性情、境遇を吟味穿鑿し、作者が書いた氣持、捕へた急所を語り活かすと云ふ事を、眼目とせねばならぬのである。

『音曲口傳書』にも、『ひらかな盛衰記』の語り方に就いての一節也。

先陣物語を別の物のやうにおもふべからず、淨瑠璃一段の内なり、すらくと語るべし。餘りおもしろくせんと思せば、詰にいたりやせてわるし。權四郎が詞に大分うれいあり、腹立るばかりにはあらず。逆鱸の段舟の表に居る者と側に居る者とに物いふわかれあり。舟うたふし立ぬやう、舟歌の音調子第一也。辻法印にわらひをもふけんと語るべからず。實躰にして心持文句に應ずべし。

順四軒申候。此四段目むげんの鐘のたん、三味線の相の手がなくては梅が枝が心底かたりかたくて氣の毒なるものなり。かくいへばとて、

大和少様をそしるにてもなく候。これにつけても師

播翁、此三段目は身代古今の随一なるべし、語るにかたりよかつたと申されしなり。作の趣向がよさに心底こころ持がよかつたといふ事のよし。左すれば三味線にもかまわす、實の樋口の次郎にも、おふでにも、權四郎にも成て語られしものとおもふ。はや三むかし、おもへば／＼有難きはなしと覺候故こゝにしるしぬ。

と云つて居る。「權四郎が詞に大分うれいあり、腹立るばかりにはあらず、逆鱸の段舟

の表に居る者と側に居る者との物言ふわかれあり」「左すれば三味線にもかまわず、
實の樋口の次郎にも、おふでにも、權四郎にも成つて語られしものと思ふ」とあるあ
たり、古人苦心の跡歴々たり。よくよく勘考すべきである。

理論の應用——先人の遺訓

實際問題としての理論の應用の困難 其の例 『忠四』の笑と泣 『壺阪』の『澤

寺』のお辻 『合邦』の難所 『忠六』の彌五郎と郷右衛門 『伊賀八』
の政右衛門の呼掛けとお谷 『近江源氏八』の首實驗の呼吸

竹本越路太夫の藝談 藝の立替 今の太夫の修業振 三味に附かぬ工夫 容
の内部を迎るのさ外部を迎るのさ

づ正本を六十遍讀め 浄瑠璃の文句を語り殺す 文句研究の一例 『紙治』の「ヤアハ
ア」東風と西風 竹本派と豊竹派 近松原作の復舊 俗受け 惡し 地色 可憐 名文

句も捨てて仕舞はればならぬ 世話物研究の苦心 私の稽古 時代物は「キユツ」を一つ握つて根
くやると語れる 世話物研究の苦心 私の稽古 時代物は「キユツ」を一つ握つて根

峻な聲の遣ひ方 覺束ない「おいだき」の太夫 辛い所は似ぬ 自己の物とせよ 團七師
匠の聲の遣ひ方 大棟の聲の遣ひ方 似るに 瓦い所は似ぬ 自己の物とせよ 團七師

でも素人でも夫れく自然に割けて来る 三味の音にも自然の妙 豊竹呂太夫の
夫の品格 附焼 双く自然に割けて来る 三味の音にも自然の妙 豊竹呂太夫の

藝談 初代鶴澤重造 お菓子を買ふた坊チャン太夫 西風と東風 先代呂太夫と
住太夫 古執太夫 其の「三勝半七」 質店 「二十四孝」 鳴八の絶句 却て評

判る 綱太夫の「三十三問堂」 古執太夫の「吃又」 昔は凡べて地聲で語るには 芝居の 眞似を
する 現今の太夫 太夫の調子 同じ鐘樓で打つ鐘の音でも同じ様には 行かぬ 文句

の研究 『阿漕』の「冥途に急ぐ」 『菅原』の「はしこく」の「浅坂」の「初めて拜む日の光
り」 『箱根靈驗』の「紅葉のある」に雪が降る 『忠九』の「浅坂」の「初めて拜む日の光

の「何んなく姫君奪ひ取られ」 『國性爺』の「手を上げ」と「手を下げ」 十三の「彌作兼腹
」 『イタナイ』 『腰越状』の稽古 冒頭の「酒」の一句 浄瑠璃ぢやない 狂言だ 團平師

の教訓 『加賀見山』の「待つ間もさけし長廊下」 作者殺し 語るこそこの研究 語り方の
らに汲揚げる 浄瑠璃を廣く大きく語る工夫 語らずに語るこそこの研究 語り方の

實際問題としての理論の應用の困難

其の例

「忠四」の笑と泣

工夫 其例 唇を使ふ老爺の詞 語尾を上げる 姫言葉 下町鼻の涙の詞 姫言葉に
は齒を使ふ 笑ふ時は奥齒に舌を 攝津大様の使ひ方 鼻で息の詞のたれのや
う 次の詞の聯絡 泣くべき人が泣ては不可 調子がイヌ一杯に語れ 一枚く
を叮嚀に語る 忌み言葉 侍なまり 奴言葉 サラッーッーカワの神傳 老爺にラ
ウ侍にカワ若い者や女中にサワ 空蟻砲一發で酔の 『太功記』十段目に就
醒めるやうな『後藤』では詮なし 明治前後の淨瑠璃芝居

ての竹本津太夫の口授大要
先人の遺した教訓 字治加賀様の教訓 『蘭鏡ケ袖』の序文の
一節 『淨瑠璃神曲抄』 『竹鹽故事』の一節

淨瑠璃語り方の理論は概要以上述ぶる所の如し、と雖もさていよ／＼實際に應用する―實地に演じて見るとなると、なか／＼容易の業にあらず、其處には又、眞面目まじめな勘考も要すれば、細心な注意も必要とする次第にして、例之は、

「假名手本忠臣藏」の四段目にても、

「上使に立つたる石堂殿、此の薬師寺へ不法作、ときめ付れば、にッここと笑ひ、ハ、ハ、ハ、此の判官酒興もせず血迷ひもせず」……と、笑ひを入れて語る人もあれば「にッこ」と云ふ一句に意味を持たせ、眞率に語る人もある。笑を入れるも一寸工夫は工夫である。されど笑ひを入れないで、眞率に語る方に、却てゆかしみもあれば、品格もあり、作者が書いた意味にも叶ふて居るのである。

元來「忠四」で泣くべき所は僅かに段切りの御臺の歎きの一ヶ所にして、「血に染る切先を、打守りく、拳をにぎり無念の涙、はら／＼／＼」は、愁嘆の涙にあらずして悲憤の涙である。無論判官には泣くべき所は一ヶ所もなし。唯々無念なり、心外なりと云ふ心一ツで語るべきであつて、曾て四十年の三月興行に、文樂堀江の兩座が

相対して『忠臣藏』を出し、文樂では津太夫―堀江では徳太夫の四段目、九段目は大隅江と攝津大椽。其の時住太夫の判官が「加古川本藏に抱留められ、エ、エ、」と泣き、力彌では「未だ參上仕りませぬウフ、」と泣いたと云ふのでさんぐの不評にして中には『忠四』の語り方さへ知らざる者也とまで批評を加へた皮肉家さへあつた位なりし。

さればよく／＼注意勸考の上にあらざれば、往々にして屢違ひんぎひの考案となり、工夫となり、却て譏者の嗤笑を招くの愚を演ずることもありと知るべし。

『壺坂の「澤市さんいの」の呼掛け

『觀音靈驗記』壺坂寺の「ヤ、こりやこれ、こちの人が見ねぬわいな、澤市さん、／＼／＼澤市さんいの――」にしても、

「ヤ、こりやこれ、こちの人が見ねぬわいな」は、はつと胸をついたる心持ち―初の「澤市さん」は近く、次の「澤市さん」／＼で次第に遠く呼掛ける心持ちとなり、だんだん疑の深くなる気分となり……最後の「澤市さんいの――」にて、いよいよ死んだに違ひないと云ふ心持ちとなり、悲愁を帯ばせて語らねばならぬのである。

明治四十年の九月堀江座で、前「繪本太功記」中「合邦辻」切「壽連理の松」と云ふ取り合せ―「合邦住家」は大隅太夫―其の時の朝日新聞の批評は

彌太夫は逝き津太夫は老い、何方かといへば攝津大椽も稍下火になつて、當時義太夫界の覇を稱して居る竹本大隅太夫の語り物中で、最も圓熟の藝と許されて居る「攝州合邦辻」合邦住居の一段は、豊澤團平改名の披露に伴れて今度

の堀江座興行に演せられる、この『合邦』は天保弘化頃を盛に送つた二代目巴太夫の秘藏藝であつたのを、初代團平が詳しく聞いて置いて置いて、その神髓を大隅太夫に傳へたので、團平、合邦、大隅とは離れ難い縁故がある、當人曰く「この淨瑠璃はお辻が手負になつてから見物側でお受け下さるけれど、最も、溢く、困難を感ずるのは手負にならぬ前にある、手負になつてからはお辻の眞實が十分に知れて居るから語るのも樂であるが、その前はお辻が無法の戀を語る中に無限の眞情を籠めねばならぬ、合邦も女房も惜いと云ふ中に可愛さが籠る、これを語り分けねばならぬから、その骨折は容易でない」といふた、いかにも爾うであらう、お辻の奇麗な聲、凄婉な詞に、戀ならぬ戀を語り、合邦のむくつけな朴訥な詞の中に、昔大名であつた品格を保つ、お辻が不義の戀に執着するを聞き、憤り極まつて切つて捨てんといふ尖り聲何等の妙ぞ、お辻が切なき辯解を聞いた後、おいやい〜と詞激し口吃りて云はんとするに云ひかぬるあたり、何等の皮肉ぞ云々。

以て『合邦』を語るに付いての要領も、急所も會得すべきである。

『忠臣藏』六段の郷右衛門と彌五郎を語り分くるにしても、單に年配の違ひ計りと心得、「詞」の調子を加減する計りにては、本文の意味を發揮することは難し。彌五郎は若氣の一徹、勘平の非義非道を喝破するの意氣込みにて語るべく、郷右衛門は諄々として説き、事を別け理を責むるの心持にて語らざれば、作者が書いた本文の眞

意は現れて來ないのである。殊更郷右衛門の一言一句は、工夫に工夫を要する皮肉ものにして、此の呼吸の出來不出來一ツで「た、ま、り、兼、ね、て、勘、平、」……云々の一句も活きて來れば、勘平も腹が切れるのである。

『伊賀八』の政右衛門の呼掛けとお谷

『伊賀越』^{目八册}の呼び活けの所などでも其の呼吸は亦同じ。「雪に潤す氣付の一滴、耳に口寄せ聲かすめ、お谷ヤーイ……お谷といふも憚りて、心の中で呼び生る。夫の誠通じてや、うんと一ト聲—氣が付いたか、コリヤ女房。ア、ハ、ハ、ヤア—政右衛門殿」と語るのが普通一般の語り方なりと雖も、一旦「氣が付いたかコリヤ女房」と呼びかけ、まだはつきり氣が付かぬと云ふ心持を利かせて、更に今一度「お谷ヤーイ」と呼掛け、直ぐに「ア、ハ、ハ」と受け、暫く息を詰め……眼をばっちりと明けた氣持ちとなつて、「ヤア—政右衛門殿かいな」と出るのが大隅太夫の語り方で、其の呼吸の甘さ、道は大隅なりと得心させたのであつた。

『近江源氏八』首實驗の呼吸

『近江源氏』^{目八册}の「疵、口拭ひ耳際まで、どつくど改め古實を守り、謹んで兩手に捧げ、矢疵に面體損じたれ共、弟佐々木高綱が首、相違^地御座なく候と御前に直し押し下れば」にしても、「謹んで兩手に捧げ」で軽い咳を入れ……心の躊躇をまぎらす思ひ入れを利かせ、矢疵に—面體—損じたれど—弟—佐々木高綱が首—相違—とためらいがちに語り、「御座なく候と御前に」……でキツパリ聲を張り、步調^{めど}を早めて語り、いよ—心一決したと云ふ心持を利かするのであつて、かくて後段の「ケ程思ひ込んだ小四郎に、何と犬死がさせられふ、主人を欺く不調法、申譯は腹一ツと、

竹本越路太夫の藝談

極めた覺悟も負ふた子に」云々の本文とも相應して來るのである。

『玉藻前』^{三段}の——「ハ、ア畏ツたと忍び入り、奪ひ取ツたはコレ此の驚塚、オ、御驚きは御尤」の呼吸も亦爾り「オ、御驚きは御尤」とかぶせて置いて、更に今一度「御驚き……は御尤」と重ねて語り、「よろほひく首取上げ、コリヤ娘、爺ぢやはやい」と出し——暫く息を持ち——呼吸を詰め——「テ、テ、爺ぢや——爺ぢや——爺ぢや」……爺ぢや……と語り、最後に耐へ兼ねて「爺ぢやはやい」と大きく出ねば、金藤次なる武骨一片の、荒くれ武士の、愁嘆は浮んで來ないのである。

理論を應用するの例は大様右の如し。以て一端を推し、よく勘考工夫を加へて、斯道の妙諦極致に悟入するの途を講すべきである。

著者は本書の刊行に際し、越路太夫及呂太夫兩氏に就いて、親しく其の藝術談を徴し、實際問題としての理論の應用が、如何に困難であり、深甚の注意を要するものなるかを聴き、録して本書の不備を補ふこととした。左は其の概要である。

竹本越路太夫の藝談

此の藝術談は、著者と越路氏との對談録とも稱すべきである。座に呂太夫氏あり、問々其の感想を漏さる。されば時に同氏の談片をも交へられて居る。

(著者)總じて義太夫道に限らず、何事にも機があつて變る……ズット修業を積んで往く内に、何かの機會に濶然として悟り、丁度眼の醒めたやうにころりと其の藝が一變する。然るに此の分なら何處まで往くか解らないと思ふて居ると、再た

るむ。一寸中よごみの姿となつて停滞する……と云ふ事があるやうですが、御
経験は如何。

(源太夫) 私も師匠大様に尋ねますと、夫れは藝の上達り目だと云はれます。即ち
藝の立替たがひになるののでして、大體皆誰も持前が有りまして、上達する程度迄は進む
さうですが、其の或る程度より以上に上達するのがなか／＼困難な事にして、今
で申せば文樂座の源太夫……此の位迄は誰でも進みますが、夫れ以上に上達し
ますのが難儀な事で……何故かと申しますと、私等の考へますには、源太夫の地位
なれば、先づ座長より四枚目……云はゞ序ついでに聽いて貰ふと云ふのでありまして、
四枚目の人が、幕の代りに聽いて貰ふと云ふと、エライ能く語ると云ふ事になり
ますけれど、其の人が三枚目に行くに古靱太夫の格で客が聞く、二枚目になると
南部太夫の格合かあひで聽くと云ふやうな次第で、御客さん方から格合を附けて來ら
れますから、段々悪くなつて來る次第で……序に聽いて貰ふて居る間は、一寸と
耳障りが良いと、南部太夫よりも源太夫が良いとなりますが、扱其の源太夫を二
枚目に廻しますとさ。ツぱり聽かれませんか——と云ふのは、太夫の方でも俄に其の
氣分に改まる故ゆゑで……文樂座に居りまして、昔は三段目の中を語つて序切、
……とかう云ふ具合で……序切と云へば中々重い役で、此の序切を語るやうにな
れば一人前の太夫で……三段目の中から序切を語る様になる。それより二段
目の切、三の切とかう云ふ順序でありまして、三段目の中を語つて居りまして、

其の中と切とは格合が違ふ一氣前が違つて参りますやうな譯で、中を語つて居た藝が俄に切に代つて参りますのですから、自身の意が改まつて來る。ところが、切を語るのはいかう云ふ具合に語るのだと云ふ呼吸が有れば宜いのですが、夫れが無ひ、夫れが無くて、三段目の中の藝で切を語るから、尠しも藝が寄らぬ、馴染まぬのであります。現今はモ一無茶苦茶で……大序なり、序中なり、序切口なり、序切なり、二段目の口なり、二段目の中なり、二段目の切なり、三段目の口なり、皆語り分けがあるのですが、……例へば三段目の中を語つて居るなれば、三段目の切の人に差支へる事は、尠しも語れぬ。同じ文句がありましても、同じ様な語り風は出來ぬ。さらりして切の太夫に遠慮して語らねばならず、假に三つ有れば一つに縮めるとか、きつしりした節があつても、其の節の眞似をせぬ様にするとか、淡泊と語るとか、さう云ふ様な極りがあるのですが、今はモ一無茶苦茶で、口も切も皆同じ氣分で語つて居る。そこで切語りの人が前に語られて仕舞ふては、モ一語られません。語ればあくどくなつて参りますから、今度は切語りの方が遠慮して語らねばならぬ事となる。今ア一語つたからと自分から遠慮して置くこと云ふことになる。夫れ丈今はものが違つて居ります。

さう云ふ次第なればこそ、今では太夫の修業振も變つて参りまして、昔の様な本筋の修業をする人が無い、無暗とハイカラになつて仕舞ふて居りますから、私自分の弟子にも、他のお方にも、もどく此の稼業は、未だに角な物を脊負ふて舞臺

に上り、しかつめらしく語つて居るやうなパン・カラの稼業なれば、ハイカラでは困る。此道丈は、パン・カラで修業をしなければ不可ぬと申して居りますやうな次第で……昔は禪坊主に角力取り、それに私共の太夫の三者——同じ修業振で——所が現今ではモ一・大序ソ・コ・ノの人が金側の時計をさげ、美服を纏ひ、羽織を著て、平常でも暮さうと云ふ様な氣分になつて参りまして……それ丈上手な者が出ません。私共の修業した時分の事を話しますと、お前達と私達とは時代が違ふ——なごよ云つて本氣には致しません。實に困つたものでありまして、期道の行末が案じられます次第です。

(著者) 足下あなたの淨瑠璃を始められました時分は、随分わらい事でありましたらう。

(越路太夫) 私が教へを受けた人は團七と稱し、未だ達者で歳が七十八……此の人が親分になつて呉られました。其の後今の攝津大様さんの所へ弟子入りを致しましたのですから、無論大様さんにも御恩が有りますが、此の團七さんには、非常な御恩を蒙つて居ります。

(著者) 淨瑠璃を語る「こつ」「こきゆう」「急所」とは如何様な事を云ふのですか。

(越路太夫) 其の「こつ」「こきゆう」は弟子にも譲れません。假令譲らうとしても先方が會得をして呉れません。「こきゆう」は即ち「こきゆう」で、辭には云ひ盡せません。

(呂太夫) 其の「こきゆう」と云ふ事が無ふて、皆同じ様に語りますれば、版はんで刷すつた様

なものが出来上る。夫れでは面白ふありません。「こきゆう」と云ふのが其の中に入る故同じ太功記を語つても皆夫れく違つて参ります。

(越路太夫)

假令ば「ツン」と三味線が出ます。其の「ツン」の所から聲を發しては可かぬ、反對に發なければなりません。「テン」の所から聲を發したら「テン」

「なにとやらして」——と、コー上に行かぬと云ふと區域が廣くない、之が即ち絲に附くので——つまり、絲の音から聲が發ると、區域が狭い、區域が狭いと云ふと、絲に壓へられて聲を充分に使ふ事が出来ない……面白い模様が出て来ません。

三味に附々の工夫

容器の内部を過るの外部を過るのとの差

三味線に附いては可かぬ……所が三味線に附て居るか居らぬかと云ふ事は解りません。一々注意して呉れる人が有りまして、夫は三味線に附て居るのではないかと説明して貰ひませぬと、語つて居る本人に解らぬのが有ります。夫れも人々に依つて違ひますが、兎に角三味線の音の上から——ト調子上から出ねば淨瑠璃が狭くなる。上から發ますと廣いものが出来る。何所にでも歩いて行ける。容器の内部を過ると外部を過るとは、廣さが違ひます。外部に出て居りますと面白いものが出来ませんが、内部では狭苦しくて面白いものが出来ません。私は常に若い者に申しますのに、それが出来ないのは三味線の音を聞て稽古をするからだ、三味の音を聞て稽古をするから可かぬ——と申して居ります。三味の音を聞て往かねば方法が附かぬ……其處が即ち「こつ」と云ふもので、口では言ふ事が出来ません……太夫は三味の音を聞くなと云ふことになつて

源太夫の息

居る。太夫が三味を聞ては可かぬ……所が御承知の通り、私の師匠の大様さんは三味線弾でした、それが太夫になつたのですが、此の人丈は實に聲を使ふのが名人で、一長短が上手で、裏聲を使つて居るのと表聲を使つて居るのが、聞人には尠しも解りませんほどで、つまり息の使ひ方が上手なのでありまして、老年に成つてからは、聲の使ひ方も違つて参りましたが、若い時分から長い息だく、どこ迄續く息かと人にも言はれました位で、「今頃は半七さん、どこにどうしてござらうぞ」之れ丈の間に、どれ丈の息が續いであるか解りません位息の續き様が上手でした。人には大抵程度の有るものですが、師匠大様ばかりは、息を殺して改めて息をすると云ふ事が無い、皆鼻で「フン、フン」と息をして居られるのですが、夫れが聞手には解りません。

(著者) 淨瑠璃の稽古……就中素人の稽古に就て注意せねばならぬ廉々はどんなものでせうか、第一腹の括り方——どう云ふ所が肝腎かなめの注意すべき所でせうか。

(越路太夫) 稽古をするのに注意すべき要點と申ますと、第一には、日々正本を讀んで其の文句を十分腹に入れる事で……昔の人も「皆目知らんでも、淨瑠璃本を六十遍讀んだら自然と淨瑠璃は語られるもので、其の間に情愛が解るものだ」と言つて居る位ですが、同じものを六十遍はなか／＼讀めませぬ……夫れも唯讀むのではない、此の人者はドー云ふ人者——こゝはかう書てあるから、此の人は

かう云ふ年頃の人だと云ふことを考へて讀むので、斯して六十遍も讀めば、其の内には自然と淨瑠璃が語れる様になるものだと言はれたのであらうと思ひます。

(著者) 節よりは文章の意味ですな。

(慈路太夫) 我々の方では、淨瑠璃の文句を語り殺しては可かぬと云ふことになつて居りまして、何程下手でも文句は明確ちやうめいと解る様にして、お客に満足を與へねばなりません。之れは素人方が娛樂に稽古をせらるゝにしても同様で、淨瑠璃を語つたら可かぬ——文句を明確と解る様にするを第一と心得ねばなりません。此の事單り淨瑠璃計りでなく、常盤津でも、長唄でも、謠でも文句が解らねば、トント面白いものではありません……

(著者) 淨瑠璃を語るに「ハア」とか「エー」とか種々の引懸ひかけがある。所謂間投詞とか助語とか云ふものでせうが、夫れに就ての要點をお話し下さい。

(慈路太夫) 其の事ですが、例へば「イヤ」と云ふのと「イーヤ」と云ふのと違ひますやうな譯で……今私は文樂座で「紙治」を語つて居りますが本には「ヤア、ハア」と書てある。此の「ハア」が私にはさつぱり解りませんが、篤と考へて見ますと——つまり治兵衛が小春にうとくとなつて居る——萬一の事があつては困ると云ふので、小春に思切つて呉れと云ふ頼み狀を遣る——小春が聞分きこわて、表向おもむき愛想づかしを云ふて一旦去く——おさんが小春の請出うけだされると云ふことを聞いて

て、「ヤア」と驚き「ハ、アツ、ハ、ハ」と嘆息する呼吸だなど氣付きました……かう云ふ所は。どうも解釋が致しにくい。されば素人衆に稽古でも仕て上げるときには、餘程具合よく教へて上げませんと、折角作者が妙味を持たせて書いたものでも、太夫の爲に語り殺されて仕舞ふことになりますので……こんな所は、語らるゝお方もよく／＼注意して活して使はねばなりません。

(著者) 昔は東風西風、又は豊竹派竹本派と、語り方にも夫々一ト風あつたさうですが、今でもさう云ふことが有りませうか。

(越路太夫) それはモ一今日は無茶苦茶になつて居ります——と云ふのは、それを語り分けて居る人が尠い、唯モ一聞き學丈で……稽古を仕て貰ふても、唯之れは西風だ、東風だと云ふて貰ふ丈で……昔はちやんと之れは東風だ、之れは西風だと云ふて、太夫衆も定まつて居りましたが、現今ではそんな事を申して居たら、全く不自由でなりません。

(著者) 今度の近松の原作の復活はどうで御座いますか。我々好者から云へば洵に結構な事こで、此の對話の當時越路太夫は、文樂座にて近松原作「天の綱島」の興行中なりし。今迄やつて居ないので、廢つて居る佳作が澤山有る。夫れ等はドシ／＼復活して高座に上ほせて貰ひたいと思ふのでありますが……き聴手の方で聴き馴れて居ないので成功如何と案せられるのですが、

(越路太夫) 悦ばれる御客もありますますが先づ七三……七三も六ヶ敷いでせう。世間

近松原作の復讐—俗受け悪し—地色

でやつて居る方を悦ばれる方が七分で、モ—種々いろいろ聞き盡した、原作でも聴きたいなど云ふ、極く熱心な方が三分位……之れも彼所あそこ此所こゝで語る様にでもなつたら流行の時代も参りませうが、一寸文樂座で、三十日か四十日興行したからとて可べけませうまい。近松さんの作は地色が多い——最も其時代の三味線彈の氣分にも依りませうが——太夫でも三絃でも、此の地色が語れたり、彈けたりするやうでなければ可べけませんので……

それ故に「詞」も大切で有るが「節」を餘程巧妙に語り廻さねば聞かれません……所が自己にそれ丈の術が無ないから能く行かぬ……どうしても前から喝采かくさいされる様な「節」を附けてやらねば可べかぬこととなる。今度の文樂座の「紙治」の道行などにも、何とも言はれぬ名文句がある。されば之れ丈は保存したい、一枚も抜かず、原作通りに語らし度いと思ふのであります、道行となれば三人なり五人なり、高座に竝んで語らねば道行らしくないと云ふので……曾根崎新地からズ—ット大長寺まで——大長寺に著てから心中場となる。小春と治兵衛との愁嘆になる。その文句が非常な妙文ですけれど、何分にも二人限りのクドキですから寂莫さびしくなつて仕舞ふ……折角の名文句は名文句ですけれど、賑かな後にさう云ふ陰氣なものでは飽きが來ると云ふ次第で、遂ついにい可惜あつた名文句も捨て仕舞はねばならぬ事となりますのです。

可惜名文句も捨て仕舞はねばならぬ

(著者) 語物を大體に區別すれば時代物と世話物と世話時代物との三通りに成りま

せうが、眞劍に語るとなると、世話物よりも時代物の方が、却て六ヶ敷いと云ふやうな譯ではありますまいか……

(慈路太夫) それはやはり世話物の方が六ヶ敷ふ御座いますな——と云ふのは、世話物は日常目前の事を語るのですから六ヶ敷い——何んでも夫れ丈の情愛を寫さねばなりません……尤も時代物でも、假へば「忠臣藏」で——由良之助の氣分になると申しましても、其の時分の人の實際の事は解りませんのですから、六ヶ敷には六ヶ敷ですが、矢張世話物の方が六ヶ敷御座います。

(著者) 時代物の方が何故六ヶ敷からうと考へたかと云ふと、つまり今御話の通り、世話物は日常目前の事で、太夫自身が其様な場合に遭遇する事も多いから、人形の情愛にも成り容易いでせうが、時代物の方は文章は極く簡單で、モ——一つ突込んで書て無い……其の突込んで書てないのを此方で工夫勘考して、情を寫して語らねばなりませんのですから、却て時代物の方が六ヶ敷からうと思ふて居ります譯ですが……

(呂太夫) 時代物なれば其の歴史から調べて來ねば其の情が出ない、それで六ヶ敷いと御考へになるのでせうが、併し時代物なれば……芝居を見てもさうです、金び加物で見せれば見せ易いが世話物はさうは参りません。丁度座敷の床間にしまして、種々裝飾がして有れば立派に見ゆる、若し何にも飾りが無い所を立派に見せやうとすれば、それは六ヶ敷いと同様に、時代物には種々の飾が有ります、

例へば熊谷でも、「その方は此處に何にしに來た」とコー申しますと、熊谷で無くとも熊谷の様に見えますやうな譯で……世話物は唯平凡に語つて居りまして、其の人に成り得ると云ふ事が六ヶ敷い——と言はるゝのが越路さんの論では無いかと思ひます、丁度此所に有ります茶碗にしても、金模様か何にか、畫いてあれば立派に見ゆる、又直に氣も附きますが、若し之れが何の飾りも御座りませんければ、手に持て居ながら、遂ひ氣が附かぬと云ふ様な理窟で……

(著者) 所が字を書くのにも、草書のくずした字の方が容易くて楷書の方が六ヶ敷い、六ヶ敷い書家になると行書を教へない、行草は自己の力で研究して、くづして書くと教へますさうで……

(越路太夫) ドーも私其の研究が未だ足らないのかも存じませんが、九段目を語つても一日向島を語つても——時代物で有れば、半月語れば大抵モー文句が腹に入りますけれど、今私が文樂座で語つて居る「紙治」の如きは、既に半箇月も語つて居りますが、未だに其の文句が腹に入りません——と云ふのは捕らまい所が無い——時代物は「キユツ」と一つ握つて根強くやると、ドーでも語れますが世話物の方は左様には参りません。之れは研究の仕様が違ふのかも知れませんが、此の兩者を研究するには、非常に我々の頭が違ひます。世話物を語れば、道路を歩行いて居ましても、疎にも歩かれませんが、日々人の言ふて居る——仕て居る事が皆淨瑠璃の中に書て有る……人が何を話して居ても迂濶に聞き流すことは出来ませ

時代物は「キユツ」と一つ握つて根強くやると語れる

世話物研究の苦心

ん。私の師匠の二見の今のお婆さんがまだ若い時の事、姑に呵られては日々泣
の涙で、夜分師匠が芝居から帰宅致しますと、寝物語りに「今日はかう云ふ事が
あつた」「ア―云ふ事があつた」と泣いて師匠へ話しをする。すると師匠はフ
ン／＼と聞いて居つて、夫れで『帯屋』を語るとき「おきぬ」の呼吸を漸く會得され
ましたさうで……後日、其の話をして大笑をしたと能う話して聽かされました
が、何事もさう云ふ實際の事からして研究して懸らなければ可けませんので……
…過日も『濱松』の口を語るのに、笑樂を賣つて居る所が有る。それに就て靜太夫
が「お師匠さん之れはドー云ふ風に語るのですか」と尋ねますから「私は其
の時分の事は知らぬけれど、併し夫れを語らうと思ふのなら、縁日の晩に、錆落し
の樂や、鉛筆などの效能を述べながら賣つて居る者がある、夫れを聞て研究をな
さい、アノ通りやつたら可いのだ」と申しましたやうな次第で……日々門前に
來る物賣りにでも淨瑠璃の呼吸がある―道路を歩いて居つても、少しも油断は
出来ませんやうな譯——然るに時代物の方には夫れが無い、それで私共には時
代物の方が語り易ふ御座いますが、元來私は世話物の方は餘り可けません方で、
大抵時代物計り——どちらかと言へば世話物の方は口の重い方でして……

(著者) 聲の使ひ方に就て苦心をなされた様な話を承りたい。

(善路大夫) 私は十九から二十才位の聲の變り目に非常に苦心を致しました。どう
したら此の聲が使へるであらう—どうしたら此の聲が癒るであらうと、當時な

かなか苦心致しました。元來私は子供の時分から、師匠の前で改めて稽古をして貰ふたと云ふことは御座りませんので……初の師匠の團七さんが堺で稽古をして居られた時分でも、連中が多いから稽古をして貰ふ閑暇ひまがありません、十人なり二十人なりの連中が朝から終日習ふて居る、其の人達に師匠が教へらるるのを聽て居て獨りで覺えますので……人の杜絶とぎれた折に師匠の前に出て語つて見る、それが稽古で……今の師匠の大様さんでも矢張り其の通りでして、師匠が夜分歸つて一杯飲さかれて、用事が済みますと、私は立關へ下がつて扇子を叩て語つて見る——すると師匠が、それはさうでない、かうだと云ふて直して呉れられましたので……それで私は今の若い者にもさう申しますのです、改めて見臺の前に坐らねば稽古が出来ぬ様に思ふては大變な間違で、そんな事では可かぬ——日々歷乎とした人が皆舞臺で語つて居られる、下、手、上手に拘らず孰れも命掛で語つて居られるのだから、それを聞いて覺わぬ事には可かぬ——見臺の前に座つてやる稽古は、稽古をする人の都合で出来不出来がある。日に依つて稽古に甲、乙が出て来る。それよりも舞臺に上つて、長くても短くても、一生懸命に語つて居る、それを聽て研究をせねば可かぬと申しますのですが——ドーも今の人は、矢張り見臺の前に廻つて、口移しをして貰はねば、稽古が出来ぬ様に思つて居ます。つまり先方のものを買つて来てやるから可かないので、先づ自己の持前の物を出し、夫れに人の長所を採つて来て一所に混せる——自分のはかう云ふ所が可か

ぬ、其の可かぬ所は棄てゝ仕舞まして、たれかの良い所を取つて来てこゝに入れ
る……と云ふ風に語らねばなりません、夫れが假令拙劣へたでも差支はない……な
せかう云ふ風にして研究をせぬかと言ふて居りますのです。

（著者）あなたが今日の位置になられるまでには、随分辛ひ修業もなされたでせうが、
其のお話を……

（繪路太夫）私は八歳の暮れ比から堺の女太夫に就いてポツ／＼てはなま手解をやつて貰ひ
ましたので——私の兄が三味線を弾て居て、近所の若者が多勢三味線の稽古に
参りましたが、右の女太夫も亦兄に教へて貰ふて居りました其の縁から……初
めて教へられたのは、『忠臣蔵』の三段目——所が私は兄弟の數が尠なう御座いま
して唯二人——それで私の親は、兄弟が尠ないのにかう云ふ事を教へて居ては
可かぬと云ふので、奉公に出されました。所がなか／＼勤まりません、直に戻さ
れる。學校は嫌ひ、どうにも始末が附きません所から、どう／＼しまひ終に寺へ小僧に
遣られました、半期程居りましたが——其の寺の坊さんと云ふのは他人では無
い、私の祖父が世話をしたことのある坊さんなので、其の坊さんが「此の子の祖
父さんには御恩が有るのだから、マゝ私の寺へお遣ましなさい、お世話を致します
から」と言ふやうな譯で——お寺へは参りましたものゝ、朝も早くは起きられな
い、御經は習はぬと云ふので、どう／＼其の寺からも戻されて仕舞ひ、幾軒奉公に
行つても長くは續かない——親父も呆れまして、モゝお前の様なものは、どうと

も勝手にせいと云ふので、夫れから團七さんの所へ通勤ことになりましたので……「かう云ふ人間ですから、足下にお委任しますから、焼て食ふなり、煮て食ふなり、ドーとも好い様にして下さい」「それなら私に一切委任すか」「どんな事をなされても一切苦情は申しません」と云ふ様な事で……所が此團七と云ふ人の稽古振がなかく、殿しう御座りまして、少し覺わが悪いと直にどやし付けること云ふ様な次第——夫れが爲め團七さんの妻女が大變氣遣はれて、「お前さん——慘酷にして傷でも附けては親達に言譯が有りません、何んぼ預つて居るとは云ふものゝ他人の子です、若しもの事が有つてはなりません」と言ふと「なに私が預つた限りには一人前の人間にせねばならぬ、私の稽古振の殿しいのを見るのが否やなら此家を出て行け、何時でも離縁をやる」と幾度夫婦争をせられたか分りません。夫れ程にして仕込んで貰ひましたので……或日私が朝宅を出で團七さんの所へ行つた限り、夕刻になりましても宅へ戻りません、親父も心配して團七さんの所へ参り、「今日悴が参りましたか、未だ宅へは歸りませんが」「ア—未だこちらに居る」「どつかへ使にでも行きましたか」「イヤ裏に居る」「ア—左様ですか」と、裏の障子を開けると庭の正面に松の木がある、其松の木に、終日飯も食はされずにヒックと居る。「親爺あれを見てお前何んどぞ思ふて居るか」「否や何んにも思ふて居りませぬ」「わしは預つて居るのだから己の思ふ様にするのだが、若しお前が夫れを見るのが辛ければ、何時でも連れて

「歸れ」と言はれまして、親爺も涙の一滴も出ましたらうが、あんまりと云ふ事も云はれませず、其の儘に引取る——さう云ふことは度々で……稽古は二階でしますので、間々二階から蹴落されたことなどもありました。

一番辛かつたのは十九の歳——當時私は大變に聲が悪く、障子の破れの様な聲が發でました頃で……和泉の佐野の在に日根野と云ふ所がある。其所へ十日間買はれて行きました。其の比の私の出物と云ふたら、三ツか五ツしか無い——然るに師匠團七さんは一人前の給金を請取つて居る——「おいだき」の太夫なれば「忠臣藏」を出せば四段目か九段目、妹春山を出せば三段目の片山は持たねばなりませんのに、子供の割合に餘り給金を請け過ぎて居る。——私の十八九歳の時分で十日間で八十圓と申せば大した給金です——先方は高いと思つては居るけれど、團七さんがさう言はれるものですから、要求通りの金を出して居る。

所が先方の註文の出物でしは私には有りません。無いからとて給金の手前さうは言はれませんか。「明日はドーしませう」と師匠に尋ねますと「黒人で何を知らぬ、彼を知らぬと言はれるか——ヨシ——マー本を以て來い、教へてやらう」と云はれて本讀みに掛る。所が團七師匠は一逼語つて呉れられますと、モー二度目には手離して、三度目に間違ふた位なら頭を擲られる。かうして毎日／＼新規のもの計り苦んで居るのですから、中々聲が癒なりません。人形遣ての方では「なんだ彼かの小僧、鹽辛聲を發かしやがつて」と言つて居るのが耳に聞えます、宿

覺えない「おいだき」の太夫

鹽辛聲の小僧

へ歸ると團七師匠が立腹して「今日も恥を掻かせやがつて、しつかりしろ」と叱かられる。「明日は何んです」と問へば「一の谷の三段目だ」「知りません」「そんな物を知らぬと云ふことが言へるか」と呵かられては前の通り……非常に艱難を致しました。旅宿ではマーどうかかうか稽古を済ましても、肝腎の舞臺へ出るとウンともスンとも言へぬ様に成つて仕舞ふ。夫れで餘り辛いものですから——稽古を終ると師匠は風呂に入つて寝て仕舞はれる。私はモ一師匠が寝たなど思ふ時分にからだ身體を撫で、其所から三里程離れて居る犬鳴山の不動さんに毎夜く通ひました。師匠の朝起きる時分迄には歸つて來る。聲の癒りさうな事は無いのですけれど、出來無いのが辛いので……不動さんに參詣しては、其所の瀧に打れて旅宿に歸り、寝て居た様な顔をして又其の日の語り物を復習へて貰ふ……かう苦しんでは聲の出さうなことは無い、師匠からは聲の遣ひ様が悪ひとか何んとか云はれては擲られる。此種事を繰り返しく一生懸命、聲の遣ひ方なり種々のことを研究致しました。

(呂太夫) それ丈辛抱の仕甲斐が有られたと云ふもので……其の時分と今とは非常な違ひで、いま現今そんな事でもしたら、直に門弟は飛び歸つて仕舞ひます。

(繪路太夫) 現今は手の一ツも觸たり、チョツと荒い言葉でも使はふものなら、モ一参りません。私も宅の若い者には、聲の遣ひ方なりと教へて遣り度いとは思ひますけれど、教へ始めたら一人計りと云ふ譯にも参りませす、と云ふて大勢ある弟

子全部を一々教へて居りましたは私の本職が疎むろになりまますので……そこで宅の若い者にも、電車賃を與るから堺にでも行つて聲の遣ひ方でも教へて貰ふて來ひと申しましたのですが、唯一人として行くものがありませんでした。

團七師匠の聲の遣ひ方と大椽の聲の遣ひ方

私は實まことに順序能く行つて居ります——と云ふのは、團七さんから聲の遣ひ方を教へて貰ひましたのだ、大椽さんの聲の遣ひ様の上手うまい——其使ひ方を教へて貰ひましたのが非常に私の幸福となりましたので……同じ聲の遣ひ方でも、大椽さんと堺の團七さんとは其の遣ひ方が一寸違ひます。今迄にも時々お世辭かも知れませんが、お前の聲は大椽に似て居るとか、そつくりだとか、言はるゝお人も有りますのですが、ソ一言はれましても、餘り嬉しくも感じません——と云ふのは、孰れ似て居ると言はれる所は良い所は似ない、悪い所が似て居るのだと考へますので……總て他人に似せ様と思ふと必ず悪い所が似る。其の人の癖の有る所は似ますけれど、良い所は似無いもので……夫れが爲め、能く似て居ると云はれますと、之れは悪い所が似て居るのでは無いかと思ふて、篤と其の點を研究致して居りますやうな譯で……

似るに真い所は似ぬ

自己の物とせよ

夫れですから他人の真似を仕掛ますと、自己の良い所を棄て、他人のものを請取つて來て語ると云ふ様なことになります。他人の品物も自己の品物として磨き出すと人が買ふて呉れますが、他人から受取て來た計りでは自己の物がお留守になつて仕舞ふ。夫れでは面白く無いものが出来る。稽古をするにして

下手でも素人でも夫れく
自己の特色

自然の眞目

淨瑠璃の「品」——太夫の「品格」

も其の點を能く心得なければなりません。どんな不器用な太夫でも——素人のお方でも、夫れく——自己の特色があります。先達津太夫が文樂で一の谷の三段目を語つて居ります時に、殿村兵衛門さんが聽にお出になりまして、「どうぢや、わしの熊谷が良からう」と言はれましたが、成程お素人のことですから、「節」でも何んでも拙劣は御座いますけれど、ジツト噓分うそわて聞いて見ますと自然にそれ丈の眞目と云ふものが備つて熊谷になつて居る。こちらは淨瑠璃は知つて居るけれど眞目が無い、之れはモ——云ふに言はれぬ人々の持前で、品格の有る人が語つて居られると、夫れ丈の格が具つて熊谷になる。それから又其の翌日、土居さんが見わまして、「どうぢや私の熊谷の方が良からう」と言はれた。成程考へて見ますと、矢張り自然の眞目と云ふものが備つて居る……大分以前のことですが、彦六座の組太夫——此の人が「忠臣蔵」の平右衛門を語り、一方文樂座の方では先代の呂太夫の平右衛門——どちらかと申しますと組太夫の方が淨瑠璃は上手ですが、呂太夫の方にはどこも云はれぬ品しなが有りました。同じ「一の谷」を語りましても、組太夫よりも、呂太夫の方が品格がある——淨瑠璃を語るには、第一此の品格と云ふことを考へねばなりませんので……ところが之れは人々の持前で——眞似の出来ぬもので——上手も下手もありません、持つて生れたものですから……

黒人でも素人でも其の人々に依つて必ず一ツは特色がある。其の自己の特色

附焼及

自然に纏て来る

を棄て置て、他人のものを採りに行かふとするから附焼及の様なものが出来上る。ところが其の附焼及も次第／＼に剝て来る。剝て来ても已れの研究して居る持前が出て来ないから可笑なものに成りますので……自己の特色を一ツ現はして置て、之れに磨きを掛け、而して後に他人のものを採つて来て裝飾を附けましたら能いのですが……もと／＼自己のかう云ふ所に、他人のアー云ふ所を採つて附けたら良いと云ふ土臺の研究がして無い。唯先方のものを買つて来て、其の儘持つて居るので、所謂附焼及になる、自然／＼に剝て来る……夫れも大體常々の稽古が足らないからでありまして、常々の稽古と申しますのは、唯モ一日々の出来事を考へまして、他人さんが對話をして居られましたも成程アー云ふ呼吸のものだ。物を賣つて居る人を見ましても、成程アー云ふ様なものか。と實地に深く研究する、之れが即ち常々の稽古で、彼の『堀川』に鐘もあわれなり」と云ふ「ヲクリ」がある。此の聲はどこから發るのかと先代團平さんに尋ねたら、團平さんは「それは廓の火の用心と云ふ音である。其の音で語れ」と申されたさうで、三味線の音色にも皆此の日々の出来事がこもつて居りますやうな譯で……「無冠の太夫敦盛は途にて敵を見うしない——御座船に」と云ふ文句が有りますが、此の文句の三味線の音を聞くと、實に其の通りで——須磨の大様さんの別荘から浦を眺めますと、其の浪の音が三味線の「間」と違ひません——之れは浪の音を採つて三味線の「間」を作つたものさうでして……

三味線の音にも自然の妙

豊竹呂太夫の藝談

初代鶴澤重造

：成程三味線の手と云ふものは能う附けたものだと思心致しました。日々の風の音でも三味線の中に入つて居ります。「忠臣蔵」の三段目に「脇能過ぎて音楽や」と云ふことがある。大鼓をドン／＼と叩て居る音と三味線の音と同じ間合に叩いて居るのですが、三味線の音が自然とソー云ふ様に聞へる——能く附けたもので、靜にジツト考へて居りますと皆夫れが現はれて參ります。さう云ふ様な所を考へますと、なか／＼油断をしては居られません。研究と云ふのはかう云ふ事が總て研究です……

豊竹呂太夫の藝談

呂太夫氏は著者が東京在住當時の師匠である。本書編述の事を話して意見を徴するに、喜んで書めに應じ、續々其の藝談を聽かして貰ふたのであつた。(附て云本書に附録として添へた『淨瑠璃系統圖表』に、氏の名乗り豊竹なるを竹本としたのは全くの誤刷にして、此處に序を以て訂正する。)

私の父は初代鶴澤重造で、後に綱太夫になりました。對馬太夫の三味線を彈て居りましたが、十六歳から三十二歳迄此の太夫の三味線を彈いて、夫れから後は他の太夫の三味を彈きません。後年對馬太夫が東京へ參り興行致しました折は、二代目廣助が三味を彈きました。

其の私の父重造が對馬太夫と興行して居りました時、未だ幼少の私をも一座に加へて語らせましたが、何分にも六歳か七歳の私——忘れもしません。當時「一ノ谷」の組打を語り、途中でつまつて泣き出しましたら、父重造が「ばち」で打つ、私は益

お菓子を買ふた坊ちゃん太夫

々泣く、却て聽いて居られるお客さんがふびんがつて、高座に居る私にお菓子を下さると云ふ様な次第……翌日高座へ上る時、弟子共がすかしまして、坊様又泣てはいけません、と申しますと、泣た方が餘程好い、又お菓子が貰へるからと云つたさうで……そんなものですから父からは愛想をつかさね、歳比になると小僧奉公に出されました。

十九の歳父に許されて古靱太夫の弟子に入り、歳數を取つて十九太夫と命名されたが、太夫稼業の發途でして、其の後呂太夫の弟子となつて呂勢太夫と稱し、後、新呂太夫、其の後祖太夫と改名し、師匠呂太夫死去の後、其の名前を繼承して呂太夫となりました。

西風と東風

御承知の通り淨瑠璃には西風と東風とあり、竹本が西で豊竹が東——ところが私は西風の語り具合しか出来ませんのに、豊竹と名乗て居る様な次第——語り具合は西風、名乗りは東風……斯様に現今では、西風も東風も區別無く混同して居りまして、素人の御方には到底此の西、東の區別は附きますまいと存じますが、黒人ですら夫々語り分けが出来ない様な次第で……當今では少々位間違た語り風をしましても、聽客にさへ喝采さるれば自然と良い役割も附くと云ふ様な譯で……西風も東風も、三段目も四段目も無い、唯美聲を張上げて艶ッぱく語れば良いと云ふ風になつて參りまして、眞に藝其のものゝ研究を重ねる人が、段々減少して往きますのは實に残念の至りであります。

先代呂太夫と住太夫―古靱太夫

私の記憶して居りますだけでも、彼の住太夫、先代の呂太夫など―古い太夫は孰れも立派な大音で、彼の御靈の前に繪雙紙屋が有りますが、先代呂太夫が語りますと、其の繪雙紙屋迄も聞きましたさうで……近來は鳥居どころか芝居の表までも聞ける様な太夫は有りません。先代の津太夫は聲が低く、聽手は皆、聽へぬと申しましたさうですが、現今では其の津太夫位の聲で語る者さへ有りません……津太夫は實に名人で、あれにモ―少し聲が有つたらばと云はれた位でありまして、先代呂太夫は實に大聲でした。

古靱太夫は中々の名人で、今の攝津大様も及ばなかつた位でした。此の古靱太夫が興行先の東京より歸り文樂座で、『加賀見山』の七ツ目を語ります時、越路太夫今のにお初の役を割當てましたが、彼の人にお初を語られては具合が悪い、私がお初を語るとて、古靱太夫自身でお初を語られた位の語り人でした。

其の『三勝半七』
其の古靱太夫が文樂座で、『三勝半七』酒屋の段を語られた時、「ホ、是はく宗岸様」「オ、そちらに居やるはお園ぢや無か」と云ふ冒頭の詞、此處でモ―お客を満足させた……唯今では此の一口の詞位で、聽手を満足させる様な太夫は有りません……

『質店』『二十四孝』
『質店』――古靱太夫は上手に語られました。彼の「ハット目め覺て、ハア、夢であつたか」の一句などは、眞實今迄眠つて居た者が、目覺た様な感動を與へました位で、『二十四孝』の四段目でも、「お前の忌日命日を吊ふ人も情なや」と云ふ

『鳴八』の絶句―却て評判

綱太夫の『三十三間堂』と古
頼太夫の『吃又』

文句が有りますが、此の文句で既に聽客をホロリとさせた位情を含めて語られました。『十種香』を語つて聽客をホロリとさせるなどは、よく／＼でなければ出來ぬ藝です。

天滿の座で興行の時、私が湯を汲で居りましたが、古頼太夫の『鳴門』の八ッ目、「と様の名はお弓と申ます」と云ふ絶句……聽客はドット笑い出す、私は氣が氣ではありませんでしたが、師匠は落付いたもので、「オ、其の名まで取り違へるいじらしさ」と泣いて語られましたら、こんどは又非常の喝采で、一時は之れが流行して、噂の種となりました位……丁度其の頃織太夫の綱太夫と云ふ名人がありました、此の人は、『三十三間堂』の語り初めの人で―此の綱太夫が天滿の芝居で一座して、『三十三間堂』を語り、次が師匠古頼太夫の『吃又』と云ふ順序で、前の綱太夫はヤンヤ／＼と喝采させてばかに受けて居る。次に出る師匠は『吃又』、あんまりジミな出し物―其の上私には曾て聞いた事の無い語物です、氣がもめてなりません、其處で師匠に「何か本を取つて來ませうか」「何んで」「でも今日は吃又ではありませんか」「吃又でよい」「酒屋でも」「かまわん」「でも綱太夫サンはアーしてヤンヤと受けさせて居られますのに、其の後で吃又―出し物を變へはつたら」と申しましたが承知しません。其の内に舞臺が廻る。「こゝに土佐の末弟、浮世又平……」と語り出し「薄き紙子の（カミ）燧石箱」と續けると、モ―吃の所迄語らない内に非常の喝采、前の綱太夫サンの『三十三

昔は凡へて地聲で語る

芝居の眞似をする現今の太夫

音聲の子

間堂』は、どこやら行て仕舞つたと云ふ様な有様……然るに惜むべし夫れ程の名人も、不幸大工の棟梁某に刺されて果てられました。越路さんは他の太夫の弟子とでも一緒に成り、一座を立て居りましたが、古執太夫ばかりは自己の弟子ぎり、決して他の太夫の弟子は使はず、御霊の芝居を興行致して居られました。

私の幼少の頃……重造カキダが芝居に出て弾いて居りました頃の淨瑠璃は、子役でも、女でも、皆地聲で語りましたもので、別に女だから子供だからと云ふて、聲を變へる様な事はありませんでした。されば父が人さんに稽古を致しますのにも、よく物眞似をするなと注意して居りました位で……男でも、女でも、子供でも、すべて地聲で語つたのですが、夫れが又聽客には男は男の様、女は女の様、小供は小供の様に感じを與へるのですから、餘程の伎倆が無ければ出来ぬ事で——丁度謠のやうなもの——今日の語り方はつまり物眞似をして居るので、男は男、女は女の様な聲を發して語る。モー一ツ太しいのになると、芝居の眞似までして居る。彼の『忠臣藏』の四段目でも「ちかうくく」「ハ、ハ……」など、何も太夫が芝居の眞似をするには及びません、却て役者をして淨瑠璃の眞似をさせるやうな見識がなければいけません……

よく三味線彈があなたは何本の調子ですかなどと尋ねることがありますが、調子と云ふもほゞくのもの、朝夕お寺の鐘樓で打つ鐘の音さへ、朝鳴るのと夕

鳴るのと其の音が違ふ―同じ撞木で打つてさへかう違ふのですから、況して生物の我々……何時も同じ調子ばかりでは語れません。腹具合により四本のときもあれば五本のときも有ります、美ひ聲の出るときも出ないときも有ります。三味線も亦さうで、五本と云ふても五本のみでは弾かれますまい、時々刻々に多少の變化はあるものだらうと思ひます。今日はすごい聲だと感じたときには直してくれるやうな三味線弾でなければ困ります次第で……

文章の意味をよくくく吟味し、作者を泣かせないやうに語るのは太夫の義務で―明治何年頃か確と記憶しませんが、曾て岩谷一六さんの御最負になりまして、爲に大に益を得た事があります。と云ふのは彼の『勢州鈴鹿合戦』阿漕の段切「へいどピラとの読み違ひ、聲に讀む字を訓に讀み冥途に急ぐ……」と云ふ所……本には「めいど」と假名が振つてあり、師匠にも左様教はつて居りましたので、其の儘其の通り岩谷さんにお教へいたしましたら「お前は何の考へもないやうだが、夫れでは作者泣せになる―字では冥途と書てあるけれども「よみぢ」に急ぐと云ふので文章の意味が活きて来る―へいとピラとの読み違ひ聲に讀む字を訓に讀みよみぢに急ぐ一文字と言つてこそ掛文句となつて面白いのだ」と言はれました。成程其の通りで……單に此ればかりでなく、文章の意味にはよくくく注意せねばならぬと非常に感じました。されど其れ位識者の一六サンでも、妙なもので、當時の流行言葉、國言葉と云ふ様なものは御承知が御

文句の研究

『阿漕』の「冥途に急ぐ」

『菅原』の「はしごくて」

座ひませんで、彼の『白石嘶』の揚屋の「奥のト・ロ・ク・の御客にも」と云ふ、其の「ト・ロ・ク」は何う云ふ意味だとお尋ねが御座りましたやうな次第で……

『菅原』四段目の寺子屋の「はしごくて出て来る小供の」とある其の「ハシゴクテ」の意味——之れは私が芹生の里に行きましたときに、子供達が遊で居りまして「ハシゴクテ倒て可かぬ」と申して居りましたので、成程と思ひ當りまして段々聞き調べてみますと、大阪で申せば「ケンケン」東京では「チンチンモガ／＼」片足を上げて飛び歩くことを、芹生あたりでは「ハシゴクテ」と申して居るのであると解りまして、昔の作者と云ふものは、よくも斯くまで調べて書いたものだと感心致しました。

所が今出来のものの中には、随分不十分なものもありますやうて……彼の『三十所』壱坂——あれは御承知の通り加古千賀——先代の團平さんの妻女——此の人が作りましたものなさうですが「三つ、違の、兄さんと、云て暮して、居る内に、情なやこな様は、生れも付かぬ瘡瘡で」とあるより見れば、澤市の眼がつぶれたのは、餘程年長けてからの事に相違ないのです。然るに奥になると「初めて拜む日の光り」とある……そこで私は「再び拜む日の光り」と教へて居りますが、近頃出来た淨瑠璃は、何所かに間の抜けた處がありますやうで……

彼の『箱根靈驗』の蹇でも「紅葉のあるに雪が降る、さぞ寒かつたで——」と云ふて、其の言譯は何所にしてあるかと云へば、奥に「散りしく紅葉」と云ふてあ

『壱坂』の「初めて拜む日の光り」

る。成程紅葉の散る時季には箱根山では雪が降る、即ち其の言譯がチャンと付いて居りますので……『忠臣藏』の九段目でも「了簡もあるべきに淺きたくみの鹽谷殿」と云ふて、淺野内匠頭と云ふ事を利かせてあるのであります。

『吃又』の「何んなく姫君奪取れ」

『吃又』の雅樂介の注進に「何んなく、姫君奪取れ」と云ふ文句があります。私が徳島に参りました時『吃又』を出し、本文通りに語りますと、藝評はよろしく、手前味噌新聞社のお方も非常に書立てと提燈を持って下さいましたけれど、雅樂介の注進の文句に――之れは太夫の缺點では無いが――自分の主人の姫君を預つて居りながら、何んなく奪取られると云ふことは無い、曾て越前様は「つひ無く姫君奪取られ」と語つた事がある、「何んなく」はおかしい、「つい無く」と語つて欲しいと云ふ批評がありました。――其處で後日岩谷一六さんにお會しましたときに此の事をお尋ねしましたら「それはどんな作意の所か」「將監の邸へ雅樂介と云ふ者が注進に参るのです」「其の雅樂介と云ふのは何んだ」「將監の弟子で書師です、それが姫君を奪取れたからと云ふて注進に來たのです」と申しますと、アーさうか、そんなら「何ん無く姫君奪取られ」の方が宜しい、それは書師の意を書いたもので、書師と云ふものは、筆を持ては強いが刀を持ては弱い、先方は武士だ、しかも大勢――其の武士が姫君を奪い取りに來たのだから何んなく奪取られた――書師と云ふ意が出て居る、決して直すで無いと申されませんでした。之れに付けても、先人の書かれたものなどには、一字一點でも迂濶に手を著

『國姓爺』の「手を上げ」と
「手を下げ」

十三の『彌作の鎌腹』

イタイく

くべきものでないと思ひました。

彼の『國姓爺』の正本に「甘輝公の御歸りと、聞くより雜兵手を上げ……」と書てありましたのを、禮式に手を上げると云ふ事はない、之れは作者の誤りだ——と云ふので、今では「手を下げて」と書變へて語つて居りますが、のです、併し丸本にはチャンと「上げ」と書てある。研究して見ますと昔は禮式に手を上げたもので、支那は勿論左様でしたさうで……今日ではさう云ふ事も判明して居りますのですが、三百年の昔、それを承知して書かれました近松の博識には、驚くの外は有りません。

大阪に素人で十三と云ふ斯道の達者が有りました。此の人は『彌作の鎌腹』の先祖で——大隅太夫も此の人に就て『鎌腹』を習ひ、私も習ひに行きました。ところが、彌作が初め山刀を持つて自分の腹を突いて見て、イ・タイ・く・と云ふ、其の情愛がどうしても出来ません。何度繰り返しても出来ません。腹を突くのでなく手でも捻つて居る位な痛さ……毎日く幾度もく教へて貰ふても云はれません。歩きながらもイタイくの復習——初めは口の中であつたが、我れ知らず大聲になつたものと見わまして、或る四辻まで來ますと其所に交番——「コラく貴様は最前から大聲で、イタイく」と云ふて居るが、何所が痛いのか「まさか淨瑠璃だとも云へませんから「へー腹が痛ふ御座います」「腹が痛いにせよ、そんな大きな聲を出さずに靜に歩け」と叱られた事が御座ひました。

「腰越状」の「酒と云ふ」「浄瑠璃ぢやない狂言だ」

先代の團平さんの所に「腰越状」の稽古に参りました事がありませんが、若い折であります。三日程聞かして戴きました。冒頭の「酒と云ふ」——そこを語つて見よと云はれましたので、「チャン」「サケー」と一ト口開きますと、「此處は浄瑠璃では無い狂言だ、マー考へて置け」と云はれて、ポント三味線を置いて止められます。「サー狂言と云ふたらどんなものだろう」と思案したが解らない、翌朝出掛けて行つて見臺の前に坐はる（チャン）「サケー」と申しますと、「イヤ浄瑠璃では無い狂言だ」ボンと止められる。其の又翌朝参りしても、矢張「浄瑠璃では無い狂言だ」とたつた一言——コーとも、アーとも教へて下さいません。私の宅から團平さんの家までは十五丁餘り——早朝から唯「サケー」と云ふ一句だけを習に行くやうなもの……七日程は辛抱もしましたが、モ一痺痺がされる。こんな六ヶ敷ものなら止めたとばかり、少々むかッ腹も立ちましたので、三日程通ふのを止めましたが、残念でたまりません。所が私の宅の近くに能役者が居りました——最も其の時分の能役者などは、實にみじめな暮し方で、餘り流行りませんから、諸の師匠をしたり能を教へたりして細々と暮して居るやうな有様——其所へ私が参りまして、「狂言言葉と普通の言葉とは違ひますか」「夫れは違ひます」「實は斯様くで、「サケー」と云ふ一句だけが狂言ださうで……夫れが私には判りませんので、何卒教へを願ひたひ」と申しますと、「そこだけ教へると云ふ譯には参りません」と云ふ次第で、紙數なら五六枚ばかり

教へを受け、段々研究に――を重ねて見て、やう――會得が行きましたから、七日程経つて、又團平さんの所へ參り、見臺の前へ坐り、狂言の節で「サケー」と語り出しますと、團平さんは三味線をピタリと止め、「誰れかに教つて來たな」と聞はれました。「實は斯様――で」と一部始終を打ち開けますと、師匠の曰く「それで宜しい」さうして置きさへすれば、お前一代は忘れ様とて忘れる事は出来ない、私が教へるのはさうさもないことなれど、教へて貰ふたものは忘れ易い、直にも忘れはしまいが、十年二十年と経つ内には忘れて仕舞ふ、「お前は太夫などはモ―止め様と思つたであらう」と團星を指されたので一言もなく、却て其の親切にほだされて男泣きに泣きました……夫れで素人方には斯程までも致しません、其の道の者に教へるとなると、昔時はなかく――嚴格なもので、今日斯様な教へ方を致しましたら、一ヶ月と申たひがなかく――、到底十日と續く者は御座りますまい……

淨瑠璃の文句の中には、たつた一字の差――ホンの一字を上につけるか下につけるかの違ひで、作意を殺したり活したりすることがあります。例へば『加賀見山』の七ツ目に「待つ間もどけし長廊下……」と云ふ處が有ります。「尾上」の心中はなかく――解けては居ない、今「岩藤」に草履で以て頭を打たれ、辱しめられ、早う己が部屋に歸つて自殺と思ふ了簡――なかく――解けるどころではありません。されば其の意味を書いて「待間もどけし長廊下……」然るに「も」の一

『加賀見山』の「待つ間もどけし長廊下」

字を上につて「待間もどけし」と語りましては全く作者殺となつて仕舞ますので——もどけしは、もどかしい、じれつたいと云ふ意味——ところが今日多くの人は「待間もどけし長廊下」と語る。

『播州皿屋敷』の「手許もゆらに」
もゆらに 副詞。搖々。
ゆらゆらにゆらめかして。
古語。古事記「そのみ頭の
珠の玉のなもゆらにさりゆ
らかして」「こぼの泉」

浄瑠璃を廣く大きく語る工夫

又『播州皿屋敷』に「手許もゆらに汲揚げる」と云ふ所が有ります。之れは「手許もゆらに汲揚げる」と語らねばなりません。もゆらと云ふは古語でゆらゆらと云ふ意味——夫れを「も」の一字を上につけ、「手許もゆらに」と語つては、何の意味だか解らなくなる——然るに今日多くの人は「手許もゆらに」と語つて居る。大方「ゆら」と云へば「ゆつくり」と云ふ意味とでも思つて居るのでありませう……

先日越路さんの話しにもありましたが、浄瑠璃を廣く大きく語る工夫……例へば、『中將姫』なれば、(チン〜) 三味「ハ、サマ……」では可けません。チンチンと鳴ると直に「ハ、……」と聲を出すからわるい——チン〜と鳴つてから「ハ、サマ」と云ふてこそ面白味があるのでして、夫れもチン〜の音から出さず外音から出す……何んでも浄瑠璃はテン・三味と鳴つたらトンと云ふ聲を出す——ナントーと云ふ高ひ所から此方へ戻つて來ぬことにはいけないので——三絃に附いたらいけません。三絃に附くと自然文句も判らなくなり、聽て居る人も聞き苦しい。彼の『一の谷』の冒頭でも、三絃に附いて、(シャン)「相模はアア障オガ子イイイ」と斯う語るなれば三絃は不用ぬ——三絃に附いて云ふて

語り方に語る

語り方の工夫

居るのですから三絃は不用——(ジャン)「サガミハー」(テンツン、チャットン)……と強味を附けて置いて「障子押開き」と語れば、文句も解れば、三絃も引立のです。淨瑠璃と言ふものは語つては不可^かず、又語らねばならぬものとしてありますが、結局語り了せるものではありません。如何^か様なにきばつても、紙の五枚—十枚と語り了せるものではありません。故に語らずに語ると云ふ事を研究しなければならぬので、即ち夫れが所謂「術」であります。

語り具合に就ては私なども常々研究工夫しては居りますのですが、例へば「太功記」尼ヶ崎の「ヤアこは母人かしなしたり、残念至極と計にて……」——此の「残念至極」も「母人かしなしたり」も同じ具合——同じ呼吸で語つてのけるが普通でありますが、「こは母人か」は驚きの意味——「しなしたり」は失望と悔恨——「残念至極」で充分切齒して残念がる情を表はさなければなりませんので……

『加賀見山』の七ツ目でも、お初の「お宿へ参つて歸ります中、主人の身の上頼みます、ドリッヤ一走り……」——之れも東風の、昨今流行して居ります語り口であります。「主人の身の上」も「頼みます」も、如何にも艶やしく語つて居るのですが、後段の一句「頼みます」は、どこ迄も心の中にて神々へ祈念する心持ちでなければならぬのです。

總じて西風は、前の「残念至極」でも「頼みます」でも、心の中で、真から其の

残念さ——神み頼みの情愛を表はすと云ふことを眼目とし、語り風として居るのでありますが、東風は、かう云ふ所までも安すく艶々しく語ります。「語らずして語れ」と云ふのは、畢竟此處等の呼吸一つであります……

淨瑠璃を語る呼吸と申しましても、例へば『菅原』四段目の「キツト見るより暫くは打守り居たりしが」——此邊は腹充分に語らなければ不可ません所で……「打守り居たりしが」迄は充分腹いっぱい語り、「テサテくそなたは……」は、腹で無く心から云ふ様にして載きたい——「勝手にせよと首受取り」は三味線に附かぬ様に——私が語りますと「勝手にせよと首受取り（テン）玄蕃」と一口早に語ります。さ様で無く、「ウケートリー」と引きますと、前申した「相模は障子」と同様になりますやうな譯で……

老爺を語るには唇を使ふ——舌や齒を使ては老爺の言葉には聞けません。此點などは美聲の太夫は、さ程にも苦心も致しませんやうですが、私共の様な悪聲家は、如何したら宜いかと種々研究も致します次第で……例へば『伊賀越』の「モシ旦那」——唇を使はずには老爺には聞けません。よく腹から聲を出せと教へる師匠が有りますが、聲は腹からは出ません、矢張り咽喉から出ます。さればこそ、いかに稽古をして居りましても、咽喉を傷めてからで無いと、美ひ聲の出るものには有りません。

姫を語るときは言葉の尾を上げますが、若い下町風の娘を語るときは言葉

唇を使ふ老爺の言

語尾を上げる姫言葉——下町風の姫言葉

姫言葉には齒を使ふ

笑ふ時は奥齒に舌を

の尾を下げます。此の様な呼吸はいろいろありまして、師匠によつては、秘密秘
密として教へませんが、決して秘す可き事ではありません。斯道の發展の爲め
には、素人方にも、廣く知らせたいと思ひます。身振素振ばかり女子の様子をし
ても不可ません。見せるのでは無い聞かせるのですから、聞いて居て眞に女が
居るのだなと感動させるやうでなければいけません。

姫言葉は齒を用ひて語尾を上げます、「アノもづ屋の羨音は」と尾を上げる。
「松風に似しとやら」と一寸と尾を上げますと姫言葉になります。老爺は唇
を用ひますが、若い女子には唇は禁物です。

攝津大様は實に美ひ聲を出されますが、あれは巧妙に齒を使はれますからで：
…之れを間違つて真似てる人もあります。大様が語られますに「我れ民間に
そだち」と華美な若者の聲で語り「人に面を見知られぬを幸ひに」……かやう
に唇を使はず語れば、必ず若者になる。是等は秘傳のものでして、最も注意せねば
ならぬ點であります……

笑ふときには奥齒の二枚目あたりに舌を曲げて其の先を附ける。而して、「ア
ハ、ハ、ハ、ハ、ハ」と笑いますと何時迄も笑はれます。左なり右なり、上なり
下なり、勝手の宜い方の齒に付けるのですが、私は上齒に付けて笑ひます。之れ
も聲が悪いからかやうな事も研究するのですが、聲の美ひ人が研究したら尙一
段と善くなるのでありませうに……美聲の人は頼んでも研究はして呉れませ

ん、其様な苦心をせずとも困りませんからでせう……

よく自分は聲が悪ひから淨瑠璃は語れぬと云はるゝ人が有りますが、聲の無い人なら聲の發せる方法が幾らもあります。私の門人に「英はなぶさ」と申す者があります、此れは親からして淨瑠璃が非常に好きで——ところが此「英」が又いたつて悪聲で、兎ても成就の見込が無いと云はれた位でしたが、私は辛抱さへすればと請負ひました。果せるかな熱心に研究の結果、今日では聲の使い具合も大分上手に成つて來ましたやうな譯で……悪聲だと申しても、必ず出來ぬと云ふ限りは有りません。

攝津大様の聲の使い方

鼻で息

攝津大様さんは裏聲と表聲とを巧みに繼ぎ合せて語られた——其の繼目が分らぬ様に巧妙に語つて居られましたので……例へば「主を殺したア天罰の報いは……」——此の文句を大様さんが語られるのに「主をコロシイターア……」幾度にも斷つたり繼いたりして語られるのですが、聽客には夫れが解りません。彼の太夫さんの聲は長いなど云はれますやうな譯で——之れは口で語つて居つて鼻で息をする——此の口で語つて鼻で息をする事が自在に出来る様になればマ——一人前ですが、吸ひ入れる息と出す息と兩方ですから、なかなか容易には出來ません。淨瑠璃を語るには其の運轉が肝腎です。

淨瑠璃を語るには詞のだれ無いやうに變化させて行くことが肝要で御座います。例へば「菅原」四段目の「それがしを庄屋の方へ呼付、時平が家來春藤を養、今

詞のだれぬやう——次の詞との聯絡

一人は菅相丞の御恩をきながら、時平にしたがふ松王丸、こいつ、病寢ながら見分の役と見ね、數百人にて追取り巻、汝が方に菅丞相の一子菅秀才、我子としてかくまふ由、訴人有て明白、急ぎ首打て出すや否」とある詞——「時平が家來春藤玄蕃」迄は普通の詞で語り、「今一人は」からは語氣を強める。「玉簾の中の御誕生と薦壘の中で育つたとは、イヤモー似ても似付ず、所詮御運の末成か、いたはしや淺間しや」とある所でも「イヤモー」からは愁うれいになる。三味線が入るからとて、三味線と共に語つては不可ません。愁の所は何所迄も愁で語ると云ふ事に必掛ねばなりませんので、中途から變はつたら淨瑠璃が水臭みくさくなります。三味線が入つても矢張悲しく、三味を「テーント弾くとすぐ歌の様になつては不可いけないのです。即ち『先代萩』の政岡——「よう死んでたもつた、ヲ、出かしやつたくノ……」と泣く、其の後に「そなたの命は出羽奥州」とある。「出かしやつたくくノ……」を三味線で、ツロツト泣くのはよいが、後の「そなたの命は出羽奥州」を普通の詞で語つては、人形が二人居る様に聞えて不可いけないのです……

松王の「アノ逃隠れもいたさずに」此所では松王は泣いたら不可いけません、少しも泣けぬ所——源藏が泣くのです。總じて泣く者は泣いたら不可いけません、——例へば子供が屋外ととから泣て歸て來る、親爺が夫れを見て「ドーシタ」「何々さんが坊の弄具やぶぎを持つてつてしまつた」と泣かすしてシクく」と云ふたら、それ丈親が感じますが、大聲張上げ泣きく」と云ふたら、感じが薄らぎます。——申付ては

おこしたれ共、定めて最期の節、未練な死を致したのでござらふノ」「イヤ若君菅秀才の御身がはりといひ聞したれば、いさぎよふ首さしのべ」「エエ……アノ逃隠れもいたさずにナ」「につこり笑ふて」「ナニにつこりト笑ひました」と云ふ様に……

調子がイヌ

一杯に語れ

よく調子がイヌと云ふ事を申しますが、無論音聲は三絃の調子に合體せねば不可ません。例へて申しますれば、或る容器いれものの中に物を充満して蓋ふたをすれば、如何に振ても中の物は動搖致しませんが、若し之れを八分目に入れたとなれば動搖致します。夫れと丁度同じ理窟で、淨瑠璃を語るときも、自己の聲一ばいに語りますと、調子は動搖致しません、調子のイヌと云ふ事もないのですが、一ばいに出して居ないと動搖します、調子がイニます。夫れ故に調子を上げやうとするときは、其の以前に下げて置かねば不可ませんのでありまして、下げて置かねば上りません。聲一ばいに「今頃は半七サン」と語りましては、次の調子が上手に出ませんのです。此邊の呼吸は、一度や二度御話し申しましたとて、了解りようかいの出来るものでは有りませんが、總じて詞でも地合でも、後を大切に語ると云ふ注意が肝腎かんじんで、此れは黒人素人に限らず、大事のことでありまして、前に申しました政聞にしても「出かしやつた〜ツ〜……」と泣き切ッては不可ませんので、後の句の「そなたの命は出羽奥州」と涙聲で云はねばならぬ所をも考へて、大切に語らねば前後の聯絡を失する様になるのであります。

一枚くを叮嚀に語る

忌言葉—侍なまり—奴言葉

サワラワカワの神傳

女や若者にサワ老爺にラワ

總じて黒人素人に限らず、本を開けましたら、其處の一枚を丁寧に語ると云ふ事の覺悟が肝要でありまして、其の開いた一枚くを、熱心—丁寧に語りさへすれば、一段全部が上手に—完全に語られる譯で……次の次迄も頭に考へて居る様では、其の開いた紙の所が疎になり、完全に語れるものでは有りません。丁度今から歳の暮の事を考へて居る様なもので……

淨瑠璃にはイ・ミ・忌言葉と云ふものがあります。侍方言では「なかりしが」を「なかつしが」と語ります、何々はあるを何々など語る所があります。又奴言葉と云ひまして、「筆助でござります」と云ふ所を「筆助めでござります」と申します。

之れ等はアイウエオーナニヌネノの使い分けでありましてアをナに、オをノに變化させるのです。夫れに付て可笑な話が御座りますが、例の『兜軍記』の「こりややい阿古屋」を「こりややいなこや」と語つた人が有るさうですが、「あこや」は矢張り「あこや」で……

序に唇と舌及齒の使い分をお話し致しますが、黒人では之れをサワラワカワと申して居ります。サワは齒を使ふて語る。ラワは唇を使ふ。カワは舌を使ふて語るのです。サワと言ふにはどうしても舌や唇では言はれません、齒を少し閉ぢてサワと申しますと優しい聲が出ます、故に若い者や女などを語るには此のサワを使います。老爺を語るには唇を使います、舌や齒を使ひましては老爺

の聲は出せません、「ラフ」と唇で言いますと丁度齒の無い老人の聲に出来ま
す、故に老爺を語るにはラフを使います。

侍言葉にはカフを使います、之れは唇や齒を使ふても出ません、舌の先きを上頤

へ附る心持ちで「カフ」と言ふと侍らしき聲になります。

サフ……齒……女、若き人

ラフ……唇……老爺

カフ……舌……侍

とかう云ふ次第で、平素から心懸けて練習せねばなりません。亡くなられた市
川團十郎さんは實に藝界の名人と思ひました。私は團州サンの『後藤』を見物
して、今迄自分が語つて居つたのは間違であつたと感じた事が有ります。團州
さんの又兵衛は、初から終り迄酔ふて居りますが、私共が語ります後藤は、空鐵砲
一發で大抵酔が覺めて仕舞ひます。併し鐵砲玉一發の音位で酔が覺める又兵
衛では、一方の勇者とは云はれません。大抵の役者が致しましても泉三郎の空
鐵砲一發で「今撃ちし鐵砲は……」と、酔が覺めたところで無く、大きな眼を刺
出して居りますが、後藤又兵衛ともあらう豪傑が、そんなことがある筈はありま
せん。

お尋ですから私の記憶して居るだけのお話しを致しますが、今の辨天座の所に
竹田座が有りました。其後大江橋の北詰に出来、夫れが潰れ、日本橋に澤の席が

出来、又夫れが潰れて、初めて博勢町の稻荷神社の所に彦六座が西向に建てられました。此彦六座は灘の酒商で、通稱灘屋と稱する灘屋藤八と云ふ人が座元となつて、建設したものです。其後彦六座が無くなり、堀江の市の側に堀江座が出来ました。併し今の堀江座とは全く別物です。其堀江座が無くなり、今の佐野屋橋の南詰に、大隅大夫を座主として近松座が建てられました。一方文樂座は最初御池橋附近に有りましたが、私は存じませんが、私共が知りましたときはモ一稻荷社内に移轉して居りました。夫れは彦六座の出来る以前です。其の文樂座が松島へ移轉して、今の八千代座が出来たので、今の八千代座は以前は文樂座と稱しました。其後彦六座が稻荷の舊の文樂座の隣に建てられたのです。文樂座が今の八千代座より移轉して御靈社内に建設せられたのは明治十八年頃と記憶致して居ります。夫れから曾根崎の鯉橋にも座がありました。又確に記憶は致しませんが、天満の天神の社内にも二箇所有りました。云々

越路、呂木夫兩氏の談るところ右の如し、孰れも斯道の好者に取りて、得難き教訓の數々を含んで居るのである。仔細に味ひ熟慮勘考するところあらば、得る所蓋し尠からざるべし。

著者云。元來呂木夫氏は、斯道に秘密なしと云ふ主義にして、從來何んでも無い事柄までも、秘傳さか口傳さか稱して勿體を附けひた隠しに隠し來れる秘密主義を排し自分の知れる限りは洩く斯道好者に公開して其の研究の資料ともなし及ばずながらも、斯道恢宏の一端とも爲し度い云ふ主張である。されば其の談は淡々として竭きず著者よりして話題さへ提供すれば悦んで之に應ずべし

この事なりしも、一旦右にて打切り、他日に譲ることせり。藤原太夫氏も亦著者の意を諒せられ、質問あらば何時にても教示を辭せずこの事なりしにより、他日本書再刻の期もあらば尙ほ幾多の有る益なる談話を乞ひ、斯道同好者に紹介するの機会もあるべしと思ふ。茲に謹んで兩師が著者に與へられたる厚意に對し謝意を表す。

尙ほ左に友人河邊香澄氏の稽古覺書の一節を載録して、竹本津太夫氏の意見の一端を紹介することとする。

河邊香澄氏は、斯道に於ける著者の同人である。左の稽古覺書は、氏が上の礪津太夫氏に就いて、『繪本太功記十』の稽古を試みたる際師の口授の要領を書き留め置ける備忘録の一節なるが、参考として乞ふて掲載することとした。

「繪本太功記十」に就いての津太夫氏の口授の要領

往時「太十」は聲量充分なる人の語物とせられ、「フシ」も小廻りせず、總して大風の吹くやうに、唯バ・ツと大まかに語り來りたるものなりしと雖も、近年次第に細き節を付け、文樂一派では、攝津大塚が美聲を利用して振廻しを多くしたるなど、往時とは大に趣を異にする事となり、自然聲量豊富ならざる人の口にも合ふやうになつた。

光秀の出其他、聲細き人でも工夫によりて大きくきかすことを得べし、あながち大きい計りがよろしき譯でもなし。箇所により様々の節付あり、何れがよろしとは言ひ難し。要するに語り手の聲量を考へ、適當のフシ廻しを教へることが、師匠たるものゝ注意すべき點である。

美しい質の聲を無理に太くせんとしてツ・ブ・ズは大の禁物也。素人筋に於て殊に然り。黒人筋にては、初め美聲なる者も次第に太くなり、遂にツ・ブ・レ、數年間は上が支れて二以下の音のみに變ず。此間最も苦心を要する時代にして、さまざま

『太功記』十段目に就
ての竹本津太夫の口
授大意

まに工夫し、高き調子にも耐ね得るやうになり、所謂サビ付いて情趣多きものとなるのであるが、攝津大椽の如く始終美聲を維持し得たる人は稀である。

黒人筋にてはタンといふて、咽喉のうちにゼロ／＼のあるのが滋味を添ゆる第一の必要とし、大物語には無くては叶ぬものとせられて居るのであるが、此等は天性にして、ワザと爲し得るものにあらず。要するに素人筋にては、持前の聲を充分に使ひ、キタナイ聲に變せしめぬ様必掛けるがよしとする。

詞 詞にて最も注意を要するのは「ナマリ」である。又地合とのウツリ方である。特に二人以上のセリ合の場合に於ては、詞又は地合の取やりを判然區別する事肝要である。

身構 男女格式夫々身構に注意すべし。大體に於て腰部をシツカリ据ゑ、腹部に力を入れ、肩以上はシナヤカにする。(のの字をかくなどの事)花耻しき姫などは、肩に力を入れてゐては、逆も其情を寫し難し。元來多人數の言語舉動を一人の口より夫々區別することなれば、身振りをせねば到底ダメ也。さりとて餘りに身振を多くし、妙な顔付などすることは、此亦よろしからず。

ウミ字の事 詞又は節廻しには、ウミ字の使ひ方如何にて大に切拙を生ず。例へば「コンナ殿御を持ちながら」コンナアトノゴオオモチイナアガアの如し。ウミ字をつかはす眞直に、「コンナトノゴオ」といふては、誠に味合なし。「現はれ出でたる武智光秀」ミツツツツの如くすれば大きくきこゆ。

詞の早き箇所 腹で急ぎ口にて急ぐ可らず。ア、ワ、テ、ル、故、マ、ク、レ、ル、なり。之れは極めて六つかしきことなれど、單り詞のみならず、地合にてもまた此心掛けが肝要也。

枕 文章の意義を能く辨へること最も肝要也。さればとて、餘りうれしいを利かせる爲陰氣になりてはわるし。「花一つ」の花陰なるうちにハンナリと語るがよし。「しほるゝ計り」うれしいを利かせ「計り」にて走る。「やうく」にてまたのばす。かくして緩急を計るべし。枕の全文にて一場の光景を描出する事、ひとり「太十」のみにはあらず、決して輕々にすべからず。

「母様にも」よりの詞 詞は大抵の場合、地合より一本位調子を高む。此十次郎の詞は前髪物にてむづかしきものとせらる。幾分世話がふりたるがよろし。調子を高めたる上、語氣凜として、勝頼となる。述懐なれど、其場に母様も祖母様も居る心持にて語るべし。「母様にも」にて切り、別に「祖母様にも」と兩人に對し、別々に嘶しかける氣持也。「思ひ置く事」にて十分聲を替ね、「更になし」と唄ふ氣味也。

「十八年が其間」は太く語るがよし、十段目の特色也。「思し召し」を「思し」だけ語る人もあり、其場合は「し」をゆる。「召し」と本文通りとせば、「思し」をツメ「召し」にてノ、バ、シ、ユ、ル、べし。「先立つ不幸はゆるしてたべ」「先立つ不幸は」はうれいにて、「ゆるしてたべ」をあまり引かず。

「残らず聞いておりました」「残らず聞いて」を早め、「おりました」をのばすべし。總じて年若き女の詞は早きが却て情あるもの也。此種の緩急はいづれの場合にも同様にして、長短緩急宜きを得て始めて面白くさうなる也。

「妻が知らないで何とせう」「何と」にてモチ或はユリ、うれいを利かせ、「せう」をかかわいらしく又いぢらしく語るべし。「二世も三世も」「二世も」は、息の永き人は充分に振廻はしてよし。併し、「三世も」にてシメねば、女太夫めきてきふにくし。

「祝言さへも」「祝言」にてタクリ込み、前の光義様に應ず。此等は足取を早むる場合の一例也。「濟まぬうち」よりうたふ氣味。「討死」にて氣聲を替へる。「わしやなんぼうでも」「わしや」少々唄ふ氣味也。

「白木に土器白髪のはど」なるべくスラ／＼と語るべし。はどに力を入れる。「蝶花形」「蝶」にてハル。「親と小手脚當」より氣をかへて力を入れる。「鍬形の」は絲にはなれて、「邊り」はアアと幾分スゴミ。「サア／＼早ふ」前の「一所の盃」までの祖母の詞、あまり抑揚變化の要なし。サア／＼にて氣を替へる也。

「目出たい／＼嫁御寮」最初の「目出たい」を太きく、次はうれいを利かせ、又幾分慰めの氣分。「こんな殿御を持たながら」斯様の箇所は體でのの字を描く心持にて、身構より注意せざれば、情を寫出すこと出來ざる也。老男は惣じて肩を後、にひき、老女はアゴを出すなど、矢張りこの呼吸也。總じて身振りは多きに過ぐ

れば却て見憎きものなれど、或程度までは身振りもせねば、詞や地合の情を現はすこと能はず。シヤンと構へ、肩を張り、頭を真直にして、「こんな殿御を」といひうるや、試めして見れば直に了解すべし。「殿御を」にてうれひを利かせ、「持ながら」をハンナリと、「是が別れの」にて中ウとなり、落著かせ、「盃かど」にて更に張る。「さかー」までうれいを持ち聲を大きくし、「づき」を細くし少しモツて、「かど」のかにてまた高くなる。「笑顔」笑いのいにて泣を利かす也。「察しやつたる」より「兼たる計なり」まで、スラ／＼とよごみなく語るべし。「攻太鼓」太のダにてハル。「顔見合せ」は全く絲をすてゝ語るべし。

「むざ／＼」の累詞かさねことば後の方に多く力を罩こめる。「祝言によそへて」よりの地色、少々唄ふ氣味が面白し。「思ひあまつた」にてうれひをふくむ。「ばどが心の」にてまた唄ふ氣味也。

「推量しやど計りにて」の推量は詞にて、「始て」にてまたうたふ氣味也。「聞初菊も母親も」は絲にはなれて語るべし。「襖押明け何氣なう」秀吉の假裝せるもの、ヨシ旅僧なればとて、重々しき所なくては叶はず、所化坊主の様に軽々しく語りては詮なし。

「泣顔かくし」のくユツクリしにてうれしい。「オ、」にて全く氣を替へ、何氣なきさま。「マア、お先へ御出家から」にて、ばどの思惑ありさうに、「アいか様」にて、旅僧もまた思惑ありさうに、一寸考へ、「湯の辭義は本とやら」とや、ふ重く、「左

様ならば」にて、稍軽く語る事、心得あるべきである。

「月もる片庇」の「片庇」は、あまり堅からぬやう、やうどウラクに語り放し、「夕顔棚の」は、凄味を帯ぶるやう、「こなたより」なにてツヨクハリたよりはツメ、
「顯はれ出たる」は、あらわれど一字／＼力を入れ、ハツキリと語り、「武智光秀」
は、たげち……にて充分に息を出し、また一パイに息を吸ひ、「光秀」と強く大きく出る也。光にてヒキビでのびよりで、にうつること極めて早くし、をあまりヒカズ口を結び、息をツメる。ヒデーと延ばせば、だれて聞き苦し。

世間一般に、光秀の大きいとか小さいとか云ふことを云へど、あながち斯様な所で、聲量の、大を誇るに及ばざる也。寧ろ、武智の三字、二の音を、まかせて、すごく、する工夫、肝要と知るべし。細く低き聲にても、發音正しく稍々ゆり加減に一ツパイに語れば、それにて可なり。

「ひつそぎやり」「やり」のりの産字を、い、い、い、と、絲につれてキザミ行くもあれど、キザマズしてウミ字を働かす方却て面白し。

中にはや、ア、ア、ア、ア、とのウミ字をユルものもあれど、之れはわるし。古人の上手には此の事なし。「手練の鎗先」は、手練をシユレンとツメるがよし。

「ヤア、ヤ、ハ、ハ、」之れは素人筋は申すまでもなく、黒人筋にてもマクレ勝ちとなる、極めて六かしき所なるが、初めのヤアを下に押へ付け、後のヤヤヤヤヤをホリ出す心持にてアゴを働かすべし。「残念至極」より「仰天」まで、絲にかまは

す「唯忙然」にて始めて絲につく。

「忙」にて切り「然たる」にて切り、「計なり」と語るは、唯大きくせんが爲めの節付なれば、息の長き人なれば「唯忙然たる」を一息にて語るも差支なし。されど這は恐らくは爲し難かるべし。

「計なり」バカンナアリは當節にて、大阪にては流行せず。バカア、アリ、ナアリと語るもの多し。何れが非といふにはあらずと雖も、前者は餘り誇大に過ぐるとの説より、文樂一派にては後者を取るこゝとなつたのである。

「聲聞付てかけ出る操」「初菊諸共走り出」此、兩人の舉動を能く、考ふべし。一率に語りては更らに妙味なし。此種の場合を常によく注意し、各人の舉動情趣を語り分ける工夫が肝要である。「ノウウ母様か」は操の詞なれば、聲聞付けてかけ出る操に屬し、其情趣を翫味すべし。

「歎くまい」より呼く息に注意。「百萬石に」「に」にて充分息をツメて更に出すべし。「猪突鎗」詞にて語る。シ。にてツツカケるはわるし。「此通り」はツヨク。「ゑぐり」もツヨク。「此通り」より「氣丈の手負」までは、聲を奇麗に使ふては面白くなし、寧ろキタナキがよし。「妻は」にて、高き奇麗な聲に移るにより、却て引き立ちて面白くきこゆる也。「むせ返り」は充分三絃にノツて可也。聲工合にてはウラを使ふも却て面白し。

「コレ見たまへ」は詞也。兎角フシになり易し、注意すべし。「軍の」にてやゝ唄

先人の遺した教訓

宇治加賀様の教訓

ふ氣味。「首途うれいを利かせ、に力を入れスカシ、絲につれて「くれなくも」と語り、「其時に」は詞のつもり、「思ひ留つて」よりまたうたふ氣味、「有まいに」又詞のつもりと絶えず調子を變へて語るべきである。云々

以て淨瑠璃を語ると云ふ事の如何に深甚の用意を要し、又如何に研究工夫を要すべきものなるかの一端を知るべきである。

淨瑠璃を語るに付いての心得として、先人の遺した教訓はさまざまあるが、左に其の一、二を摘録すべし。此れ等教訓たる必ずしも場合のみに限りたるには、あらずと雖も、爰に一括して掲載することとした。

宇治加賀様教訓摘要

淨瑠璃は謠狂言の音聲を父とし、草紙の文勢を母とし、曲音假名開口清濁を宗とし、そいらす緩まず、節拍子にからまれず、唯位はかせ、程うつりもじり、はこび、持合引廻し、色ウキ、あたり、躰用長短等の故實なふまへ、詞地、色、フシ杯の品をみがき、段々奥儀を究むべきなり。

何の差別をも辨へず己れが聲拍子にまかせ、其程々の位を張りに語ららずは、偏に本心を忘るゝ狂人ともいふべし。

習はずして草紙のふし付を見あるひは又聞語りに致す事、是實淨瑠璃と云つべし。

諸藝共にか程利口發明の人、口傳を請ずして道に叶ひ都すて至る事有るべきや、藝の妙々奥底は限り知れぬ者なり。

必しも響るに乘らず、心高ふるべからず、是にて好よしと云かぎりは無き物ぞや、今どきは藝二歩なれば心十分なり、慎むべき事ぞかし。

引く間敷處をも引、まわすまじき處を廻し、一息いに扇を打拍子にいわい、文字のいきゆるも、假名

のにちあふも位はかせなご亂れたるは是餘々の我流にて宜しからず。
文句あきらかに宛角假名の消ぬゆる地色詞に拍子無きものなれば扇子打事なけれ地節にさへし
げきはかしましくいやし。

此の道の本意をうしなひ今は唯我がちに心いき計りに心を勞し本式の音曲取失ふは不覺成事ぞ
かし。

藝に器用の無器用と無器用の器用有り器用の無器用は習ひ覺は早く忘るゝ事又早し是不器用に
おさるべし又不器用の器用は習ふ事おそれ共忘るゝ事無かつたし是誠の器用なり。
人毎にすむ拍子とたゆむ拍子有りすむ拍子は差當り好きやうなれどゆふ無きゆふ悪したゆ
む拍子を磨きぬれば本間の拍子に成るなり是を勇の有藝と云勇力の人はずくまずたゆまず驚か
ず武藝は勿論音曲の道同断とや。

藝の下手に限り人の譏るを立腹するはこれ誤りの第一なり口惜くばなご修行せざるや譏る人は
我身の師と願ひ譏らるゝ處に心を付常に能々工夫して合點行かすば幾度くも尋聞合すべし問
は一人への耻問はぬは萬人への耻と知るべし。

淨瑠璃能々語りおふせても數段の中にて唯一字の誤りは語りたるにあらず予ばいの漆に蟹の足
一ツ入れしとやらん能心得べし。

節付草をたよりに語るは大きなるひが事也。夫にて成事ならば諸の本程委細に草を打たるはな
けれ共習ひ無くては謗とば申がたし。

位はかせば上御一人より下萬民の一切の生類風雨水音迄に有事なり程と云ふはそゝらすたゆま
ず是を本間の拍子と云ふ。うつりま云ふは拍子より程にうつり程より拍子にうつり地より移り
地より外の處に移るを云ふ也。もちりなりと云ふは拍子を程にもちり程を拍子にもちりたゆま

竹本筑後様の「鸚鵡ケ柚」の序文

ずいらいずいて、みぢんも、油断無きなほこびさ知るべし。云々

竹本筑後様「鸚鵡ケ柚」の序

淨瑠璃の文句の中ならば、謠も歌もうたふさはおもふべからず、語るさいふべしとこそをなしへ侍れ、いはんや時々のはやりうた、木やり音頭の大くひ、面影はさもありなん、淨瑠璃の正體に眼をはずすべからず、世のはやり歌さて、半年はやるはまれ成事にて、上方のはやり事違國にしろす、いなかのはやり物都路にしろす、上の京のこも下の京に聞はず、天満の噂波にしろぬ事のみおほし、異國の大きなる御殿ひまつの内にはさへ、一日の間氣候ひさしからずさいへり、はやり事さのみ好まずともあらまほし。世間のはやり事聞出し、淨瑠璃に入んより、手前の淨瑠璃世間にはやるやうに種古有たきものなり。世繼曾我の道行に、馬かたいやよさをどり歌入し事相應せず、一番の蓮今聞に汗をながすも、三十年前を後悔ある作者の心藝道の熱心さも有べきなり。實にも、文言章段のしなによりて、いかなる名人もかたり、得がたき事有べし、堅からんさすれば、太平記の、ごさく、鬨ならんさすれば、源氏物語の、ごさく、端手ならんさすれば、當世好色、雙帯の、かる、口に、似て、各淨瑠璃に、あらず。詩人の平仄を分ち韻字を押すも、律呂にかけてうたはん爲さかや。此の國のうたひ物我胸貫川伊せの海などのをかしげなる呂律にたがはぬこそ有がたけれ。そのごさく文句にもはこびはかせをよき等程拍子有事なれば、それに心を付て文字うつり音聲開合甲乙の位を練磨すべき事なり。申も障り有共、遠達院入道内府公は、御日侍の夜尺八鼓三味線などのあそびの中に、いで我も一藝せんさて、簞木しなさだめの巻を素讀あそばされしに、あやしの下部まで聞人感に堪て、外の歌三味線もけおさされしさかや。源氏のよみ曲堂上の御傳授には、清濁文字うつりはもちろん、御聲になまりなかけさせ、かなふ所ふしを付させ給ふ所も有さかや、傳へうけたまはる。是らなこそ音曲の龜鑑とも申べかめれ。それ迄はおそれ有共一藝の本意をしらんさおぼげむべし。ましてつたなき辻藝の門

音楽を大事有げに語りまぜて、淨瑠璃本ぶしの立所を取うしなふ下劣の甚しき本心を外にうばくる、いかなる狂人ぞやと宇治加賀様の批判尤なるべし。若聞人外のまぜ事ほむるまきは扱は我淨瑠璃は是におさりたるさかへり見て、いよくたしなむべき事なり。名醫の調合ある益氣湯も野屋醫者の合する敗毒散も、薬味はかはられども大きに人をそこない、又大きに人をたすく淨瑠璃にかはりたるふし、古今なき事なり、唯趣向年代せりふ、風景時宜にそむかず無理ならぬやうに、地色ふし詞造心をかへて情をふかく語りなす事、かの病根病因によりて配劑加減有がごとし。外の事まじゆるは一味二味の加薬のごとく、本方のための加薬にて、加薬のための本方にあらすまじるべし、かくあればとて、本式にわきめもふらずつぐりつけたる如く、成は佛藝さてきらふ事なり。其の内の意味は聲さふしこの和にありて、言語道斷、天然の所なるべし。云々

『淨瑠璃秘曲抄』の一節

聲を似せるをきらふ、信仰なれば心を似すべし、惣じて似せるに能事は似ぬものなり。

仰山にやかましきをきらふ、唯やすらかに上品に語るべし。

味い事をいはんと聲をすかした正根をきらふ、さらしく語るべし。

長くしてぶらつき地合ならぶを嫌ふ、長短大事にすべし。

調子持前より下う樂せんとするをきらふ、しんどすべし、行儀あしくなるなり。

こゑをつくりいや味ありて下品なるをきらふ。

淨瑠璃を好てけいこなきらふをいましむる。

拍子の次第は三つ、五つ、七つと心得べし、たさへば瀧の水のおつるごまくなり、三つでも一尺、五つでも一尺、七つでも一尺、右拍子なくてはあまたれ拍子にて退窟するものなり、そこを程よく引たて、氣のつきぬやうに語るを名人と云ふなり、講太夫節と云ふものはもと表、嘉太夫裏播磨と合したるも

『竹豊故事』の一節

のなりよく工夫すべし。

『竹豊故事』 名人上手下手 三品評判之事

故陸奥茂太夫多川源太夫・豊竹幾世太夫竹本播磨・同頼母大和太夫和泉太夫河内太夫以下其の時代に名人と呼ばれし太夫衆も、筑後・越前・兩元祖に及ぶ音聲一人も有べしと思はれず。兩祖師は天性自然の達人成故に、節句・甲乙・偏頗の輩の師範には成難かるべきか。其の故如何なれば、斯る衆中の師傳を受得ても、音聲不都合の輩は其の流を直寫しに語る人は稀成べし。喩へば鹿相成木地の道具を上手成塗師の塗上たるも、又島桐・さつま杉杯の木工目能、木地道具との違ひ有べしとく成べし。兩元祖は木地道具のごとし。其の外の上手分と呼ばるる衆は皆下手を塗上げて能仕立たる上手成べし。夫故に今の世に譽れ有衆中には皆下を塗直して能藝にする筋を懇鍛しての上、素人の弟子中に教へらるる故に、此の理を以て考れば、今様の太夫衆を師匠と頼み稽古せられれば、利方能からんと存ぜらる。故竹本播磨・當時の豊竹・筑前・豊竹・駒太夫・竹本・錦太夫等は、音聲兼備の達人と云には非ざれ共、切磋琢磨の功を積て名人の譽れを取られしと存る。兎角上手分と呼るる太夫衆は、何分にも生質の器量薄くては名は揚られまじ。又都べての藝者に名人と上手と、下手の三品有。先づ名人と云ば其の一道に生れ付かては、達人名人杯といふ場には行届き難かるべし。下手にても骨髓に徹して其の藝に執心深く、修行の功積りなば、上手と云迄には成べきなり。名人に成べき淨るりは、未だ功も無内より程拍子の間合能、開語譯能、聞は清潔なる音聲なる上、序破急の氣轉取り廻し能語らる人は、名人になるべき器量兼て見へ透物也。然れ共、其の名人と成べき仕出しの淨瑠璃なれ共、稽古修行に精の入ざるは、惡働に成上手分と云場迄も行届かず終る太夫衆も有し也。又硬付て當りを取らんと而已思ひ語る衆中には、大方下手分の爲業也。顔氏家訓に曰、上智は教へずして成、下愚は教ふと云共益なし、中庸の人は教へざれば知らずと有、此の語實に宜成かな。

所詮名人と云は藝の道堪能にして其の爲す業自然と至極の場に至り、感應見物の心魂に的するを云成べし。故竹本筑後椽同播磨椽隱居豊竹越前椽三味線故鶴澤友次郎人形當時の吉田文三郎等の類は神化不測の名達人と稱して誰か非言有らん哉。次に上手と云は夫々の業を能なすを云也。併し上手なれども名譽の少き人も前々に在りし。故陸奥茂太夫竹本頼母和泉太夫等也。又上手の至る所にて名譽在しは、故河内太夫當時の竹本大和椽同政太夫等成べし。又上手分の中にて大丈夫成聲柄は、見物の讀る掛聲も多く、是等の衆は時に合たる名物と云べし。故竹本大和太夫、當時の豊竹若太夫等を云べきか。何分上手と呼るゝ太夫衆は數無こそ。云々

同 名人の太夫達弟子中に教訓の事

井上播磨椽、清水の理兵衛に示されて曰、淨瑠璃の一體秋は隨分聲花はなに語るべし。是人の陰氣を引立んが爲也。春は引ひべて和やはらかに語るべし。人の氣浮立時なれば引ひべざれば人の情寄らず、時の氣に乗じて和らかならざれば、人の情に應こたへ難しと教訓せられし由。是に依て思ふに増補鐵鶴てつかくに北村季吟の曰、呂りよは凡て和やはか成音也。律りつは立て硬き音也。唐土の音聲は和らか、過て開分あひがたし。日本の言語は清濁分明鮮然せんぜんにして剛こく聞ゆる。唐土は呂の國也。日本は律の國也。是和漢呂律の不同、呂は陰律は陽也。和朝には、呂は春に用ひ律は秋に用ゆ。唐土は是に反すと云々。依之見る則すなは井上氏も此の理に達せられし名人と覺。

宇治加賀椽門弟に教訓せられて曰、淨瑠璃を稽古するに面白氣なく高き聲有、美敷けれ共生得低き聲有、大音にて下手なるは執行しんぎすれば上手に成べし。一體小音にて紋切もんぎのせぬ音聲は、何程心懸ても其の甲斐なかべし。又如何様成上手成共我藝に自慢の心が有て語られば淨するり疎縮そくて聲花はなならぬ者也と示されし。

竹本筑後椽へ陸奥茂太夫初心の初問て曰、女の詞は如何心得て語り可申や、筑後椽答へて曰、第一に

傾城の詞を能合點して語るべし。源々と語れば懦弱に聞えて下品也。唯挨拶なく蓬然と柔從成言葉能く考へらるべし。是さへ語り眠癡るれば外々の事共は皆語り易かるべし。其の故如何となれば語る處の者元來男成故俗としたる事は性質に持て居る故也。次に心得べきは高位成御方の詞をば能勸辨せらるべし。貴き御方の詞成さて位を取過て語れば、至才らしく成て聞ぐるし。此の段稽古に工夫せらるべしと教訓有しとや。

豊竹越前椽門弟和泉太夫河内太夫等に示されて曰、藝に精を入るさ云は、我役割の場を能工夫して稽古に飽迄精を出し、扱床へ上りては心を安らかに思ひて語るべし。稽古に精を入れてさへ置ぬれば易らかに語りても、少も間拔はせぬ者也。兼ての工夫に心を盡さず、床にて計精を入るれば力身立行詰りたる様に聞えて賤し。其の上操への移り、人形の働き迄が不都合に成さ教へられし由、傳へ聞たり。

加賀椽門人宇治甚太夫、伊太夫寄會談せしは、師匠の語らるゝ節所は見物衆極て讀ざるさ云事なし。我々は随分精を入大事に語りても、見物衆の懸聲なきは合點行すと嘯し合けるを、加賀椽聞て曰、皆の衆は語り出すと否や讀られんぞ定思ひ始終面白様に語らる故、要の場に至つて聲疹み聞ゆる故、讀度ても聲の懸られぬ様に成なり。某しは唯何もなく安らかに語り、節所要の場所に至りて精を入語る也。始終共見物衆の掛聲を取らんとのみ心得は肝心の場當るべからずと云々。斯る示しを傳へ聞れしにや。又自分の發明成や。故竹本播磨椽、當時の豊竹筑前椽等は此の教訓の理に合ひし語り方の様に聞ゆるなり。

岡本文彌の曰、荒事を語る時は上りの文句相應に強みを引張で語るべし。上邊計を語り並べても人形の働きと相應せず、心と形と二つに成故當り目なしと云れし由最成理也。併し事は一圖に計に了解すべからず。或太夫酒の酔の場を受取て語られしに、床へ上る時に臨んで、茶碗酒を二

三盃吞で語られしに、一段と見物の請能出來晴せしとや。斯様の人に若し手負の場杯を語らば、床へ上る時毎日肩先にて二三寸計切られて後に語らるや、一笑、何様の場成共唯一心の工夫に有べき也。

同 淨瑠璃語り萬心得の事

芝居を勤めたもふ太夫衆は、文句の清濁り筋付等にも心を付たまひて、鹿相の無様に心得たまへがし。物置納屋の連子は破れても人目に立ず、座敷の障子紙は少の破れにても見苦しく。元禄年中に岡本文彌の語られし上るりに、老女の懸幕せる段の文句に、しらがみすじに油付と云所を、岡本氏は白髪三筋に油付との閑語に語られし也。虎屋源太夫此の所を難じて曰此の文句作者の心には白髪筋に油付にて有べし、如何なれば三筋や五筋の髪の毛には油を付る事は成まじ。勿論三筋計の白髪は、目にも見ゆす事にも懸るまじ。併し文彌は天性の妙音にて何事も聲にて押せば是非に及ばず、一聲二節と云なれば、文盲にても時の響れを取し人と云々。故實を知り顔に自慢せられても、聲柄の甲斐なき人を喩へて云ば、智慧有人の貧乏成に同じ。不都合にても聲の能語り手は、有徳成人の阿房に同じ。賢くて金持たらんは猶以て好ましかるべし。然れば聲の能を頼みにして執行の薄き太夫衆は、名人と云には難かるべし。

藝者の身の上計にも限ざる事なれど、運の能と悪敷と有。先運悪敷人は至極の上手なれ共、時に合すして用ぬられぬ身の上も有、或は自分の器量を顧みず古實を守るが能と計心得、筑後筑前兩元祖の語られし通を直寫しにせんとのみ思ひ語らるは、了解違ひと云成べし。斯る人を喩へて云ば、學問に能達したる僧の談議の下手成と同意也。佛の本意計説て、方便説を雑へざれば、聽衆氣出次第に參詣も薄らぐ者也。而れば何を以て衆生に濟度利益を施さん哉、機に困て法を説と云なれば、此の段淨瑠璃に引當工夫有べし。併し芝居を見淨るりを聞は、爵氣を晴さんが爲の慰み事なれば、

兎角して成共、見物衆な悦ばさん名譽有し太夫達の眞似をし、又は歌舞伎役者の詞色ことばいろを似せ、或ひは放蕩はなはだにて當りを取らるゝは、本道の當りまは云難し。道外みちぐわいがましき語り方は、場の見物衆への當りには有べけれど、様敷に居らるゝ衆の耳には悦ばれまじ、何さやら此の近年に及びては兩祖の語り弘められし遺風は薄らぎし様さまに聞ゆる也。

以上よくく、玩味し、どかく「無器用の器用」となるも、「器用の不器用」とならぬやう、潜心思索修練し、徐々に斯道の妙諦に悟入すべきである。宇治加賀様の教訓に所云「曲音假名開口清濁を宗とし、そゝらす緩まず、節拍子にからまれず、程うつりもじりはこび持合もちあひ引廻し色ウキあたり體用長短の故實をふまへ、詞地色ラシ杯の品をみがき、段々奥儀を極むべし」「程とは、そゝらす、たゆまず、是を本間の拍子と云ふ。うつりとは拍子より程にうつり、程より拍子にうつり、地よりうつり、地より外の曲にうつるを云ふ。もぢりとは、拍子を程にもぢり、程を拍子にもぢり、たゆまずそゝらすして、みぢんも油断なきをば、こびと知るべし」の意味を、篤と研究會得すべし。

第四章 節

節の稱呼

『江戸節根元記』の一節
『世事百談』の一節

節の變化

極り節の實例

正本の節

章に就いて注意すべき廉々

情愛—文義に應じて節の形もさまざま也 節附
にも真楷(行草の三體)書き下し當時は語りや

變つて居る

地の様々

竹本四季太夫の『淨瑠璃道の技折』

丁寧親切な斯道の指南書

上と下 紛らはしき丸えんじの章

乙久とウシ

太夫癖の節 『音曲

兩節辨』の一節 『章句故實集』

産字の意義

其の例

産字を必要とする二の理由

三重に七ケの品品ヲクリナクリニ七ケの傳、地合地合に四地の區別

「三重」に七ケの品あり、「ヲクリ」に七ケの傳あり、「地合」に四地の區別がある。

「三重」七ケの品とは、「三重」「大三重」「猛三重まほひ」「愁三重」「中愁三重」「しころ三重」「吟

三重」と夫々區別もあり、心得もあるべきことを云つたもので、「ヲクリ」に七ケの傳

とは、「ヲクリ」之をれて八「小ヲクリ」「ギンヲクリ」「色ヲクリ」「ウヲクリ」「アタリヲク

リ」「歌ヲクリ」「ツキヲクリ」等夫々語り方の心得あるべきことを云つたのである。

「地色」「地ハル」「地中」「地ウ」即ち四地の區別である。此の外間から出たものに、

「三ツ間」「四ツ間」「本間」「半間」「割間」がある。ゆりから來たものには、「三ツゆり」

「四ツゆり」「五ツゆり」「七ツゆり」「丸ツゆり」がある。語り出した太夫の名を取つ

間とユリ

節の稱呼

て稱呼として居るものには、「播磨」「文彌」「半中」「一中」「外記」「表具」「道具」「重木夫」「角木夫」「半木夫」「國木夫」等がある。克く／＼心得て夫々其の變化、ゆりもち、はこびを考へて語らざれば、兎角たるみありて引き締らず、淨瑠璃の色彩、情味が浮み出で來ないのである。

節の稱呼は左の如し。

「ヲクリ」普通のヲクリを
入れて入ッナリ

- (一) ヲクリ (二) 小ヲクリ (三) ウヲクリ (四) 色ヲクリ (五) ギンヲクリ (六) 歌ヲクリ (七) ツキヲクリ (八) アタリヲクリ

「三重」

- (一) 三重 (二) 大三重 (三) 吟三重 (四) 愁三重 (五) 猛三重 (六) 中愁三重 (七) 鏝三重

「ゆり」

- (一) 三ツゆり (二) 四ツゆり (三) 五ツゆり (四) 七ツゆり (五) 九ツゆり

「かゝり」

- (一) 播磨かゝり (二) 川崎かゝり (三) 地蔵經かゝり (四) 説教かゝり

其他表具かゝり、冷泉かゝり、フシかゝり、長地かゝり等其の數多し

「おご」

- (一) うざん (二) 上ざん (三) 中ざん

「おとし」

- (一) 文彌おとし
- (二) 五字おとし
- (三) 上^{かみ}五字おとし
- (四) 大おとし
- (五) 二重おとし

「する」

- (一) する
- (二) 大する
- (三) するて

「タ、キ」

- (一) タ、キ
- (二) 上タ、キ

「間」

- (一) 丁間^{間本}
- (二) 半間
- (三) 三ツ間
- (四) 四ツ間
- (五) 割間

「地」

- (一) 地色
- (二) 地ハル
- (三) 地ウ
- (四) 地中

此の外「地」には、

地ハルウ、地中ウ、地入、地上等其の數多し

「フシ」

- (一) フシ
- (二) 本フシ
- (三) 中フシ
- (四) ハル中フシ
- (五) ハルフシ
- (六) フシハ
- (七) ギンハルフシ
- (八) ウフシ
- (九) ハブミフシ

以上の外に、

- 「ヒロイ」
- 「コハヲ」
- 「ノリ地」
- 「長地」
- 「くりあげ」
- 「ハヅミ」

「サハリ」 「ヨミクセ」 「色」

「表具」 「道具屋」 「八郎兵衛」 「文彌」 「播磨」 「半太夫」 「大和」

「冷泉」 「半冷泉」 「江戸冷泉」 「海道」 「半中」 「角太夫」 「外記」

「鹿踊」 「地藏經」 「放下僧」 「吉野」 「説教」 「國太夫」 「三勝」

「祭文」 「相ノ山」 「アミト」 「林清」 「平家」 「鉢叩き」 「音頭」

「小室」 「一中」 「舟歌」 「舞」 「謠」 「歌」

等がある。義太夫節の多趣多様なる、以て想見すべし。

元來流祖義太夫は、井上播磨の流れより出て、宇治加賀の曲風を加味し、「謠」「歌」「説教」「祭文」「平家」「鉢叩き」等に至るまで、當時流行りし節ものと云へば、冷く拾集参考し、巧に應用調節して義太夫節なる一派を大成するに至つたのであつて、斯曲に應用した此等異曲の節調を語るに就いての心得としては、「淨瑠璃の文句の中ならば、謠も歌も、うたふとはおもふべからず、語るといふべし、いはんや時々のやりうた、木やり音頭のたぐひ、面影は、さもあ、りなん、淨瑠璃の正體に、眼をは、つすべからず」と云つて居る。されば「謠」にあれ、「歌」にあれ、「小室節」にあれ、「外記節」にあれ、義太夫節化したる「謠」、義太夫節化したる「歌」、義太夫節化したる「小室節」、義太夫節化したる「外記節」であらねばならず、何處までも義太夫節淨瑠璃の正體に外づれぬやう、語つて往かねばならぬものとせられて居るのである。『江戸節根元記』には、

「垣の外に誰かあらんと仰ければ、畏み側につかひたる冷泉といへる女中、月さよ十

五夜といへる兩人の女を召れて、しをり戸を明て走り出んとせし所を、側には有あふ竹をしをりて牛若丸を隠しけるに——長が娘御逢被成度由を語りければ、牛若丸聞し召、長が娘に、いざあはんと三人の女伴ひて内へ入給ふ。此の時より是をしをり戸と名付、冷泉來りし所を、レイゼイ、インヲリと云節は、是を以て名付るなり。三人の女、三重の踏段を下り來る所を、三重と云、三ツ宛、三三九ユリなり、又三人にて上り三ツ、三三九ユリ、上り下りを二ツ合せて、二九十八ユリを本三重と唱へ、夫よりいろく、の三重來るなり。カイドウと云へる節は、六部の海道下りといへる念佛より、ごりし節なり。此の節には、表裏あり。タ、キといへる節は、都にて鉢擲と云ふ物、貫の名なり、是より取りし節なり。」云々

と云つて居る、然るに山崎成美の『世事百談』には、

淨瑠璃の節にレイゼイ、また三重などいふ名目くさくあり——三河國やはぎの長が娘、淨るり姫に牛若丸の戀せしことを、十二段に作りし物語に、節付をして語りけるに、かの物語のしのびの段に、柴のあみ戸をおしひらきといふ所の、あみといふ詞のふしを、アミといひ、更科冷泉もろどもに、といへる、侍女の立ちいづるところの、れいせいといふ文句のふしを、レイゼイといふ節の名となれり。またたきといふは、むかし網笠を著て扇を持ち、手を打ちたふきて唄ふものを、たふきといふ。人倫訓蒙圖彙に見わたり。その節を用ひたる所を、タ、キと云ふ。鉢擲の歌の節と、いへるは、ひがことなり。三重といふ節は、ふるき琵琶の手なり、何某、勾當の師直が、

前にて、平家をかたるに、琵琶の三重を上げたりといふこと、太平記に見えたり。
と云へり、併せ稽ふべし。

古き淨瑠璃は常例として「扱も其の後」と云へる發語で筆を起して居るのであるが、
近松の初期時代の正本も、「扱も其の後」「斯くて其の後」などの常套的發語を以て筆を起して居る。這は佛家の聲明の節調より思ひ付いたもので『江戸節根元記』には左の如くに云つて居る。

扱も其の後、是の語り出しの口傳は、眞艸行の三ツ語りわくるなり——同じやうに
語るは心得違なり、さなても其の後と語る人もあり、文字合す、甚聞苦敷なり、扱も其
の後の根元を尋るに、筑紫善道寺會下法隨和尚といへる僧あり、此の僧至つて音曲
好にて、上京の折から伏見に生佛琵琶法師といへる盲人ありしが、心安く、彼法師淨
瑠璃の序文に心を勞し考へ居たる所へ參り合せ、法師は何を考へ給ふやと尋けれ
ば、如此の仕合なりと咄しける、法隨和尚暫く考へて、眞言宗の聲明又は引導のそれ
おもんみればのようなる、靜なる音聲しかるべしと教ける、法師悦び、此の節を附し
なり、云々

「三重」と云ひ、「扱も其の後」の發語と云ひ、淨瑠璃の曲節中、佛家の聲明の節調より
轉化したるもの多きは言ふまでもなき所である。

「節」の變化は様々にして、無論一律には參り難し。同じ極り節にしても、世話もの—
時代もの—夫れく語りものにより、多少の屈折抑揚をも異にして居るやうの次第な
れば、之を會得合點すると云ふ事は、要するに實際問題である。實地に稽古、修練して習

節の變化

極り節の實例

奥の仏ると湯殿

オクノブツトヲネオホホ
ツクドドクケチ

太功記

尼ヶ崎ノ段

赤坂の遠る地分

アカサカノトホリノチノリ

妹春山

川場

阿波のつとね波の

アハノツツトネノナミ

阿波鳴戸

十郎兵衛内

表具

重加玉極の心裁

シヤシヤウガシクホゴウチオクシ

忠臣義士傳

赤垣出立ノ段

「ハルアジ」も
いろ／＼にし
てユリ多き
ハルあり、ユ
リなしに長く
引くもあり、
短きもあり

道具屋

のち秋丸の桐中へ

カールナゲキキートナチカキニ

鈴鹿合戦

平治内ノ段

義経

賈の河東とせせり

コノヨネカアラタタス

玉藻前三

道春館ノ段

疾む石敷

ツノイシーカアツウモヲ

とふと我めめしめて

カネノカミイネキアーヌアーテ

櫻鏝恨絞袴

鰻谷ノ段

道具屋にも種々あり、千兩一町中の最賃に肩も猪名川が三日太平記嘉平治内の「鏡兜もだいなしの」等其の適例なれど此處にはわざと、變りたる阿漕を引例せり

江戸人

司娘と小娘おめい

(太ッ) ツカサヒムヲコワキニカハ

岸姫松三

飯原館ノ段

コウ

果はひかき常れ端

(オ) タガイニアラクオニオビノムシ

四ッ谷怪談

伊右衛門内

「コハリ」もいろくあれど大體は大差なし

ヒロイブル

塚の今面をえかひそ

ヘノソトモヲ(オ)ミオ、ロオシイニテ

明烏六花曙

山名屋ノ段

三味線の方に「ヒロイ」も云ふ彈き方あるも並には「ヒロイ」云ふ節を示す

志

人目をつむわらあひ

ヒトメヲツムホウカフリ

傾城戀飛脚

新口村ノ段

上タキ
風を渡る鳥を捉へて

加々見山七
長局ノ段

イマアソカキイリイキハムウニニ

三重
斗のあま後(こと)の木の

増補忠臣藏
本藏下邸ノ段

ハカリカアネモヲクニハア(心)チヨラスソチ
チンヲミミヲミミ

スエテ
氣のさへきとあつた

忠臣講釋

キハクヲアミニヤミトナリイニニケエル

喜内住家ノ段

スエカリ
成果を愛中(海)がなげ抱ゆ

狭間合戦

ナリハテタルカナシヤトナミダチガランカイウニ

竹中砦ノ段

表具

ゆゑいゝるゑの果
イツクイカアノナルクニクニクテ

近頃河原達引
堀川ノ段

タキ
〜〜〜〜

かめりるれ就粒り

攝州合邦ヶ辻
合邦内ノ段

伐害

心斗りり孫入部

箱根靈驗

篋り十一冊目

ミ只カアノリイハ
カツタゴホロホホホ

伐害とは主として三絃の方の唱へ也

小タクリニ
奥の道々中一の様

ホクツハムナマケ

忠臣藏四
判官館ノ段

「小タクリ」は概ね假名三字の場合

「タキ」にもいろいろあり、大略小異なれば略之

冷泉カリ

ある羽織さびるまで

伊賀越五

政右衛門邸

(ツ) キセルウハアミオオリイ

オシノオニオニオニオニオニオニヒツシヨナ

忠臣藏九

山科ノ段

ウツカリ
あつあつある指子の内

マフウカアニムキタル

中ツカリ

表の方道に

日蓮記

勘作住家ノ段

カハベエニイニイイイ

ギンツカリ

入の軽たうゆを

加々見山七

長局ノ段

イルウサアアシムカゲムラマキ

「ウツカリ」は四字の場合

賢女鑑十
片岡忠義ノ段
感戴のいさむはた

イホラミミヲミハタシテクヤクウミ
オダセエミリイニシ

朝顔

宿屋ノ段

治部右衛門の心く

ナニゴオコオノロオミニチアク

新版歌祭文

野崎村ノ段

己カリ
おひゆるる国の中に

オモオイキツタアミタミルウミ

花ノ上野

志度寺ノ段

花のあはれと病のしづか
シヤシホホレエエテエイタアスルイシカ

總節にして何れの極用り
せらにたるとの所應り
にれりたるも其の多
よれながし等ゆ
おるがし多
な
少り過あるがし多
れど違ふ中ひ
種々別々の節の中
は始に其の達
く感ぜらるるも
一げもあはれも
例也

新と新と世に五れ松五

(下) カクトシラセニアルジニツワウ

増補菅原

松王下邸ノ段

あびの穂大長あまれば

(下) シニハトモシビサシヨスレエバ

八陣八ッ目

政清本城段

あまの舟のまじと揚舟

(下) シニハトモシビサシヨスレエバ

近江源氏八

盛綱館段

新と新と世に五れ松五

(下) カクトシラセニアルジニツワウ

奥州安達原

袖萩祭文段

江戸冷泉

あひ後るらんめらるる

オモイニツクニメエタルガクヌウニツクニツクニツクニ
イニイニイニイニイニイニイニイニイニイニイニイニイニ

加々見山七

長局ノ段

五字落

赤城の道じもの

マアヨオヒイニイニイニイニイニイニイニイニイニイニ

一の谷

熊谷陣屋ノ段

文弥落

方後とこふあふと候

(本字マ) ドフトフウシイニイニイニイニイニイニイニ

阿波鳴戸

順禮歌段

清合針歌

シカアアアアアアアアアアアアアアアアアアアアアア
シカアアアアアアアアアアアアアアアアアアアアア

正本の節、章に就いて注意すべき廉々

カカリ
 じつじつじつじつ
 (チ) トハノコレガマナシトオマア

伊勢音頭

油屋ノ段

「カカリ」にも多少の違ひあり、雖も、詞と地合の間に用うる節なれば大差なし

カカリ
 じつじつじつじつ
 (チ) コロツクシムハオカ

碁太平記

新吉原揚屋ノ段

説經カカリ
 じつじつじつじつ
 (チ) トハノコレガマナシトオマア
 (チ) コロツクシムハオカ

観音靈驗記

壺阪ノ段

説經カカリも一様ならず、總じて何々カカリなるものは一定のものにあらず多少異なる所あり

大凡右の如し。但し此れとても、僅に其の一端を示したまでのものにして、無論此の外例示すべき極り節は澤山ある。「大三重」「吟三重」「綴三重」「ギン」「ウギン」「中ギン」「半太夫」「角太夫」「外記」「林清」「半中」等例示して無いものも太た多し。加之

情合文義に應じ節の形もさ
まぐである

節附の眞行草の三體

同じ「んこ」にしても、泣きの入つたのもあれば、入らないのもある。同じ「本こ」にしても、ユリの長いのもあれば、短いのもある。同じ「ハリマ」にしても「マ」にしても、『花の上野譽の石碑』志渡寺の「元の姿は何處へやら」のやうな皮肉を語り口のものもあれば、「譽は今にいちじるし」のやうな、一ト風變つた語り様の所もある。其の時其の場の文義、情合に應じ、變化さまざまなれば、一樣には論じ難し。されば前記の節附とても、僅に其の語り方の一例を示したまでと承知すべし。

書道に眞(楷)行草の三體があるやうに、淨瑠璃の節附にも亦眞行草の三體がある。大時代物の節附は眞の形である。生世話物の節附は草の形である。而して世話時代物は、其の間を往く行の形とも見るべし。されど基く所は眞の形である。眞の體を學んで篤と正しき筆法を悟了し、爾して後初めて行草に入るのを書道の正則とするが如く、淨瑠璃の稽古も亦先づ時代ものより初め、篤と「節」の數、「ユリ」「ナガシ」「ウツリ」等を會得了解し、而して後世話時代もの生世話ものに入り、變體のさまざまを研究修練するを、正しき稽古の順序とするのである。尤も正しき稽古の順序としては、先づ景事道行等より始め篤とさまざまの

書き下し當時さば語り様も
節附も變つて居る

「節」數を覺ゆ夫れより徐々に段物に移るを順序とすべしと雖も、今の義太夫修業の連中には到底左やうな秩序ある稽古を積むやうな辛抱も忍耐も出來さうにも無いのである。されば爰には變則なから先づ段物より稽古を始むるをすれば、時代世話孰れより著手すべきかと云ふことの順序を示すこととしたのである。

按ふに淨瑠璃の語り様も、節付も、乃至三絃幾多の變遷を経て、書き下し當時とは餘程趣も變つて來て居ることは勿論にして、比較的新しい『觀音靈驗記』の壺阪でさへ、新舊二通りの語り方がある位である。「上る段さへ」と語る方の一派と下る段さへと語る方の一派があり、お里の(グドキ)の處なとも大分行き方が違つて居る。

「地」の様々

丁寧親切なる新道の
指南書―『淨瑠璃道
之枝折』

恐らく今日原章通りに語られて居るものとし云へば太だ儘にして、別段變つて居さうにも思はれざる『忠臣藏』四段目の如きさへ、書下し當時の語り様に較べたら、尙幾多の違ひも存すべしと思はる。されば稽古に際しては、先づ第一に、師匠の語り方に相當した、朱章をさして貰ふと云ふ事の必要も起つて來るのである。

何んでも無いやうにして六ヶしいのは、「地」である。「地」の語り別である。「地」にはさまざまあるが、根本は、「むウ」「むま」「むん」「む中」の四ツにして、之れを「四地」の大事とせらる。古人も「右の四地わからねばいつもおなじ地合にて、淨瑠璃めいるものなり」と云つて居る。三絃の方でも亦なか／＼六ヶ敷ものとせられ、此の區別明かならざれば、一人前の弾き人とは、云はれぬ事となつて居るさうである。其の他「地」には、「むまウ」がある。「むんウ」がある。「む中ウ」がある。「むまん」がある。孰れも四地の變化應用と知るべし。

明和八年豊竹四季太夫が著した『淨瑠璃道之枝折』は淨瑠璃語り方に就ての指導書としては頗る珍らしく、其の説く所も亦實用的に、頗る丁寧親切に書かれて居る。左に之を紹介して、「節」及其の語り方の説明に代ふる事とする。

『淨瑠璃道之枝折』抜抄

句讀及圈點は原文には無し。便宜上著者の加へたるものに係る。

ヒキガナ之事

いんニイ

へんネヘ

おんノオ

うんヌウ

あんナア

あんネエ

右ハネ字の下のゆりは、右のヒッキガナにて其節の敷をおぼゆる事なり。口傳

ハネ字の下の假名づかひの事

いハニ はハナ ほハホ あハナ うハヌ おハノ

わハナ ゑハニエトツメテ云 やハニヤ同

節附口傳

允 はるさいふ事也

このおんは聲を鼻にかけ、眉毛を中へよせ、目鼻の間のひくみより出すおん也。考ふべし。

ウ うくさいふ事也

このおんはほうをふくらし、ばらを立るやなる聲にて、小鼻をいからし、したをまきくぼたまりのやうにしてうなる也。

中 したのおん也

このおんは大方允ウのDくのうへのごとく、中とあり、惣體允ウより中へおとすと云。これは允おんより中くの下のおんへゆりながしおさむるいさ也。

こゑのいでごころは、のぞをふくらして、唇首のやうにして、兩眼にて鼻をにらんでうつむき、中へゆりながす也。

心 と云は 三味線にあふやうに、Dよりくぎりまで間よく節をかたるを地

合と云。むかしより地合には、名人の妙音にてさま／＼あじはひ有。口傳
と云は 詞にいろをつけ、三味線をいれかたるいき也。地合同然のど

ころなれば、しろとしようにてはわかり申さざるところ也。當時の節付は、
太夫にてもかたりやうはむちやなり、氣を付くべし。

刃

と云は 惣體平生通俗の語言の通、公家武家町人百姓冠織實惡におふし、
老若男女平生の詞のやうにいふを功者といふ也。

と

と云ふは 詞へのかふりをつめるところをといふ。惣體地合の中に
かど有も同じ。詞のやうにつめていふをといふ。地合と詞の間なりと
いふるへべし。

上

と云ふは うれいの文句のところにおふくあり、又景事の内にあれば大
ナトシといふ節のところへ上といふ章あり。これは口授なくてはいき
がたし。地歌タ、キのたぐひあるひはノリの内にも上とある。

このおんのいでごころは、目をつりめにして、ひたいにしわをよせて、鼻と
ひたいのあたりよりくりいだす也。

き

と云はいろ くあり まづつうれいきの音と云は、口をふさぎ、齒をくひしぱり、鼻
へすこしかけていだすおん也。

上き

と云ふは 右に應じ、はをくひしぱり口をあき、はなへかけ、ひたいへし
わをよせてくり出す也。

げれば、則いといふ時はいゝト下へまげるころ、氣を付べし。

つ

此の章は、あるひはいふんなどよはねて、しりをつゝむの節付なり。文字の跡へんをつけるどころへべし。

子

此の章は、かやうのるいづれども、まへに有ごま章引ごま章のいきかたなれば、あげさげとも右にて考べし。かす多く付たる節付も、右をよせたるものとしるべし。節は、うみ字を元とする也。うみ字にて、なまりのあやまりなきやうに、字をうみ付たるものなれば、うみ字を能く考ふべし。

り

と云は、いさむ文句に付る。惣體詞に七字五字のくきりのところへ三味線を入れてかたる所也。詞にさみせんを入るところなれば、くぎりより、くぎりまで、を間よくかたりつめるやうに、心掛くべし。中よりいふは、右に少ししづかなる詞の合へ、さみせんを入かたり詰る所也と心得べし。

り

と云は、右り同様にいさむ所へ付る節なり。文句によりおんはかわれども、りをおにしてかたるころ也。

笑の事

ホ……と笑ときは、口をすぼめて、腹を背中へ付るやうにしてはらから出す也。

ハ……と笑ときは、口をひろげ、はなをいからして、はらを右之通に背中へ付るやうにしてはらからいだす也。

へ……と笑ときは、齒をくひしばり、はなをいからせ、右之通しやくり出すいき也。

笑の事は色々傳あり、むつかしき事也。惣體、なに笑にても、腹の中より、い、だ、さ、ね、ば、笑、わ、れ、ぬ、と、こ、ふ、ろ、へ、べ、し。凡何笑にても右のいき也。文句の意味により、上、中、下のおんにて、諸笑共いで所は同事と心得べし。

「上」と「下」

正本の「章」には、「ウ」「中」「ま」「ん」などの符號は至る所にあり、されど上、下の章を附けたる所は太た少し。中にも下の章を附けたる所は、殆ど見當らざる位である。「花の上野春石碑」志渡寺の、「さつと吹くる風ユヅリに連れ」は其の一例にして、「章句故實集」には、「上下は甲乙也」「下は物寒き所か忍ぶ處に書也、其の外は、此如く書くべし」「カンは一と場に一とつか二つより書くべからず、其の他は上と書く也」「ランは位のある所に書く也、其の他は中と書くべし」と云つて居る。

正本の「章」の中で紛らはしいのは、「ん」「ん」「ん」「ん」の四の符號である。正本筆者の筆ぐせもあり、板刻の出來、不出來もあり、一見其の甄別に苦しむやうな書き振りの所も尠からざれば、よくく師匠ニに聞き質して合點するを要する。例へば

「八陣守護城」八册目の、「投げ出す庭先ニ主計中の助」の章は「ん」である。「本朝二十四孝」十種香の「今日命日を弔の位牌中に」の章も「ん」である。「太功記」尾ヶ崎の、「後んの方より大音上」は「ん」である。「手をかけてるんぐり苦しむ」の「るんぐり」の章は「ん」である。

紛らはしき「ん」「ん」

「フシハル」と「ウフシ」

太夫癖の節

「音曲兩節辨」の一節

『章句故實集』には、「ん」の章は一ト句切の文句なかば三字にて句を切所、或は四字にて句を切處に書く也」「詞にん」と書は心覺にひとしければ書くべからず」「然し詞りに地の文句ある時はんとも共書なり。」「ん」の章は下より十二字目に書か、或は下より七字目に書也」「ん」の章は上の跡かんの跡、又はんりの前などに書くべし」と云つて居る。

普通に使はれざる珍しい節には、「フシハル」「ウフシ」がある。『花の上野譽石碑』志渡寺の、「かゝる所へ奥庭より」は「フシハル」、ウラシ「刀を鞘に納めた顔」は「ウフシ」である。「ウフシ」は文句を詰めて、五文字にて付るものとせらる。其の他淨瑠璃により、太夫癖の節と云ふのがある。語り始めた太夫の特種の考案に成つたもので、假令は、「妹脊山婦女庭訓」川場の、「障子ぐわらりのぞきこぼるゝ腰元共」に附けた節、「花の上野譽の石碑」の志渡寺の、「額を土にうづくまる」に附けたる節の如し。豊竹此太夫の書いた『音曲兩節辨』には、左の如く云つて居る。

フシは節の字にて四季の土用のごとし。依而フシの跡は改る心なれば、むま中、むま穴、むまウなど付る習ひ也。詞より地へかゝりはむま穴、むまウ、むま中の類に付る。先女のたをやかなると位ある文句はむま中可然。次にウはむま穴にウ有り、中にウ有、句切毎にウ付るに不及、餘は胡麻章にて知らすがよし、譬ばむま穴の内にあたりあるは一如此の章にてしらす。中の内に下る心持有は、如此にてしらす。間のごま章は歌の五文字七文字の心にて、三五七の假名に上ケ章下ケ章を付れば、

「斯界唯一の註釋書」
「章句故實集」

手爾葉の程拍子によくあひ叶ふ也。折章廻章はぬる章は、いづれも謠の通也。又フシ跡にむを付るに、一ト句切の中にて詞へ移るあり、是は詞落しにむ付るは二重なり。句切かはれば苦しかるまじ。又姿の章心の章と申は、先づ姿の章は、文句の膚はだに應じ現在に付る也。心の章と申は、表へ顯はさず置是は指つかへの章、あるひは同じころもちなる節は、見渡しあしく候故、少しづゆり、もち、はこび、等を替て語るゆへ、章にあらはさぬ節也。云々

淨瑠璃正本の「章」は解し難し。『章句故實集』は、之れが故實の註釋書としては、斯界唯一のものである。左に抄録して参考に資する。

○章句起源之事

- | | | | |
|---|--------------|----|--------------|
| ㇫ | 東春木青肝酢仁呼角牙 | ㇫ | 南夏火赤心苦禮言徵舌 |
| ㇮ | 坤土用土黃脾甘信哥宮喉 | ㇮ | 酉秋金白肺辛義哭商齒 |
| 中 | 北冬水黑腎鹽智伸羽唇 | ㇰ | は日月星也 |
| ㇰ | は平上去入也 | 上下 | は甲乙也 |
| ㇱ | は陰陽也 | ㇱ | は始終也 |
| ㇲ | 宮、大に充て和らかに緩し | ㇲ | 商、輕く少し勁し |
| ㇳ | 角、和調にして直也 | ㇳ | 徵、和調にして長也 |
| ㇴ | 羽、沈て深し | ㇴ | 天地人三才は胡麻章を加へ |

て章數十八と定る也

○筑後掾越前掾心まの心違ふ事

節の數は七十二候をかたとりて七十二と定め章の數は土用の日數を倣りて十八と定むるなど都而兩祖の教心同し然れ共心まの書處のみたがへり筑後掾は節に節なしの心を心まと書なり越前掾は宮商相交る心を心まと書故に節落しスエ節杯の跡は心まと書也。

○姿章心の章の事

姿の章は語る通りに書章也心の章はさしつかへの章ありて語る通りにかゝれぬ章なり文句にそむけしフシは付ぬものなれども品に依て付る事あり其時は語る通に書す文句にそむけぬ様に替て書ならひ也文句に依て句を切て語るとも句切をかゝねばならぬ所あり又は同じ節重なりたる時は本の面て見苦敷故少しづゝかへて書也ゆり數の多き節または音の品々にかわる節など語る通りに書ては見苦敷もの故ユリ數を少く音の數を少くかへて書是らを都て心の章と言なり。

○所に依て節の名を書ざる事

表具屋 道具屋 文 彌 相ノ山 舞 平 家

江戸 半太夫 地藏經 タ、キ 鉢タ、キ ラント

コハリ サハリ 林 清 說 經

右の數一と句切にてなをす所は節の名をかゝす章にて知らすべし刃の内に哥か或はサハリなど三味線なしに語る所は節の名を書ず刃のまゝにてをくべし。

フシかゝり 本フシかゝり スエかゝり

本心かゝり 三重かゝり ダンギリかゝり

右の類章は心覺にひとしければ書べからず然れども前後の節に依てかゝねばならぬ事も有也又道行ノフシヲクリ前に七ツユリ冷泉などはつけぬ者なれども文句に依てつける事ありたとへば町つゞきの道行に海道はつけぬものなれども品に依てつけることあり其時は節の名をかゝす章にてしらすべし斯様の類あまたあれども爰に略す。

○ワキ場に遠慮すべき章の事

カン ヲン 上 上キン え 入

右の章はワキ場にこゝろゆべしたとへば

○カンは ○上ト書べし

○ヲンは ○中ト書べし

○上は ○りかやうに書

○上キンは ○はきと書か りま

此通書べし前後にキンあらばりかやうに書べしワキ場には別てンを多く書べからず。

え は 一 天の章を書べし
入 も 一 天の章を書べし

大落しはワキ場につけぬ節なれども文句に依て付る事有り其時はフシ落しに
なりとも三ツユリになりともかねて書べし然れども至てせつなる心の處は大
落しに書ても苦しからず。

冷 泉 江戸冷泉 半冷泉 七ツユリ フシをくり

色をくり アミトヲクリ タ、キ 文 彌 表具屋

半太夫 説 經 舞 平 家 サハリ

相ノ山 鉢タ、キ 海 道 地藏經 半 中

右の類總てむつかしき節はワキ場につけぬものなれども品に依て付る事有
其時は節の名を書べからず然れども文句に依て其節に限る事有其時は節を書
てもくるしからず。

附り總て役場に應せぬ節は少しかへて書べし。

○景にむなしの事

景事はすべて宮の音ンより出る宮は哥の音ンにしてむ也故に景事はむと書に
及ばす然れども文句に依てありあり有時はむあり又景事のうちに景事ならぬ
文句有時はむとも書むむとも書なり。

○は之事

ㇿとㇿを重ねて書べからずㇿと書たるあとほクとばかりにてはいくつ書ても又
ㇿとは書べからず書たる時は

中 ㇿ ㇿ ㇿ

右の内何れにても書たる上にて又ㇿと書べしㇿㇿにてもㇿまにても同じ。

○中之事

中と中を重ねて書べからず中と書たる跡へㇿと書たるばかりにてはいくつ書
ても又中とは書べからず中と書たる時はㇿとㇿㇿ右の内何れにても書たる上
にて又中と書べし中ㇿにても中まにても同じ。

○と之事

ととと多き時は文句に依て中と書べし又ㇿ或はㇿのり文句短き處はとと書な
り。但し前後の章によるべし。

○多く書まじき章の事

上	下	カ	ヲ	ま	上ま
下ま	中ㇿま	ん	入	ㇿ	ㇿ
ㇿ	ㇿ	ㇿ	ㇿ	ㇿ	

右の章多く書は宜しからず。

○

上の音ン多き時は至て心の重き所にばかり上と書べし其外はㇿを書か或はㇿ

此ごとく書なり。

○ 下は物寒き所か忍ぶ處に書也其外は中と書か或は、此如く書べし。

○ 但し中の跡は下と書べし。

○ 夕は一と場に一とつか二つより多く書べからず其外は上と書也。

○ 夕は位のある所に書也其外は中と書べし。

○ 夕とばかりは、のあとか或は、の前の前か又は段切の前ならでは書べからず但し余り夕の多き時は、の跡上の跡をば夕と書べし、の前の前は、と書か又は入とかくべし。

○ 上きは一と場に一とつか二たつかより多く書べからず其外は、と書か或は、りき此如く書べし余り夕の多き時は、りかやうにかくなり。

○ 下きは一と場に一とつか二たつより多く書べからず其外は中まど書べしあまり夕の多き時は、りよつては中とも書或は、りとも書なり。

中クまの章はなとなとの間ならではかゝす其外はクまと書也あまりまの多き時はクとばかり書べし總てまの章は多く書べからず。

○ んの章は一と句切の文句なかば三字にて句を切所或は四字にて句を切處に書也たとへば

なふとつ なふとつ 此の節に四字もあるなり なふとつ 同上

斯様の所に書べし數多くあれども爰に略す。

○ 刃にんと書は心覺にひとしければ書べからず。

然し刃ノリの内にもとの文句ある時はんどもノリ共書なり。

○ 入の章は上の跡ならでは書べからず但し上のあとなりとも多く書はよろしからず。

○ 丸の章は下より十二字目に書か或は下より七字目に書也。たとへば

めとやまておとや よめとやまておとや

何とやまた^三重

斯様の所に書べし數多あれ共爰に略。

えの章は上の跡か^二の跡又はえの前の前に書べし。

〇 此章は上に一此章を置きて^三ケ様に書か或は^二此章を置一^三此如く書べし
〇 是斗りは書べからず。

〇 此章は^二ヲクリ或は^三ヲクリ又はアミトヲクリのとまりに書べし其外には
用ひず。

〇 へは多く書可からず長き^二の所に書べし但し音ン傳ひに附たる^三へは短かくと
も書べし。

〇 胡麻章の事

何れの音ンにても上る所は、天の章にて知らすべし下る所は、地の章にて知
らす當る所持つ所は一人の章にて知らす但し所持つ所に、地の章を書時は次の
文字に、天の章をうつすべし下る所にても地の章を書たる時は次の文字に、

天の章にても又は何れの音ンにても其節に應じて書べしさてギリノゴマ章は書所に定り有り例へば

何とやうしておとやうキおとやうして何とやうキ

斯様の所に書べし數多あれども爰に略す又定の胡麻章あり例へば

何とやうしておとやうキ

何とやうしておとやうキおとやうして何とやうキ

何とやうしておとやうキ何とやうしておとやうキ

斯様に書べし。

○ゴンの章カギの章の事

フゴンの章は徴なり廻す章にて長し

フカギの章は商なり折る章にて勁したとへば

何とやうしておとやうキ何とやうしておとやうキ

何とやうしておとやうキ

右はゴンの章なり數多有共爰に略す。

何とやうしておとやうキ

右はカギの章數多あれども爰に略す。

○フシ落之事

この書所に定りあり前よりもよほしたるを落は下より十二字目にと書べし又急にを落になる時は下より五字目にと書也是を五字落しと云なり又文句に依て下より七字目にと書べし例へば

何れやうして物とやう

是は下より十二字目にと書字餘りなれば十三字目に書なり勿論此を落數多有例へば

何れやうして物とやう

是は下より五字目にと書べし字餘りなれば六字目に書なり此五字落しも數多あり又

何れやうして物とやうして

是は下より七字目にと書べし字餘りなれば八字目に書べし。

○詞跡竝節落跡之事

○二十二音の章書様竝に人情有事

一は。ヤスンズル。シホル。カンズル。アキラムル。サダムル心に用ゆる章中と書く但し中を書たる跡ヲ斗りの時は下と書なり始の内の次ぎは之の跡次は心の中とかき之の跡スエ節の跡は、心を中と書なり。

○
一の一は。シホル、心に用ゆる章は中と書但し中と書たる跡ヲ斗りの時は下と書なり。

○
一の二は。イブカル。ラソル。シノブ心に用ゆる章は中と書但し中を書たる跡ヲ斗りの時は下と書前後にまの章多き時は中と書文句に依て下と書なり。

○
一の三は前に同じ。

○
一の四は二の音なり。ヤスンズル心に用ゆる但し外の音ン加ル時は人情色々替る音ンなり。

例は一を加ゆれば。アキラムル二の二を加ゆれば。アンズル二の四を加ゆれば。ウカル、三の五を加ゆれば。ウレウル。クヤム心に用ゆる章數多あれど

も爰に略す章は中と書文句に依てランと書景地の時は中クとも書刃の次は中と書刃の跡スエの跡は心を中と書也。

○

二の一は。シホル、。アキラムル。クヤム。ヤスンズル。マギラス心に用ゆる章は中クとも中とも書中を書たる跡はクと書く文句に依てランと書なり。

○

二の二は。イブカル。オソル、。アンズル。マヨウ。シノブ心に用ゆる章は中まど書中を書たる跡は下まど書まの章多き時はクと書文句に依てランと書刃のつぎ刃の跡スエの跡は心を中まど書なり。

○

二の三は。イブカル。オソル、。マヨウ。シノブ心に用ゆる章は中まど書まの章多き時は中の跡はクと書なり。

○

二の四は。オソル、。アキル、。イカル。コラユル。アンズル。イブカル。ヤスンズル。マヨウ。シノブ。サダムル。ウカル、心に用ゆる章はクと書刃と刃の間は中クと書刃のあとに心をクと書刃の跡スエの跡は心をクと書節に依てクまど書刃と刃の間は中クまど書刃の次刃の跡スエの跡節によつて心をクまど書く。

修シユとキかカして

節の時斗りシとキと書なり。

○ 二の五は。イブカル。マヨウ心に用ゆ章はクキと書なり章多き時はクキと書なり。

○ 三は。イカル。ヤスンズル心に用ゆ章はシと書シを書たる跡はクキとも書クりとも書シの次はシと書節の跡スエの跡はシと書なり。

○ 三の一は。アイスル。ヨロコブ。イサム。コラエル。マギラス。アンズル。ヤスンズル。アキラムル心に用ゆ章はシと書シを書たるあとシともりとも書シとシの間は中クキと書シの次はシと書シの跡スエの跡はシと書なり。

○ 三の二は。イブカル。オツル。イカル。マヨフ。シノブ。カンズル心に用ゆ章はクキともりとも書中の跡クキの時はシとも書節に依てシと書シの跡クキの時はシと書シの次はシと書文句に依てシとかくシの跡スエの

跡は^ハを^レ^ハと書文句に依て^クと書なり。

○ 三の三は。イブカル。マヨウ。シノブ心に用ゆ章は^レま^ト書^レの跡^ク斗りの時は^リま^ト書^ナりま^シの章多き時は^リと書^ナり。

○ 三の四は。イサム。イカル。クヤム。サダムル。ウレフル。コラエル。コブル。カンズル。ヨロコブ心に用ゆ章は^レと書^レの跡^ク斗りの時は^リと書^三重かへしには上と書^レの次は^ハを^レと^カき^コの跡^スエの跡は^ハを^レと書^也。

○ 三の五は。ウレフル。クヤム。コブル。マヨウ心に用ゆ章は^レとも書^上とも書^節に依て上^クと書^レの跡^に上の章多きときは^リと書^レの次は^ハを^レと書^節のあと^スエの跡は^ハを^レと書^ナり。

○ 三の六は。イブカル。コラエル。イカル。カンズル。イサム。ウレフル。コフル。マヨフ。マギラス。サダムル心に用ゆ章は^レま^ト書^レの跡^ク斗りの時は^リま^シとも書^又ま^シと斗りも書^ナりま^シの章多き時は^レと書^レの跡^ク斗りの時は^レと書^レの次は^ハを^レと書^ナり^コの跡^スエのあと^ハ此音^ンなり。

○

三の七は。コラユル。イカル。ウレフル。コフル。マヨウ心に用ゆる章は前に同じ但し次の次の跡には此音なり。

○
三の八は。イサム。イカル。コラユル。ナゲク心に用ふる章ははなとも上とも書なり。はな跡にて上の章多き時はフと書べし。次の次ははなともは上とも書なり。この跡スエのあとには此音なり。

○
三の九は。コラユル。コブル。マヨフ心に用ゆる章は上と書上の章多き時はりきと書前後にきの章多き時ははなと書。はなのあとク斗りの時はりと書なり。

○
三の十は。ナゲク。コブル心に用ゆる章は上と書前後に上の章多き時はフと書なり。この前はきとも書。次の次はは上と書なり。この跡スエの跡には此音なり。

○
三の十一は。ナゲク。コブル。マヨウ心に用ゆる章は上とも多とも書なり。
右二十二音の章を書にはあらず多くはゴマ章にて知らずなり。

(以下略之)

其の例

自然の變化により、子音が母音に還元する場合に、其還元したる母音を指して、産字と稱するるのであるが、蓋し「原字より産み出されたる字」と云ふの義なるべし、例之ば、

「ア」行の子音カ、サ、タ、ナ、ハ、マ、ヤ、ラ、ワの産字は其の母音の「ア」

「イ」行の子音キ、シ、チ、ニ、ヒ、ミ、リ、キの産字は其の母音の「イ」

「ウ」行の子音ク、ス、ツ、ヌ、フ、ム、ユルの産字は其の母音の「ウ」

「エ」行の子音ケ、セ、テ、ネ、ヘ、メ、レ、エの産字は其の母音の「エ」

「オ」行の子音コ、ソ、ト、ハ、ホ、モ、ヨ、ロの産字は其の母音の「オ」

となるのである。元來子音は、或る父音と母音と結合化^も成して出來上つて居る音なれば、結局は母音に還元さるべき約束を有つて居る。例之ば、

「ク」音と「ア」母と結合してクア「カ」となり、ク音と結合してクイ「キ」となり、

クエ「ケ」となり、クオ「コ」となるが如く、

「ス」と「ア」と結合してスア「サ」となり、スドイと結合してスイ「シ」となり、スエ

「セ」となり、スオ「ソ」となるが如し。

子音は本來母音に還元さるべき約束を有する

されば父音ク。スツ。ヌフ。ム。ユル。ウ。 嚴密に云へば此れ亦、本來子音にして父音にあらざるも、他に適當なる父音の字形を案出せられざるにあり、從來一般に之を

以て父音と假定し、論究せられて居るのである。 さればウリ列の假名に限り、父音にして同時に子音たるの異觀を呈して居る次第なれど、要は實際の便宜に由れるものと知るべし。と母音「ア」と

結合して成り立つて居る子音カ、サ、タ、ナ、ハ、マ、ヤ、ラ、ワは、結局は其の母音「ア」に還元し、母

音「イ」と結合して成り立つて居る子音キ、シ、チ、ニ、ヒ、ミ、リ、キは、其の母音「イ」に還元し、ク

ス、ツ、ヌ、フ、ム、ユルは母音「ウ」に還元し、ケ、セ、テ、ネ、ヘ、メ、レ、エは母音「エ」に還元し、コ、ソ、ト、ハ

ホ、モ、ヨ、ロ、ヲは母音「オ」に還元する理合なれば、結局「産字」と云へば、母音ア、イ、ウ、エ、オの五字の外には出ないのである。

古き斯道の祕傳書様の著述には、左の如き産字表を示し

いイろヲはアにイほヲへエとチちイリイぬウをヲわアかアよヲたアれエ
そヲつウねエなアラアむウウウのヲおチくウやアまアけエふウこチねエ
てエあアさアきイゆウめエみイしイゑエひイもチせエすウ

「節」のゆり、ながし等は、すべて「産字」にて變化の働きを見すべきものなりとし、「淨瑠璃道之枝折」にも「いゝろヲとおしつけていへば外文字を一字づゝうむゆるウミ字といふ、かな四十八文字ながら此通り。惣體節付のゆりは右ウミ字にてゆるものと心得べし。」節はウミ字を元とする也。ウミ字にてなまりのあやまりなきやうに字をウミ付たるものなれば、ウミ字を能く考べし」と云つて居る。

惟ふに子音をわざ／＼母音に還元するの必要即ち産字の必要は二の理由から來て居るのである。

第一、子音はもと／＼父音子音列ノと母音との結合音なれば、發音して延ばし詰むれば結局母音に還元する。例之ば「カ」の子音は「ク」と「ア」との結合音なれば、カカカカ……と延ばし詰むれば、遂には母音「ア」に還元するが如し。されば「一谷嫩軍記」の「逃げ去りたる平山が、後の山より聲高く」の「高く」も「カ」を延ばして語ることが故に「ア」に還わり、「聲たかアア……ク」と語ることとなるのである。

産字を必要とする二の理由

第二、子音は父音と母音との結合音―混成音なるが故に、發音圓滑ならず不純である。されば幾回も折返して發音すれば、聽者をして一種不快の感じを催さしむるに至る。例之ば、

キ、シ、チ、ニ、ヒ、ミ、リ、キ、の子音も、一旦母音に還元し、イ、イ、イ、イ、イ、イ、イ、イ、と發音すれば、幾回重ねて發音しても、格別耳障りもせず、圓囀快心の感じを與へ得るのであるが、子音其儘にて發音し、キ、キ、キ、キ、キ、キ、キ、キ、シ、シ、シ、シ、シ、シ、シ、シ、チ、チ、チ、チ、チ、チ、チ、チ、ニ、ニ、ニ、ニ、ニ、ニ、ニ、ニ、ミ、ミ、ミ、ミ、ミ、ミ、ミ、ミ、リ、リ、リ、リ、リ、リ、リ、リ、と發音しては、何となく異様な感じを催さしむるが如し。

されば「節」の變化、節尻のゆり、ながしは、すべて一度母音に還元し、「産字」によつて發音すると云ふ事となつて居るのであつて、一つは發音自然の理法より來り、又一つは、音調調節の必要に由來する次第にして、別段玄妙不可思議なる理由の存すると云ふ譯合でもなければ又深奥語るべからざる祕傳などの存すると云ふ譯合でもないのである。

第五章 稽古の心得

稽古の順序 最初は音調と曲節の修練 夫れには適當な景事道行も 古人の至言 稽猪

古 百日に百杯の道 赤素人の三段目 熱心は稽古の要訣

聲音修練の意義 順的助長 修練と逆的對抗 修練 稽古の手初めには先づ順

べし 一方に偏固過ぎたる片輪者 逆的對抗 修練の意味 聲音修練の

原則としては何處までも順的修練

斯道には卒業期限無し 攝津大椽もまだくなれ 稽古に臨んで心得べき

廉々 根氣と辛抱一口を開くまでの辛抱一ツ一稽古の紙數一稽古本の研究一要

「節」を覺ゆるよりは「程」「間」「拍子」「呼吸」「情趣」を呑み込む事の

苦心 初學者の惡癖 正しき稽古の姿勢 二度稽古、三度稽古 氣合の

たのは最初の一回一結局悪い所く覺 杉山其日庵主人の「義太夫の稽古」の

一章

淨瑠璃を語る姿勢と態度 昔の出語りと今の出語り 首一ツ振らず、

口一ツ歪めずには淨瑠璃の情味は語り難し 要は何處までも格を崩

さぬと云ふ事が肝要〔浄瑠璃早合點に云へる出語りの辯餘りに偏固な見解である〕自然に出て來る表情の態度と姿勢なるべし〔満座の中でも眞摯に自己の限りを盡して語れ〕形ばかり學んださまの誤解

稽古の順序

最初は音調と曲節との修練—夫れには適當な景事道行物

義太夫節稽古の順序としては先づ道行景事より始め、次で端場はばものに移り、夫れより漸次しだだに段ものに入り、よく／＼工夫修練して向上の一路に入るべきものなりと訓へられて居るのであるが、最も次第である。總じて道行景事は「節」ものにして華やかに、聲うつりよく、景致を語ることを專一とするものなれば、「音調」と「曲節」との修練には洵に恰好の語りものにして、最初より三段目もの四段目ものなどに手を著ける事は、勞する割合に功能薄し。諺にも「急がば廻れ」と云ふ事がある。されば手始めとしては正則通り、先づ道行、景事より始め、よく／＼音調と曲節とを修練し、次で端場や軽い段ものに移り、多少は浄瑠璃の情を語るといふ事をも呑み込んで、爾しかる後、三段目もの四段目ものに移るのが、却て成功を速にする所以である。

古人の至言

猪稽古

『浄瑠璃早合點』には、「昔の稽古は道行より景事、節ごとを篤ぶくと熟して段物にかゝる、是は節の名を會得させん爲なり。今の人は其故を知らず、唯氣短く、我聲が能やら悪いやら、調子が有やら無いやら論に不及、始より三段目を稽古する、此等は向見ず猪稽古といふものなり。唯何となきハル、フシ、ス、エ、フシを二三十遍もくりかへし、先生を退屈させ、其身も精つかし、何にも覺へず、口直しにはやり歌諷ふてかへる、當世は皆此れなり。先づ稽古せんとおもはゞ、能き師匠を吟味して、聲の皮のむけるまでは輕き

稽古の要訣は唯一の熱心である

端場を習らい、譬へこゝろに覺たりとも幾度も大聲あげて語り見る、いかぬ所へは考をつけ、節を得と覺へたれば、夫れより程長短、序破急を尋ね問ひ、よく熟して二、三段を精出して語るべし。覺へたれば能にして、外の稽古にかゝるべからず。百日に百盃の道理にて、終には人にも聞かすやうにもなるべし。是も習ひ、あれもならひするは宜しからず。歴々の太夫にても同じことなり。上手の藝に何にでも面白なきことはあるまじきなれども、得と得ぬの相違なり、染太夫が大塔の宮薄雪、政太夫が忠臣藏九段目、鬼市の三段目、或は住太夫が伊賀越鏡山杯、いつ出しても相應の入りあり、此にて悟るべし。譬へていはゞ、誰れそれが三勝は面白けれども、誰れがのは面白ないといふ。同じ文句に同じ節、別に變りあるまじきなれども、稽古の熟せしと熟せぬの相違なり。其人々の上手下手心得にもあるべけれども、多くは稽古の厚薄にあることなり。義太夫芝居始まりて凡二百年近きに及べども、三段目語る太夫は、當代まで僅五、六人に限るなり。まして赤素人の初心として、三段目は入らざることなり。悲しくも二十年の功を積み、四十にして辨へ、五十より六十までを盛りとする。下手上手ともに積りし功は心に不及たさへば、物に光りあると光りなきがごとし。此義理を能考へ心長く稽古すべし。」

と訓へて居る、洵に至言である。稽古の要訣とて、別には無し、唯一ツの熱心である。疑つて、疑りぬくことである。百の箇條書を暗んじたりとて、唯一ツの熱心が足らざれば到底ものにはならないのである。

聲音修練の意義

順的助長的修練と逆的
對抗的修練

稽古の手初めには先づ順的
—助長的修練の方より入る
べし

稽古の第一の目的は聲音の修練である。されど此れとても亦別段の祕法のある譯でも無し。唯生理的、自然の理法に従つて、聲帶の機能を促進し、幾回か練習助長し、其の力を増し、其の量を増し、其の色彩を増すと云ふ事に外ならないのである。當初より三段目もの、四段目ものと、大ものばかりに手を著け、無理やりに大聲を出して見た所で、即座に効能の顯れて來ると云ふ譯合には參らないのである。凡べて何事にも順序ありと知るべし。聲音の修練とても亦爾り、一步は一步と漸次に強き練習に移り、日一日と聲帶の發達、轉開を期することゝすべし。無論少々の無理をしたにしても、強行練習をやつたにしても、數日ならずして恢復する。されば、大概は深くも考へず、生理的、自然の理法に背いた強行練習を事とし、往々之れがために聲帶の組織を害し、生れも附かぬ鹽辛聲—ばん／＼聲となり、一生取り返しの附かざる疵ものとなり、了ること、實例乏しからざる所である。娠義太夫などには其の例殊に多し

元來聲音修練の方法には、助長的、修練、順的と、對抗的、修練、逆的との二ツの方面がある。各自天賦の長ずる所に従ひ、甲の調子に美い所があれば、艶ものを語り、乙の調子に良い所があれば、どつしりとして重みのあるものを稽古する等、各自特有の聲量音調に應じ、夫々適應した語りものを選んで修練し、愈々益々其特長を助長し、發揮すると云ふのが、順的修練—助長的修練にして、斯道入門の手初めとして、先づ此の順當なる方面より入り、概要一般の修練を積むことが必要である。

されど、順的修練は、或意味より云へば、一種の偏固稽古である。長所は之れに依つて

一方に偏固過ぎたる片輪者
とならぬための逆的—對抗
的修練

逆的—對抗的修練の 意味

愈々發達展開すべしと雖も短所は依然として何時までも短所として残り、稽古の進むに從つて次第に其の差も太しくなり、果ては一方に偏固過ぎたる片輪ものとなり了るべききは必然である。されば四、五段乃至五、六段も稽古し、較喉工合も調ふて來たとすれば、順逆兩様交々併せ用ゐて稽古し、逆的修練—對抗的修練の方法をも取り、自己の不得手な、不足せる聲調の助長展開にも努むることとし、餘りに一方に偏した片輪者とならぬやう、修練を積むことを必要とするのである。

逆的修練—對抗的修練とは、乙の音に不足あるものは、無理にも乙の音を主とした語り物を稽古して其の不足を補ひ、甲の音に不得手なる人は、無理にも甲の音を主とした語りものを修練して其の不備の點を補足すると云ふ稽古の仕方にして、婉麗委遜として優にやさしき持前の美聲の人には、遙逕豪拓、凜手として動かざる語りものをも稽古させて、艶もあり、澁みもあり、優みもあり、強みもある語り振りに導かうとする修練の方法である。生來の惡聲にして『花雲佐倉曙』や『忠臣藏六段目』などを語るの外、何んとも方法なしと思はるゝ人にも『新版歌祭文』や『艶容女舞衣』などを稽古させて、惡聲ながらも云ふべからざるの味もあり、情もあり、優しみもあると云ふ語り振りに轉回せしめやうとする修練の方法である。

元來一段の淨瑠璃は、甲ばかりで往かず、乙ばかりで語れず、艶もあり、強みもあり、優しみもあり、澁みもあり、刻々變化の妙を極めされば、正本本來の意味を語り活かすことの出来ないものである。『三十三間堂棟由來』には和田四郎の出場がある。『艶容女舞衣』に

は宗岸がある。半兵衛がある。『繪本太功記』には光秀の出場がある。『新版歌祭文』には久作がある。盲の母親がある。艶一方では澁味が出ず、強い一方では色氣を失ふ。されば美聲の太夫はお柳を臺として語り、木遣りを種として語り、お園を臺として語り、サ・ハリを當て場として語り、お染を語り、連理引きを語り。悪聲の太夫は和田四郎を語り、宗岸を語り、半兵衛を語り、久作を臺として語り、盲の母親を種にして語り、『太功記十』の前半よりは寧ろ後半を身上として語る等、夫々目標とする所には差別もあるべしと雖も、しかと修練を積んだ聲音には又何處となく不可言の妙味あり、悪聲は悪聲ながらも、お園にも、お染にも、お光、久松、操、十次郎にも、夫々情味もあり姿態もある調子が出て來るのである。然るに今の多くの素人義太夫の連中の不心得なる、徹頭徹尾、順的修練―助長的修練の方面のみに没頭し、此れは自分の畑にあらず、彼れは彼の人の柄でなしなどと稱し、他も云へば自己も思ひ、逆的修練―對抗的修練に依つて、其の短所を補足修練すると云ふ注意の皆無なるは、餘りに速成的、稽古に趨り過ぎる短氣の致す所にして、嘆すべきの至りである。

されど逆的修練は決して聲音修練の原則ではない。餘りに逆的修練に急にして、折角の美音も、各自の特長も、滅茶くにして仕舞ふなどは、決して譽むべき話してはないのである。特長は何處までも保存し、美點は何處までも助長し、いよ／＼ますます其の美を濟すと云ふのが聲音修練の根本義にして、ド・ス・聲決して義太夫節本來の要望ではないと知るべし。要は片輪者にならないまでの修練の一方法としての逆的修練であ

聲音修練の原則としては何處までも順的修練

斯道には卒業期限なし
攝津大椽もまだくなれば
大隅太夫もまだくである

稽古に臨んで心得べき
廉々

根氣と辛抱

口を開くまでの辛抱一ツが
ものになるかならぬの境目

る。五段に一段、三段に一段位の程度なるべし。聲の皮のむけるほど強行修練を加ふる事も、一策は一策である。されど自家本来の素質をも考へず、しやにむに聲帯を潰して仕舞ひ、生れも附加ぬ片輪聲となつて了ふなどは、そもく愚の骨頂と知る可し。

要するに稽古は根氣である。熱心である。辛抱一つのものである。僅かに四段や五段を稽古して、夫れで一ト廉の語り人にならうなどは、以ての外のと簡違ひと知るべし。もく、く、淨瑠璃には、卒業期限なし。「藝の妙々奥底は限り知れぬもの」と云はれて居る。津大椽もまだくなれば、大隅太夫もまだくなりし。古來上手と云はれ名人と稱せられた人も、畢竟は程度である。比較的の名人であり上手である。斯道本来の極致より云へば孰れもくまだくと云ふべし。熱心に、精確に、順逆兩様併せ用ゐて修練怠りなく、氣長に樂んで斯道に遊ぶべきである。

稽古に臨んで心得べき廉々は、大要左の如し。

一、根氣よく熱心に、モ・二日モ・一日と出來るだけ辛抱し、よくく、呑み込んで、後に、口を開くべし。其の口を開くまでの辛抱一つが、ものになるかならぬかの境目と知るべし。早合點の不呑込みにては、幾段稽古しても到底ものにはならないのである。急げば廻れである、口を開く迄の辛抱、一日の差は、後に至つての千日の差と知るべし。「藝に器用の不器用と、不器用の器用あり。器用の不器用は習ひ覺は早く、忘るゝ事亦早し。是れ不器用におとるべし。不器用の器用は、習ふ事おそけれ共、忘るゝ事無く固し、是れ誠の器用也」と云へる古人の言を味ふ可し。

稽古の紙數

二、景事、道行、端場ものゝ稽古中は、可成紙數を少くし、幾回も同じ箇所を繰り廻し、唯記憶、練習と云ふ事を專一として稽古すべきなりと雖も、較力量も出來、段物でも稽古するやうになれば、紙數を多くし、一回稽古に限るべき也。

稽古本の研究

三、稽古本は繰り返し素讀玩味し、一段の筋、章句の意義、變化の要所、其の時其の場、其の人の氣分、性情を篤と研究會得し、此の意味なるが故に斯く語り、此の氣分なるが故に斯く發音すると云ふ、研究の視地を作ることが肝要である。

要所、は直ちに備忘の爲めに書き留めよ

四、節、詞を論せず、凡べて「句讀」「程」「間」「呼吸」「情趣」に注意し、稽古の刹那に感じたる所、師匠に口授を受けたる所は、即時に稽古本に記入し置き、忘れぬ助けとすること、肝要である。總じて節數、節まわしの長短、巧拙は、三味に合して記憶を喚起するの機會ありと雖も、語つての「呼吸」「程」「間」「情趣」の要所、は畢竟以心傳心的にして、頭腦に残らねば、其場限り、夫れまでのものとなり、了ること多し。例ねば、旅行日記を綴るに方り、コレと感じ、成程と聽き、面白しと見たる廉々は、一々廉書にして書き留め置き、忘れぬ爲めの用意に供することの必要なるが如し。後になりても考へ及ばず、夫れなり鼻に了るが如き、智慧のなきづばらな遣り方では、幾年經つても、淨瑠璃の眞髓を修得することは覺束ない義と承知すべきである。

五、詞にあれ、地合にあれ、單に發音を聽いただけでは、淨瑠璃の眞味は呑み込み難し。稽古に臨んでは、出來るだけ、師匠の態度、表情に注意し、顔の上下、向け、方聲の發し、工合、身構へ等に、至るまでよく、氣を附け、工夫一番すること、肝要である。殊更盲

師匠の態度表情に注意すべし

「節」を覺ふるよりは
「程」間「拍子」「呼
吸」「情趣」を呑み込
む事の苦心

初學者の惡癖

人低能者、手負等の發音の工合には、一層の注意を必要とするのである。

總じて「節」を覺ゆると云ふ事の苦心は、初心の内の事にして、既に相當の年功も經たりとせば「間」「程」「拍子」「呼吸」「氣持」「情趣」と云ふ事に注意研究し、淨瑠璃の黒味を出す云ふ事の工夫を第一とせねばならぬのである。

初學者の悪い癖は、二、三回も師匠の語るのを聽けば、直ぐに後に隨いてそろ／＼さぐりを入れて見る――五六日も經てばモ一廉覺に込んだ積りとなり、拍子も呼吸も滅茶滅茶の儘で語り出す――此れでは到底満足なるものゝ出來上るべき道理はないのである。第一師匠の語りに隨いてさぐりを入れる、所謂つれ語り、と云ふ事からして好ましくない事ではないのである。初學者の了簡にては、これこそ稽古の捷徑にして、節の長短、呼吸の緩急を計るには、此れに上こす良法なきが如くにも考へて居るやうなれど、大なる了簡遠と知るべし。其れでは、折角の師匠の節廻しの味も、詞の「呼吸」も、「間」も、「拍子」も、「程」も、自分の聲で打消して仕舞形は似ても心は似ぬ、不具的の稽古が出來上つて來る次第なれば、ゆめ／＼斯様な了簡遠はせぬ事である。

最も景事道行などの稽古なれば差支なし。隨分古い古

い斯道の苦勞人でさへ、師匠の後に隨いて語り、初心者同様の稽古の仕方を繰り返して居るものも少くないやうなるが、這是恐く、初心當時の惡癖が込み込んで痼疾となり、黙つて聽くばかりでは何となく物足らず、ツイ／＼口にも出ると云ふ始末にして、今更改むるにも改められぬと云ふ次第なるべしと思料せらる。されば初手より正しき習慣を付くると云ふ事が一層大事となる次第にして、ゆめ／＼此等の惡癖に染まぬやう、心

懸くることが肝要である。

正しき稽古の姿勢

稽古中脇目もふらず、一心に稽古本を見詰め、深く／＼印象を刻み付けて行くこと云ふことも必要は必要なりと雖も、其れでは眞個の稽古とはいかないのである。師匠とキツと眞向きとなり、顔を上げて、師匠を正視し、發音の工合、態度、表情の呼吸に注意し、一糸、一毫の微だも聴き漏さぬやう、心掛くるこそ正しき稽古の姿勢である。兎角初心の中は何んどなくきまりわるく、師匠の顔を正視することさへ、如何にも氣の毒のやうな感じのするものなれど、其處をじつと辛抱し、キツと師匠の態度、動作、發音の呼吸に注意し、刻々に變り行く微妙の氣合まで、會得するやうにならねば、眞個の稽古とは行き兼ねるのである。随分義太夫を語る顔付きは、親兄弟にさへ見せられぬやうなまづい／＼表情をするものなれど、平氣の平左で押つ通し、衆人稠座に罷りツン出て、臆面もなく顔を晒し、泣いたり、笑つたりするほどの度胸を持ちながら、イザ稽古となると、眞向きに師匠の態度、動作さへ注視することが出來ぬとは、如何にも通せぬ話にして、畢竟其の心得の至らぬ故に外ならないのである。

二度稽古、三度稽古

氣合のつくつたのは最初の一回

二度稽古、三度稽古と同じ箇所を繰り返へして稽古することは、決して得策ではないのである。總じて何事にあれ、二度三度と同一事を繰り返すと云ふことは、誰れしも嫌氣になるものである。淨瑠璃の師匠にしても亦同じ。最初の一回より二回、二回目より三回目と、漸次にだれ加減となるべきは、人情自然の理合にして、眞個氣合のかゝつた語り口は、先づ最初の一回に在りと云はねばならないのである。然るに其れとは反

結局悪い所へと覺て行く稽古の仕方

一回稽古に限る

杉山其日庵主人の「義太夫の稽古」の一章

對に、稽古を受くる弟子の方は、稽古臺に向ふてかしまる當初より、二度稽古なり、三度稽古なりと腹をくふり、最初の一回はソコに通ほり、ヤット三回目位になつて稍々本氣になり、さて此處なりと氣を入れて來る頃には、師匠の方は既にだれ氣味となり「間」も「拍子」も「呼吸」も抜けた形式一片のものとなり來つて居る次第なれば、結局悪い所へと覺て行くこと云ふ勘定となる譯合にして、洵に馬鹿くしき次第である。されば景事、道行、端場もの等、「節」專問、記憶一方の稽古の際なりとすれば、三回にても四回にても、つれて謠ふなりどうするなり、深く咎め立てをする程の事もなしと雖も、既に段物の稽古となり、淨瑠璃の情を語る事の稽古に取り掛りたりとすれば、徹頭徹尾、一回稽古に限ることとし、師匠の氣合の乗つて居る所を直寫しに寫し取ると云ふことの注意が、大事中の大事とせらるゝのである。

頃日演藝雜誌「素人」誌上に掲載せられたる、杉山其日庵主人の「義太夫の稽古」なる一章は、道に三十年來、親しく稽古もし、語りもし、十分の經驗と識見とを有せらるゝ主人の所言とて、句々悉く肯綮に中り、大凡義太夫の稽古に關して心得べき要項は、之れに竭されて居る。今左に其の要旨を轉載して、汎く斯界の同好者に紹介することとする。

義太夫の稽古

當今、東京には義太夫の天狗様が、幾師團と云ふもの鼻を蠢めかして、ガヤンと虚空を飛び廻つて居る、實に結構なことである、併し、唯だ盛んなだけでは誠に困る―此

の幾師團の天狗様は、皆稽古が悪い、三味線に合へば語れたと思ふて居る人が多いやうである、庵主の聞いた中では、最上等がどうやら三味線に合ふた人、最下等は合ふ合はぬの問題よりも、寧ろ語らぬ方が餘つ程その人が伶俐巧に見ゆる抵度である、庵主の識るところで、義太夫節稽古の初歩は

〔第一〕三味線の間をポツ／＼と一ツづゝ合點して呑み込む事

〔第二〕間が分つて來たら一息づゝの息の次方、延ばし方、縮め方、息の吐き方、息の詰め方、息の持ち方を覺ゆる事

〔第三〕それから三味線の撥數を覺ゆる事、即ち一撥聞いて語り出すか、二撥か三撥か、又合の手がどれ位あるかを覺ゆる事

〔第四〕それから運び方、即ち師匠の教へに従つて一ト文句をすらく／＼云ふところ、緩る／＼云ふところとを區別して呑み込む事

〔第五〕それがポツ／＼分つて來たらば、幾度も幾度も繰り返して、その覺れた事を鍛練して、すらく／＼云へるやうになる事

〔第六〕それがすらく／＼云へて來たらば、尤も一大事の稽古に取りかゝる事、それは聲の修養である。悪い聲でも良い聲でも、修養のない聲は締りが無い、作者の意思と、己の考へとを明白に徹底せしむることが出來ぬ

〔第七〕聲の修養の段になつたら、産字と云ふものを慥かに調べてゐなければ、力ある聲は出されぬ、ウロ／＼しては物事に力の入るものでない

〔第八〕産字が極まつたら假名を切ること、即ち引字なきやうにすること、を、す、こ
と、渡、す、こ、の、る、こ、と、す、ね、る、こ、と、等、の、細、目、に、入、る、事

〔第九〕それからは第一なまりを取ることに元來このなまりと云ふものはなまり
の稽古をする事で、吾々から云へば大阪の詞が皆ななまつて居るが、大阪の音
藝であるから大阪なまりを覺ねばこの藝にならぬ故に、三味線も、東京の人
などが弾くとその音がなまつて居ると云ふて師匠が叱つて居る、此が庵主な
ごでは一番困難で、これが奇麗に取れぬ爲めに、人に語り聽かすのに厭な氣が
するのである

〔第十〕これから稽古が大變になつて來る、それはその一段に出場する人物の區
別即ち老幼男女、士農工商、公卿大名、非人、乞喰に至るまで、音聲、詞の遣ひ分けを
語り、又大切なことは其の人物が喜怒哀樂、愛惡慾と、遭遇する境遇を識別して
語る事

〔第十一〕これから一層困難なのは、人工的に以上を識別したゞけでなく、自分の
腹が其の人物に靈化して無我の境に入つて、其の人々を語らねばならぬ事

〔第十二〕この風味が分れば陰に腹構が調ひ、陽に藝風が發揮して來るから、聽衆
がその上手と下手と、惡聲と美聲とに關せず、傾聽するやうになるものである
〔第十三〕この時に最も注意して修養せねばならぬのは、後の文句に移らぬこと
と、先急ぎをしてまくれぬことである

〔第十四〕 これ丈で、凡そ義太夫節の幼稚園はよいであらうと思ふが、それからが大分骨が折れる、先づ語る一段の風格を覺わること、それは師匠に習はねば分らぬ故、天狗を捨て、我が儘を忘れ、端場や切や、景事物や、道行物、又は二枚目、三枚目、四枚目若くば古人の語り、残した藝風等を丹念に納得し、音遣いや詞癖に鍛練を加ふること

〔第十五〕 これが合點に至れば、其一段の義太夫節を我が物と懐に入れ、心置きなく提げて語らるゝことになる、その時は名刀で物を斬るやうに、投げ出すやうに、語り捨らるゝのである、此の場合になれば、彼の語りて語らず、語らずに語ると云ふ思ひも依らぬ恐ろしい神通力の藝が出来るのである。

以上云ふたる十五條件に照せば、庵主などはどの一つも具備して居らぬから、素人の道樂としても悲觀せずには居られぬのである、庵主は三十年も前から、この藝が好きで、唸つて居たが、一度も料理屋や待合で人に聴かせるなどの大膽を仕たことがない、唯だ故後藤伯家の世話をした時、猛太郎伯の遺物故鶴澤仲助が取り残されて不憫で仕末に困つたから、庵主が先に立つて稽古を初め、同好の人々を誘ふて稽古をして貰い、その中先輩大岡育造氏に誘はれて紅葉館で一度語つたのが運の盡で、それから悪友共に引つ張り廻はされて、ざらに方々で語るやうに墮落したのである。庵主の義太夫を申せば

第一 聲が腐れて居る

第二 調子が低い

第三 修養が足らぬ

第四 音遣いが出来ぬ

第五 子役、姫詞が語れぬ

第六 歌物が浮ばぬ

第七 景事物が語れぬ

第八 道行物が届かぬ

第九 眞世話が口に廻はらぬ

第十 下らない事を調べた爲めに怯氣おどけが除かぬ

列擧すれば限りがない、その不完全な義太夫節を毎日親不孝な聲で唸り出てるのは寧ろ惨憺の所業である、併し、今から常盤津や、清元を修業して道樂の趣味を拵へ又、新たに耳目満足な友達を惱まして片輪にするでもないと思ひ、之迄幾多の負傷をさせた友達を馴染甲斐にと時々苛めるのである。

斯様な始末故都下幾多の同好者も少しは物の哀れと云ふことを考へ、斯道の困難な事を會得し、少くとも道筋一通りは稽古をして、上手下手は別問題として、聞いて筋道だけはあることを語ることに心掛けては如何であらうか。

三味線に合ふだけの稽古をして、跡は師匠の云ふことも聽かずに無暗に怒鳴り散らして強制執行に他人に聞かせ、子供は連れて来るな、靜かにせよ、小便には立つな、

嘯もするなど、まるで監獄でゝも義太夫を語るやうに制裁を加へて、碌でもない義太夫を語るは大正時代の痛事此の上なく、獨乙がバルカンの諸國を苛めるよりも慘事であると思ふ。

それに最も氣の毒なは、修練のない素人の中に、まるで藝人じみた風が流行り、ヤレ語り番の前後を争ふたり、聽人の藝評に腹を立てたりするのは、言語道斷である、如斯は自分と自分の品位を下劣ならしむるので、藝人は前後を争はねば出世の道に關係し、給金にも係はれども、素人は申さば紳士の遊藝である、紳縹の遊藝も是に至つて墮落の極と思ふのである。今庵主が此の遊びを共にして居る人々は、初心な人も多いけれども、品格だけは、我々浪人が屹度尊敬に價する人ばかり故、庵主は寧ろ光榮として此の遊びを共にして居るのである。

悪口ばかり云ふて濟まぬと思ふが之は悪口でなく、庵主が眞に斯道の爲めに此遊藝の發展を希望するから云ふ婆心である、若し参考の一助にもなつて皆々勉強して心ゆくまで此の藝に遊んで下されば、斯道の爲め庵主は如何に嬉しいか知れぬのである。云々

淨瑠璃を語る姿勢—
態度

淨瑠璃を語るに付いては先づ其の姿勢を正し、態度を正しくせねばならぬことは勿論である。往昔は出語りと云ふ事流行せず、名ある太夫の初目見得、追善、祝儀、乃至は旅先きより歸りての久々の出勤などの折々に、出語り出遣ひにて演じたる位のものにして、もどく／＼出語り其のものゝ本旨が、主として見物への禮儀、挨拶と云ふ事の意味より

今の出語

來りたるものなりしより、何處までも行儀正しく品位を保ち、語りものなども短き景事などを語り、首少し傾げてさへ、無作法なりと批難せられたるほどにして、慎みに度んで語つて居たのでありし。されど後年此の出語り出遣ひを以て、興行方策の一とするに王り、人氣汲收の方便としての出語り出遣ひの流行となり、三段目、四段目の段切の正念場まで出語りするやうになり來りしより、勢ひ行儀作法ばかりに構ふては居られぬ事となり、首を振るところもあれば、顔をしがめる所もあり、湯も呑まねばならず、鼻もかまねばならず、さまざま見苦しき所も見せねばならぬ事となつて來つのであつて、淨瑠瑠の情を語ると云ふ上より見れば、此亦已むを得ざる次第に屬するのである。

攝津大椽の直話を集めた『義太夫の心得』に、麓太夫が『義經千本櫻』の鮎屋を語つた時の事を左の如くに書いてある。

千本櫻は私の師匠の春太夫も絶えず語つて居りましたが、大物の中でも非常に、丁場が長うございますから、餘程音聲の好い確乎した體格でない、語ることが出來ませんのございます。先づ中古で之を語つた名人と申しますと、彼の有名な豊竹麓太夫と云つた人でございませう、是れは太閤記が新作になつた時に十段目を語つた人でしたが、文化の頃まで生て居られた様に聞て居ります、この麓太夫といふ人は初代豊竹駒太夫の門人で、古今に雙ぶ者のないと言はれた美音家でございませう、其の聲は誠に品が好いのみならず、極高い調子になると、黄鐘調までも行きますし、また極低い調子になると一越調をも自由に出すといふ、實に非常な名音でございましたさうで、

其の人がこの千本櫻を語る時の様子を聞きますと――勿論其の頃は尙だ御簾の裡で語る時分では御座いましたが、いかにも聲に品が有つて好適る位でございますから、この千本を語ります時には毎も文句に依つて其の行義の風俗を變へたと申します。一體それは何ういふ譯かといひますと、御存じの通り此の千本には小松内大臣の子息惟盛卿といふ公卿がありまして、それに點綴つてあるのが昔の家來の彌左衛門といふ町人と、其の忤に權太郎と云つて世間の人には暈と云はれる程の悪黨でございます。斯ういふ懸隔れた配合せの上に、尙だ腹からの町人の老婆といふものが有れば、又其の娘の里といふ生娘も加つて居るのでございます。そこで麓太夫がこれを語りますのに天性の美音でございますから、品の有る惟盛を語るのには成程結構でございますが、腹からの町人といふ老婆や破落戸の權太郎を語りますのには、餘程難義であつたに相違ございません。そんなら之れを何ういふ風にして語つたら宜いだらうかといふのが麓太夫の苦心談でございます。幸ひ御簾の裡でもございませうから、惟盛を語る時には、チャンと畏まつて、兩手を膝に置いて語り、また彌左衛門を語る時には、ズツと形を崩して語りまするので、それから權太郎などの所になりますと、不行儀に大胡座を搔くし、又時に依つては肩に手拭などを投掛けて、グツと下世話に碎けて語つたと申します。云々

麓太夫ほどの古今の美音家にして、尙且つ斯の如し。首一つ振らず、口一つ歪めず、膝に手を置いた正座の儘では、眞個の淨瑠璃の情呼吸氣合を語り活かすと云ふ事は出來

首一つ振らず、口一つ歪めずには、淨瑠璃の情味は語り難し

要は何處までも格を崩さぬと云ふ事が肝要

「淨瑠璃早合點」に云へる出語りの辨

ないのである。纂裡なるが故に無作法になる、出語りなるが故に眞面目になると云ふ次第ではないのであつて、畢竟作中の人となり、其の境遇となり、其の氣分となつて語ることが故に、姿勢も、態度も、夫々其の情其の氣分に伴れて、さまざまに變つて來るのに外ならないのである。眞の形で語ることがあれば、行の形ちで語ることがある。ずつとくだけて草の形ちで語ることがある。姿勢を正すと云ふも、態度を正しくすると云ふも、要は何處までも格を崩さぬと云ふ事を肝要とするの意義にして、行とやわらば、草とくずしても、筆法の格則には外れぬやう、注意せねばならぬと云ふのと同一義なりと知るべし。終始眞(楷)の形ちで押し通し、行草を書くことは相成らぬと云ふやうな、不合理な注文を出すのではないのである。

『淨瑠璃早合點』には左の如くに云つて居る。

出語りの辨 名ある太夫始て出勤するか又は遠國へ出で久々にて歸國し目見得さして出語すか或は追善祝儀事すべて諸客へ禮を厚くする爲なれば行儀正敷すべきことなり。昔有隣大和椀久ゆかりの十徳又は河内通振分鬘部鄆杯出語りせしに口も動ざりしは行儀正しき太夫なり、誠に出語は斯有べきことと諸見物感稱する、又西口政太夫寶曆年中、日高川入相花王狂言半にして、芝居類焼せり、普請成就して、四段目大道具なれば急に出來兼、四段目の替り用明天皇鐘入を出語せしに首少し、右へ傾ければ、見物の評判大和におさりしことなり。僅に頸少しかたむきてさへかくのごとし、當世は出語度度にして珍しからず、二段目三段目四段目の差別なく出語りする、此故は東國杯へ行て景事を知ざる太夫目見ぬに段物を語り始め、余國の風儀本へ移る、又は老て聲衰へ届きかゝれるを恐れて、まんざら願見ては悪口もいふまじそのり、さあればさて見苦しく顔をしばめ首を振迫し、鼻を五十度かんだ白

湯を百度呑だの、何太夫か顔はおかしい顔をする、淨瑠璃よりは首振のが面白い杯と評判する、三段目杯長き大場を語れば顔もしかめ身もだへせれば、力もなく水くさき故最なり故に古人は短きけいこさを語りたり、是見物へ禮をなすに行儀正敷せん爲なり、今にても老たる太夫の音力甲斐無は是非なし、若き太夫是能こに見ならひ町の稽古屋の初會納會等に來て出語する、故もなく強動さすこと不禮なり、今世にいふ粹詞に寒いさもいふなり、近年太夫仲間のよき臆病隠しなるべし、太夫座さいふて床に御簾を掛る古實ありて芝居の規模なり、今のごこくに、出語はづんで、床も後には入らぬ様になり、京都の首振芝居同然になるべし。云々

餘りに偏固な見解である

されど這は餘りに偏固の見解にして、往時の如き短き景事などの出語りの時なれば其れにても濟むべし。されど今日の如く、既に三段目の切、四段目の切までも、出語りにて語るやうな出語り本位の時代となつて來ては、首少し右へ傾げたとして、彼此れ批判論評を加へらるゝやうな窮屈な制限の下に、蹙つて語つて居るやうでは、第一に淨瑠璃の眞髓を語り活かすと云ふ事が出來ないのである。

自然に出て來る表情的態度と姿勢なるべし

されば通則としては、淨瑠璃の情を語るに就いて自然に出て來る表情的態度——此の態度の爲めに自ら變つて來る姿勢の變化なれば、決して咎むべきにあらずとせらるゝのである。自ら作中の人と同化し、其の情となり、境遇となり、其の氣分となつて、知らず知らず出て來る自然の舉動、姿態なれば、決して咎むべきにあらずとせらるゝのである。されど形ばかりを學んで情の届かざる——仰々しき——不自然な表情は、斷じて之を排斥すべきは勿論なりと知るべし

『はなわらひ』には、左の如く云つて居る。

昔より諸藝の中に淨瑠璃程衰へしもの有まじ。余國の事はしらねど、碁にては虎藏米藏清吉珍十郎、將棋にては宗壽清三仁左衛門、相撲にては小野川雷電、歌舞伎にては古人なれど嵐小六、手づま輕わざ曲馬上手多し。此の道にては名人はもとより上手もなし。是修行をせず、唯見へをおもとするがゆへなり。中興までは鐘太夫、春太夫、染太夫、此太夫など、義太夫節の俤げ残り有しが、政太夫住太夫行義を崩し、景事段物の差別なくめつたやたらに出語をし、顔をしかめ、首を振まはし、人形を白眼付、後には見臺を握り碎きそふなる勢ひ、不行儀とやいはん、言語にのべ難し。其餘の太夫も是を能事と心得、又しては出語をする。此出語に三徳あり。

一、五體を動かし如才のなきを見物に見せる。

二、若きものは男自慢も有、老人はあの年ばいならば聞ねぬはずとおもはず。

三、白湯の呑様を見物に見せる。

是三徳也。たとへば、借錢の斷りを自身出て直にいふごとく、見物も指向ふては、胴欲におだてられもせず、さればとて聞ねはせず、太夫の顔に目を付得心するも、笑し戻つての評判には、何々太夫の出語は白湯をよふのむのあたまを能ウ振るの、と評する事也。是其の本亂れて未納らずとは此の事成るべし。是等にくらぶれば、麓太夫の下手の方が結句ましならんか。淨瑠璃も染太夫、此太夫限りで見へたり。悲しむべし。

之れ亦「淨瑠璃早合點」と同様、餘りに局限的な解釋、批評なりと雖も、現下の素人連中の催會もよほなごとなるに、僅かに一季、半季の稽古の先生さへ、やれ見臺、それ肩衣と、見た所ばかりは一廉の太夫顔なれど、多くは「借錢の斷りを自身出て直に云ふ」的の先生方にして、「指向ふては胴欲におだてられもせず、さればとて聞ねはせず、太夫の顔に目を付得心するも笑し」と云ふやうな滑稽なり、苦しい目に逢つた事、自他わがひとともに随分覺わのゝある事である。古人も「出ぬを第一の當あたとす。我持前より輕き物を手短く語り、恥をすくなふかくを中の當とする。大體熟するまで出ぬがよし。相應語る人成とも、前後の出し物をかながへ、似寄りたる物は語るべからず。かつら物の後は時代を語り、愁の後は修羅かちやりを語る。是前後を助け、我も當る道理なるべし」と云つ居る。よくよく此の邊の理合を合點し、程々にして恥を少ふする勘考が第一と知るべし。

満座の中で恥をかい
て見るのも亦必要

されど凡べての藝事は、稽古ばかりでは兎角氣分にゆるみありて引き締らず偶たまには満座の中で恥もかいて見ねば、骨ほね身に泌み込まず、兎角は忘れ易し。可なりには年數を掛けて稽古をして見たものでも、半年も棄てて置けば、急所いそは記憶より去り、役に立たぬ半端ものとなり了ること、誰しも經驗のある事なるべし。されば聽客の迷惑なご餘りに顧念せず、づう／＼しく糞度胸を据ゑ、恥を満座の中にかいて見るのも亦必要にして、唯己れの力を圖りて天狗にならぬやう、慎みに慎み、下手は下手ながらも何處までも眞面目に、渾身の熱誠を傾け盡し、自己の限りを盡して語ると云ふことを第一とせねばならぬのである。此れやがて聽客に對する作法であり、禮儀である。此の眞摯な

何處までも眞摯に、自己の
限りを盡して語れ

形ばかり學んださま
の誤解

不體裁な形ばかり眞似た所
で何の效がある

る心掛けさへあつて語るとなれば、聽客も亦大方は辛抱して聽いて遣る氣にもなるのである。

多くの素人義太夫の先生達の中には、口を歪めさへすればうまく語れるものだと早合點し、伸び上がりさへすれば聲の出るものだと誤解し、さまざまの滑稽を演ずる人も尠くないのである。されど舌を使ふ事を知らずして無意味に唇を歪めて見たところ、何等效能のあるべき筈もなければ、其の氣が届かずして見臺に伸び上がつて見たところで、何の足し前になるべき筈もなし。從來より涎をくる人は淨瑠璃の上手と相場が極まつて居るやうに言はれて居るより誤解し、みねを張つて故らに涎をくる者さへある、是等は寧ろ滑稽と云ふべし。彌太夫、津太夫、大隅太夫等の伎倆もなく、心得もなくして夫れを學んで涎をくつて見た所で、何の取柄にもならないのである。もとく口を歪めるのも、涎をくるのも、畢竟は舌音（タチツテト）（舌端音）（ナニヌネ）唇音（ハヒフヘ）（唇音）（マミ）唇喉（音）に注意し、舌を遣ひ唇を遣ふ事に苦心の餘り、見ねも、體裁も構ふて居れざるより、ツイく可笑な口振りともなるのであつて、淨瑠璃の呼吸が詰んで、唾を嚥下す違さへなくなるから、自然に涎をくるやうにもなつて來るのである。さればいづれも自然であり、必要已むを得ないからの結果である。信心なれば宜しく其の原を質して之れに倣ふべきである。不體裁な形ばかり眞似た所で何の效があるべき。

拾遺 參考資料

蜀山人の見た淨瑠璃詞章の批評〔俗耳鼓吹〕 淨土雙六と『丹波與作』の道中
 雙六〔還魂紙料〕 白獅の尺八に武太夫の合奏〔俗耳鼓吹〕 元の吉原〔異本洞房語園〕 辰松
 齧と文三郎羽織〔我衣〕 塵〔塚談〕 説教節と歌念佛〔用捨箱柳亭記〕 淨瑠璃本刊行の
 初〔用捨箱〕『東西評林』の竹豊兩座の太夫評判記 『浪華其末葉』に載せた竹
 本豊竹陸竹三座の太夫評 半太夫節より轉した河東節〔奈良柴〕 京阪の
 芝居〔劇場新話〕 三代 筆太夫の硬骨 源與清の『三絃考』

著者云。大凡斯道に關する著書、隨筆類の主なる廉々は、可及的本文中に摘録引用して參考に資することゝしたが、尙ほ捨て難きものが澤山ある。今左に其の中の數條を抄出拾録して、稽考の資料に供することゝする。

▲蜀山人の見た淨瑠璃詞章の批評

『俗耳鼓吹』は太田蜀山人の隨筆であるが、中に海音作『青梅選食盛』、八重太夫の語つた『近頃河原の逢引』の猿廻しの唱歌、近松作『曾根崎心中』、『爐山搖』、『淀鯉出世瀧徳』等の詞章に付いて、左の如くに評して居る。

○淨瑠璃作者紀海音は、狂歌師油煙齋觸屋貞柳が弟なりと、稻毛屋東作の話なり。

按、油煙齋狂歌集置土産の序に、愚弟紀海音堂貞峨とあり。

紀海音が作に、青梅撰食盛さいふあり、おちよ牛兵衛の元祖なるべし、おちよ牛兵衛の名を忌しにや、お長牛平とありて、板行の本に、うめ木したる様に見ゆ故に末の方ところぐに、おちよとありて、お長と直さぬ所も、間同見の侍る。

第二段目に、牛平が濱松へ行たりし留守に、女房お長を姑がさりしを、お長がおば、牛兵衛も同意と心得、途中にて牛平にあひ、うらむことば妙也。

しうさめごのさがなふて、さりにくひ御きげんに、しんぼうするは何ゆゑを、男の顔をたのしみ、くらす女房に口出して、ひいきこそあるまいけれ、影ひなたになるほどの、きがれは折てやられても、さのみ人はしかるまひ、いふではないが、かはいそに物も見んごさぬいます、書出し一つする程の目は、親達があけておく、うみつむぎなら人あいならきりやうは、こなたの覺てあり、ちつさのおちめはばでなれど、わかい時は二度はない、さのみむりにもあらぬ筈。(下略)

手を書事な、かきだし一つさは、老婆の聲色奇妙く、末に七郎兵衛がことば見合へし。
きりやうは、いはぬ處も亦妙也。

此はでの字、始終に照應あり、此處に島原のかけおちものにまぎれて、追手のかゝる所あり、これも此はでの字に眼をつくべし、此次に姑のことばを書ぬき置見合へし。

同所お長が詞

此の世の縁はうすくとも、未來はながくそふべし、さたのしみにした我身をばむこく計、牛平をじつ見やりし目の内に、恨と戀の二瀬川、みちくるちしほを涙なる

深情妙語、多言するに及ばず、妙々

第三段姑のことば

ア、太郎兵衛様よいすいりやう、牛右衛門殿、牛兵衛は佛様めうさの中はちんぐ、ばなしたば此母お前の

様なよい衆の嫁子にしては似合ふが、此方づれの内にて、まゝなもたかにやならぬ、身ではだには小娘はながみは、のべでなければ手にふれず、わしらはお寺の奉加さへ、百目の銀は太儀なり、五兩さやらのくしなさい、鳥かぶさ程つゝ出して、太夫の道申する様に、せばい所を入文字、そこらあたりの青物はふみつぶされて、あくたになる。(下略)

此の姑がいふことをば、半分はかけれさ見ても、よほどはでさほみへたり、はじめのおばの目からも、おちめはちつさばでなれど、いへる位なれば、しうさめの目で無理さといひがたし。

七兵衛にじりより(中略)ごを聞いても其の様に、よい事計はそろはぬ物で、身共が嫁は随分さ世體はやうする、あらくにも、入文字はふまれども、一文字をふひかいて、是も又きのどく。(下略)

一文字をふひかぬさは、始の書出し一つかく程の目は明いてゐるさいふ、お長が手をかく事に對してはいへり、細かく。

右之通のこまかき文章の照應、一々かぞふるに違あらず、後世の作者も、かくる文段ありや、如何く。

道行のうちに、お長半平が辭世をのせたり。

はるくさ、濱松風にもまれきて、涙にしづむざくんざの聲

牛 平

○扇尾上 鏡山書錦繪 容楊 天明二年寅正月より中芝居 名代 藤原屋 小平太座にて大あたり也、此の時竹本八重太夫下りて、瀬川の陵をかたる、中に猿の場大あたり也、その唱歌

猿廻し、おしゆん 近頃河原の立引に見ゆ、
傳兵衛

おさるはめでたやなむこいりすがたの、のつしりさく、コレさりさばく、ノホンホヨホく、あるかいなさんなまたあるかいな、命の手コレくく、いたたくものじやさかづきを、さんなまたあるかいな、命そこでおはつがいたたく物じや、コレいたたくのふ蓋を、さんなまたあるかいな、コレよめ子のひるれば、ころりさいせく、ナアコレ、ノホンホヨホく、あるかいな、エコリヤく、ヤイコリヤ、さりさばく、ノホンホヨホ

くあるかいな、合おきたらたがひにだきつきやれ、それできげんがなをつたぞ、エ、あるかいな、さんなまたあるかいな、合くるりさかへつてたつたりな、たつてくれ、コレ、たいしやませ、ついでにひよりを見てたもれ、よい女房ぢやの、ノホンホヨホ、あるかいなさんなまたあるかいな、合ひより見たらばおちてたも、さうじゃ、おさるめでたや、

この猿廻しのうた、竹本八重太夫かたれり、大に流行せり、八重太夫俗稱泉屋平兵衛、人みないつ平と稱す。文化五年戊辰、中村歌右衛門芝中村座に下りて、この猿廻し大あたり也き。

近松戲文評（情農子著）

○曾根崎心中下巻 德兵衛上巻、德兵衛縁の下に忍び居、おはつ足にて喉をげつる所妙なり、可斷騰

此のよのなごりもなごり、しにく行身をたさふれば、あだしが原の道の霜、一あしづきにきねて行く、夢のゆめこそあはれなれ、あれがそれさか曉の、七つのまきが六つなりて、この一つがこんじやうの、かれのひゞきのきくおさめ、寂滅爲樂さひく也。

徂來先生云、近松が妙處、此の中にあり、外は是にて推はかるべしと、字佐美嘉助名は嘉字は于建字の話也。

摩訶十夜に云

一曾根崎心中の道行の中に、何くさして何くさ死に行身の道の霜、一足づくに消て行き云所迄作りしが、言葉盡て心たらず、いかに、さ案にほけたる、其の頃伊勢の涼菟攝に來合れけるを悦び、いかにして取續けんや、御助言し給へさ投かけたり、菟曳聞ながら、外の唾して酒のみ物云て笑ひ遊び、門左衛門ひたすらにすくめてたのめるにぞ、叟何やかや雑談しながら、夢のゆめこそはかなければ、成さもやり給へさ云しに、近松大に悦び、やがて作り入しと也、まことに詞情の盡たらんに、いさ佳く轉じたる文體、すらすらとして、行跡のいっやうにも取つづけやさき、彼決前生、後の文法なり、涼菟は妾異の作者、明和二乙酉年八月板

素堂涼菟は同時の人にて、素堂は享保元年に没し、涼菟は同二年に没す、されば明和二年に素堂五十周忌を甲ひしさいふは涼菟にはあらず、總て此條説脱あるへし

右は古素堂五十周忌追善之佛書 右小石川紅の束自書

○ 姫山姥之内 全篇は、頼光の遠巡退避を以て文をなす。

第一段 惜らくは敵なうつ事早し。

第二段 姫の奥へ入さる、散しの妙を得たり、不知此則山姥さなる事あたはず。

第三段 美女御前以法割愛、讀譬中書而始認其志一哀深於一哀。

第四段 山姥必ず奥を見まいぞ云、是安達原の怪胎也。

第五段 無味。

○ 百合若大臣野守鏡 後世儀太夫本の名に似たり。

第一段 第二段 さして評すべき事なし。

第三段 有馬湯處、此老本色、子竊父刀、使人感泣、別符殆死於浴室、忽如脱兎、奇々怪々。

第四段 島中事妙々、魔化爲女、妙一層、母子情態、宛然如晴、俊寛島物語及道藏大内鑑子別等、不能出於此節

圍中。

第五段 僞盲女餘波可笑

○ 没鯉出世瀧徳たる者

上卷

「こくぞうき世のたての大木戸、あけぬは銀のさがしの鬮、それつらくおもんみれば、

狂文 大じん客衆の秋の月は、小判の雲にひかりを傳、よひましましや長へんじ、おごるかすべきよほもなし、

滑稽 新町橋のはしのうへ、はし辨慶が長刀の、さや落したるごさくにて、うるくとして立たりしが、

下卷 妓東殺客藤五郎之條下

眞ヤアこりや、なんでころさう双物がない、帯をさいてしめころさうか、いやゆるりさする間は有まい、た

ば粉でふすべし、ろさうか、酔ふてさきへこちがしなう。

評云、瀟灑妙々。

▲浄土雙六と『丹波與作』の道中雙六

柳亭種彦は其の著『遺魂紙料』中に、浄土雙六に就いてさまざま考證し之を以て我國に於ける繪雙六の初めなりと、近松作『丹波與作』の淨瑠璃、道中雙六の詞章に、「南無諸佛分身」云々を云へるも亦、此の浄土雙六に縁由するものなりと斷じて居る。

繪雙六といふもの漢土には古くよりあれども、本朝にはふるき書には見えず、浄土雙六といふものぞ繪雙六の初めなるべき、それさへいつの頃よりあるか詳ならず、俳諧の發句には萬治寛文中よりあり、假字草紙に見ゆるは、貞享元年の印本西鶴二代男に、吉原の遊女の遊びたはふれて居ることをいふ條に、「或は手撰火わたし浄土雙六心に罪なくうかれあそぶを云々」又初音草断大鑑元禄十一年印本に「九月の中頃日待をせしに明がたき夜のなくさみさて小歌淨瑠璃物まれなごさまく」なる中に人の心の善惡はこれで見ゆるものぢやと浄土雙六をうちけるにやうちんへおつるもあり餓鬼道へゆくもあり一人は佛になりたりさてよるこぶ云々」

寶永四年近松門左衛門が作丹波與作の淨瑠璃道中すごろくの段に「これこそ五十三つぎをぬながらあゆむひざくりげ馬はいいい道中雙六なむしよぶつぶんしんを書た六字を六かくにきざむさくら木花のみやこなまん中に云々」さいふこそあり、道中雙六は原この浄土すご六よりうつりてのちにつくり出しともゆゑ、百年のむかしは道中雙六をふるにも、南無分身諸佛の六字を目安に用ゐしもの歟。

▲白獅の尺八に武太夫の合奏

淨瑠璃三絃の奥祕を道破した原武太夫の『斷絃餘論』の要點は、既に本書の本文中に抄出引用

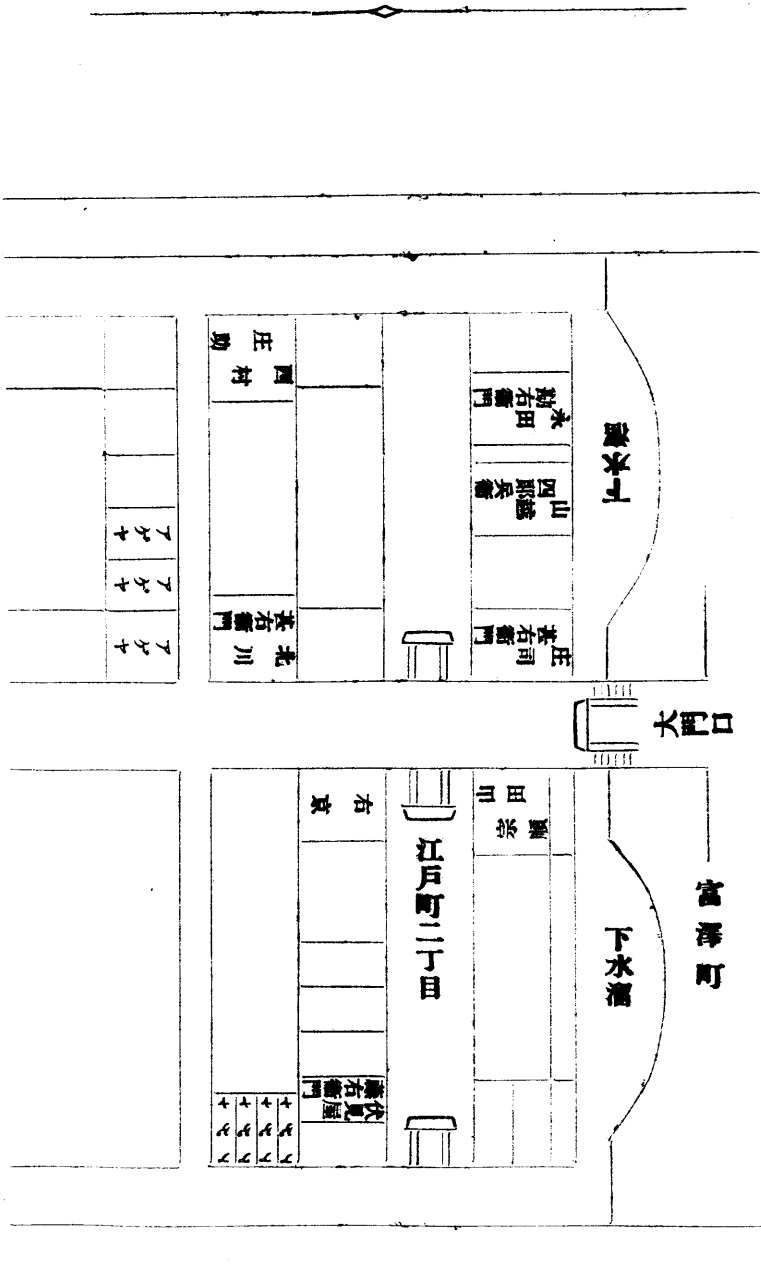
して置いたのであるが、『俗耳鼓吹』には左の如き逸話さへ傳へられて居る。之を以て觀るも、武太夫が如何に斯曲に堪能にして、斯道の人々に推賞されて居たかと思はるゝのである。

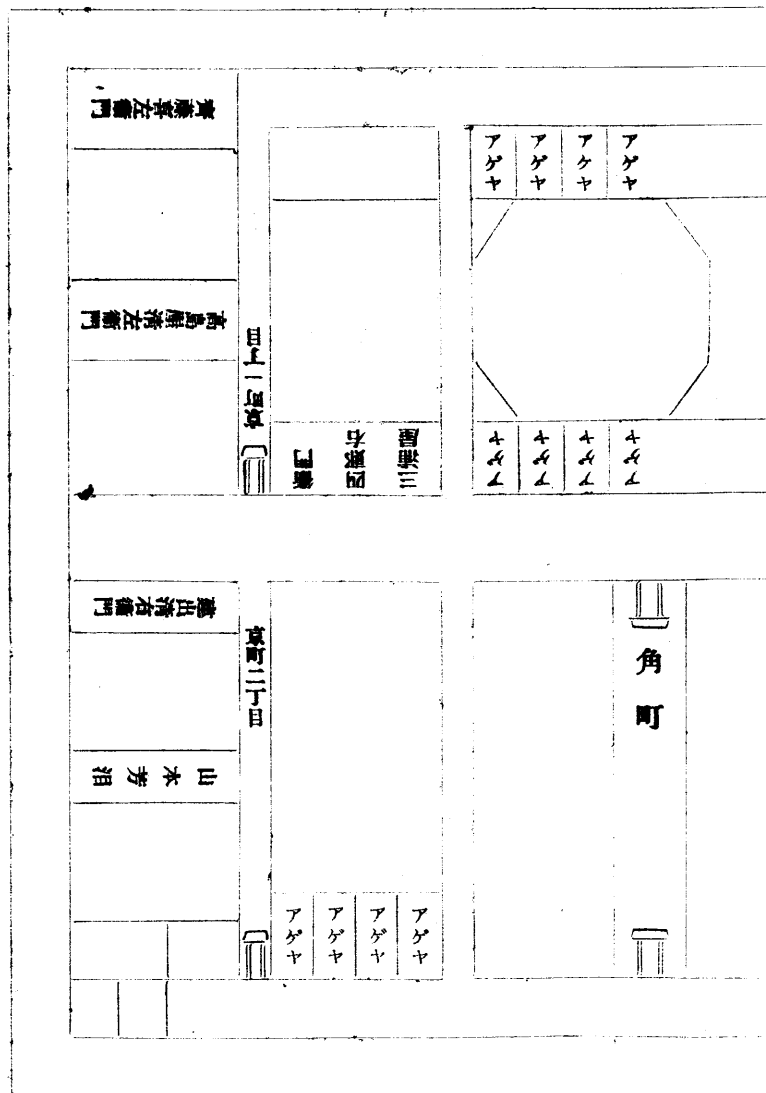
○原富五郎後稱武表徳は原富三線に堪能なる人なりけり、いつの年にてやありけん、市谷長流寺にて、原富の三線に白獅宗淨浄榮寺先住が尺八をあはせて、道成寺の曲をなせしに、頃しも秋の末なりしが、空にはかにもりて雨ふりけるさなん此の座にありあふ人々、その妙を感嘆しければ、原富笑ふて、かくる三線は淫聲にて雅樂にあらず、道成寺の淨瑠璃また古の曲にあらず、何ぞ天の感じ玉ふ事あらん、ほごよく雨のふりたるは、己が幸ひなりと申き、此の時先新九郎名鼓の先山彦源四郎名三線の歌舞伎役者尾上菊五郎幸梅市村龜藏五代目羽左衛門聞居て感じけるこそ。

此の時白獅が吹たる尺八は、放下せりぞ著ちやくさいへる竹也、此の竹長さ一尺二寸、もと越後國のある山僧、此の竹をきりて所持せしが、これをふけども音いらざれば、久しく床の間に置しに、ある日秋風ふきてその竹に入しに、おもしろき音の出たるを聞て、その竹を吹き見るに、よき音出たり、それより二なく秘藏せしが、鈴寶寺の普淨さいへる僧、尺八に堪能なりけるもの、これをかりて吹て返すとき甚是を惜しみ、放下著となづけて返しけり、山僧其の志の切なるにめでて、すなはち是にあたふ、普淨是を白獅につたふ、白獅死にいたるまで是を秘藏し、ある門生某に傳へしが、そのうち門生死して、又淨榮寺の白獅子に藏めけるこそ。

▲元の吉原

「元吉原は、今の和泉町、高砂町、住吉町、難波町、此所方二町四方也。瀧河岸は其の時の小堀也。今の大門通りは其の時の大門通り也。其の頃の遊女屋、京町右側角、三浦屋四郎左衛門、同左側角むかふ、三浦屋源三郎、是等其の頃の頃の大見世也」と『異本洞房語園』に見ゆ。左は同書に載せたる平面圖である。本書本文の「江戸淨瑠璃の前半期」の堺町葺屋町附近の圖面と併せ讀ふべし。





▲辰松鬻と文三郎羽織

辰松八郎兵衛江戸に下りて、辰松風をて一種の髪の結振りまで流行し、吉田文三郎江戸に下りて、長羽織の流行を作りたるが如き、人形遣ひ、淨瑠璃太夫などのなり、振りの時俗に影響したる事、『塵塚談』『我衣』等に其の記事あり、左の如し。

享保の頃、辰松八郎兵衛ト云人形ツカイ此風ニ結フ、辰松風トテ又ハヤル。針ニテ留ル。『我衣』
辰松シマダ享保中ハヤル。『我衣』

享保末元文頃に、都古路風の黒八ツ打羽織の出ル、長紐ナリ。『我衣』

寶曆四五年頃は、伊達男は短羽織にて、袖より下はやう／＼四五寸もありて、袖はかりのやうにてありし。明和二三年の頃、大阪より吉田文三郎吉田文吾などといふ人形遣ひ下り、長羽織を著せしを、皆人わらひけるか、其の時分より段々長くなり、文化七八年に至り、又々短く成しやうに見ゆ。『塵塚談』

▲説教節と歌念佛

説教節に就いて考證したる隨筆類は太だ多し。歌念佛に就いても亦詳しませず。今『用捨箱』『柳亭記』に載せたる此等考證の數節を紹介する。

天滿八太夫は説經淨瑠璃の太夫にて、芝居は堺町にあり、江戸名所記寛文二年の畫には大薩摩が芝居に並野真三座記貞享元年印本に載たる堺町の圖には、出來島と中村善五郎が二軒の芝居にはさまれて北側なり、元祿曾我物語十五年刻に「十文字さつまが景清門破り、天滿八太夫がかるかや道心」など並べいひしを見れば、萬治の頃より寶永中までおこなはれしなるべし。

風俗陀羅尼 寶曆十年刻 尺龍撰

冠いたはしや

浮世のすみに天滿ぶし

甲州長澤組

彼がかりし淨瑠璃節寶曆の頃は廢て僅に残りし事此の冠帶にて知らる若此の天滿節の奥州には近くまで傳はりしにあらすや天滿八太夫の事くさくさの草紙に見柳亭種彦撰『用捨箱』
 天滿節 天滿八太夫は説經淨瑠璃の太夫なり貞享元年の印本野良三座記に載たる堺町の圖を見れば芝居は北側にあり、江戸鹿子享五の巻に

説經座

堺町

天滿八太夫

權太夫
脇

重太夫

と見わたり八太夫の傳系及芝居起立の初未考尾陽戲場事始本寫寛文五年云々の條に「尾頭町東側説經操芝居興行天滿八太夫」と見わたりばや當時江戸に芝居をかまへし事江戸名所記の畫にあり、元祿曾我物語印本十五年二の巻「あるときは中村が芝居にて坊主小兵衛がやつし藝花井才三が長口上噂息しながら見物十文字さつまが景清門破り、天滿八太夫がかるかや道心をば心ならず聞てやる」などいふ事あり、按に八太夫は古き淨瑠璃をかたりしとおぼしく、予藏書あみだの胸割に八太夫正本と奥書したるあり、風俗陀羅尼寶曆十年尺牘撰いたはしや浮世のすみ天滿ぶし、甲州長澤組「寶曆の頃廢れたる證とすべし、天和笑文集二年三六の巻堺町の事をいふ條「くるる日かげを思ひ忘るゝ是ぞ大阪七太夫おなじく天滿小糸が地黃煎あまいもからいもよきもあしきも云々」さあるは天滿八太夫とつゞいていふべきを、天滿小糸當時名高かりし故、それにひきかへてかく狂言に書しものなるべし、天滿小糸の家今淺草八幡町大護院門前にありて水飴を賣れり、今は蒲屋同書此のつづきに云々ありて「おしやれば最かれ則八太夫古今無雙の名太夫おとにのみ聞くかりやうびんがも舌ぶるひしてかちばじなりしをり裏聲いつくしく」とあれば、天滿八太夫の事なれど、中へ小糸の名をいれて書しゆゑ考へざれば聞ゆがた

し。

小糸如此のいさ古き看板ありながら、今はしるこ餅ざふにもちなうれり。

前に引し尾陽戲場事始に寛文八年云々尾頭町以下前の如し「太天滿十太夫脇部右京歌小宮屋四郎左衛

門 横笛瀧口 善光寺開帳」

又元祿八年云々の次にも、天滿十太夫の名見たり、同時に十太夫さよびしもあり、又説經者由緒書正徳二年の條に「日暮八太夫」其の後の宿所書上に京猪熊通り四條下ル町説經日暮八太夫さあるは別の家なるべし。『柳亭記』

日暮小太夫 説經淨瑠璃の太夫也、寛文五年刻京雀の畫に四條川原にしばぬあり、紋所だ尾陽戲場事始

「寛文五年云々尾頭町西側にて説經操芝居興行夫、日暮小太夫、こすひでん、山榎太夫愛護若、かるかや、小栗

判官、後徳丸、松浦長者いけにほ小さらし物語」と記し、又寛文八年云々の次に「日暮市九郎同小九郎右

兩人若衆にて出語、ごんらん記、誓願寺本地」又天和二年の條日暮卯源次などあるは小太夫が子歟、小太

夫が芝居は久しくつゞく、代々名を續ぎしにて一人にはあらず、江戸八百韻延寶ある時は愛宕高雄の作

おこし、安昌」説經芝居日暮のたま、來雪」俗つれ、西鶴一の卷「門に禁酒の札を石に彫りて立

てべし、此いひ置より外なく、昨日も日ぐらし小太夫が説經を聞けば、あれ程力も強く利發なる小栗殿も、

横山にもりころされ給ふ」とあり、説經者由緒書に「正徳二年云々日暮小太夫唯重」其後宿所書上に

宮川筋七丁目さあり、語に見たり、小太夫が孫子世におちぶれし事、近代因果物、京羽二重にあるべけれど、今本をうし

なひたり、重て書入べし。『柳亭記』

日暮の歌念佛 日本永代藏、西鶴作元祿一の卷「歌念佛の日暮さいふは昔伏見の御城代の時諸大名の

御成門軒を並べてかじやき金銀珠玉をちりばめいづれのたくみさんごなけつりなして紅梅の枝に

春をうつし五色の浮雲しづかに龍はさながら動き虎は其の儘かける勢ひ見ぬ、唐土の二十四孝を越前

殿の御門にあり、と美景の彫物に此のきよなる事詞にのべ難し五十五萬石三年の物なり是に入けるとなり彼京都の鉦たゞきうら盆の頃勸進にまぬりしが朝日影御成門にうつるひしに是に氣をこられてながめけるにまづ大しゆんの耕作のころまだら牛のいかな事作り物さは思はれず淀鳥羽にかへる事をさごめおのが友かき道連をこひける中是にめをよるこばしげに秋の日のならひにてはや暮れて驚き願ひし功德あき袋かたげて都に歸るを見て人申ならばし日暮坊を其すゑ、今に名高き云々」日暮の名義見はたるゆゑ後のさうしながらまづ初に抄出西鶴一代男天和二年の卷「交野牧方葛葉にさしかかり橋本にさまれば大和の猿引西の宮の戎まじまはし日暮の歌念佛かやうの類の宿まで同じ穴の狐川身をさまゝに化るばかり」日暮の名ふるくこくに見はたり、按に人倫訓蒙圖元禄三年印本七の卷に歌念佛、丈念佛といふは萬徳圓滿の佛號なり、それに節をつけてうたふべきやうはなけれど、末世愚鈍の者を道引きせめて耳になりさふれさせべきの權者ごんの方便者ならん、それを猶あやまつていろゝの唱歌を作り、是を鉦に合せてはやし、淨瑠璃説經のせすさいふ事なし、末世法滅の表じなり、悲しむべし」と見は、又餘情男元禄十一年刻「物いはす互の泪山莊太夫の歌念佛船と船との押別れ」といふ事あれば、元禄の頃は念佛にうちまぜさまゝの事を歌ひしなるべし、されば日暮小太夫は歌念佛より出たるか、又小太夫が説經に似たる念佛ゆゑに如此いふか知らず。歌念佛ふるく見はたるは抄録鷹筑波集寛永十小歌ぶしにも申す念佛」尺八の短き身をば打捨て、政明」寛永中よりあり又不可徳物語慶安元年上の卷「當世にはやりし貧窮飢寒に及びて我道心はなたやが風を是さしくわんくわつ寛潤念佛を申印本上の卷「當世にはやりし貧窮飢寒に及びて我道心はなたやが風を是さしくわんくわつ寛潤念佛を申洛陽をばひぬめる者普し」寛潤念佛も歌念佛の類なるべし、吾吟我集慶安二年序「宇治山の貴賤群集すれば茶つみの歌のかすかにしてははじめをばりたるならすいはと秋の月にありく歌念佛のあかつきの雨にあへるが如し。」

歌念佛の發句

續山の井寛文七選

後砂金袋三延寶

空林風葉自天和三撰

同集も浮世念佛

都曲元祿三撰

瓜作元祿四撰

歌念佛附合の句

廣小路不延寶六年撰

千代見草寶永印撰

紙 蠶享保十撰
年貞佐四

塵 取延寶七撰

尼蛙聲や殊勝な歌念佛

歌念佛と聞や驚時鳥

初午や林にいさむ歌念佛

浮世念佛稻妻の影や墓廻り

競馬見ぬ人や河原の歌念佛

歌念佛申さん嵯峨の櫻狩

はらびける歌念佛の聲添て

爰に佛有り壬生の忠峰

小袖ほのめく出格子の間ま

我思ひ唱へてくれよ歌念佛

羽根切り雀縁の下出る

後世よりも今を樂む歌念佛

出格子あけてつま戀の鹿

歌念佛聲聞秋ぞ物思ひ

未 覺

作者不知

申 照

可 不

同

不 角

流 也

一 意

貞 佐

長 虹

常 矩

同

『柳亭記』

近代因果物語「寛文の頃迄世にもてはやされける説經太夫に日暮さいひし者は世に類なきほまれた
殘し今も片田舎の者は折ふしこまに物忘れの種にじん徳丸さんしやう太夫などいひ出ける元祿十一
年の頃迄日暮小太夫さいふ者あり美濃尾張國々をめぐり説經をかり辻打の芝居に傀儡を舞して渡
世しけるそれより世くだり人さかしくなりて如何なる國のはてひなの長路の口すさびにもあひこの

若なさいふふるびたる事はいはず唯わつさりさ時^は行^は歌角太夫節こそよけれさ行くもかへるも耳をさ
らへて顔をかつたぶけ七小町杉山兵衛などいふ物かしほりあげ又は上方へのぼり僅の讀賣して歌びく
尼などの口眞似をほしく覺^はて日待の家に行てうたへど何か聞わく方もなく老人の噂にも昔の小
太夫は袖袂を聞人もぬらしけるがなごさいひあへり聞おさりすればそれも廢り人形つかひにならば
やさ思へどそれも今時のおやま五郎右衛門が風ぞ手づま善右衛門が流などさままの身振をうつ
しなかゝく生きたる人の如し今はせん方なく人形をも火にくべ雪の夜の寒さをしのぎおやま人形ひ
さつ殘して地藏の道行などやうくさうたひあるき袖乞してぬけるが今はくらしかれ其の人形も火
にくべさんぐに罵り汝故にかくかんなんをなすなどいひけるがげちくさ鳴りてもはくぬ飛つき、
ふるひ落せどもおちす井戸へ落て死ける夫人形の思ひならんさ人々いひあへり」〔柳亭記〕

▲淨瑠璃本刊行の初

柳亭種彦の『用捨箱』下巻には、「淨瑠璃本刊行の初」と題して左の如くに記して居る。

其角が著焦尾琴に、「童謡歌舞のいにしへを思ふに、明暦年中の雙紙に登八島下り八島さいふばなやか
なる事ども十二段に分たるあり、六字南無右衛門正本と奥書して侍るこそ、數奇ものゝ名にふれたる雅
なるべけれ」とあり、其角は寛文元年の生なり幼ききは是等の草紙を翫弄しを思ひいで、當時の好事の者
南無右衛門が名をかりて、奥書を記しくならんさいひし也、又操年代記にも非上市郎兵衛播磨前には、淨
瑠璃の彫本なかりしやうに記せり、此の市郎兵衛は明暦萬治頃の人なり、今傳はる細書畫入の淨瑠璃本、
宇治の姫きり鏡がへ、贅の類を見るに、明暦萬治の年號ありて、それより古きはなし、操年代記は淨瑠璃の
作者にもたち交りし、西澤一風の著なれば、此の説にしたがひたるを、友人難波の其樂子笑ひて、八島一冊
を贈られたり、寛永にはや彫本ありしを、初て知れり。

○此の草紙は義經が奥州及羽州なる佐藤莊司が許を訪玉ふ事を記せり、下りやしまさいふ是なり、矢鳥は出羽國由利郡の地名、西海の屋島にはあらず、此の六字南無右衛門の事、ふるき草紙あるべけれど、彼不幸にして其の書を得ず。

〔用捨箱〕にはやしま道行の本文及挿畫の一部を模寫して示しあれど略之。

東海道名所記に、「淨瑠璃は京の次郎兵衛さかいふ者、後には淡路丞と受領し、西の宮の夷かきをかたり、四條川原にして鎌田政清が事をかたりて人形をあやつり、其の後、ごうの姫、阿彌陀の胸割などいふ事をかたりける、次に河内左内さいふ者出たり、女にも南無右衛門、左門、よしたか、などこて淨瑠璃をかたりける、又 古郷歸江戸貞享三年淨瑠璃の起りは云々の條、「京田舎遠國端島まではやりける程に、四條川原にて芝居をたて、六字南無右衛門といへる女太夫かたりける時、十二段ばかりはぐや人の聞ふれて、めづらしからざるこて、舞にまふ、やしま、高館、曾我などを彼ふしにかたりける」とあるを見て、女なるを事を知るのみ、傳系未考、西鶴大矢數延寶八年吟に「淨瑠璃やかかなる風の末の段」といふ句に、「念願六字南無右衛門さて」と附、又同人作の讀本 二十不孝貞享五年日本に、「南無右衛門節の淨瑠璃をかたる」といふ事あれば、西鶴が現在の頃までは、彼がかたりし曲節の傳はりてありし歟、借難波より此のやしまをめぐまれて後、説經淨瑠璃 三莊太夫さいふを得たり、是又摘用して左にあぐ。

可惜卷尾に西洞院通り長者町さのみ記して、年號及板元の名を闕、又友人豊芥子同説經淨瑠璃 かるかやを得たり、是には年號ありて太夫の名を不載。

〔用捨箱〕にはさんせう太夫の本文及挿畫の面影を示したれど略之。

此のさんしやう太夫の草紙と合せて、寛永中大阪に與七郎さいふ者ありて、はやく説經の印本もありし事を知れり、此の二種は三冊に綴て段を分ず、前の二本にくらぶれば、かるかやの草紙は大形なり、按るにやしまと三庄太夫の畫は全く同筆とおぼし、かるかやは異なり、七人比丘尼の畫人なるべし、今傳はる七人比丘尼に

年號を缺たるが多し、友人伊勢の津に在る春明の本に寛永十二年とあり

〔用捨箱にはせつきやうかるかやの本文及挿畫の面影を示したれど略之〕

前の三莊太夫の初には丹後の國。鐵燒地藏の事をいひ、後のかるかやには信濃の國親子地藏の事をいふは、説經の微意を存したるに似たり、偕やしま。かるかやの二本に、板元喜右衛門とあるは、江戸通油町鶴屋の祖なり、淨瑠璃屋の號寛永八年にあるを見れば、是より前に數十種の彫本ありし事必せり、されば初て刊行せしは、元和年間ならんも知るべからず、こゝに摸したる冊子三種とも、昔ふどり本さくなへし物の鹿悪なるにて丹綠青を筆まかせに彩色さもなく點じて最古雅なり、七色賣の條に引たる小栗判官も、必當時の彫本あるべけれど未見。

▲『東西評林』の竹豊兩座の太夫評

『東西評林』寶曆八年板行と『浪華其末葉』延享四年板行とは、新道好者に取りては洵に得難き参考書にして、

『東西評林』には竹豊兩座の太夫の細評あり、『浪華其末葉』には當時の大坂操り三座―竹本、豊竹、陸竹座の太夫の細評あり、其の本文の一節は既に本書第九章頁三〇六以下に抄録して居るのであるが、尙ほ其の殘りを拾録して參考に資することとする。

東西評林

罷出たる某は八幡大名の妻女、ヤア／＼局達腰本共は皆打揃ふて詰めたか、イヤ今様に過は申すれど召使ふ女は唯二人此の者共が此の程は吾儕に暇も乞はず何方へやら行走てござる、承はれば今朝程歸つたさござれば、呼出して急度折檻を加へふと存じます、ヤア／＼お本お豊はお居やるか

〔兩人〕アイ、御前に

〔女大〕

名お竹御前

何じや其の方達は隙をも貰はず、此の間は何方へ行やつたぞ

〔兩人〕大阪へ参りましてござる

お竹御前

何ぞ大阪へ行は、主人に暇を乞はひでも苦敷ない法でかなおりやるかの

お本が曰

御最ではござる

ざりますれ共御用の繁き御形さまなれば、願ひました共御暇が出来ますまいと存じ、お豊と申合せ忍んで参りましてござります

お竹御前

夫は何の用が有て

お豊が曰

御前様には毎度大阪へ御越遊ばされ、道頓堀の

操芝居竹本や豊竹の替り浄瑠璃を御覽遊ばさるを、餘り御浦山しう存じ参りましてござります

お竹御前

何さいやる、浄瑠璃の芝居へいきやつたさや、夫ならそれと知しやりなば、札錢や棧敷のおあしな、くわつたさ

お本が曰

前々御供に召連られて見物を任りました節

おまさう物を、して、嘸面白かつたで有らふが、
さば違ひ、淨りりの作には珍らしい趣向を思ひ付、太夫衆は節付も功者に面白ふ語られ、又採道具、建衣裳の結
構さ、働きの見事さ、中々言葉には盡されませぬ

お竹御前

さこそ、西と東とどちらが能と思やつたぞ、噂

を聞けば去年の冬、兩座共に替り新淨りが出たさ有が、外題は何さいふ事ぞ

お本が曰

筑後の方は十二月

十五日々、昔男春日野小町と申て、作趣向共に能出來、扱も、面白事でござります

お豊が曰

サイナ私は

餘り面白過たかして、一日頭痛と欠息で暮しました

お本が曰

チ、おれもそなたにつかれて越前を見物し

たが、欠くびの替りに胸が悪うて、嘔づきが出て難義致しました

お豊が曰

チ、いやんな、今度の新淨り、極

月五日が初日にて、祇園祭禮信長記、作と云語り様と云道具建の見事さ、面白ふて氣が晴れて西々した頭痛が

お本が曰

當流の

さつぱりさなをつた、道すがらもいふ通り、竹本最負を止めて豊竹宗に珠敷を切なさんせ

根本根元の筑後の芝居を其の様にそしりやつたら、いさしや罰が當るぞや、私次第に成て是非共竹本連中に

お竹御前

ヤレ、兩人共に女子の端たない、静まりやれ、東も西も面白ければこそ、大阪中

は云に及ばず、國々の端までも、兩座共の淨りりが葉流ではないか、其の様に片意地張て依怙最負をしやるこ、

此の屋敷に奉公はならぬぞ、當屋敷の代々淨り操を信仰し、見物する因縁、其の方達はいまだ知りやるまい、

兩人

ハア御床几

お竹御前物語り

抑

當屋形兩竹氏の景圖と云は、さつみの、其の昔、竹原天皇の王子大和竹の尊より數代の末葉、竹野の竹左衛

門竹世の代にいたつて、竹の齒生の家筋を放れて、民間に出、竹田村と云所に住居せり、又其の頃、鎌倉の最明寺

殿諸國行脚に廻らせ給ふ折柄矢簞竹のごさく降續きたる長雨に凝らせ給ひ御心は矢竹に思しけれど雨はあがらず、竹の子發張はちりの笠を被り、竹左衛門が竹垣の邊りにイみ晴間を待せ給ふ間に日はたけたり、詮方盡きて是非なくも、竹の網戸を押開き竹椽に立より一夜の宿を借給ふ、折節お申もたんご空敷思しける故か、出来合にても早ふくご御所望有、さもしけれ共幸有合竹の子の煮染を平皿にうづ高くもり、竹箸添へて差上げ、舌打して召上られ、精進物の水くさきは喰れぬに、扱もく醬油が能しゆんでうまさ甘露のごさしご御囊美有、竹の子に醬油が能しゆんださいふしゆんの字ご甘露の様なのかんの字を取て、竹の子の煮物をばしゆんかんご號稱なづけしは此の時よりの因縁也、猶又何かな御慰みにもがなご竹左衛門は尻ひつからげて身繕ひ、手頃の竹杖おつ取て突立上り大音上ッ、ンンンン竹本氏の大出来淨るり國性爺の千里が竹の虎の段和藤内が身振、操人形の所作、又次には火吹竹をしやに構へ、豐竹の當りもの親子三人跡や先成道行連吹の尺八竹、響の有竹仕儘して慰め奉れば、最明寺殿御感の餘り、風呂敷包より尺長紙ご竹の矢立を取出し、西國にては筑後に竹本の庄、東國にては越前にて豐竹の庄、合せて二箇所の竹の庄、竹世が子々孫々にいたる迄相違有ざる自筆の狀、蟲頁連中ご書付せし提燈に取添給はつたる安堵の御教書、竹世は是を頂戴し、夫より次第に家富榮に、苗字をも兩竹氏に改め、名を筑越の大輔ご號し給ふ、かゝる目出度淨るりなれば、此の儘差置は勿體なしご、庭前なる竹藪の中に石の唐櫃を拵へ、時頼記國性爺二番の淨瑠璃を替り、ぐに一段語つては彼唐櫃の中へふつご吹込、又語つては吹込ける程に、後には石の唐櫃の蓋のふうわりふうわりご吹上る程語り入、其の上には社を建、淨瑠璃大明神ご崇め奉る、斯由緒有此の方の屋形なれば、其の方達も西の東のさいふ隔てなく、兩芝居共に随分ご蟲頁をしやれ、扱當時竹本豐竹兩座の役者中、藝の位所定めを、殿様の御慰に書せられ、吾儕に給はりし一書有、幸是を立にして、評判をいふて見やうではないか。

お本が曰 歌舞伎役者衆の藝評は前々よりござりますれど、淨るり芝居の評判は終に承はり及びませぬ、壁に耳ご誰ぞが聞かれて、萬一逆答はござりますまいか。

お豊が曰 惣じて芝居の狂言には、往古の帝王王子公卿大將方、夫より下々迄の善ご惡ごを正し、善道

に導く便になせる教へなれば、此の評判も是れに順じ、何の遠慮もござりませふ。御竹御前曰 そんなら互に云て見や、併し必ず依怙がましひ評判は無用にしや。兩人曰 畏りましてござりますと彼書を開き、是は春日の永々まご何よりの御樂しみ。御竹御前 君は千代ませく、三人同音縁言を祝ひ歌の有難の時代也。寶曆八ツの春

豊竹筑前少様

竹本大和様

お竹御前 筑前様初めは伊太夫さまやらん云々由、元文二巳年大政入道の淨るりの時初て竹本座へ出られ、初床の時より修行の功を積れし程有て評判能其の次の替り行平の時此兵衛の場より彌名高く成、則此太夫と變名せられ相續きて當りをさられたり、延享元年子の秋播磨椽死去せられし故、眞の見物力を落し芝居の相續いかに當惑せしに、此太夫勝役三段目の詰を請取富士見西行を大きに出来され、菅原傳授は猶以て大當り、又千本櫻も評判能其の次、忠臣藏の九ツ目は古今奇妙の語り方に、大阪中の耳を驚かされ、筑後播磨の再来か、諸人悦び居たりし所に、其の年の冬より豊竹座へ立越され、今の世の三段目語り益々評判能剩さへ筑前少様と受領せられし段、先以て目出度お手柄く。お本が曰 仰の通西の座に居られし時は大きに評判能かりしが、共東の芝居へ來られし顔みせ淨るり橋供養を初め、其の次のかしくの大當りにさへ此のお人の當り目はなく、其の後ははさいふ大出来は終に聞ませぬ、然れば大和椽殿をなぞ巻頭と御出しなされぬ、椽様の御書付には大分依怙が有か、存じます、憚りながら是は座並を御替遊ばして能かりさうに存じます。

お豊が曰 お本殿だまらしやれ、和田合戦と頼政と菟萱桑門との三番の古淨るりは、太夫本越前椽殿語られし場なるを、此の人なればこそ面白く勤め給ひて、町中が大きに悦んだではなかつたか、作が出来故に當りを取れぬは、此の人計りには限らぬ、作の能出来た一の谷と義仲の三段目、身替り地藏和讃の愁の巻、又前九年の三ノ切は、忠臣藏の大當りよりは増つて面白いとの評判、大阪中は云ふに及ばず、諸國の端々までも響き

渡りしに其の方の耳へは入らなんだかい、聾の若人のいそしや薬師様へ願をかきやいの お本が曰 成程耳へ入つた先年より數多の替りの中で一度や二度はまぐれ當りさいふ物も有筈也筑後座を勤めて居られし時分は當り通して能かつたか、豊竹座へ行れてから評判が目入ッて笑止に思ふ先づ此方の大和椽の大當りさいふは去辰の年竹本座への歸り新參の顔みせ淨るり大内鑑の子別れの段次に戀女房の重の井がうれひの場次に愛護雜の替りの節、政太夫殿錦太夫殿共に京都の座へ行かれし留守事に一人しての大當り、何と此の様な競べ事が筑前椽の方に有たかや、其の上出語りの勿體と云聲と云、今の世の大名人と云は大和殿の事、筑前殿杯は足本へも行届かぬ事、又過し盛衰記の鐘の面白かつたを思ひ出せば、私しやもうア、いしんき、今でも氣がも、や、い、とするわいの お豊が曰 ナ、輕忽り、そなた計氣をもやつかつたさて、彼方には何共思やせまいに、いかひおせくの何じや筑前殿が豊竹座へ越されたを笑しさうにいやれと、其方の鼻眞の大和椽は、三輪太夫と云し初心の比は東の座に久敷勤め、夫より出羽の芝居で伊藤と名乗、其の後西へ住んで竹本内匠太夫と號し、又東へ歸つて豊竹内匠より上野椽と成、又夫より京都へ行て竹茂都大隅と云、又筑後の座に歸り、今は竹本大和椽と名乗らる、扱も、あんな心の多い尻の居らぬ男はわしらはいやじや お本が曰 尻が居るがすじらうが、そなたの様なお田福を大和殿が女房に持ふと云はせられまいし、夫は藝の評判さいふものではないなうて、悪口をいふて打込のか、エ、身が焚て腹が立、囁付ぞや お豊が曰 そなたは自慢らしう大和椽の出語り呼ばりを召るれど、粟島系圖の切に出語りをせられしが、見物の請が悪かつた故にや、漸二十日程語つて仕廻はれたが、夫でも出語りの名人でござるか お本が曰 筑前椽受領の祝儀に出語りをせられたる、其の方計は能いと思ふて聞きやつたか、何ほ片意地に鼻眞をしやつても、世間の目と耳とが證據じやもの お豊が曰 其所が名人の發明、見物の請の悪ひを見て取つて七日語て止られた、兎角淨るり太夫の肝心要の場は三段目の詰こそ大事なれ、大和椽は三でも四でも大切な段切詰の場が、不得手さうな自身にも氣が付しやら三の詰を語られしは、粟島系圖と崇徳院斗、凱陣紅葉の節は、政太夫殿、京行の留守故、是非なう三ノ切を語

られた、其の淨るりの作趣向は能出來たれど、第一要の場の三ノ切が淋しいと町中が評判するではないかいのじやつ共いふて見たがよい、作の善惡は格別、筑前椽の三段目の語り口に難をいふ人は有まい、夫でも大和椽を巻頭に出せじやまで、ア、おかし、餘り笑しうて臍もじが茶もじをわかしもじするわいの

お御竹前曰

事、父内匠理太夫より二代の太夫と云、殊更初心の砌り三輪太夫と云し時は名人の譽れ高き越前椽に付添れし故、第一淨るりの格式正敷して行儀亂れず、筑後椽、越前椽の遺風を守りて語らるゝ、正眞實體の太夫と云は此の人一人に止めたり、其の上聲柄美數難疵と云は毛頭なし、併生得微力なる聲故か、序破急の分ち立がたき故に、詰合段切の場にいたつて、かゆき所へ手の届かぬ様な場も折に觸れては有その評判なり、又、筑前椽も竹本座を勤められし節の様に花々數當り目は近比には聞かず、最餘程手經し語り手なれば、次第に調子も低成て聞苦數様なれども、當世の人氣を能さつし、工夫を凝し、云解き杯の場、落合の所にいたつては、さらさら、能た、いみ込で安らかに語り、肝必要の場には情を入れて、動らるゝ故に、聞中に調子は低けれど、見物の情盡す、又出語りの事は、筑後椽、越前椽時代とは違ひ、當世の氣の短かい若い衆の氣に合ぬか、と厭はるゝ、但し又、筑後越前の兩祖師程に行届かぬ所も有か、知れず、何分にも近年の人氣にては、出語杯は何れの太夫衆が勤められ、ても大當りは有まじ、修行と云、功者と云、筑前大和の兩人、藝の位におゐては何れ甲乙は有まじけれど、筑前椽は此の近年、當官の受領せられし人なれば、此の意味を以て殿様も巻頭に立られしと推量せり、猶又功成名遂一世一代の暇乞、清和源氏大切り山伏攝待の出語り大きに繁昌し、太夫本越前椽の跡、追入舞の能、御隠居御手柄、又大和椽には當時御休か、但し京都座の御勤か、出座はなけれど、兩座共に太夫の名を出されし故に、評判に出せり、必ずごちらが跡じやの先じやのさ、評ひは無用にしや、此の次の太夫衆の評判もおとなしやかに女子らしういふて見やれ

お本が曰

そんなら先づ夫にして置なされませ、何ば御前様でも、評判のなされ方が悪うござりますれば、急度申分がござりまするぞ

お竹御前曰

チ、夫はそなたのいやる通り、兎角世間の

評判次第で座の前後は其の年其の時々で替る筈の事、扱此の次は

竹本政太夫

豊竹若太夫

お本が曰 過行れし播磨椽の門人に、雑魚場重兵衛殿といふ上手有さは、大阪中の人々誰しらぬ者も無かりし所に、去寛保三年辰のさし、三度めの眞鳥の時に竹本座へ初て出られ、其の次の替り兒源氏の二段目を大きに當られてより、彌其の名世上に高し、則其の年播磨死去せられてより、町中の諸人播磨殿のかたみと思ひ、蟲負彌増大評判、是自分の器量計にてはなく、御師匠さまの御影と疎に思ひ給ふべからず、夫より後菅原傳授の二段目の切千本櫻の狐の場、又此太殿島太殿豊竹座へ行れし後布引瀧の三段目の詰を大きに當られ、其の後大和殿京行の留主に、小野道風の三段目にて又々大入を取られ去る子年の秋よりは京都の座へ御越有ても評判能、京の見物がきつう悦びますと、吳服所の若い衆が咄しを聞きました、又丑の年姫小松の三ノ詰の大當り、次に今度春日ノ小町の三四の詰別しての大出来、今の世の太夫の巻頭と町中の大評判を聞まして、私は嬉しうて、ごこやらの人が腹が立たうと存じ、夫が猶面白ござります

お豊が曰 ごこやらの人はおれが耳をこするの、此方にはそなたより猶十倍も面白事有、云て聞さう、夫は先そうよと、若太夫殿をなぞ三番目にはお出しなされませぬぞ、憚りながら此の段は殿さまの御了簡違ひかと存じます、扱此の人は元文四年竹本座の盛衰記の節より初て出られ、先づ第一に聲柄能、今の世に竝ぶ太夫衆は有まいと思はれます、夫故町中の評判能、別して菅原傳授の四段目の大當り、大阪中は勿論諸國の浦々山家の隅々迄も響き渡る大評判、此の菅原の一の當りは島太殿、次は此太殿、其の次は政太殿と錦殿にて有し也、其の後此太殿と同敷豊竹座へ來られての顔みせ淨るり、橋供養の四段目琴の場にては下地能聲に色と匂ひが有、私計じやござりませぬ、いかな女中も嬉しがりました、其次の替りかしくの時、お園が親方の男氣なる愁歎、少し計の所にうまみが有と諸見物が大きに悦びにました、其次物ぐさ太郎の三ノ口と四段目の切、又在原系圖の四の切關平の場、釜

淵の中の巻別して私が面白う存じましたは後三年と勲功記その四段目のぬれの場は美うてくごうもた
まらず男女共に若い衆がたんと思ひの種を拵へました、ほんにマアあんな色氣の有かはひらしい聲は何所
から出る事じや迄 **お本が曰** ナ、好かんナ、腹苦しい、人の事はいやれ共其の方の様にあだ惚はせぬわいの、ちま嗜まれたらよからう、さうして此の人の藝の評をいわうなら、最聲は少も能様なれど、うやら淨るりに勿體氣がなく、其の上語り方がごこやらの屈かぬ様な所が多い、又一二を争ふ大立物さも云るゝ程の太夫には似合はず、折に觸ては輕却含な笑しひ詞を出さるゝ、最下々の見物は嬉しがる事も有べきなれど、上々様方の御耳には下卑た様にな思し召でござりませう、ナア御前さま、夫に何じや政太殿の前へ出せとは慮外千萬な望事では有わいの、政太殿は三段目の切を語られて毎度大當りを取られたはそなたも知りやる通り、若太殿の藝の功者では中々三ノ切の様な打付た場を渡さるゝ太夫では有まいと思はるゝ、其の上いかに響自慢がしたいさて、若太殿の聲の色はどの目で見やつた事だ、又匂ひの有聲はどの鼻で嗅やつた事ぞ、餘りな事で興が覺るわいの **お豊が曰** 政太殿の三の切を語られたを我連合の夫の藝かなんその様に鼻に掛て自慢しやれど、筑前殿や若太殿がやはり竹本座に一所に勤めて居られうなら及びも絶た三ノ語假令大和殿は微力也、外に語り手がない故に鳥ない里の蝙蝠さやらいふ物じや、先年竹本座では三の語は此太夫四段目は鳥太夫やうゝ、政太夫は二ノ語よ、ナ、皆人の知つた事でござる、すりや若太夫殿を前へ御出しなされませと申す私が無理はござりますまいな **お竹御前曰** 嗚呼氣の毒な又評合るかいの、最二人の衆のいやる通りを聞ば兩方共に道理は有共、そこが評判さいふ物じや、まづ鳥太夫の聲は世上に又、一人並ぶ人は有まじ、此の人ののけて今の世に四段目の切を賑かに面白ふ語る人は聞及ばず、併し難をいふて見やうなら、能聲故に高慢する心にも有やら、藝に實の入りぬ様に聞ゆる時、有なり、最三段目の語語は五段續の要の場にて、六ヶ敷所と云ふ事は誰も知て居る事なれど、四段目の切には見物の氣に聞退屈の出る折なれば、繁花なる語り方に有ざれば、見物衆が情を突す物也、此の工夫を以て勤らるれば、折には端手に聞ゆる時、も有るべし、去る

丑の春夏は豊竹座の作趣向面白からず、夫故惣役者中に當り目見せず、秋替り清和光氏の役、大體には聞はしか共、此の人初ての三ノ詰故か大出来と稱美する程の當りまは聞はず、然るに今度信長記の三の詰の役工夫をこらして語られしゆゑか、見物の受能天晴御手柄く、又政太夫の事は、故播磨椽の音聲、箭付共に直寫しに語られ、其の上心を付て藝を大事に懸らるゝ故、殿様にも定て前へ出されし見はたり、左有は若太殿も故播磨椽の次に座する心にて居られば不足は有まじ、最此の兩太夫達は藝盛りの衆なれば、随分工夫を凝らし勤められば、此の行末の評判次第にて跡が前へ前が跡へならうも知れず、先づ其の通りに思ふて兩人共に諍合す共、中能くして評判をしやれ、扱此の次は

豊竹駒太夫

竹本錦太夫

お豊が曰、駒太夫殿は去る享保二十卯の年少の間の旅かせぎもせず、突出し、ゆりも豊竹座の初床に菊堂道門の三段目の口を語られ、瓢箪から駒が出た、大阪中が大に悦んでの評判、通行きし大和太夫に生寫しとの噂にて、大に當りを取られ、其の後釜淵の上の巻硯の海に筆しめすの、一ト筋、大阪中は勿論の事、諸國の隅々迄も流れ渡りしは、お手柄次第に立身有べきと存せし所に、どうやらしめり氣に成て、氣の毒の癩瘡がおこりし所に、延享五辰の年、東鑿の三段目の詰、六根清淨穢の段切にて、又大阪中の見物目を覺し、此の様な上手の太夫殿をなげに埋もらせて置給ふと、作者連なちと恨み心ながら悦んで居たりしに、江戸の豊竹座へ助に行きしと聞て、又力を落し、案じ暮して居たりしに、便を聞ば、江戸にても大きに評判能、其の明々年御歸り故、起つた癩もさつぱり愈り物ぐさ太郎の二段目の切を江戸土産に語りて、大に出来され、夫より段々に淨るりに實が乗玉藻前の二段目、賴政の四ノ口別して一の谷の二段目、忠度郷太刀おつ取て、突立上りの矢聲、諸見物の耳を貫く大當り、又相馬太郎の二の切の大評判相續きて、後三年義仲勳功記、清和源氏の四段目の詰、今度信長記の三の口と四ノ詰の語り方、四段目にはちと淋しからん、案の外賑はしく聞はしは、御名人の證據、何れの替り

にも此のお人の當りを取れずと云事なし、大阪中は勿論諸國海山里々のはづれ迄評判の能太夫殿、天晴の手柄、エヘン慮外ながらじやつ共いふて見たがよい。お本が曰、扱も云ひたりしやべつたり、まそつと響残したではないかや、飯も能喰る、酒もなる手で引かひても歩行もしやるさいふて響やれ、サアじやつさいふて見せうが何とさしやる、駒太夫の初床から久々の勤の中に當り目なく漸く此の近年少色づ有れば、今の世に競べ者もない様に響上るを知らぬ人が聞たら誠かと思はふが、夫が腑が悪ひ先此方の錦太殿は、年かさ云年來修行を經し太夫殿を差置ての高上り、どうも堪忍がして居られませぬ、錦太殿と云ては立子、膝行子迄も能く知つた蟲頁の多い大名人の太夫殿、去る元文二巳の年豊竹座へ出られ、釜淵中の巻の大當り、夫より子の年迄八年が間始終評判能、其の冬より竹本座へ移り越され、富士見西行管原傳授、忠臣藏布引の瀧の酒の酔の場別して大峰櫻の節は此人一人の大當り、いつこても錦殿の語らるゝ場は見物の悦ばぬさいふ事なし、どうした譯やら此一兩年は折々出たり引たり、私計じやござりませぬ、大阪中が力を落して居りました所に、又々出座せられて其の嬉しさ忝なさ、兩夜の月見に空が晴たさいはうか、空腹時に餘所から飯團餅を貰ふた心地が致しました、なんぼ悪口云のお豊でも此の人計にはどうも非は打れまい、此の様な名人は唐にもあらうかいな

お豊が曰、チ、粗言が有共く、毛を吹て疵を求むるさはこんな事、望ならば云て聞さう程に必ず腹を立やんなや、一體此の人の淨るりはちと下品な仕出しにて、二三四の詰の場には建が輕ふ聞ゆる、高位成人形若侍別しては女人形には聲が鼻へ入つて聞苦し、其の上愁び愁歎の場は哀れにはなうておかしみが出る、唯下劣な在所の親父祖母のちやり計の場は能さいふて響ても大事有まい、此の二三年は年だけでかほつこりさいた當り目もなく、ナア御前様左様には思召しませんか。お竹御前、さりさはお豊には悪い評判の仕様、此の人の聲の一體鼻へ懸るは生れ付故是非に及ばず、然れ共其の聲の竝生に付て語りこなさるゝは、功者さやいはん、上手さや云ふべき、天晴名人さいふ物也、今度の替り春日野小町に道行四ノ口と別しては二の詰の役義、此の御人近年の大當りと町中の評判、當時西東兩座に多き太夫衆の中に、駒太夫と此の錦太殿程見物の嬉し

り、蟲頁の多きは有まじ、又、兩人共に上手い牛角にして何れに甲乙は有まじけれど、駒太殿は一體の聲柄立派に聞いて然も勿體有、其の上女の言葉柔かにして色氣深し、殊更初心初床の頃より心替らず豊竹座に永く勤めらるゝ所の規模に、錦殿より前へ出せしと駭さまの御了簡じや程に、さう合點して得心しやれ。

六人の太夫衆の惣評

お竹御前の曰

大阪の芝居は勿論の事、京江戸其の外諸國に今程淨るりの業流事はないと年老衆の物語

也、其内に京の竹本の芝居は、當地の座より頭立し、太夫連一兩人宛入替り、其の外は若き衆中加はりて勤めらるれば、外に格別の名人衆も有まじ、又江戸の豊竹座、辰松座、搦も噂を聞けば、大抵知れた事也、米の相場と淨るり芝居は大阪が諸國の第一じやと出入の香具屋が咄して聞けば、さうも有うと思はるゝ、竹本豊竹兩芝居の淨るりを語りて、家業にする太夫衆、其の外慰みに語る素人衆、何千何萬人といふ限りも、數も知れまじけれど、是ぞ名人上手と極めもてはやす程の衆は有まじと思はるれ、左有ば彼よりは是がよいのは、是よりは彼が勝つた、劣つた杯と、諸人の評判に合るゝ衆は、唯此の六人の衆也、然れば何のかの品を付て、影沙汰にても此の衆に對し誹言がま敷、悪口をいふは、勿體至極もない事じやと思はるゝ程に、お本お豊二人共さう心得て居やれ、扱次でながら此の六人の衆を物に准へて見立を云て見やうでは有まいか。

兩女の曰 是は一段と能ござりませう、私共もさうに存じ寄を申て見ませう。

お竹御前曰 竹本大和様の淨るりは十種香の様に思はるるわいの。

お本曰 其のお心はどうでござりますな。

お竹御前曰 ハテ花車で華麗に優敷遊びなれど、下々へは向にくひ慰じやばさて。

お本曰 豊竹若太夫の淨るりは花見小袖の様に存じられます。

お豊曰 夫はなぞにの。

お本曰 ハテ模様は端手で美しけれど、中入の眞綿が薄さうに見ゆるにさて。

お豊曰 竹本はなぞにの。

お本曰 ハテ模様は端手で美しけれど、中入の眞綿が薄さうに見ゆるにさて。

お豊曰 竹本政太夫の淨るりは須磨明石の風景の様に思はるゝ。

お本曰 夫れはなぞにの。

お豊曰 ハテ名にしおふ名所なれど、播磨の中程迄も行届かぬはさて。

お本曰 豊竹筑前少様の淨るりは貴さび御聖人の説法を聽聞する様に思はるゝ。

お豊曰 夫はなぞにの。

お本曰 ハテ聞た所は最らしい感じ入様な所も有共、聲花

に面白い事は近比になかつたはさて **お豊が曰** 竹本錦太夫の淨るりは入瀬や小原の黒木賣の様に思はる
お本が曰 夫はなぜにの **お豊が曰** ハテ名に高き名物なれど女の言葉が鼻へ入て賤しいは **お竹御前**
豊竹駒太夫の淨るりは砂の物の立花を見る様に思はるくわいの **お豊が曰** 左様に思召御心はごうで御ざ
ります **お竹御前曰** ハテ苦曝の凄冷き中に草花を會釋た様にしほらしい所が有るさて又此の次は

豊竹鐘太夫

お豊が曰 十二年以前卯の春萬戸將軍の節より出座有打聞には微力なる様に聞ゆれ共第一に聲柄清麗
にて然も難曲のなき仕出し也段々立身有て序切の役を久く勤められ町中の請も能清和源氏の節よりは
二ノ詰の大役を初に語られし故いかに案じ暮せし所に大きに出來され相續て信長記の御役益々評判能
御大慶く御年は若し末頼み有太夫さま。

竹本千賀太夫

お竹が曰 此の御人は十一年以前辰の冬替り二度めの大内鑑の砌りより初て出給ひたり先は御聲の美
しき直なき御師匠大和椽殿増り町中の大評判夫より相替らす竹本座の御勤め子の年は江戸へ御越のよ
し成に是も殊の外出來ましたこの噂を聞て悦びました丑の年御歸りにて相替らす御勤にて嬉しう存ぞし
に又當年は京都の御勤めか此のかはりには御勤めなしアゞどこへもいっておくれればよいのに。

豊竹此太夫

お豊が曰 十年以前己の年の冬替り物ぐさ太郎の節八重太夫と號し初めての出勤第一達者なる聲立初
心の砌りより淨るりの間合能情を入れて語られし故か次第に御立身其の後時太夫と變名せられてより益々
評判能夫故御師匠筑前椽殿舊名を譲られ此太夫と名を改め序切の大役首尾能勤給ふに彌見物の請能今度
の信長記には別しての大評判私は嬉しうてごうも成りませぬ。

竹本紋太夫

お竹が曰 此のお人は上總太夫殿の御弟子のよし、九年以前の冬より御出勤、聲柄筋立共に御師匠に真まじき器量成さの評判成しに、何故にて此の一兩年は御役目も不請成様に聞け氣のごく山々、随分精を出してくんなさんせ。

豊本十七太夫

お豊が曰 六年前酉の冬生年十七歳にての初床生得大音にて丈夫に聞け見物が大に悦びます、次第に功者に成給ふ故、餘程うまみが付ました。

竹本組太夫

お竹が曰 六年前酉の夏よりの出勤當座へ出られぬ以前より餘程功者にて名高き語り手也、今度昔男の御役大きに出来ました。

竹本染太夫

お竹が曰 五年以前の冬より初めての出席第一に聲柄能淨るりの間合よし、去る薩摩歌の節は此の人の役場を第一に響めました、今度の春日野小町には序切の大役を大に出来され、古参の衆中も増るその大評判、西の座にて近年の堀出し人さ町中の噂故、私は氣がいそぐぞ致します。

豊竹伊豆太夫

お豊が曰 五年以前戌の冬より初めての御勤め、第一功者なる淨るりの仕出し、上手めきたる語り打御修行の厚い故でござんしよ。

竹本中太夫

お竹が曰 三年前子の春よりの出席、きやう肌なり、藝の上の仕出しむかへ頼母敷く。

豊竹諏訪太夫

お豊が曰 去々年の子の冬よりの御出席、第一聲柄丈夫に聞け其の上功者なる仕出しむかへ頼もしう存

じます。

豊竹麓太夫

豊竹恒太夫

お豊が曰 兩人共に丑の冬替りより初ての勤随分御情を出されませ。

竹本百合太夫

お竹が曰 十八年以前竹本座へ初めて出座有、七年の間つゝめられ、辰の冬より豊竹座を暫らく勤夫より江戸京にて語られ、又去る丑の冬より竹本座へ歸り新參功者には聞ゆれど役場の悪き故かしか、この當りめ見ぬず、春永々能評判を待ちます。

竹本春太夫

お竹が曰 十五年以前の辰の冬より初て豊竹座へ出られ、申の年より竹本座京大阪を勤らる、最聲美數大役をも請取れしが、此の一兩年は少し泊みの有處に聞えます、今度の小町には二の口四の中の御役、殊の外評判能御大慶く。

豊竹伊勢太夫

お豊が曰 十四年以前丑の冬より東の座の出勤生得淨るり功者にて、然も達者成故、五年の間大役を勤められ、巳の冬より江戸の豊竹座へ立越られ、以の外成御出世と傳へ聞しに、お江戸の水がふさい不申故か、病身になられし故、又古郷へ歸り、名を彰太夫と改め、成の冬より歸り新參、いまだ病氣もしか、さなき故にや聲の艶か失て、氣の毒の山、去る冬より舊名に立歸り、信長記の三の口の御役名がふさひしか、今度は殊の外なる大評判目出たし。

若手太夫衆の座並は藝の甲乙にもかくはらず御出座の年數にて前へ出しました、今日は日も暮れ方になり、ましたれば先づ是限にて相止め、春永に兩座の淨るり操を見受まして、太夫衆は勿論三味線方人形方等不

殘次に近年兩座の新淨るり作の善惡をも評判致しませう。

千秋樂には芝居繁昌萬歲樂には大入明日御出相生の兩竹颯々の聲ぞ樂しむ。

▲『浪華其末葉』に載せた竹本、豊竹、陸竹三座の太夫評

△淨るり太夫之部

大上上吉 豊竹上野少椽

〔評判師延四大臣〕

さあ、皆打寄つていふて見たがよい、此の人越前殿一世一代の出語の折から、内匠さ

いふ名を上野少椽と受領なされたも無理ならず、おそらく三箇の津に肩をならべる者はない

〔女郎染きく〕

是あたりにもなげな事いひなんすな、今三箇津に上手といふは西の此太夫さん、それになんじや、肩をなら

べる者がないとは、おまへ方の耳はごに付いてあるぞいな

〔女郎花よ〕

何いばんす上野さんは大上々吉さ

いふのはまだ不足なな極の字にしてください、景事ならふし事なら、何にいばふ所のない、この太夫

さんじやわいな

〔たいこ傳三〕

まあ、お待ちなされ、成程御兩人のせり合最に存る、しかし此太夫殿の事は、此

太どのの座敷で申さう、先此人内匠理太夫の御子息勝次郎さかやいひし人始めは諸國へ御出にてそれより

豊竹座へ身をよせ、三輪太夫と名付けて南北軍問答の前後より、すでに時頼記の二の奥など語られし時より、

はつきりさしてよかつた、しかしながら詰詞ちと申ふんありしが、程なく出羽芝居にて和泉太夫殿其の外二

三人打寄、前内裏島といふ新上るり興行ありしが、様子あつて相止、それより江戸へ御出にて段々評判よく、二

度大阪へ御登り竹本芝居にて親の名をすぐに、内匠太夫と改め、出れた時は蘆屋道藏、大内鑑かと存たいにし

へ承つたさげきつい相違にて、聞人感じ入、是程にも能なる物か、この取沙汰、又々越前殿芝居へ御戻り、只今上

野と成り給ふは大きな御出世

〔わる口女郎〕

其様にほめさんしても、去年の冬は何さやら、さ御浪人

のやうにあつたさうな、それがんりう島の淨るりも、しか、めしのふし付さんした所もないさうな、どう

したわけかしらぬ、したが又おつこめなさんすさうな大臣 そんな事いふまい、毎年十月切りの折極の時分は左様な事はいづれにもある事、その事も有り、二つには越前殿もはや役義はおつこめなけれど、まだ御存生でござるゆゑに、上上吉と致したい所を、極の字を遠慮いたして大の字に仕つた、何んぞ無理でござるか、ここに此の度、裾重、紅梅服の上るり、殊の外の評判、さにかく巧者にして、節事わけてはんなりさふし、今少しお聲あらばさいふ噂もあれど、それは十ふんと申物、欲には限りのない、うき世、巻頭は此の人。

上上吉 竹本政太夫

延大臣

此人助ヶ分ンにて竹本座へ御出はい鳥の二の詰前方より得でござるよし中々聞事なれ共、淨る

りこまへにて幕の通りいかゞと存る所、つゞいて兒源氏二段目の詰、うれひしゆらをまぜての段切、扱々面白く、それより西行の二の詰、團七から楠昔唄、次第くにお聲も大きくなつて、座本は勿論政太殿もお仕合く、**わる口中間** あんまりほめまいぞ、此の人の淨るりは、もち、こればついて、ごうやら、時にふつては、口中に

地黄煎でも入いてあるやうな

たい、幸介

ホ、ウ、最な御ふしん、しかれども此の度、菅原傳授の二の詰、菅丞

相道明寺のばで、かくじゆに別れのうれひ、ふせこの内にある、娘かりや、姫をしらぬふりにて、ふそながらのうれひ、位事なれば、淨るりにも位が付かればならぬ、四段目の口怒りの段など、又格別よし、惣體位事は、あのやうに語らねば、勿體がなうて、いやしう聞ゆる物、武家世話事になつては、又々次第に御巧者に語らるゝでござらう、もさざこ場にて十兵衛殿と申たれど、小政く、さ異名する事、過ゆかれた播磨ごのにいきうつしじやさいふ心で名付たるは、誠に無理ならず、次第に立身あらばおそらくあるまいと存る。

上上吉 竹本島太夫

堀江日

幾竹屋平右衛門とて、こちらの島で名高いお人聲、大場にしてうれひせりふさもにはつきりさして

いやみなく、修羅といひごういわれぬお上手、政太ごのく下へはなせぎた、いひわけあらば聞ふく

る口中間

いやくそのやうにりきまるくな、も島太ごの癖に、節落しの引捨あるひは地のとまりにも

長ふひかるゝに申ぶんあつて、物の賣聲のやうにもあるさいふ人がござる、あまりほめられもいたされぬかい
 正四大臣 こなたのいはるゝのは評判じやない、そりやわる口さいふ物、引すてのさまり、わるいのはいひ
 人があつて直りました、最も生れながらの孔子も有るまい、又うれひ事は實がいらでしつほりさせぬさいふ
 人がある、しかし此の度、手習鑑の四の詰、たけ源藏かんしゆ才をかくないゐる所へ、三ツ子の松王丸、我子小
 太郎を手ならひにおこし、跡より討手に成り、我子の首を身替りに受取立歸り、後に成り段々のうれひ野邊の
 送り、我子の死がい乗物にのせ、さいのかはらの砂手本、つるぎと死出のやまけこへ、あさきゆめみし心地
 しての段切町中の三ツ子迄、口まれ、竹本芝居にて座中見物が涙をぬぐふゆゑ、めつきり、鼻紙の相場が高い
 さいの噂、是でも實がないさいば、申されまい、猶此の上に心を付け候はゞ鬼にかな棒なるべし。

上上士 陸竹佐和太夫

思はくの女郎

さあこちらの太夫さんじゃ、聲さいひ、筋さいひ、其の癖男ぶり、迄いふ所のないお人わしや

此のさんを巻頭にしてほしいわいな たいこ萬介 成程女中の心に左様に思したももつさし、かしながら

此の人の淨るり、殊の外お上手にて、巧者なれ共、いかにしてもちいさうておしい事じや、その評判もさより男
 ぶりがよいさて、それが淨るりの爲になるものでござるか 大臣 こりや兩人ともに最、成程此の人の上るり

きれいにして、先は御巧者、始は陸奥の門弟にて、それより播磨どのゝ門弟なられしよし、今に風義残り有、小
 兵なれ共、一ツ方の大將と成去冬より女舞、緋紅楓、六ツ目いひ名付のおそのさ半七と、三かつが心底のふ心中
 なごいふせりふ、それよりたさへていはいみかやま木さみやこのはなりんきせまいさたしなんでゐてもなさ
 けなやさいふ替りぶし、町中も口まれする程の事、先はお上手の程見へました、承れば尾張にては飛鳥もおち
 たさ申、うそで有まいさ存る、當地にてはいまだお名染なきゆゑしかくさした事もござらぬ、猶春永に申
 さう。

上上齋 豊竹駒太夫

大臣 此の人竹本座にて紋太夫と申て、是迄評判よくお勤めなされ、此の度上總太夫と改め豊竹座へおすみ、相かはらず何んでも御巧者に、しつくりとして人々のうけもよく、實を入れて語り給へばきめなごもようきくゆゑ次第に御出世先達て手ならひ鑑道行、二の口など語られた、それより此の度などはなな／＼聞増ておもしろう覺えまする。

上上書 竹本錦太夫

たい、幸介 第一かはつた節付能なざるに、拍子よく御巧者にて、ちよ／＼めづらしいき思ひ入れなど承る、つめ修羅のたぐひもあつばれぬし、**わる口女郎** 此のおさんは錦武さんといふた時は、町でこの外人の嬉しがつたお人、播磨さんのうつしを語らんした、それから豊竹座へはいらんして、和佐太夫といふた時は、それは／＼きつゝいものじやあつた、どうしたかさか次第／＼にめいつて、又竹本座へ御出なさんした、なぞ大きなひやうばんがないぞいな、**大臣** 最々、しかし其の折節よりも、淨るりはきつう御巧者に御成りなされた、巧者になればふしに、からまれ、おのれさこまへによつてめいるやうな物なり、近年竹本に御すみなされて、近頃では西行の二の口、靱負が西行に逢て互のしうたん、町中がよろこびました、桶の三の口おかしうてたまらず、ここに此の度手ならひ鑑の序の切、管丞相さらはれさ成給ふ所中々よし。

上上書 竹本文字太夫

大臣 一兩年前豊竹座御勤なされ、それより尾州へ御出にて、彼地もこの外首尾能去年御歸りより竹本座へ御有り付、則手習鑑紋太殿の役を、其の儘御つさめ、二の口五段目の節事迄、中々見物のうげよく、紋太殿よりよいさいふ人もあればお仕合／＼。

上上書 竹本百合太夫

大臣 此太夫殿の御門弟さやら承りました、中々御巧者にて、聲もよく、今もつて聞こさる、此の度序の内三の口、あら事はつきりさて、びしく、拍子よければ、次第に御立身でござらう、梅玉櫻丸を車の上より時平

がぎせいしてにらむ所、てづようてよし。

上上上 豊竹采女太夫

たい、こ萬介 此の人折には河内太夫の風義を御うつしにて、一トふうおもしろく、この外はれたること
もなけれ共、なか／＼御巧者にて最も聲がらよく聞ゆ、いやしからず、めつきりさ御出世にて、追付上上吉にも
御成りなされうと頼もしう存る、猶此の上にも御精出され、大鳥さもいわれ給へ。

上上上 豊竹伊世太夫

たい、こ萬介 此の人出世はしらねど、近頃島の内三休橋筋に親御さ一所に御商賣なされし折から、殊の外
音曲お好にて、それよりそこそこ御出にて、ついに豊竹座へ御すみなされしに、わけて評判よく、第一聲よく
ふしなども利口に取廻しよく、御器用なれば追々上座へ上げまするぞ。

上上上 陸竹伊豆太夫

ぬしや彦兵衛さいふては誰知らぬ者もなく、他國へござつても二三ささがらぬお人、中音にて聲がらよく、
最ふしこまかにして道行最事よし、ふるい事など能御存さ承りました。**わる口中間** 此の人のやうな古風な
律義な淨るりは、百年もさきの人に聞いたらよからうが、今の人のみくへは本堂で茶漬喰やうで、抹茶くさう
てごうもならぬ。**たい、こ萬介** 大きな間違ひな事をいふやつがある、最當世の様に端手にはなけれど、先淨る
りの行義くづれず、第一達者にしてうれひしゆらにても、實をいれてつく込んで語らるゝ女舞の四ツめ、宇治
や久貞子息市藏を藏の内へおしこめておいたるうれい、幕切までしつぱりとしてよし、此の人が古風でなく
當世を飲込聲に今少し場あらば、唯の人ではござらぬ程おもしろし。

上上上 豊竹元太夫

たい、こ幸介 京都よりお下りなされ、豊竹座御出の日より、わけて町中の評判よく、扱々お仕合であるぞ、

上るりの巧者女 此の元太夫さん、京下りに時頼記の四の詰、おもしろいことござんしたが、それから後は、

其の時程にはわしや思ひませぬ、どうしたことでござんしよ。大臣 御ふしんもつとも、めい／＼の得手もの、さいふは格別なものなり、ここに其の以前越前殿語られた口うつしを語らるゝよつて、一倍よう聞はました、それより後は自身の筋付なれば、左様には結句ないはづ、何にても形のあることは致しよい物でござる、しかしながら中々驚き入つた音曲、追付御出世頼もしく思れます。

上 陸竹富太夫

大臣 聲花やかにして土地かんの所など身内がちむ程ふし、ばくる町いなりにて、六兵衛さよば、大阪一枚になびかし給ふほどあつて、中々承り事、しかし其の時のお聲さはいかうおちたやうに聞はきする、根が元手のある聲なれば、此の三勝の五ツ目むしやうにおもしろう覺はました、かれのかはりには女房になれさいふ所など、どうも、たい、忠七、こりや一番旦那の誤りでござります、最かんをはりあげた所は、どうもいへれど、淨るりの行義がくづれて、詞やら地やら何やらわからぬ聞はます。大臣 まだな事いふやつも、此の人の淨るりは稻荷で東の上るりは越前殿の場、西の上るりは大和太夫の場と、一日替りにおつさめなされた、それゆゑ、兩方へ口うつしが一ツになつて、今に其の癖がなならず、越前殿やら大和殿やら、知れぬゆゑ、行義がくづれたやうな、さか、うれ、ひの、かん、な、す、つ、さ、あ、げ、ら、る、所、は、銀箱、く。

上 陸竹桐太夫

大臣 此の人當地初て此の芝居御つさめ、筋も相應に御付なさるゝ、此太夫殿の門弟のよし、此殿女舞の二ツ目にせ侍金受取る時、大序の夜番を殺す所など、はつきりとしてよし、今少し御師匠の御巧者あらば、存る隨分御精出され肝要く。

上 陸竹彌太夫

島の内連中 此の人錦殿の御門弟のよし、おどけたる所さはぎなどおかしく、おもしろきふしなどよく付らるゝ、御師匠のおかけが拍子よく、うれひ事は少し申分あれども、先ここの外お達者にて、役替りなどよくお

つさめなさるゝ此の上ながら語り口に御念御入、國太夫文彌など多からぬやうに頼ます。

上 豊竹春太夫

上 豊竹鐘太夫

上 竹本友太夫

上 陸竹美太夫

上 陸竹常太夫

上 陸竹初太夫

大臣 右六人の衆申、少しづつ不同あれ共、いづれも御巧者にて聲がらしごくよし、しかしながらいまだ大きな場を一ト場も御受取なく、評判いたしがたく、それゆゑ此の度は一所に申ます、猶かされて申さう、随分随分御出世なされ、上上吉の黒いのにあやかり給へ。

惣巻軸大上上吉 竹本此太夫

大臣 むかし、合羽商賣なされた折から、殊の外お好にて御精出されたるしにや、段々の御出世に

て、伊太夫と名乗方々へ御出なされ、いにしへ出羽芝居へもちよさおつさめなされたかぞ存する、それより竹本座へ相すみ此太夫と改、播磨殿存生の時引廻し給ふよし、只今大鳥と相成り給ふ、きついお手がらひいき

女郎 其のやうにほめてくだんしても、巻頭にしてもくだんせぬ、何ぞ又思はくがあるかしらぬ、わしが心にもなつて見さんせ

わる口女郎

これそないにひいきさんしても、此太夫さんはんぼでもてうしがあがら

ぬ、大入の時は聞ゆぬやうな事がある、そんな人が巻頭にはならぬ、**大臣** 兩方だまれ、其の纒か一越が半越の調子にて、あれ程に大びらに語らるゝ所、御巧者と申さうかい、やはやどうもいへぬ、三箇の津に一二ささがるやうに存る、それゆゑ内匠殿、此の人を巻頭巻軸に引わけました、上野殿は受領だけさいひくらべては此の人を軸になをしたがむりであるまい、此度手ならひ鑑三の詣ち、やりまじりにて、白太夫が梅瀬松

三本の木に膳すゑて挨拶のせりふ、それより櫻丸が切腹の所、うれひの念佛思入ふかく、段切迄扱々驚き入つたお上手、どうもいゝ。

△三味線之部

上上吉 鶴澤友次郎

播磨殿此の世を去り給ふ砌、此の人も芝居御引にて、いかかなられしと思ひしに、去々年陸竹芝居京都へ登る折から、一箇月御つごめ、佐和太夫ごのさ鐘入の出語り、都にてお上手の評判、一座も大當りにて、それより竹本座へ又々お戻り、むかしより此のしばぬにて聞きなれたる撥音、いづきいても聞あかぬといづくの人も申ます。

上上吉 野澤喜八郎

いにしへの喜八殿は豊竹座にて初めの時頼記の出語り、其の時の三味線こそ、の外町中の評判、それより世上喜八ごの御巧者にて、一ト風かはりはでなる思ひ入、友次郎殿のかうさう成さ打かへて、又おもしろいさのうはさ、つゞいて又此の喜八殿もそれにおさらぬ御巧者見物のうけもよく聞人感じ入ます。

上上士 鶴澤平五郎

此の人もなか／＼御巧者にてひやうしよく、合の手のり地など、あつばれ聞事でごさる。

上上士 竹澤彌七

竹本座に御つごめなされし所、いかなる事にやいつ頃よりか御引なされ、去々年曾根崎新地にて、明石越後座へ御すみなされ、それより其の冬陸竹芝居、唐金茂右衛門より御つごめ、此の度女舞に二の口取りに、少し計の琴聞及びました歌枕の時胡弓を承つた、いかさま御器用な事、猶さつくりさ承りたい。

右の外三味線あまた有、御休の方も大勢あれ共いづれも名人にて、評任るさても同じ事ゆゑ申ませぬ、春永

△人形之部

大極上上吉 吉田文三郎

島の内連中 扱もあるものか、是程の名人又あるまい、人形の氏神か、存る思ひ入れ、いさかた其の外道具の思ひ付迄がよいと有る、三箇の津はおるか、唐天竺にもあるまいと存るきつい御名人である わる口中間
あんまりほめてもらふまい、それ程の名人なら何もかもよいはずなれど、立役は若男でも老人でもあつばれ、どうもいへれど、おやま、人形女形は、どうやらしんきな所がある、それでも名人か ひいきぐみ田 やいうつそり、目の見ぬものか、東西子が見たらばそんな事いほうか、しらず、人心地のある者が何んのそんな事いはずい 大臣 是はけうさい御ひいき、したが、兩方ともに無理なら、実なるほどおやまの方は立役から見れば、のみ、それほどにはなけれど、なか、及ばぬ事、ほんに人形が、いきて、働ます。

上上吉 藤井小八郎

大臣 今おやまは此の人にならぶ者なし、身ぶりよく拍子迄がきいてある、太夫、女、それ、くの風、そなはり、いにしへの辰松殿、藤井小三殿にもおさらぬ御名人、いかな、人形さは思はれませぬ、中々御巧者、どうもいへぬ。

右の外名人の人形あまたあれ共、此の巻は淨るりの評判なれば、是を略いたします、くわしうはかされて申ませう、先此の御兩人は竹本豊竹の兩芝居にてならびなき方なれば、爰にあらはし評仕る竹のそのふの、其の末葉、三ツの屋ぐらに音高く、朝はさうから、くの、たいこのひびきに、諸見物、ふいさう、木戸口は、實の山や蓬葉の、松竹いばふ君が代の、おさまる御代ぞ久しけれ。

▲半太夫節より轉じた河東節

丹波和泉太夫相方の三絃に、權左衛門といふ者、山彦と銘ある三絃を所持せしを、老年の後、源四郎懇望せし

不勝へ不肯ノ假字

ゆゑ、藏前笠倉半平今平十郎祖小田原町大和屋勘九郎兩人にて眞請源四郎へ遣す、よろこびの餘りに扇八景竹馬の淨瑠璃の節より、本苗村上を改山彦と改名す、源四郎は、元來半太夫操座の、合の狂言の唄を動居たりし故、半太夫節荒増覺へ、木村又八前に云ぶ弟子となりたり、去によつて河東市村竹之丞座にて、傾城富士の高根さいふ狂言の節に、吉原松の内さいふ淨瑠璃つるみ一語りし時より、河東相方とは成たり、古今の妙手故、其の以後出る新淨瑠璃手付面白し、河東は半太夫節を好て覺へし上、自分の節付は、手品節市左衛門に云手品兩節を好て、其のすびた有るゆゑ、半太夫ぶしと少し違ふ様にもきこゆれど、古代の半太夫節道行等、少しも替る事なし、然るに近世の藝者の内にも、半太夫節不覺して、違ふようにもおもふやからも有るよし、違ふにはあらず、銘々不知のなり、源四郎も前々式部節をひきたるゆゑ、新上るり手付に、式部の手多く有り、古代の事をひく時は、又八に習ひ置しゆゑ、古代の手くたり違ひなかりしに、得さ稽古せざるやから、是又手くたり違ふと覺ゆしはなげかはし、凡上るりは、何節さても操を以て體さす、あやつりは能太夫の能にひさし、いかふ碁盤猶同じ、然るに近世操を勤し太夫、三絃人形の妙手迄、皆たへて少しばかりの、ふし事のみ要とするは、能太夫の能を不知して、小諸のみうたふがごとし、かなしむべし、元祖の半太夫は、肥前太夫弟子にて、肥前永閑を和らげて、語りたるものなれば、相方三絃も、肥前永閑節のひき方不覺しては、半太夫節ひくさは難言、河東一統も、半太夫節を和らげ語りたる物なれば、半太夫古代の手くたりなど不覺しては、河東節ひくさは云がたし、予は前に云、山崎源左衛門へたよめて、肥前永閑半太夫古代の物操の一體を習ひ、たび／＼操へ出會、人形の妙手へんろく六郎兵衛、小山兵三、門三、清介等相手さし、古半太夫、意教左内など相方にて勤其の外、彼是さ心身を盡すさいへ共、元來不勝にして、その器に不當、老年成就難斗を斗り、元文元辰の八月十五夜、所持せし三絃弟子高木序遊に譲り、遺残る三絃、淨瑠璃本、唄の本等一時に焼捨、其の後無絃無聲の靜なるを樂とせしに、我數年道に勞せし事をいたみて、や、人々一章一句を送らるゝ、其の儘にも難捨置、梓にちりばめしは世に知る所、嗚呼古代の達人、人形の妙手まで残らずして、江戸操の正しき格式をしれる人も無き世ぞなげかはし、犀は角に死し、虎は皮に死し、熊は膽に死

『劇場新話』の選者は不詳。
文化の初めに成りしものと
如し。

し、孔雀は羽毛に死す、我は三味線に死せし甲斐もなく、一藝さもならで止るは、毛物にもおさりたる身因果
さやいはん、命さやいふべき。『奈良柴』

▲京阪の芝居

左は『劇場新話』に載せたる京阪歌舞伎芝居の記事である。採り芝居は直接相繋る所なし
と雖も、旁證の資料として其の一節を抄録することとする。

名古屋三左衛門お國歌舞伎の始りは北野の芝原にて興行し、又出雲のお國織田信長公の免許を蒙りて、則
北野にありし人升場所なりといへりは陣立稽古のを拜領して興行せしより、芝居といふ也、甲陽軍鑑に曰仕場居は勝軍
ならでは踏留られぬものなりと、高坂彈正申されたり、いづれも芝に居るの心也註。江戸にて原といふ處を
あらすには、其の後祇園の南林にて執行ひ、また其の後河原橋の南にて興行しけるに、秀吉公伏見より上洛の時、
必此の橋を通り玉ふに、見物群集し妨に成しにより、四條へ移されしと也、男女打交りの狂言、猥りがはしく相
聞はしゆゑ御停止と也、それより京都にて村山又兵衛といふ役者、數度御願奉申上、承應二癸巳年三月かぶき
物まねづくし、若衆交りの儀、御高免被成下、明歴二丙申年、四條河原中橋にて興行、今文化の年迄百五十餘年に
及ぶ、さすれば上方芝居役者たるべきもの、此の村山氏の丹情を尊むべき事なるべし、又大阪の芝居は、寛永の
始より若衆歌舞伎とてあり來りしに、道頓堀九郎右衛門町の裡下難波領に、其の頃は傾城町ありけるが、此所
の傾城をもな多く集め舞臺へ出し踊らせ杯して、是をお國かぶきと申たる事也。

按ずるに、大阪の芝居今二の替り狂言の大名題、いつにても傾城と字を名題の上に置事、江戸の春狂言に替
我と下に置が如し、是は本文のごとく寛永のむかし傾城に狂言させたる古風の残りたるなるべし、大阪の
二の替りといふは江戸の春狂言也、顔見世も當年子の年なれば丑の年顔見せといふ、顔見せは役者座付口
上斗りにて手打連中の手うちあり、大手組笹瀬組藤石さくら池、四組の手打連中、替りくゝに手打あり、衣裳

など至極立派なる事也、顔見せ十日の間、夜五つ過より始め、座付口上済で、思ひ付の狂言二幕か三まくもする、其の内夜明になる故打出し也、夫れより霜月二十日過比間の替りてて狂言を出す也、夫ゆゑ春狂言を二のかはりて申習したり。

扱此の芝居は、則鹽屋九郎右衛門芝居なりしが、女かぶきの事、長く御停止となりける故、其の後度々御願申上、前々の通若衆かぶきの芝居再興相叶ひ、今に興行いたす也、今の角の芝居は、大阪太右衛門といひしが、福永屋新十郎是也、又大和屋甚兵衛といふ名題ありしが、元は鹽屋名題故、元へかへる、今の中の芝居也、斯の如く京大阪の芝居は有來る芝居名題をかり請、いづれの役者にて、金主方よろしき輩座元を勤る事也、依て名題は誰座元誰と記す也、江戸三芝居は又別格の違ひにて、三座とも元祖より太夫元一名にして、惣役者迄も主人と稱す。云々

▲三代 筆太夫の硬骨

三代目竹本筆太夫は初代彌太夫の門弟にて、西京の人、近松狂言堂と合考して淨瑠璃大系圖小冊三卷を著す。伎倆もあり、又一廉の見識も有したる硬骨漢なりし。天保十三年幕府令を發して

社寺境内の芝居の撤廢を命じ、同時に「諸藝人淨瑠璃はやし方の類、町方にて家持又は田地田畑等買求候義不相成」この布告を發し、義太夫節の太夫も亦、他の諸藝人同様、此の一令の下に支配せんとせしに際し、彼は其の非を鳴して之に抗議し、結局申分相立ち、「淨瑠璃語りの義は是迄通り差構なし」この裁斷を得たのであつた。四代目長門太夫の著した『増補淨瑠璃大系圖』には、左の如くに云つて居る。

茲に天保十三壬寅年天下一統御改格を仰出され、社寺芝居小家取拂ひに相成り、其の節の御觸には、諸藝人淨瑠璃難し方の類、町方にて家持又は田地田畑等買求め候義不相成と有り、其の頃筆太夫は勢州古市に興行

に参り居り留守中の事なりし、歸返して聞、早速我居住の町年寄に趣き、右家持御差止の義は如何成る事に候哉、我々淨瑠璃語りの儀は昔より受領頂戴或は家屋舖田畑等所持在る事故、御布令は下々にて取方の相違も是あらんかも知れず、依て今一應御窺ひ下されと段々頼み込みし處、其の時の町年寄綿屋平三郎殿、無據右の趣きを惣年寄へ御尋申上候處、昔より淨瑠璃語り渡世の者は一身二名にて町人同様の事と仰にて、此の由直様仲間中へ申達する、同七月二十五日淨瑠璃太夫人形遣ひ歌舞伎役者芝居仕打殘らず御召出しにて、西御奉行阿部遠江守御前に於て御申渡しには、歌舞伎役者の者道頓堀八丁町の内住居に限り、人形遣ひ同様の事、淨瑠璃語りの儀は是迄通り家屋舖田畑畑畑等買求め候共差構ひ是なくと申渡しに就き、往古より仲間家持の衆を調べ自筆にて書置れしを茲に寫し出す。

日本橋筋一丁目坂町東の行當り

義太夫事 竹本筑後椽

同所筑後椽と合壁

竹田出雲椽

長堀橋筋二丁目周防町南へ入

若太夫事 豊竹越前少椽

心齋橋筋周防町南へ入、紅屋長兵衛と云ふ

内匠太夫 竹本大和椽

道頓堀太左衛門橋筋濱を少し北へ入岸本屋善兵衛

此太夫事 竹本筑前少椽

島の内、周防町御堂筋西へ入

豊竹島太夫

同八幡筋心齋橋西へ入

二代目 豊竹駒太夫

鹽町通り佐野屋橋東へ入

三代目 竹本政太夫

島の内清水町筋三休橋西へ入

二代目 豊竹此太夫

梶木町淀屋橋筋

二代目 竹本染太夫

北堀江下通四丁目阿彌陀池南の筋角

三代目 豊竹此太夫

京都猪熊佛光寺上る町

二代目 竹本綱太夫

同上長者町松屋町下る

野澤 吉兵衛

立賣堀北通一丁目土橋筋西へ入

初代 鶴澤 寛治

島の内清水町疊屋町南へ入

竹本内匠 太夫

北新地二丁目

初代 竹本彌 太夫

島の内清水町三休橋筋西へ入

竹本播磨 大椽

京都三條橋東松の木町大菱屋

三代目 竹本綱 太夫

島の内岩田町

三代目 竹本筆 太夫

鹽町通心齋橋西へ入南側

竹本政 太夫

島の内御堂筋鹽谷角

竹本住 太夫

北新地三丁目

五代目 豊竹 此太夫

東成郡天王寺村河堀口宮町

三代目 竹本長門 太夫

右爲後年之書印置者也

天保十三年壬寅八月

竹本筆 太夫

▲源與清の『三絃考』

三絃に關して考證した隨筆類は太だ多し。中にも源與清の書いた『三絃考』は、此等考證中の最れたるものの一である。左に其の本文全部を轉載して参考に資する。

風を移し俗を易るは樂より善はなし禮記樂記、孝經孔安國序、樂は徳の風、說苑修徳の華上にて、民情を和正し司徒大邪惡を蕩滌せしむるゆゑに禮樂篇、聖人樂器を造り、樂章を撰び、樂府を置く、吉凶軍實嘉の禮儀にさり用ゐ、政教治道の助させり、天照大神天石窟に幽居ましく時、八百萬神等併優したまひしを起源にて、舊事紀二、古事記上、

類聚國史一、假名日本紀一、舊事大成經五、天書記三、日本紀竟宴歌上、釋日本紀七、神皇正統記上、類聚神祇本源六、
 元々集三、粟田口猿樂記、體源抄十の本卷、和事始五の卷、和事始正誤下卷などに見ゆ、八幡愚童訓上には神功皇
 後の時の磯瓦をすかし出さんため、神武天皇の御代より、後々の樂府歌ごもの記紀に載られたる、東遊、神樂、催
 の神樂を、神樂の溢鶴なりといへり、神武天皇の御代より、後々の樂府歌ごもの記紀に載られたる、東遊、神樂、催
 馬樂、風俗、雜藝、葦柄今様神歌よりして、田樂、猿樂、白拍子、傀儡子、師子舞、琵琶法師、縣御子、咒師、侏儒舞、千秋萬歲、傾
 城、幸若能、狂言歌舞伎、丹前、柴垣、小唄、念佛、躍、やゝ子躍などいふ雜樂、つぎ、くに行はれ、天竺、大唐、高麗、新羅の類
 の夷部樂もふるくよりありて、それに用る樂器鈴、鐸、方響、銅鉦子、琴、瑟、箏、琵琶、新羅琴、阮咸、箏、日本琴、簫、笙、篳篥、
 橫笛、和笛、簫、長笛、中管、尺八、莫牟、鉦鼓、大鼓、摺鼓、鞀鼓、腰鼓、拍子、輪鼓、編木子などかぞふるに違あらず。近
 世になりて三絃鼓弓の二器出來、三絃は殊に天下の士女好弄びて、いたりいたらぬ郷なし。こは升庵外集二
 卷一のに、今之三絃始於元時、小山詞云、三絃玉指雙鈎草字、題贈玉娥兒云々、五雜俎物部四の卷に、又有所謂三絃者、常
 合簫而鼓之、然多淫哇之詞、倡優之所習耳云々、通雅部冷簫の條、樂器に、今之彈三絃者、初亦倚人吹簫定調、散彈小絃、
 以合簫中伊字、然後定軫、可以合和云々、皇國にて、三絃に一節とみわけて、元代始造れる樂器なり、琉球島にも傳へ
 たりけん、こまは、中山傳信錄六の卷に、三絃柄比中國、短三寸餘、彈撥惟用食指云々、南島志下禮形部に、凡燕會備、
 樂樂有國中中國二部、國樂其唱曲則如我里謠、其器則三線子云々、また同卷風俗部に、俗好聲樂、皆弄三絃、相傳以爲、
 絃響能避蛇害云々とあるにてしるし、さて文祿年間などにや、琉球より皇國にも傳來しならん、そは明末に、倭
 寇防禦のためさて撰たる全浙兵制附錄日本風土記四の卷、語言に、三絃子前、三皮三びせん云々と見ゆ。慶長寛
 永の比など作りけんとおぼゆる狂言昆布賣詞一の卷、狂言記外または慶安年間の尤之雙紙下巻ひくもの、吾吟我集
 序文、及などに、三絃の名あればなり、漢土にも、隋書志律曆舊唐書志音樂杜氏通典百四十の卷の類に載て、隋唐の代より
 春部、及などに、三絃の名あればなり、漢土にも、隋書志律曆舊唐書志音樂杜氏通典百四十の卷の類に載て、隋唐の代より
 きこはたれど、今の元製の三絃にはあらず、藝苑日涉卷四のに、元史、事物紀原絃子記席上廣談、輾轉錄、帝城景物略、
 天祿識餘、事物異名、丹鉛錄、五雜俎、通雅、通志、琵琶錄、初學記、樂府雜談、中山傳信錄を引て、三絃此云沙彌線、一名渾
 不似、一名胡不兒、一名火不思、一名虎拍詞、一名虎拍思、一名琥珀思、一名虎撥思、一名胡撥四、一名撥音四、皆一音之
 轉訛耳、渾不似之目頗古、而三絃之名乃始于元時云々、此の説たがへり、三絃元、秦謂之絃、魏晉以來謂之秦漢子、

宋人謂之瑟琴者、即今之三絃也云々と論じいひたれど、轉引の誤、また引出し書ごもの説、いかにぞやおぼゆるふしあればうけがたく、渾不似、絃、瑟、秦、漢、子、瑟、琴、を今の三絃ぞといへるも從がたし。こは元時阮咸、琵琶によりて製出しものと見ゆ、されば轉手、海老尾など、その體全同じく、やがて琵琶の名を用しなり、源抄八の本卷、寶晉竹林七賢の琴教録下、なごにみゆ。阮咸は秦代の器にて琵琶の始なり、石類書二十四類聚、物考、樂部、六、なごに、くは、晋、竹、林、七、賢、の、阮、咸、が、彈、る、器、な、る、ゆ、ゑ、さ、る、名、を、得、た、り、そ、は、唐、書、二、十、一、の、卷、禮、樂、志、十、杜、氏、通、典、樂、部、四、十、四、の、卷、文、獻、通、考、百、三、の、卷、樂、考、白、氏、長、慶、集、の、卷、三、十、三、事、物、紀、原、二、的、券、樂、事、文、類、聚、卷、百、三、十、二、の、三、才、圖、會、三、器、用、本、草、綱、目、果、部、荔、枝、の、卷、夷、潛、絲、之、屬、部、七、十、九、の、卷、類、書、纂、要、音、樂、事、林、廣、記、の、卷、八、舛、奄、外、集、器、用、音、樂、部、通、雅、三、十、の、卷、圓、機、活、法、音、樂、門、確、類、書、七、十、九、の、卷、類、書、纂、要、音、樂、事、林、廣、記、の、卷、八、舛、奄、外、集、器、用、音、樂、部、通、雅、三、十、の、卷、圓、機、活、法、音、樂、門、韻、府、卷、三、十、の、格、致、鏡、原、樂、器、類、部、瑟、拾、芥、抄、樂、器、部、類、古、書、所、見、枚、舉、す、べ、か、ら、ず、は、調、子、の、異、名、琵琶、の、風、香、調、こ、云、へ、て、延、喜、式、寮、式、和、名、類、聚、抄、瑟、部、瑟、拾、芥、抄、樂、器、部、類、古、書、所、見、枚、舉、す、べ、か、ら、ず、は、調、子、の、異、名、琵琶、の、風、香、調、こ、同、音、也、と、四、絃、十、三、柱、な、り、唐、太、宗、の、一、絃、を、加、し、も、な、ば、五、絃、と、い、ふ、よし、文、獻、通、考、百、三、十、七、の、卷、に、見、ゆ、三、代、實、錄、も、い、へ、り、三、十、六、類、聚、國、史、職、官、部、卷、體、源、抄、八、の、な、ご、に、五、絃、と、ある、こ、れ、な、り、北、史、倭、國、傳、九、十、四、の、卷、に、樂、有、五、絃、琴、笛、の、三、十、六、類、聚、國、史、職、官、部、卷、體、源、抄、八、の、な、ご、に、五、絃、と、ある、こ、れ、な、り、北、史、倭、國、傳、九、十、四、の、卷、に、樂、有、五、絃、琴、笛、と、い、へ、る、は、撰、者、が、唐、代、に、皇、國、の、風、俗、を、聞、傳、へ、て、誤、記、せ、し、な、る、べ、し、大、怒、佐、卷、一、の、松、之、葉、文、序、書、言、字、考、器、財、門、類、聚、名、物、考、樂、部、な、ご、の、説、に、よ、れ、ば、正、親、町、院、の、永、祿、年、間、琉、球、よ、り、蛇、皮、線、文、獻、通、考、百、三、十、七、の、卷、に、み、ゆ、二、絃、の、器、文、獻、通、考、百、三、十、七、の、卷、樂、考、俗、部、に、二、絃、琵琶、四、隔、一、孤、柱、釋、名、曰、推、手、前、曰、琵琶、引、手、却、曰、琵琶、二、絃、形、如、琵琶、を、云、々、宋、史、樂、志、に、始、製、二、絃、之、琴、以、象、天、地、謂、之、兩、儀、琴、云、々、な、ご、見、ゆ、茅、窓、漫、錄、上、に、も、二、絃、の、圖、を、載、た、り、を、傳、へ、和、泉、國、堺、津、の、琵琶、法、師、中、小、路、と、い、へ、る、習、者、に、人、の、と、ら、せ、し、な、中、小、路、甚、く、愛、て、朝、夕、に、手、ま、さ、ぐ、れ、ど、その、調、を、了、こ、と、あ、た、は、す、故、に、初、瀬、の、觀、音、に、一、七、日、參、籠、し、て、祈、請、し、靈、夢、の、示、を、蒙、て、階、を、下、る、を、り、大、申、小、の、三、絲、足、に、か、り、ま、つ、は、り、た、る、を、得、て、蛇、皮、線、に、か、け、て、し、ら、べ、つ、く、遂、に、微、妙、さ、色、音、を、彈、出、ぬ、府、内、侯、の、藏、に、四、あり、轉、手、も、左、方、に、の、み、四、なら、び、たり、その、後、習、者、虎、澤、頗、妙、を、得、て、本、手、破、手、な、ご、い、ふ、調、子、を、定、て、人、に、傳、ふ、二、絃、三、絃、四、絃、の、もの、有、し、な、る、べ、し、

習者澤住、此わざをつたへ歌謠に合せて彈初しより、世に賞訖し、續して頸にかけて彈人いさくおほかり。

按に頸にかけて彈る琵琶に平家曲を合することく。臥雲日件錄六の卷文政五年八月十九日の條に、最一檢

校來留而宿焉云々。最一來話及鎌倉持氏之事、最一日、某女三歲初到鎌倉、持氏十二三也、二十五歲又到鎌倉時、管領上杉金吾承持氏命、與諸大名戮力賜三百貫、持此上洛爲檢校云々、予又問座頭話平家之由、最一日、昔爲長卿者、作此書十二卷、留在子播州、子後曰、性佛者、上之於音曲、而歌詠耳、生佛之後曰、如一檢校者、有二弟子、一曰覺二、一曰城二、城一弟子城元居八坂、城元次曰城意、城意次曰城存、城存尙在焉、覺一弟子有、四檢校曰通二、曰靈二、曰景二、曰清二、某乃靈一弟子也云々。徒然草二百二十六段に、後鳥羽院の御時、信濃前司行長云々、此行長入道、平家物語を作りて、生佛さいひける盲目にをしへてかたらせけり云々。彼生佛が生れつきの聲を、今の琵琶法師は學びたる云々、同二百三十三段に、琵琶法師の物語をきかんとて、びはをめしよせたるに云々。めくら法師のびは、そのさたにも及ばぬことなり云々。薩戒記應永三十二年六月二十七日の條に、藏人中務源重仲來密談曰、近日主上上皇御中不快、其故召比巴法師、可聞食平家物語之由、自內被申、院無先例、不可然之由、有御返事云云。同閏六月二十一日の條に、依召參院、比巴法師參入語平家物語云々。東齋隨筆音樂類部に、逢坂の蟬丸は式部卿敦實親王の雜色なり。盲目と成て琵琶を引ける云々、其よりして盲目の琵琶引ことは始めり云々。羅山文集五十六に、瞽者彈琵琶誦平家物語而爲節云々。最之雙紙下卷に、小うたにのせてはさみせんをひく、平家にあはせて琵琶をひく云々。なき有にて、平家に琵琶を合するさ知べし、琵琶法師は兼盛集に、びはのほうしのある所、よつのなにおもふ心をしらべつくひきありげごもする人もなし。散木集六にあらやさいふ所にて、びは法師のびはをひきけるをほのかにきくて、むかしをおもひいでらるゝ事有て、ながれくるほどのしづくに、びはのおさをひきあはせてもぬるゝ袖かな。源氏明石に、なかにびは、さうのこゝ、さりにやりて、入道びはの法師になりて、いさをかしくめづらしう、手ひさつふたつ引いでたり云々、小右記寛和元年七月十八日の條に、召琵琶法師令盡才藝、給小祿云々、など見ぬ、十訓抄第十訓、庭訓往來卯月五日の狀、七十一番職人歌合二十五番、體源抄十の末卷、藻鹽草十七の卷の類、後の書の所見は舉盡しがたし。臺記康治九年二月十六日の條に、瞽者、今昔物語舊本二十八の卷第一語には、盲目なごかき節、用集女部に、瞽者メクラ、盲者同云々、運歩色

葉集免部に、盲目メクラ云々あり、教訓抄序には、メクラノ杖ヲウシナヒタルガゴトク云々とも見ゆ、さて歌に琵琶よめるは顯綱集に見ゆ、神樂竈殿歌にびばのこゑとあるは、古本に比、左のこゑと書たれば、梁塵愚按抄の誤なり。四の緒よみしは、兼盛集、玉葉雜三、同雜五、新續古今秋上、新葉雜下、夫木雜五、同雜十一、式子内親王集、嘉喜門院集、太平記三、などに見ゆ、此の外おほかるべし、相如集、輔親集、公任集、拾玉集五などには、ただこゝのみよめり、八雲御抄三の下卷に、琵琶よつのを、なかつなる月、半月をいふなり、さほやま、未詠、遠山也云々。小唄淨瑠璃に三絃を合せひくは、この澤住がしめしなりとぞ。(昔々物語に、織田信長公の侍女小野お通三河國矢作長が、娘淨瑠璃御前のことを、薬師十二神將に、かたどり十二段の物語に作りしを、丹後七郎左衛門橋本筑後に命じて、節をつけさせ、城支勾當、角都勾當、三絃に合せて、これを淨瑠璃曲といふ、二勾當別に、酒吞童子を作りそへ、遂に西宮の傀儡しを召て、木偶に合せしより、アヤツリさいふもおこれりさいへり、散木集十に、傀儡舞しはまはり來て居りさあれば、傀儡師ふるくより木偶を舞せしにや、淨瑠璃詞十二段、畫入の本也、初段に、去程に御曹子はいかなる人のすみやらん、心をさめて見たまへば、あるじは上り御せん、さて云々、父はふしみの源ちゆうなごんかねたか、さて、三河のくにの國守なり、母はやばぎの長者とて、海道一のいうくんなり云々と見ゆ。御曹子は牛若丸なり、淨瑠璃御前は三河國峰の薬師に、きせいして生たる子のよし也、淨瑠璃曲の事、東海道名所記六の卷、江戸名所記四の卷、江戸雀三の卷、古郷歸江戸唄、江戸總庵子六の卷、江戸總庵子新造大全六の下卷、江戸砂子一の卷、市尹要覽、東都事蹟合考三の卷、本朝世事談綺三の卷、江戸志一の卷などにも、これかれしるして、この説おなじからず、小窓雜筆五に、小野於通は、鹽川志摩守が後妻にて、詩歌書琴に勝れし才女なりといへり。寛永の比、大阪の柳川加賀都八橋城秀といへる二人の賢者、此のわざに堪能にして、江戸にくだり、貴戚權門にもてはやされ、遂に檢校の職を得、柳川八橋二流の祖となれり、三絃工に柳川八橋といふ稱あるも、この兩檢校にゆるされしなりといへり。元祿の頃、淺利檢校、佐山檢校、出田檢校、市川檢校、朝妻檢校、藤島勾當、小野川檢校、三橋檢校、藤永勾當、熊川勾當、松澤勾當、木崎勾當、早崎勾當、豐田勾當、清田勾當、倉橋座頭、岩崎

檢校豊橋勾當、連川勾當、安數川座頭などいふ上手、京大阪、江戸に競起りて、唱歌をつくり、新曲を彈出て、大にその風おこなばれ、長唄、投節よりして、つぎ々々出來しよしなり、また糸竹初心集卷下には、文祿年間、石村檢校琉球島に渡り、三絃の小弓を得て歸り、京都にて三味線を作出せりといひ、呂律三十六聲序には、後柏原院の御宇、梅津少將さいふ人詳、彼島に漂泊ゆき、小女に學得られしが、即琉球組なりといへり、此等の説いかにあらむお竹齋物語に見ゆて、寛文、延寶、天和などの頃の人とおさて、三絃の製作は、和漢三才圖會卷十八に、其棹以花欄木爲上如鐵刀木紫檀、最愛、種之美、桑木次之、檜木爲下品、其皮皆以猫革、八乳者爲良、狗子皮爲下、といひ、東海道名所記卷四の卷、江戸名所記卷四の糸竹初心集、下山城四季物語、首、江戸雀卷三の江戸名所、唯卷六の姥櫻卷一の大怒佐首、云波草卷三の骨董集、上編など、にその圖見ゆ、今様の體は古近江といへる、三絃工が所爲なりとぞ、編中、卷上、今は義太夫曲、ぶんど曲、長唄曲の三絃、各その製作別にて、いにしへとおなじからず、字は三絃、和漢三才圖會卷十八、和爾雅卷五、器財門、三十三線、字考、器財門、類聚、名考、器財、六、書言、三、味、線、東海道名所記、六、江戸名所記、四、絲竹初心集、上、三、尾、線、律呂六聲、一、三、線、日本風土記、四、など、書き、名所は海老尾、轉手、南留別志、一、に、琵琶のてんじゆをてんじんといふは、節用集、三、絃、子、笛、用集、大、全、六、など、書、き、名、所、は、海、老、尾、轉、手、南、留、別、志、一、に、琵琶のてんじゆをてんじんといふは、也、轉、軫、之、書、也、云々、按、に、轉、軫、の、字、物、に、見、あ、た、ら、ず、楊、子、大、梅、鳩、胸、脯、伊、登、具、良、加、美、期、末、伊、夫、久、良、佐、留、乎、爾、遠、奈、玄、經、に、軫、轉、其、道、さ、あ、り、字、典、に、琴、下、轉、軫、者、謂、之、軫、云々、大、怒、佐、一、和、漢、三、才、圖、會、十、八、關、祕、錄、五、に、は、三、味、線、な、ご、き、加、期、佐、支、ウ、ネ、チ、カ、ケ、ナ、ご、い、へ、り、撥、駒、一、二、三、の、糸、の、糸、は、近、江、の、日、切、村、の、餅、の、精、に、て、よ、る、さ、い、へ、り、な、ご、き、こ、ゆ、ま、た、本、調、子、三、下、調、子、近、江、踊、伊、勢、踊、管、笠、曲、吉、野、山、海、道、下、小、六、曲、柴、垣、獅子、躑、す、か、く、き、岡、崎、林、雪、れ、ん、ぼ、な、が、し、投、曲、本、手、破、手、琉、球、組、し、の、び、組、う、き、よ、組、ひ、ね、だ、組、ふ、し、や、う、組、こ、し、組、さ、ら、組、亂、後、夜、搖、上、は、や、ふ、れ、名、よ、せ、組、さ、か、ひ、組、中、島、組、な、く、つ、に、な、る、こ、新、曲、裏、組、力、草、の、類、の、名、目、琴、一、節、切、の、合、せ、や、う、な、ご、糸、竹、初、心、集、大、怒、佐、紙、鷹、本、手、破、手、唱、歌、新、曲、唱、歌、松、之、葉、濱、千、島、律、呂、三、十、六、聲、に、く、は、し、く、記、し、た、り、歌、に、よ、め、る、は、正、親、町、一、位、公、通、卿、の、雅、筵、醉、狂、集、上、春、に、柳、ハ、露、

棹、姫、も、ひ、く、や、三、す、ぢ、の、い、さ、柳、こ、ほ、る、く、露、は、風、の、ゆ、り、か、ん、左、注、に、三、線、に、ゆ、り、か、ん、さ、い、ふ、祕、傳、あ、る、よ、し、な、り、棹、に、氣、を、付、べ、し、云、々、按、に、棹、に、佐、保、姫、を、よ、せ、た、る、は、假、名、違、な、れ、ど、その、例、に、已、に、樂、章、類、語、抄、の、附、言、に、古、今、六、帖、大、和、物、語、拾、遺、集、後、頼、口、傳、補、中、抄、小、馬、命、婦、集、堤、中、納、言、集、な、ご、引、て、い、ひ、た、り、

また春清水の瀧の下にて

清水のたきもみすぢの糸ならば花にいらべふうぐひすの歌、また上嵐山の花見にまかりけるに、よしあ

る人さみぬしが戸無瀬の邊に船を留めてめしぐしたる座頭に三味線ひかせ酒くみてあそび居ければ

これもまたよし野の山をうつしけり櫻にかゝる三味のいさすぢ。左注に新千載後宇多院「あらし山こ

れもよし」のやうつすらん櫻にかゝるたきのしらいさ。左注に、小歌に吉野山さいふあり云々御製春下に見

ゆ本居宣長が玉勝間卷七の、ある人の世にあまれくもてあそぶなるさみせんといふ琴なかつたる繪に

歌よみてかけさこひける、そは今様のたはれたる物にて、いにしへのむともがらなごは、いやしむるすぢの

ものなれば、いかにそやかたはらいたくおほほけれど、さもいなみがたき人のいふことなりければ、いかゞは

せんに、よみて書けるうた。

さかせばやいにしへ人にみへのをのみつものしらべを心づくやと。例の人にはわらはれんをかつばおこ

たりがてら、これにさへものしのしつ云々。未得が吾吟我集春に、柳

さみせんのおほの河べの糸柳れをあらはして浪ぞよせひく。三絃の變體に鼓弓あり、和漢三才圖會の十卷

に、鼓弓按未詳其始形似三絃而小、不用撥以小弓絃鼓之、故名鼓弓、其音最悲哀者也、勢州宇治乞巧、每鼓之謠矣、相

傳、鼓弓始於南蠻、彼土人行住每鼓之、以避蛇虺云云、書信字考器財門に鼓弓三線之類云云、糸竹初心集卷下に抑々

日本に三味線をひき初し事は、文祿の頃、石村檢校さいふ琵琶法師あり、心たくみにして、器用無雙の者なり。

ある時琉球島にわたりけるに、彼島小弓さいひて糸三筋に入らず物あり、小き弓に、馬の尾を絃にかけて引

なれば、小弓さいひふさぞ、石村是をさぐりみるに、琵琶をやつしたる物也、糸のしらべやうも一二は比巴のこ

さく、三の糸は比巴の三ふりも二調子ほごたかくおはせたるもの也、さおもへり所の者いひけるは、此の島眞

蛇のおほき所なるが、らへいかさいふものありて、此のまむしを食物とす、さればらへいかのなくこそ、小弓の

音に少し違ざるゆゑ、眞蛇をしりぞけんが爲めに、專ひく也云々。江戸名所記卷四の、三味線鼓弓引ならして

歌うたひ云々。竹齋物語卷上に、遊女遊君あつまりて、わかき人々打まじり、しやみせんこきうにあや竹やしらべそへたる其中に、石村檢校まぬられて、歌の調子をあげにけり云々狂言記外こぶうりにもしやみせん書志也禮くさめなくしなど見ゆ、其圖倭漢三才圖會十八骨董集上編の卷骨董集上編に載せたり。按に、夢溪筆談五の卷に、邊兵得勝回、則連隊、抗聲凱歌、古之遺音也、凱歌詞甚多、皆市井鄙俚之語、予在鄜延時、製數十曲、令士卒歌之、今粗記得數篇云々、其三、馬尾胡琴、隨漢車、曲聲猶自怨單于、彎弓莫射雲中雁、歸雁如今不寄書、皇朝類苑十九曲禮音律と見ゆ。たる馬尾胡琴は今の鼓弓に馬尾を用るに叶へり、これならんには胡弓も漢時の器とすべし、そも、今の俗人をよるこばしむる樂器、琴、三絃、鼓弓、に及ばなし、中に三絃第一のものにて、耳をかたぶけ心をさらかし、飲食を忘れ、勤業を廢るにいたる、されば鄭聲など、いひもおとしむべけれど、かく人心に合へる音聲なれば、これをもて民心を善道に移さん、こはたやすく、調化政教の助、治國平天下の器と稱いはんもなごかしひごさならん、そは樂章、義、太夫などの文、ないふ、なほらぶにあり、君子をして、これを作らしめ、忠信、孝貞の事跡を大意とし、假名づかひ、詞づかひ、てに、なほづかひを正し、伎はその能を正し、工は、その器を正さば、佛家の梵唄、儒家の禮樂にも、なさく、立おくれまじう、なん、賛曰、天下爾、遊音、波美、都乃、緒、乃、古、登、爾、心、乎、人、轉、春、絶。

文政九年六月

義太夫大鑑下卷終



大正六年十二月一日印刷
大正六年十二月五日發行



賣捌店

著者
發行者

大連市乃木町八番地

秋山

(號木



印刷者

大連市東公園町十七號地

嶺田

嘉三

印刷所

大連市東公園町十七號地

株式會社 滿洲日日新聞社

東京日本橋區數寄屋町 大連市大山通 京城本町 釜山大麻町

大阪屋號書店

大阪市東區唐物町(鹿島屋)

竹中清助